心の隙間の埋め方

篠原　皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
心の隙間の埋め方

【Ｎコード】
Ｎ９１６８Ｗ

【作者名】
篠原　皐月

【あらすじ】
佐竹清香は早くに両親を亡くし、シスコン気味の売れっ子作家の兄清人と２人暮らし。若干寂しくも穏やかな毎日を送っていたが、２０歳の誕生日を過ぎる頃から、身辺が賑やかになってくる。それが両親の通夜の席で不用意に発した一言と、彼女達両親の隠された境遇に因るものだとは、清香は夢にも思っていなかった。
顔見知りの優しい《お兄さん》達に加え、近付いてくる１人の人物を無視できなくなっていく清香。しかしその相手も複雑な事情を抱えて清香に接触していたのだった。

プロローグ

両親の通夜で、市営住宅の集会所に設けられた白を基調とした簡素な祭壇を見やりながら、その間近に制服姿で正座していた清香は呆然と今の状況について考えていた。

（どうしてこんな事になってるの？　昨日までは2人とも、普通に笑ってくれてたのに……）

中段に並べて飾られている両親の遺影を見ても、居眠り運転のトラックに突っ込まれて両親が呆気なくこの世を去ってしまった事が未だに理解できていない清香を、隣に座る喪主の年の離れた兄、清人が低い声で促す。

「清香、ご挨拶しなさい」

その声で正面に向き直ると、旧知の人物が顔を揃えて弔問にやって来ていた。

「柏木さん、倉田さん、松原さん。本日はお忙しいところ足を運んで頂き、ありがとうございます」

清人礼儀正しくが頭を下げる前で、並んで沈痛な面持ちを見せる父親の幼馴染として時折顔を見せていた初老の男性達が口々に声をかける。

「何を言ってるんだね、水臭いぞ清人君」

「そうだぞ？しかし連絡を受けて、何か我々でできる事があればと思って取り急ぎ駆けつけてみたが、この短時間で君が万事整えていた様で安心したな」

「私達としては寂しいが、2人とも安心しているだろう」

「いえ、ここの自治会の方やご近所の方にお世話して頂きました。私1人ではとても……。今後何か手に余る事がありましたら、その

時はご助力をお願いします」
　再度神妙に頭を下げた清人に対し、三人は涙ぐみながらも力強く請け負った。

「それは勿論だとも。遠慮なんかしないで、幾らでも頼って来なさい」
「まだ清香ちゃんも中学に上がったばかりなんだしな。あまり気を落とすんじゃないよ？」
「何か困った事があったら、すぐにおじさん達に言うんだよ？」
　引き続き自分にかけられた声が引き金になったのか、ここにきて漸く清香の目にじんわりと涙が浮かんでくる。
「雄一郎おじさん、正彦おじさん、義則おじさん、ありがとう、ございま、す……」

　そんな清香の様子を見た面々は、黙って1人は頭を撫で、1人は軽く肩を叩き、1人は膝の上で固く握りしめた彼女の手を優しく握ってから下がって行った。そして彼らが集会場の片隅で、何やら手伝いの女性達と話し始めたのを涙で潤んだ視界に留めていると、突然横の清人が立ち上がったのに驚く。
「どうしたの？　お兄ちゃん」
　すると清人は険しい顔つきで低く囁いてから、出入り口に向かって足早に歩き出した。
「ちょっとだけ離れる。ここを頼む」
「え！？　ちょっと！　お兄ちゃん！？」
　1人にされ一気に心細くなったものの、同じ団地の知り合いが挨拶に来た為自分まで席を立つ真似はできず、そのまま座ってお礼を言いながら頭を下げた。そしてその人物が去ると同時に、同じ棟で家族ぐるみの付き合いをしていた女性が、割烹着姿で背後からにじり寄って声をかける。

「清香ちゃん、ちょっと良い？」
「はい、なんでしょうか」
　するとその女性は割烹着のポケットから素早く白い封筒を取り出し、後ろに向き直った清香の手に握らせた。
「凄い仕立ての良いスーツを来た三人の方に、『葬儀では現金が手元に無いと何かと不自由です。私達からだと清人君は遠慮して受け取らないと思いますので、貴方達から後で渡して頂けませんか？』って押し切られて預かっちゃったんだけど……」
　困った様に囁かれ、こっそり渡された封筒の厚みに彼らの思いやりを実感して、清香はいよいよ号泣しそうになる。
「ありがとうございます。あとからお兄ちゃんに渡して、おじさん達にはお礼をちゃんと言いますから」
　それを聞いて、相手は如何にも安堵した表情を見せた。

「良かったわ。おばさん安心しちゃった。だって佐竹さんの所ってご夫婦どちらも親戚付き合いが無いって伺ってたから、急に兄妹２人だけになってしまって団地の皆で心配してたのよ。勿論清人君はもう成人して自活してるから大丈夫だとは思うけど、やっぱり頼りになる親戚の方が居れば安心でしょう？　優しい伯父さん達で良かったわね」
「……いえ、あの方達は父の幼馴染で仲良くして頂いただけで、親戚じゃないんです」
「え？　あ、そう、だったの？」
「父は確かに天涯孤独ですが、確かに母には親兄弟が居るらしいです」
「らしいですって……。清香ちゃん？　その人達に連絡は取ったの？　それらしい方はまだお見えになっていないみたいだけど……」
　何故か急に俯き、暗い声で呻くように告げた清香に、若干たじろぎながらも相手は控え目に問い質したが、そこでいきなり清香が激昂した。

「だれが連絡なんか取るか！　あの人で無し野郎どもにっ！！」
その怒声に集会場内が静まりかえり、先程挨拶して帰りかけていた三人組と、それと入れ替わりに目立たぬ様に集会場に入ろうとしていた1人の老人の動きが止まった。
「おばさん！」
「なっ、何っ！？　清香ちゃんっ！」
「母の家族っていう人達はね、お金持ち特有のもの凄く選民意識に凝り固まったどうしようもない連中で、1人娘の結婚しようとする相手が15も年上のバツ一子持ちの男だと知るや、その職場に圧力掛けて首にさせ、借りてたアパートの大家に金を掴ませて無理やりたちのかせ、人を雇って悪質なデマビラを撒き散らして子供が学校でいじめられる様にしむけ、何度電話番号をかけても無言電話を掛けまくる、非常識かつ不見識な人間の集団なの！　お母さんから洗いざらい聞いてるんだから！」
「そ、それはなかなか、大変だったのねぇ……」

思わずドン引きになりながらも相槌を打った相手に、清香は泣き叫びながら畳み掛ける。
「お父さんは間違っても人の悪口なんか言わない人だったから、その話を聞いている横で『子供に向かってそんな事を言うのは止めなさい。それにそれだけ大事な1人娘を奪ったんだから、当然の仕打ちだと思っているから』って笑ってたけど、お母さんは未だに怒ってたんだから。結婚の許しを得ようとお父さんがお兄ちゃんを連れて自分の実家に挨拶に行った時、よってたかってお父さんをボコボコにした挙げ句、お兄ちゃんの腕まで折った事！」
「えぇ？　そんな事があったの？」
「全然知らなかったわ～」
「その頃清人君、小学生でしょう？」
「幾らなんでもそれは、子供相手に酷過ぎるわよね」

奥まった給湯室でお茶出しをしていた他の女性達も騒ぎに驚き出てきたが、清香の話を聞いて揃って顔を顰めつつ同意を示す。その声に重なる様に、清香が声を振り絞る様にして叫んだ。

「そんな人達、焼香に来たって一歩たりとも上げさせるもんですか！！　どうせ『それみた事か、こんな貧乏暮らしの上早死にするなんて馬鹿な奴だ』とかなんとか、せせら笑う為に来るに決まってるんだから！　もし来たら頭から灰をかぶらせて叩きだしてやるわっ！！」

「清香！　何を騒いでる！？」

「お兄ちゃん！」

その時、どこに姿を消していたのか慌てて集会室に入って来た清人が清香に駆け寄ると、とうとう緊張の糸が切れたらしい清香が抱きついて盛大に泣き出した。

その自分の腕の中にすっぽりと埋まる小さな体を抱きかかえ、背中をさすってやりながら、先程断片的に聞こえてきた清香の叫びの影響を考え、清人は小さく溜息を吐いた。そして部屋に駆け込む時にすれ違った何人かの人間に、肩越しに視線を向ける。

案の定全員が未だ蝋人形の様な表情で固まっており、その者達にほんの僅かの罪悪感を覚えた清人は、謝罪の気持ちを視線に乗せ、清香を抱きかかえたままごく軽く頭を下げてみせたのだった。

プロローグ（後書き）

出だしがシリアスですが、頭の中で構築中の中身は基本コメディです。期待ハズレな展開になってしまったら、申し訳ありません。

第1話　二十歳の誕生日

２人で食べる為用意されたごく小さなサイズのホールケーキに、細いカラフルな蝋燭を２０本立てた清人は、それに火を点けてから室内の電気を消した。そしてテーブルに戻り、向かい合って座っている妹を促す。

「さあ、吹き消してごらん、清香」

「はぁ～い」

途端に真顔になって何回か深呼吸して息を整えた清香は、勢い良く溜めた息を吐き出す。それは見事に一息で、全ての蝋燭の火を吹き消す事に成功した。

「誕生日おめでとう、清香」

「ありがとう、お兄ちゃん」

「さあ食べよう。今日はいつにも増して、腕によりをかけて準備したから」

「うん！」

途端に満面の笑みになり、ウキウキと料理に手を伸ばす清香。

当初清人に負担が大きかった兄妹２人暮らしも、八年近く経過した今ではきちんと清香も家事を分担していた。しかし小さな洋食レストランを経営していた亡父の料理の才能は主に息子に受け継がれたらしく、清香の料理はどうしても兄の作るそれに及ばないと自覚しているのだった。

「うぅ～ん、やっぱりお兄ちゃんの料理は最高に美味しい！　同じレシピで作っても、どうしてかお兄ちゃんの作った方が美味しくなるのよね。それにマンネリ化しないで次々レパートリーを増やしてるし」

幾つもの皿に手を伸ばして味わう合間に清香が感嘆の声を漏らす

と、清人が箸の動きを止めないまま爽やかに言い返す。
「それは当然だな」
「え？　どうして？　何かお父さん直伝のコツでもあるなら教えて？」
途端にキラキラとした目を向けてくる妹に、清人は優しく目元を緩ませながらのたまった。

「大した事では無いけど、それは俺が作る料理には清香への愛が詰まってるから。清香が美味しく食べてくれたら嬉しいと、終始思いながら調理してるからな」
目鼻立ちがすっきりとした色白の、若干癖のある髪を綺麗に流して切り揃えている、一見王子系のイケメンに面と向かって言われたら動揺しない女性は少ないと思われるのだが、その手の台詞に慣れきっている妹は盛大に不満の意を唱える。

「えぇ？　それは絶対納得できない！」
「どうして？」
「だって私だって料理する時は、毎回お兄ちゃんに美味しく食べて貰える様に愛情込めて作ってるのよ？　それなのにお兄ちゃんの作った料理には、適わないんだもの……。何か根本的な才能が欠けているとしか思えなくなっちゃう……」
最後は拗ねた様に呟いた妹の可愛らしい台詞に、清人は噴き出したいのを何とか堪えつつ宥めようと試みた。
「清香の愛は充分分かってるよ？　だけどそれが普段だだ漏れしてるから、料理だけに集中してないだけなんだろう。適性というより性格の問題だから心配するな。清香の料理は充分美味しいぞ？　俺が保証する」
「ありがとう、お兄ちゃん」
この兄妹の日常を知っている彼女の友人達が聞いたなら「いい加減にしなさいよ、このバカップル兄妹！」と盛大に毒吐かれる事は

確実だったが、自宅には当然2人しか存在しない為、そんなベタベタ会話が暫く続いた。
そして清人がふと思い出した様に口を開く。
「そういえば……、柏木さん達からお前への誕生日プレゼントを預かってるんだ」
「え？　本当？」
嬉しそうに見返してくる清香に、自然と清人の顔が緩む。
「ああ、二十歳になった時に真珠を贈られると幸せになれるという謂われがあるそうで、3人で相談して色とかも揃えたらしい。柏木さんがネックレス、倉田さんがイヤリング、松原さんがブローチだそうだ。後でちゃんと礼状を書くんだぞ？」
「分かってるわ！　うわ、なんか凄く嬉しい！　いけ好かなくて音沙汰が無い親戚より、おじさん達の方がよっぽど本当の親戚らしいわね。『遠くの親戚より近くの他人』って良く言ったものだわ。ねえ、そう思わない？」
「……ああ、そうかもな」
同意を求められた清人は何故か微妙に清香から視線を逸らし、幾分口ごもって控え目な同意を返した。しかし上機嫌な清香は、兄の不審な行動に気がつく事無く食べ続けたのだった。

佐竹家の兄妹がそんな風に和やかに誕生日ディナーを堪能している頃、清香に《親戚の様なおじさん達》と評されていた面々は、それぞれの息子達を連れ、とある場所で一堂に会していた。
「さて……、食事も無事済んだし、本題に入るか」
そう言ってその場を取り仕切る発言をしたのは、その家の当主である柏木総一郎。
既に８０近い年齢にも関わらず意気軒昂であり、大企業である柏木産業を一代で築き上げた往時の面影を失ってはいない人物であっ

た。
　長方形の広い食堂に相応しい、２０人は席に着けるダイニングテーブルの上座に当たる一辺に１人で陣取り、左右に並ぶ息子と孫息子達を睥睨した途端、食事中も和やかと言い難かった雰囲気が一層重苦しいものとなる。

「……お父さん。大体予想はつきますが、息子達まで呼びつけた訳を説明して下さい」
　柏木産業の社長職を引き継ぎ、最近では父親以上の手腕を発揮していると財界では評判の彼の長男の雄一郎が深い溜め息を吐きつつ促すと、総一郎は重々しく言い出した。
「今日１０月１８日は、清香の二十歳の誕生日だ」
（（（知ってますよ。プレゼントも贈りましたし））
　そんな事を正直に口にしようものなら目の前の人物が拗ねまくる事が分かりきっている為、彼の３人の息子は余計な事は口にせず、黙って父親の表情を窺った。

「これまでは清香に幾ら害虫が寄り付こうが、あのクソガキが頑として認めなかっただろうが、二十歳を過ぎたらあの子の自由意志で結婚ができるわけだ」
（（（いや、清香ちゃんが二十歳過ぎても、あの清人君なら妨害しまくるだろうな））
（（（（（一体何を言いたいんだ？　祖父さんは））））
　思わず遠い目をしてしまった息子達と、祖父の言わんとするところが全く分からなかった孫達に向かって、総一郎から爆弾発言が投下された。

「だから浩一、玲二、正彦、明良、友之。お前達のうち誰でも良いから清香と結婚しろ」
「「「「はぁあ！？」」」」

従兄弟達が揃って間抜けな声を上げる中、その場で1人だけ名前が挙がらなかった倉田修が、恐る恐る手を上げながら声を出した。
「お祖父さん。俺は妻帯者だからその話は除外ですよね。それたらどうしてこの場に呼ばれたんですか？」
「まあ、結婚してるだけなら離婚させれば良いだけの話だが、来春子供が産まれるなら仕方あるまい。儂はそこまで鬼ではないからな。お前には従兄弟達のフォローをしてもらう」
もったいぶって頷いてみせる総一郎に、その場の全員が白い目を向けた。

（子供がいなかったら別れさせるんだ……）
（さすがワンマン爺さん）
（だから娘に逃げられるんだよな）
（年を取って丸くなるどころか……）
それぞれが心中で呆れていると、年長者達が嫌そうに口を開いた。

「お父さん……、話を戻しますが、何が『だから清香と結婚しろ』なんですか？　清香ちゃんと息子達が結婚する必要性と理由を説明して下さい」
「まあ、大体理由は察せられますが。『誰』と指名では無く『誰か』と乱暴な事を言うあたり」
冷静に、婿養子として家を出ている次男の倉田和威と三男の松原義則に促され、総一郎は決定的な一言を放った。
「そんな事は決まっとる！　孫達の誰かと清香が結婚する事で、儂が清香の実の祖父だと紹介して貰うんだ！」
（（（やっぱり……。それよりいい加減にきちんと清香ちゃんに名乗れば……。いや、これに関しては父さんの事は言えんか……）））
息子達はすっかり諦めた様にうなだれたが、当事者の孫息子達は流石に噛み付いた。

「ちょ……、何考えてんだ祖父さん！」
「気でも違ったか？」
「儂は正気だっ！　何だお前達、清香では不満だとでも言う気かっ！！」
　総一郎に纏めて怒鳴りつけられた面々は、ある者は困惑し、ある者は些か呆れつつ言葉を返す。
「いや、確かに清香ちゃんは可愛いし、気立ては良いのは分かってるけど」
「結婚となると色々と話は別ですよ」
「そうだな。妹みたいなものだし」
「それに今までキチンと名乗れていないのは、どっからどうみても祖父さんと親父達の自業自得だろ？」
「散々当時の話は聞いてるぜ？」
「その尻拭いを俺達にさせようってのは、少しムシが良過ぎませんか？」
　口々にやんわりと責められた総一郎は、巨大企業を一代で築き上げた『経済界の優駿』と誉れ高い高潔な雰囲気をかなぐり捨て、単なる困った孫バカ老人に変貌した。
「五月蠅い口答えするな！　清香の結婚相手には、儂の保有している柏木産業の全株式を譲渡してやる！」
「お父さん！？　いきなり何を言い出すんです！」
「そんな事を言って、もし変な人間の手に渡ったりしたら！」
「全発行株式の１５％ですよ！？」
　瞬時に血相を変えた息子達に、総一郎はあくまでも真顔で宣言する。
「だからそうならない様にお前達、気合い入れて清香を口説くんだ。儂が可愛いたった１人の孫娘と、感動の再会ができるかどうかはお前達の働きにかかっているんだ。分かったな！！」

「「「「「……」」」」」

そのままふんぞり返る祖父を前に、指名を受けた5人の孫達は何とも言い難い顔を見合わせて黙り込んだが、ここでドアを開ける音と共に、冷え切った声が割り込んだ。

「あぁら、皆何を黙り込んでるの？　気の毒なお祖父様のたっての願いを叶えてあげるのが、孫としての当然の務めだと思わない？だけど、私の記憶に間違い無ければ、お祖父様の孫娘はもう1人居たと思っていたのだけど……、気のせいかしら？」

そこで雄一郎の長女で柏木産業に勤務している真澄が予告なしに現れ、その彼女の一言でそれまで決して快適とは言い難かった食堂内の空気が凍りついた。

「真澄っ……、お前今日は残業……」

「全て終わらせました。……そうですか。たった1人の孫娘、ですか」

母親譲りの美貌にうすら笑いを浮かべつつ真っすぐ自分を目指して歩み寄る孫娘に、総一郎は蛇に睨まれた蛙の如く、固まったままダラダラと冷や汗を流す。

「い、いやっ！　決してお前の存在を忘れていたわけではっ！」

「そうですね。確かに孫娘ではありますが、《可愛い孫》では無かったというだけですよね？」

「かっ、可愛いに決まっとるだろう！　ただ、お前に関しては、可愛いよりは雄々しいとか凛々しいとかの形容詞が前面に出てきていてだな」

そんな風に必死に弁解を試みる祖父を、側まで来た孫娘は呆れ果てた視線で冷徹に見下ろした。そして仕事上の口調で淡々と指摘する。

「柏木会長、第一線を退いたとはいえ、あなたは未だに柏木産業の

対外的な顔で、社内でも依然として影響力をお持ちです。ご自分の言動に節度と責任をお持ち下さい」

「……っ」

「柏木社長。現時点ではあなたが柏木産業のトップです。まだ柏木家の家長では無いのかもしれませんが、いい加減頑固ジジイの操縦法位会得して下さい。そうでないと振り回される周囲が迷惑です」

「……あのな、真澄」

反論できずに口ごもる総一郎と閉口した雄一郎を知った事かと真澄は睨み付け、淡々と正論をぶつけた。

「ところで、明朝9時から経営会議と伺っております。会長と社長は勿論ご出席の筈。くだらない話は適当に切り上げて、さっさとお休みになる事をお勧めします」

「く、くだらないだとっ！？」

「玉砕が怖くて真正面からブチ当たれない人間が、何を言ってもやってもくだらないだけですよ」

「なっ……」

「それでは失礼します」

流石に声を荒げかけた総一郎の台詞をぶった切った真澄は、言うだけ言って踵を返し、食堂を出て行った。その背後や閉めかけたドアの向こうから、男達の囁き声が微かに届く。

「全く、年々気が強くなりおって！」

「亡くなった母さんに、年々似てきましたね。父さんをやりこめる所なんか特に」

「五月蝿いぞ和威！」

「しかし相変わらずきっついよな～、真澄姉。あれじゃ嫁の貰い手が無いんじゃない？」

「もういい年だろう？３３だったっけ？」

「友之、明良君。そこまで遠慮の無い言い方はちょっと……」

「姉さんは仕事に生きてるからな。仕方ないさ」
そんな声もドアを閉めると聞こえなくなり、真澄は傍らに控えていた使用人を振り返った。

「部屋に軽食と飲み物をお願い。夕食を食べそびれたのよ」
「畏まりました」
恭しく一礼した背広姿の男性が歩き去ると、真澄はそれに背を向けて足音を吸収する厚さのある絨毯の敷かれた廊下を進む。そして階段を上がりながら、食堂に乱入する直前に聞こえた話を頭の中で反芻した。

（清香ちゃんと従兄弟達の誰かをね……。いよいよ棺桶に片足突っ込んだのかしら、あのお祖父様がそんな発想するなんて）
実の祖父にかなり辛辣な批評をしつつ、真澄の心の中で静かにさざ波が生じる。

（まあ『彼』がそうそう簡単に清香ちゃんに男を近付ける筈は無いけど……、面倒な事になってあまり怒らせたくは無いわ）
そんな事を考えながら真澄は自室のドアを開け、溜め息を吐きながら中へと入ったのだった。

第2話　男達の事情

その日食事当番だった清人が台所で軽やかに野菜を刻んでいると、カウンターの向こうから自身のアシスタントをしている川島恭子が困惑気味に声をかけてきた。

「先生、お忙しい所申し訳ありません。お電話が入っているのですが……」

「うん？　誰かな？」

手の動きを止めて背後を振り返った清人に、恭子が補足説明を行う。

「小笠原聡と名乗ってらっしゃいます。“小笠原由紀子の息子”と言えば分かると仰っておりましたが」

その台詞を耳にした途端、清人は瞬時にその表情の一切を消し去った。

「……知らないな。そのまま切ってくれ」

吐き捨てる様に告げて再び調理台に向き直った清人に、恭子は諦めて了解した旨を告げる。

「分かりました」

多少気まずい思いをしながら恭子はリビングの奥に戻り、電話の向こうに一言断りを入れて切ったが、間を置かず再び着信音が鳴り響いた。立場上再び恭子が受話器を取り上げ応対してから保留にし、恐る恐る清人にお伺いを立てる。

「先生、先程の小笠原さんからまたお電話ですが……」

今まさに中華鍋で油を熱し炒めに入ろうかと思っていた清人は、憤然と舌打ちをして火を止め、乱暴な足取りでキッチンとリビングを横切った。

（どうやってここの番号を調べやがった？）

向かっ腹を立てながら保留音を響かせている電話の受話器を取り上げ、相手に何か言う隙を与えず、もの凄い棒読み口調で伝える。
「只今おかけになっている番号は、現在使われておりません。番号をお確かめの上、再度お掛け直し下さい」
言うだけ言ってガチャンと乱暴に受話器を戻した清人は、些かキツい視線を恭子に向けた。
「川島さん。今後この人物からの電話は、一切取り次がないで下さい」
「あの、でも……」
「まだ何か？」
常に自分に従順な恭子がここで口ごもった事を清人は不思議に思ったが、続けられた台詞で再び表情を険しくした。

「先程の男性は、自分は先生の弟だとも仰ってまして……。でも先生に弟さんが居るなんてお話は」
「川島さん。俺の家族は、亡くなった両親の他は清香だけですからそのつもりで。勿論この電話の事は、清香の耳に入れる必要はありません」
「わ、分かりました」
慌てて頷いた恭子に背を向け、清人は調理を再開したが、なかなか動揺と苛つきは収まらなかった。

（今更何だってんだ！　胸くそ悪いっ！　それに……）
一心不乱に中華鍋を振るっていた清人だったが、少ししてまた邪魔が入った。
「あの、先生。柏木さんからお電話が入っていますが…」
「浩一から？　何の用だ……、こんな中途半端な時間に」
大学以来の腐れ縁である浩一からの着信を告げられた清人は、反射的に通常なら就業時間内である事を掛け時計で確認し、眉をしかめながらもキッチンを離れた。

「もしもし？　何だ浩一、まだ仕事中だろうが。ろくでもない用だったら速攻で切るぞ？」
　不機嫌さを隠さず応対を始めた清人の声を耳にしつつ、リビングのテーブルで頼まれていた資料の整理を再開した恭子だったが、清人の苛立たしげな呻き声に思わず無言で視線を向けた。
「はあ？　今夜？　お前いきなり何を……」
　何事かと思ったものの恭子はおとなしく作業を続け、幾つかのやり取りの後、清人は不承不承といった感じで会話を終わらせる。
「……分かった。いつもの場所で9時だな。時間を合わせて行ってやる」
「どうかされましたか？」
　そんな憎まれ口をたたいた清人が受話器を戻してから、恭子は静かに声をかけてみた。すると話している間に幾分感情が落ち着いたのか、清人がいつも通りの柔和な笑顔で振り返る。
「ああ、川島さん。今日帰りがけに原稿を届けるのをお願いしてましたが、やはり俺が行く事にしますから」
「予定が変わりましたか？」
「ええ、出版社に顔を出すついでに次回作の構想を相談して、軽く食べて時間を潰した後浩一と待ち合わせする事にしました。……それで川島さんに一つお願いが」
「何でしょう？」
　急に真顔になった相手に恭子が若干固めの表情で応じると、清人は淡々と“お願い事”を述べた。
「夕食を2人分準備してしまいましたし、清香を予定外に1人で夕食を食べさせるのは可哀想なので、一緒に食べてやって貰いませんか？」
　それは確かに妹を溺愛している清人らしい台詞ではあったが、おそらく長く1人暮らしを続けている自分への心配りをも含んでいる

と分かっている恭子は、うっすらと笑いながら了承の言葉を返した。

「先生のシスコンぶりは相変わらずですね。そういう事でしたら、喜んでお相伴に預かります」

「それは良かった。それではもう少ししたら出掛けますので、後は宜しくお願いします」

「畏まりました」

そんなやり取りの後、帰宅した清香と入れ違いになるように、清人は夕闇が迫る街中へと出て行ったのだった。

出向いた出版社で担当者と結構有意義な打ち合わせを終えた後、軽く腹ごなしを済ませた清人は、その足で待ち合わせ場所へ向かった。

高級ホテルとして名高いラルフリードホテルをエレベーターで上がり、最上階スカイラウンジのバーカウンターに出向く。そこに何人かの男性がまばらにスツールに腰掛けている中で、迷わず1人のスーツ姿の男に近付いて行った。

「よう、待たせたか？」

勝手知ったる仲である気安さから、いつもとは違う砕けた口調で声をかけつつ隣に座った清人に、浩一は苦笑いしてみせる。

「いや、俺も今来たばかりだ。しかし男2人で待ち合わせってのは、正直虚しいな」

「呼びつけた本人が何を言ってる」

清人も苦笑いで返して早速注文を済ませ、顔見知りのバーテンダーと二言三言言葉を交わしてから、肘を付いて浩一に視線を向けた。

「それで？　さっさと俺を呼び出した本題に入れ」

その詰問口調に幾分困った様に視線をさまよわせてから、浩一は重い口を開いた。

「……実は、これから暫く俺達が清香ちゃんの回りをうろうろするが、黙認して欲しい」
「何だそれは。しかも“俺達”？　分かる様に話せ」
「それなんだが……」

そうして浩一が清香の誕生日に自分を含む総一郎の孫達に召集がかけられ、その場で清香との結婚を求められた経緯を話した。
「……そんなわけで、お前の気に障って強制排除されるのは勘弁して欲しいが、電話で済まそうとすると益々お前の機嫌を損ねかねんし、かといって家に押し掛けるのも清香ちゃんの耳に入る可能性が無きにしも有らずだから、お前とちょっと突っ込んだ話もしたかったし呼び出したって訳だ」
その事情とやらを一通り聞き終えた清人は、その間に目の前に置かれたグラスを持ち上げながら小さく失笑する。
「それなら当然ここの支払はお前持ちだな。しかし御大は相変わらずだと思っていたが、いよいよ棺桶に片足突っ込んだのか？　そんなくだらない策とも言えん策を用いようとするなんて」

奇しくも当日真澄が心の中で断じた表現と酷似した言い方を清人はしたが、当然そんな事は知りようもない弟の浩一は憮然として清人の顔色を窺った。
「まあ正直に名乗る事ができれば一番なんだけどな？　その時、お前フォローなんかしてくれないよな？」
「当然。そんな義理は無い」
「容赦無いな」
溜め息しかでない浩一の前でグラスの中身を一口飲み落としてから、清人はすこぶる冷静に相手に告げた。

「だが、告白自体を妨害しようとは今も昔も思ってない。清香ももう二十歳だし、幾ら子供の頃に香澄さんから散々刷り込まれてると

しても、少しは大人の対応ができる、かも、と、思うんだが？」
その会話の最初と終わりの微妙な口調の変化に、浩一が鋭く突っ込みを入れる。
「あくまで疑問形なんだ」
「流石に３０過ぎると、若い子の心境に疎くなってな」
ニヤリと笑いながら再びグラスを傾けた清人に、些か気分を害した様に浩一が肩を竦めた。
「言ってろ！　あちこちで若い女を口説き落としてる癖に」
「口説いた事は無いぞ？向こうから言い寄ってくるだけで。お前の方こそどうなんだ？　柏木物産の御曹司どの」

そこで不毛な言い合いになりかけた事を自覚した浩一は、話題を変える事にした。
「……それはともかく。お前、母方の方と未だに連絡取り合って無いのか？」
軽く顔を覗き込む様に尋ねてきた浩一から視線を逸らし、清人が途端に不機嫌そうに目を伏せる。
「愚問だな。酒がまずくなる話題をふるな」
その態度に浩一が軽く溜め息を吐き、手元のグラスを見下ろしながら淡々と続けた。

「やっぱりな……。実は先週親父の代理であるパーティーに出席したんだが、そこで小笠原氏を見かけた」
「それで？」
「夫人が今入院中だそうで、単身で出席されてた」
言うだけ言って浩一は再び清人の反応を窺ったが、相手はさほど関心が無さそうに呟くのみだった。
「……へぇ、それはお気の毒に」
「別に命に関わるような大病じゃないらしい。来月末には退院するとの話だし」

「……」
途端に漂う冷気にもめげず、浩一はもう一押ししてみる。
「なあ、見舞いに行ったりとかは……」
「……」
まるで取りつく島もない様子の清人に、浩一は完全に説得を諦めた。

「分かった。もうこの話は止め」
「今日家に電話があった」
「は？　誰から？」
いきなりの話題の転換に浩一が戸惑った顔を見せると、面白く無さそうに清人が続ける。
「小笠原聡とか名乗りやがった」
数瞬かけてその名前を記憶の底から引き上げた浩一が、思わず驚きの表情を向けた。
「え？……それって、ひょっとしてお前の」
「問答無用でブチ切った」
「お前な」
はあぁ、と重い溜め息を吐いた浩一に、清人が冷たく言い捨てる。
「だがさっきの話で大体のところは分かった。話を聞く気にはならんが」
それ以上不用意に相手を怒らせたく無かった浩一は、続ける言葉を選びつつグラスを揺らし、琥珀色の液体に浮かぶ氷が微かな音を立てるのを眺めていたが、ふと面白い事を思い出した様に口を開いた。

「しかしよくよく考えてみれば、大したもんだよな～、お前の親父さん」
「いきなり何だ？」
訝しげな顔を向けた義理の従兄弟兼親友に、浩一は楽しげに指摘

してみせる。
「だって考えてもみろよ。柏木物産と小笠原産業、業界1位を争ってガチンコ勝負してる総合商社のご令嬢2人をたぶらかして、両方と結婚しちまったんだぜ？」
それに清人は相手以上に笑いを堪える風情で応じた。
「悪いが今の話、一点だけ訂正させてくれ。親父が口説いたんじゃなくて口説かれたんだ。“あの人”も香澄さんも殆ど押し掛け女房だった筈だし」
「だろうな」
（実の母親を“あの人”呼ばわりか。相当根が深いな）とは思いながらも浩一はそれ以上突っ込まず、持ち上げた自分のグラスを清人のそれに近付ける。

「それじゃあ……、モテモテで羨まし過ぎる、良い男だった叔父上に乾杯」
「乾杯」
軽く触れ合ったグラスがカチンと小さな音を立て、男2人はそれから余計な事は言わずに酒と四方山話を楽しむ事に専念したが、心のどこかで何かが動き出しているのを感じていた。

同じ頃、都内でも有数の規模を誇る総合病院内で、消灯時間を過ぎた病棟内を極力足音を響かせない様に歩く２０代半ばの男性の姿があった。
仕事帰りであるのか片手にビジネスバッグを持ち、薄暗い廊下を迷うことなく進んで行く。そして目指す個室に辿りつくと、入口の引き戸をするすると音も無く開いた。
中の人間に気付かれる事は無いと思ったのだが、予想に反して当面のそこの主である小笠原由紀子が気配を察した様に顔を向け、それを見て心の中で舌打ちをする。

「……聡？」
「ああ、ごめん。起こしたかな？」
自分譲りの多少癖のかかった柔らかな髪を持つ息子が申し訳なさそうに謝ってきた為、由紀子はベッドから体を起こしながら笑って首を振った。

「ううん、何となく目が覚めたところだったから。それより何かあったの？」
僅かに首を傾げつつ尋ねた母親に、聡は鞄から一冊の文庫本を取り出し、彼女に向かって差し出す。
「大した事ではないけど……、東野薫の新刊が今日発売だったから持って来た。もう寝ていると思ってたから、置いて帰るつもりだったんだけど」
「え？　まさかわざわざ仕事帰りに買って来てくれたの？」
それを見た由紀子は僅かに目を見開き、目の前の本と息子の顔を交互に見やる。その視線を居心地悪そうに受け止めた聡は、まるで反抗期の様な受け答えをした。

「……今日は偶々外に出る用事があって。ついでに買って来ただけだから」
ボソッとそう呟いて視線を逸らした聡を見つめた由紀子は、ほんのりと嬉しそうに笑った。そして愛おしそうに受け取った文庫本のカバーを撫でる。
「ありがとう。明日ゆっくり読ませて貰うわね」
そのまま本の表紙に視線を落としている母親に顔を戻し、聡が静かに声をかけた。

「……母さん」
「何？」
顔を上げた由紀子と真正面から向き合った聡だが、少ししてから

自分からその視線を外した。
「……いや、何でもない。遅いしもう帰るよ。次の休みの日にゆっくり来るから」
そう言って踵を返した聡の背中に、由紀子が気遣わしげな声をかける。
「来月には退院できるんだし、忙しい思いをして無理に顔を出さなくても良いのよ？お仕事が大変だろうし」
「ああ、分かってる。それじゃあ」
些か重い気分で母親の病室を抜け出た聡は、そのまま依然として喧騒を保っている夜の雑踏の中へ戻って行った。そして家路を辿りながら、日中の出来事を反芻する。

（一応、電話をしてみたが……、やはり直接は無理か。予想通りと言えば予想通りなんだが……）
未だ直接顔を合わせた事の無い異父兄の事を頭に思い浮かべ、聡はその顔に渋面を浮かべた。
（だが、このままで良い筈がないだろう？）
そう決意を新たにした聡が、地下鉄のホームへと通じる階段を降りながら呟く。
「本人が駄目なら、この際、妹から接触してみるか」
そんな風に、聡の当面の方針が決定したのだった。

第2話　男達の事情（後書き）

なんか今回主人公が影も形も出ませんでした。次はそんな事は無い筈ですが……。

第3話　Ｆｉｒｓｔ　ｃｏｎｔａｃｔ

ある土曜日の午後、時間を見計らって清人達の自宅マンション最寄りの図書館に出向いた聡は、書架の間から首尾良く目的の人物の姿を探し当て、軽く安堵の溜め息を吐いた。

（興信所を使って生活パターンを調べさせたものの……、今時の学生に珍しくバイトはしていないしサークル活動もしていないから接点がな）

そしてスキニージーンズとパーカーの後ろ姿を見ながらほっとしたのも束の間、新たな問題に直面する。

（唯一ここだったらそれなりに自然に知り合いになれるかと思ったが……、どう声をかけたものか。下手するとストーカーとか、不審者扱いされかねないし）

棚を眺めている清香の動きに合わせ、周囲に怪しまれ無い程度にさり気なく移動しつつ、そんな事を真剣に悩んでいた聡だったが、清香が頭を動かす度にゆらゆらと揺れる、真っすぐに床に向かって伸びているポニーテールを見ているうち、ふと思ってしまった。

（ちょっと引っ張ってみたいな、あれを）

そして次の瞬間、自嘲的な呟きを漏らす。

「……何、小学生のガキみたいな事を考えているんだ？　俺は」

そうこうしているうちに、既に左手に一冊抱えていた清香が二冊目を取ろうと書架に手を伸ばした。しかし目指すそれは最上段にあり、身長が１６０ｃｍ前後の清香が背伸びしてもギリギリ手が届かない高さだった。

普段なら列毎にキャスター付きの台形の踏み台が置いてある筈が、その日に限って何故か清香が見渡す範囲に見当たらず、ちょっと不

機嫌そうに棚を睨み上げる。そうしてもう一度背伸びしてみようと踵を上げかけた清香に、背後から声がかけられた。

「俺が取りましょうか？」

「え？」

反射的に清香が振り向くと、チノパンにボタンダウンのカラーシャツを合わせ、ジャケットを羽織った聡がその前に立っていた。そのまま聡が書架に近寄り上方に手を伸ばす。

「わざわざ踏み台を探してくる程の事では無いでしょう。……確か、これですよね？」

「あ、えっと……」

驚いて軽く目を見開いた清香の前で、１８１ｃｍの聡は楽々と目的の本を取り出し、彼女に差し出した。

「はい、どうぞ」

爽やかに微笑まれながら差し出されたそれに、清香は一瞬戸惑ったものの、素直に礼を述べて受け取る。

「ありがとうございます。助かりました」

「どう致しまして」

本来ならそこで話が終わる筈が、聡が何気なさを装いながら慎重に口を開いた。

「良くここに来るんですか？」

「はい？」

「そのポニーテールを、ここで度々目に留めていたので」

いきなり何を言い出すのかと怪訝な顔した清香が、僅かに首を傾げながら応じた。

「そんなに目立ちます？」

「ええ、……ついつい引っ張ってみたくなる、色と形と長さですから」

真顔で告げられたその内容に清香が一瞬キョトンとした後、堪え

きれずに噴き出した。

「やだ、子供ですか！？　しかもいじめっ子でした？」

「とんでもない、虐められる方でしたよ？　だから昔出来なかった事を、今無性にやりたくて仕方がなくて」

しみじみとした口調の予想外の切り返しを聞いて、益々爆笑したくなった清香。しかし場所が場所だけに精一杯声量を抑えようとした為、余計に苦しい。

「何ですかそれ？すっごい迷惑です」

「すみません」

そこで清香は何とか笑いを静め、改めて初対面の苦笑している相手を見やった。

「でも度々って……、あなたもここの常連さんなんですか？」

「常連と言うかどうかは分かりませんが、月に１・２回は来てますね。本を読むのも好きですが、図書館の独特な空気と匂いが好き、と言うか……」

考え込みながらそう告げた聡に、清香が我が意を得たりとばかりに力強く頷いてみせる。

「そうなんですか！？　私もそうなんです！　良いですよね？　整然と分類されて、年月を感じさせる書物の存在感。日常空間から切り離された雰囲気！」

「あの……、分かったからちょっと移動しませんか？他の人の迷惑かも……」

「う……、す、すみません」

興奮気味に叫んだ清香に、割と近くに配置されていた閲覧席から幾つかの視線が突き刺さる。それを察した聡が清香を促し、清香もすぐに状況を理解して奥の方へと移動した。

そして多少笑いを堪える様な表情で、聡が口を開く。

「でも確かに珍しいかもしれませんね。女の子が図書館について、そういう風に熱く語るなんて」
「はい、友達にも良く言われるんです。『そんなカビ臭い事言ってないで、もっと周りに目を向けたら？』って」
思わず項垂れそうになった清香を宥める様に、聡が口を挟む。
「人の趣味嗜好なんてそれぞれですから、放っておけば良いのでは？」
「それはそうなんですけど、昔から進路もそれで決めてしまったので、余計にからかわれるネタなんです」
ここではぁ……、と軽く溜め息を吐いた清香に、聡は慎重に話を進めてみた。

「進路？　将来何になりたいのかな？　図書館とか本から連想すると……、作家とか？」
「まさか！　あんな大変な仕事、私には無理です。私、図書館司書希望で、大学も司書科目を取れる所を選択したってだけで」
大袈裟に片手を振りながら否定した清香に、聡は内心ほくそ笑みながら探る様に言い出す。
「ああ、そうなんですか。なるほど。……だけど『あんな大変な仕事』って、まるで身近に文筆業の人が居る様な言い方ですね」
「……あ、えっと、……まあ、そんなところで……」
途端に視線をさまよわせて曖昧に言葉を濁した清香に、聡はストレートに自分が目的としている人物の名前を口にした。

「まあ作家と言ってもピンからキリまでありますけど、確かに東野薫位の売れっ子作家とかだと大変そうですね」
「……あの」
「え？　どうかしましたか？」
「その…、どうしてその名前……」
聡が清人のペンネームを口にした途端、清香の顔が僅かに強張る

と同時に、今更ながら警戒する色が浮かぶ。しかし聡はそれに気付かないふりをしながら、淡々と話を続けた。
「“東野薫”の事ですか？　実は母が以前からのファンで、デビュー以来発売された本を全作揃えているんです。この前も新刊を買って届けたので、何となく名前が出ただけなんですが」
「そうなんですか？」
若干警戒の色を弱めた清香に、聡はスルスルと用意しておいた台詞を続けた。

「ええ。母はその中でも『覇権の階（きざはし）』とか『雷光』とか好きみたいで、繰り返し何度も読んでます。なんでも初期の頃の作品より、ここ数年の作品の方がストーリーも人物描写も各段に良くなってるからと言ってましたが」
「嬉しいっ！お母様って、本当に本物のお兄ちゃんのファンなんですね！！」
いきなりそう叫びつつ清香が空いている方の手で自分のジャケットの袖を鷲掴みした為、流石に聡は驚いた。
「は？　え？　あの、ちょっと」
「あぁぁっ！　ご、ごめんなさい！」
瞬時に我に返った清香が慌てて手を離しつつ謝罪したが、聡は緊張しながらわざととらしく突っ込んでみた。

「いや、それは良いんですが、お兄ちゃんって……」
すると清香は幾分迷いながら、控え目に口を開く。
「あの…、実は“東野薫”は私の兄なんです」
「本当に？　凄い偶然ですね」
白々しくそう驚いてみせた聡に、清香が切々と訴える。
「私がその妹だと知ると、『お兄さんのファンなんですよ』と良く言われるんですけど、それならどの作品をどんな風に好きかと尋ねると途端に口ごもったり、トンチンカンな受け答えしか出来ない人

が大半なんです。でもお母さんがファンだって仰るなら、その通りなんですよね？」

「勿論です。見ず知らずのあなたに、嘘やお世辞を言っても仕方がないし」

苦笑しているふりをしつつ、聡は密かに冷や汗を流した。

（うっ……、下手に俺自身がファンだとか言わなくて正解だった）

そんな聡の内心など知る由も無かった清香は、頷きながら続ける。

「そうですよね。実は……、お兄ちゃんがデビューした翌年に両親が急死したもので、私を引き取ったりして金銭的にも色々大変だったみたいなんです」

当時の事を思い出したのか沈んだ表情になって俯いてしまった清香に、何と言葉をかければ良いのか分からない聡は沈黙を保った。

「そんな事もあって、その後何年か編集さんの言いなりになって大衆受けする物ばかり書いてたから、『その頃の物は今自分で読み返してもつまらない』って言ってて……。あ、これは勿論お兄ちゃんがそんな愚痴めいた事を私に言ったわけじゃなくて、アシスタントの人から『私が言った事は内緒ね』って口止めされた上でこっそり聞かせて貰った話なんですけど」

顔を上げて弁解する様に告げた清香に、聡が安心させるように宥めた。

「分かりますね、それは。どんな職業だとしても新人時代はあるものだし、そういう場合不本意な事が多いのはお約束ですから」

それを聞いた清香は、安心した様に顔を綻ばせる。

「それで『自分の作品だって自信を持って言えるのは、五年目位からの作品だな』って言ってたそうで、さっき名前を挙げてくれた本がその時期の作品だったから、お母さんは本当に良く読んでくれてるんだなぁって思って、凄く嬉しくなっちゃったんです」

「そんな風に言って貰えるなんて、母が聞いたら喜びます。今度行った時に伝えますね」
ニコニコと告げてきた清香に釣られて笑顔になった聡だが、ここで清香がささやかな疑問を呈した。
「ご両親とは離れて暮らしてるんですか？」
「いえ、同居してますが、今入院中なので」
「え？ご病気なんですか……」
途端に心配そうな表情を浮かべた清香に、聡が取り繕う様に続ける。

「でも大した事じゃありませんから。確かに手術はしましたが経過は順調で、来月末には退院できますし。……そんな心配そうな顔をしないで下さい」
何となく罪悪感を覚えてしまった聡が清香に言い聞かせていると、少しの間何やら迷っていた様な清香が躊躇いがちに言い出した。
「あの……」
「どうかしましたか？」
「お見舞い代わりと言ってはなんですけど……、そんなにお兄ちゃんの作品のファンの方なら、サインとか貰いましょうか？」
聡にとっては願ったり叶ったりの申し出だったが、あからさまに喜びを露わにする事はできず、控えめに問い返した。

「え？　それは嬉しいですが……、色々とご迷惑では？」
「私は構いません。せっかくですから最新刊とかにサインして貰って、そちらのご自宅に送る様に手配しましょうか？」
「あ……、それはちょっと……」
「何か不味いでしょうか？」

親切に清香がそう申し出たが、そうなると自分の名前と住所を教えなければならず、早々に自分が清香に接触した事が清人にバレる

危険性に気がついた聡は、慌てて考えを巡らせた。
偽名を使ったり知人の住所を教えて誤魔化す事も考えたが、本来欲しかったのはサイン本ではなく、清人への足掛かりだった事から考えて、継続的に清香と連絡を取り合える状況を作り出す事が最優先だと結論を出す。そして短い時間の間に脳内をフル回転させ、目の前の人物を何とか丸め込めそうな流れを捻り出した。

「……う～ん、サインを貰うだけでも悪いのに、新刊まで頂くのは正直言って気が引けるんです。それに……、せっかくだから母が読み込んでいる本にサインして貰えないかと。書き手として、その方が先生も嬉しくないでしょうか？」
「言われてみれば、そうかもしれませんね」
「ですがそちらに本を送りつけるとなると、貴方の住所を聞かなくてはいけませんが……、先生に保安上不用意に見ず知らずの人間に住所を教えない様に言われていませんか？　勿論俺は不特定多数の人間に漏らす気はありませんが」
「そうですね……、ファンと言っても色々な人が居ますから、出版社でも公表してないって聞いてますし」
聡の繰り出す話に頷きつつ考え込んでしまった清香に、聡は優しく笑いかけながら打開案らしき物を口に出した。

「だからあなたさえ良ければ、あなたの携帯番号かメルアドを教えてくれませんか？　２人で連絡を取り合って、直接本をやり取りすれば良いかと」
「あ、なるほど。その手がありましたね！　そうしましょう！」
嬉しそうに同意し、左手に抱えていた本を棚の空いているスペースに乗せ、斜め掛けしたショルダーバッグから今にも携帯を取り出しそうな様子の清香に、自分がそう誘導したにも関わらず聡は頭を抱えたくなった。

（見ず知らずの男に住所を教えるのは確かに危険だが、あっさり携番やメルアドを教えるのもどうかと思うんだが……）

そして自分の携帯のプロフィールには本名の“小笠原聡”の名前で登録されている事を思い出し、あっさりと赤外線通信でデータ送信はできないと判断する。

そして何か考える前にジャケットのポケットから財布を取り出し、更にその中から仕事で使っている名刺を取り出した。

「……ああ、すみません。今手元に携帯が無くて。代わりにこれを渡しておくので、後で都合の良い時に連絡をくれませんか？　仕事中でないので名刺入れを持って無くて、財布に入れててくたびれた奴で申し訳ありませんが」

続けて取り出したボールペンでサラサラと裏面にメルアドと携帯番号を書き込んで清香に差し出した名刺には、聡が職場で名乗っている父の旧姓である“角谷聡”の名前が刷られてあった。それを受け取って眺めた清香は、少し困った顔をする。

「……ええと、ごめんなさい。“すみや”さんですか？　それとも“かどたに”さんか“かどや”さん……」

「ああ、そういえば自己紹介がまだでしたね。“すみやさとる”です。でもちゃんと確認して貰えて嬉しいですね。いい加減な人間はそのまま流して、次回に自分が適当に思った読み方で声をかけますから」

実際、これまでに何度か不愉快な思いをしていた聡が思わず嬉しそうに本音を述べると、清香は多少恥ずかしそうに話を続けた。

「こちらこそ名乗るのが遅れてすみません、佐竹清香です。仕事柄、読み書きに関してはお兄ちゃんが五月蝿いんです。それに加えて『人様の名前を間違えるなんて失礼極まりない。社会人としての礼節に欠けるから、曖昧な場合には初回にきちんと確認する様に』って念を押されてて」

「そう。先生は清香さんの事がよほど大切なんですね」
「どうしてそう思うんですか？」
同じ事を友人に話した時は「口うるさい」とか「厳しい」とか評された経験しかない清香は意外に思ったが、聡は目元を和ませながら当然といった口調で続けた。

「だってそれは清香さんが社会に出てから恥をかかないようにっていう、先生の優しい心配りからきている言葉でしょう？　凄く大事にされてるのが、その一事で分かります」
そう告げられた清香は間接的に清人を褒められた事ですっかり嬉しくなり、満面の笑みで聡を見上げた。

「はい！　お兄ちゃんは頭が良くて優しくて何でもできる自慢のお兄ちゃんなんですよ。だから私も大好きです！」
「そう……」
その時、聡は自分の胸中に、何とも言い難い感情が宿ったのを感じた。
それが清香から絶対的な思慕と崇拝を受けている清人に対する嫉妬心と、兄である清人に対するその感情を躊躇い無く表に出す事のできる清香への羨望である事に気付くのは、もう少し先の事になるのだった。

第４話　交錯する思惑

「「いただきます」」
夕食時、清香と食卓を挟んで挨拶をした清人は、常より微妙に多い皿数と手の込んだ料理を眺め、箸を動かしながら不思議そうに尋ねた。
「……清香、何か今日は随分気合いを入れて作ったんだな」
「うん！　だって嬉しい事があったから」
如何にも上機嫌に言い出す清香の、“聞いて聞いて！”的な無言の訴えを醸し出す瞳を見た清人は、笑いを堪えながら尋ねてみた。
「へえ、因みにどんな？」
「今日図書館で、お母さんがお兄ちゃんデビュー以来の熱烈なファンだって人に偶然出会って、色々な話を聞いてきたの」
「そうか。例えばどんな話？」
「あのね、出版作品を全部コレクションしているのはお約束でしょうけど、装丁が傷まない様にオリジナルの手製のカバーをかけてるんだって」
「そんな風に大事にして貰ってるとは、有り難いし作家冥利に尽きるな」
自分の作品を大事にして貰っていると聞いて悪い気がしないのは当然であり、清人の顔も自然に緩む。
「それで、お兄ちゃんはこれまで色々なジャンルで書いてるでしょう？　一般的な文芸書とかの他にエッセーとかミステリーや各種ルポやノンフィクション、恋愛物や時代劇とかＳＦまで手を広げちゃって」
「まあ、書きたいものを書いているうちに、際限なく幅が広がってしまったんだが」
「それでその方、ご丁寧にジャンル毎に色柄を変えてカバーを作っ

ているから、お兄ちゃんが新しいジャンルに手を出す度に『今度はどんな物にしようかしら？』って楽しそうに、でも真剣に悩んでるんですって」

「俺が雑食作家なばかりに、見ず知らずの女性を散々迷わせる結果になって申し訳ないな」

そこで苦笑いを一層深くした清人に、清香が顔付きを改めて神妙に言い出した。

「それでね？　お兄ちゃん。お話しているうちに分かったんだけど、実はその人今入院中なんですって」

「それは……、それなりの年齢の人だろうし、心配だな」

思わず同情する口調と表情になった清人に、清香が軽く首を振りながら続ける。

「でもすぐ退院予定だから心配しないで欲しいし、変な事を聞かせて却って悪かったと謝られたわ。だけどその話を聞いて、私つい『お見舞い代わりにお兄ちゃんのサイン本でもさしあげましょうか？』って言ってしまって……」

そう言って気まずそうに顔を俯けた清香を眺めた清人は、目元を緩ませて優しく笑いかけた。

「分かった。それは清香の親切心から申し出た事だし、気にしなくて良いよ。俺なんかのサインで喜んで貰えるなら、幾らでもするから」

それを聞いた清香は、弾かれた様に顔を上げ、嬉しそうに礼を述べた。

「ありがとう、お兄ちゃん！」

笑みにすこぶる満足しつつ、清人が早速どの本にサインして渡そうかと思案する。

「じゃあ……、出版社から貰った最新刊が残っているから、早速それにでも」

「あ、ちょっと待って！」
「どうした」
慌てて引き止めた清香に清人は訝しげな顔を向けたが、清香は順序立ててその理由を口にした。

「あのね、できればお母さんが普段読み込んでいる本にサインをして貰えないかって頼まれてるの」
「そうなのか？」
「うん、サインして頂くだけでも恐縮なのに、本まで頂けないって。それに愛着のある本にサインを頂けた方がお母さんも喜びそうだからって事なんだけど、どうかな？」
幾分心配そうにお伺いを立てる清香の顔を見て、清人は破顔一笑した。

「それなら俺もそれで構わない。大事に読み込んで貰ってる本を見たら、俺も嬉しいし」
「良かった！　じゃあ今度預かってくるからお願い」
「分かった。しかしその人は良識と謙虚さを兼ね備えた上、母親思いの親孝行な人だな。そんな風に思いやって貰って、そのお母さんは幸せだ」
「そうね……」
しみじみと感想を述べた清人だったが、ここで何故か清香が箸の動きを止めて何やら考え込んでしまったらしい事に気がつき、気遣わしげに声をかけた。

「どうかしたのか？」
その問い掛けに清香は一瞬何と言ったものかと迷う風情を見せたが、ぼそぼそと正直に思った事を口にする。
「あ、えっと……、大した事じゃ無いんだけどね？……私も親孝行、したかったかなぁ、なんて」

「……清香」
思わず何とも言い難い顔で清人が口を閉ざし、自然と重苦しくなったその場の空気を払拭しようと、清香がわざとらしく明るい声を張り上げた。

「だから！　親に親孝行出来なかった分、親代わりに面倒見てくれてるお兄ちゃんの老後の面倒はみてあげるからね！　安心して！」
「……なんだそれは？」
いきなり飛躍した話の内容に清人が眉を顰めたが、清香は勢い込んで続けた。
「だってお兄ちゃんったらもう３１なのに、結婚どころか女性と付き合ってる気配すら感じないんだもの」
その妹の訴えに、清人は呆れた様な溜め息を吐く。

「あのな……、未成年の妹が居る家に、女性をとっかえひっかえ引っ張り込んだりできると思うのか？　お前が知らない所でそれなりにやってるから、清香が心配する問題じゃない」
「それなら今までどうして結婚の話が出てこなかったの？」
「清香が自立して幸せな結婚するのを見届けるまでは、自分の事は考えられないから」
真顔で淡々と、自分の中での既定路線を語った清人に、今度は清香が溜め息を吐きたくなった。

「あのね……、そんな事言ってたら、お兄ちゃんは忽ち４０過ぎるわよ！？　だから私のせいで１人寂しい老後を過ごす事になったら、面倒みてあげるって言ってるの」
椅子に座りながら些かふんぞり返る様に姿勢を正して宣言した清香に、清人がクスッと小さな笑いを漏らす。
「別にそうなっても、清香のせいじゃないと思うが？」
「いいの！　それに……、お兄ちゃん以上に格好良くて頭が良くて

頼りになる男の人なんてそうそう居ないんだもの。だから私の方が一生独身っぽいし……」

多少いじけた様に呟いた清香に、とうとう清人は笑い出し、何とかそれを堪えながら結論づけた。

「それについては明らかに俺のせいだな。分かった。じゃあその時は、2人で静かな老後を過ごそうか」

「そうしようね！」

自分達の将来についての、ブラコンシスコン2人組の会話はそれでひとまず円満に終了し、その後清香が清人に色々話し掛けつつ食事を続けたが、何故か清人は何かを考える風情で受け答えをした。そして食べ終えて椅子から立ち上がりつつ、すまなさそうに清香に声をかける。

「清香、悪いが来週一つ締切があって、予定が詰まってるんだ。後片付けを任せて良いか？暫く書斎に籠もるから」

それに清香が素直に頷く。

「分かったわ。二時間位したら珈琲を持っていくね。明日の朝ご飯も私が準備するから心配しないで」

「ああ、頼む」

軽く微笑んでから清人は歩き出し、仕事場にしている書斎へと入った。そして机の前のキャスター付きアームチェアにドサリと音を立てて座る。

大きめのその背もたれに寄りかかりながら、清人は斜め上方向を見るともなしに見つつ、先程までとは打って変わって無表情で呟いた。

「……親孝行、か。『親孝行したい時に親は無し』とは良く言ったものだな」

そして次に上半身を起こし、机に肘を付いて両手を組む。そこに

額を押し付ける様にして、不機嫌そうな呻き声を漏らした。
「しかし、不愉快な事まで思い出したな。……ふざけるな」

この時、清香がはっきり告げなかった事もあり、清人は清香が知り合った“母親がファン”だという人物が清香と同年輩の女性だと、何となく思い込んでしまっていた。しかもその人物が最近自分を苛立たせている張本人と同一人物であるなどとは、夢にも思っていなかったのだった。

本来、清香に関しての観察力洞察力が鋭過ぎる清人が、珍しくそんな些細な勘違いをした日の翌日。明るい午後の日差しが差し込む、ガラス張りの広い店内の壁際でシャンプーを済ませた清香は、スタッフに誘導されて鏡の前の椅子に座った。

さほど待たされる事もなく、指名をしていた明るいオレンジ色に近い髪の美容師がやってきてその背後に立って声をかけてくる。

「やあ清香ちゃん、お待たせ」

笑顔を振りまきながらふわりとカット用のビニールケープを自分の周りに広げた玲二に、清香は鏡の中の彼に笑顔を返しつつスルリと袖に腕を通した。

「今日もお願いします、玲二さん。でも私って贅沢よね？」

「何が？」

ケープを清香の首の後ろで止めつつ、首にかかる程度の髪を僅かに揺らしながら玲二が尋ねると、清香がクスクスと笑いながら理由を述べた。

「だってカリスマ美容師と人気も高い玲二さんに、電話一本でこちらの都合に合わせていつでも予約を入れて貰えるんだもの。しかも毛先を揃えるだけなのに。他の女の人達に知られたら、絶対恨まれ

るわ」
　それに玲二は清香の髪を纏めたタオルを外しつつ、笑って応じる。
「可愛い清香ちゃんがわざわざ俺に会いに来てくれるんだから、時間を空けるのは当然だよ？」
「もう、相変わらず上手なんだから」
　苦笑した清香の髪を、玲二は滑らかな手の動きで肩から背中へと流した。

「言っておくけどお世辞じゃないよ？　本当に、会う度に何にも染まっていない清香ちゃんを見ると……」
　そう言いながら玲二は後ろから両手を回し、清香の両サイドの髪を耳の横で指で挟んで長さを測る様に伸ばしつつ、僅かに屈んで清香の顔に自分の顔を寄せた。そして鏡の中の清香に向かって、艶やかな流し眼を向ける。
「上から下まで余す所無く、俺色に染め上げてみたくなる……」
「ぜえ～ったい駄目っ！」
　大抵の女性はこれで落ちるところが、清香は頬を染めるどころか、気分を害したらしい顔で盛大に否定してきた為、さすがの玲二もへこみそうになった。

「……酷いな。そんなに嫌わなくても」
　すると清香が猛然と理由を述べる。
「だって美容師さんって、会う人会う人私の髪を見るなり『あら素敵な髪ね！　でも若いんだからもう少し明るい色にした方が絶対似合うわよ？　ついでに軽くパーマもしてみない？』とか何とか上手いこと丸め込もうとするんだもの！」
　憤然としながら訴えられた内容に、玲二は苦笑いしながら立ち直った。

「ああ、カラーやパーマが嫌な訳ね……。因みにその理由、聞いて

も良い？」
「だってお兄ちゃんが『自分の髪がくせ毛で明るめの色だから、この黒くてサラサラの髪が好きだ』って言って、嬉しそうに髪を撫でてくれるんだもの。うっかり職業上の口車に乗って変えたりしたら、そんな事してくれなくなるかもしれないでしょう？」
「……そうかもしれないね」
取り敢えず同意の言葉を返しながら玲二は手を動かし、肩甲骨にかかりそうな長さのストレートヘアを少しずつヘアクリップで頭に留めてカットの準備を進めた。
「じゃあいつも通りの長さで、揃えるだけで良いんだね？」
「はい、玲二さんの腕の振るい甲斐が無くてすみませんが、宜しくお願いします」
「任せて」
くすくすと笑いながらも、次の瞬間真面目な仕事上の顔になった玲二は、クリップを一つ外して指に挟みこんだ髪に向かって鋏を動かし始めた。しかし頭の中では先程の話を思い返し、些かげんなりする。

（だけど……、嬉々として年頃の妹の髪を撫で回すなよ清人さん。絶対、あちこち触りたいだけだろ。危ないな～）
思わず愚痴を言いたくなった玲二だったが、今日顔を合わせた時からいつも以上ににこにこしている清香を見やって、ふと第六感的なものが働いた。

「ところで清香ちゃん。最近何か良い事があった？」
「え？　どうしてそんな事を聞くの？」
「いつもより何となく機嫌が良いかな～って。客商売だから観察眼はそれなりにね。特に魅力的な女性に対しては」
目を丸くした清香に、玲二は手を止めないまま茶目っ気たっぷりに言ってみる。すると清香は納得したように話し始めた。

「凄いな～、玲二さん。実は昨日嬉しい事があって」
「へえ、どんな事？」
「お母さんがお兄ちゃんの熱烈なファンって言う人と知り合いになって、色々あってその人と連絡先を交換したの」
好奇心で尋ねてみたものの、何やら不穏な物を感じてしまった玲二は慎重に尋ねてみた。
「……ちょっと聞くけど、その知り合った人って、勿論女の人だよね？」
「ううん、男の人」
（はあ？　それじゃあ得体のしれない男に連絡先を教えたって事か！？）
サラッと言われた内容に、玲二は流石に手の動きを止めて慌てて確認を入れた。
「因みにそれ、清人さんに話した？」
「ファンだってお母さんの事？　勿論嬉しいって言ってたけど？」
「いや、そうじゃなくて……、連絡先を交換した息子さんの事」
「別にわざわざ話す事じゃないかと思ったから、言ってない、かな？」
僅かに首を傾げ、怪訝そうに自分が話した内容を確認している清香を見て、玲二は腹立たしく思った。
（何だよ清人さん！　いつもなら俺らが清香ちゃんを誘ったりしようものなら、露骨に邪魔したり圧力かけてくる癖に！　どうして今回に限って疑いもしないんだ？）
そこまで考えて、ある一つの可能性に行き着く。
「……清香ちゃん。ひょっとして清人さん、締め切りが近いとか？」
その問い掛けに、清香は完全に目を見開いて驚愕した。

「凄い！　どうしてこの場に居ないお兄ちゃんの事まで分かるの？　玲二さん、ひょっとして最近超能力に目覚めた！？」

「は、はは……、さすがにそれはどうかな～」

天然っぷりを如何なく発揮し、嬉々として食い付く清香に顔を引き攣らせつつ、玲二は内心で深い溜め息を吐いた。

（清人さん、あんた何で肝心な時に使い物にならないかな！？　しかしあの人が締切位で清香ちゃんの監視が緩むとは考えにくいが……。まあ、仕方がない。今日は俺が情報収集に勤しむ事にするか）

そう腹を決めた玲二は、再び手を動かしながら清香から必要な事を漏れなく聞き出す事に専念した。

「因みに清香ちゃん。その人とどこでどんな風に知り合ったの？」

「昨日図書館に行って、レポートを書くための資料を探してたの。学内の図書館は粗方目を通してたから、他に参考になるのはないかなって。そしたら……」

そして繊細な手の動きで玲二が毛先を揃えている間、清香は巧みに誘導されて前日出会った悟との一部始終を語った。

「……そんな風に意気統合して、結局本を借りた後、図書館の隣のカフェでお茶を奢って貰ったの。『お手数をかけるので、是非ともこれ位奢らせて下さい』って。流石一流商社勤務の人は、気配りも欠かさないのね」

心底感心した様に目を閉じて1人納得している清香に、前髪を揃えていた玲二は激しく脱力して思わず床に蹲りたくなった。

（清香ちゃん……、悪いけど、そいつどう聞いても胡散臭さプンプンだから！　もっと警戒心持とうよ！）

しかし取り敢えずの小言はひとまず横に置いておく事にし、玲二は何とか最後まで笑顔を保ちながらカットを終わらせた。そして「

じゃあまたお願いします！」と無邪気な笑顔を見せる清香を見送った直後、緊急召集をかけるメールを兄と従兄弟達に一斉送信したのだった。

第5話　秘められた確執

浩一が鞄を片手にビジネススーツ姿で小料理屋（くらた）の前に立つと、まだ営業時間内にも関わらず暖簾が店内にしまい込まれ、準備中の札が入口に掛けられていた。一瞬戸惑ったものの店内の明かりと人の気配に、苦笑して引き戸を開ける。

カラカラとドアの開ける音で奥のL字型のカウンターに囲まれた調理場の女性と、右手奥の座敷席に陣取っていた男達が浩一に目を向け、それぞれ笑顔を向けてきた。

「日曜まで仕事だったのか？お疲れ」

「そんな所だ。馬鹿な部下の尻拭いほど、疲れるものは無いな。…しかし早じまいしたんですか？　奈津美さん。愚弟が迷惑をかけて申し訳ない」

真っ先に声をかけてきたこの店の主である、上下白の仕事着のまま座敷で寛いでいる修に苦笑してみせた浩一は、次にカウンターの向こう側で予め用意されていた料理を取り分けているその妻の奈津美に向かって軽く頭を下げた。しかし彼女は笑って手を振る。

「あら、良いのよ。修さんの大事な清香ちゃんの一大事なんでしょ？　お店を開けていたってそわそわして仕事にならないもの」

そう言われてますます苦笑を深めてから、左側に幾つか並ぶテーブル席の横をすり抜けて浩一は座敷に上がり込み、諸悪の根源の弟の隣に立った。

「あ、兄貴、お疲れ～」

そう言ってヘラヘラ笑いかけてくる玲二に、浩一は疲れた様な溜息を漏らしながら畳に膝を付き、弟の首を絞める真似をしつつ恫喝する。

「玲二、お前な……、人の都合も聞かずに『俺達の愛しの清香ちゃ

んに纏わりつく害虫発見！　駆除対策を練るべく即刻全員集合すべし！』の文面に、ここの場所と時間だけ付け足して送るとは良い度胸だな。何様のつもりだ？」

「あ、あはは…、いや～、俺もちょっと動揺したかな～？」

他の皆が傍観する中、玲二が些か引き攣った笑いを浮かべた所で、タイミング良く浩一用のお通しとグラスを運んできた奈津美が割り込んだ。

「はいはい、浩一さん、その位で。皆さん浩一さんが来るのを今か今かと待ってらしたんだから」

そう言われながら目の前の空席に小皿とグラスを並べられた浩一は、あっさりと怒りを引っ込めた。

「分かりました。奈津美さんに免じて許してやります」

「ありがとう。さあ、どうぞ」

笑顔の奈津美に促され浩一が所定の位置に収まると、この場を仕切っていたらしい修が浩一のグラスにビールを注ぎながら玲二に声をかけた。

「じゃあ全員揃った所で、早速始めようか。玲二君？」

それに軽く手を上げて、真顔で応じる玲二。

「はい、じゃあまず俺から報告。何が目的か、清香ちゃんに近付いてる男が居ます。そしてどうしてだか、これに清人さんが気付いて無いらしいという驚愕の事実」

「はあ？なんだそれ」

「ありえない」

「泳がせてるわけじゃ無いのか？」

「もっとあり得ないだろ、即断即決の清人さんが」

その場の殆どの人間が懐疑的な視線を向ける中、玲二は予め協力を要請していた従兄弟に話の主導権を譲った。

「それで今日俺の店に来た時に清香ちゃんから得たデータを元に、

今日明良に調べて貰ってるんで。あ～き～ら、ちびちび飲んでんなよ。後は任せた！」

それを受けて、修の弟である明良がグラスを置き、どこからか手帳を取り出して見下ろしながら仔細を話し始めた。

「玲二から連絡貰って、取り急ぎ分かる範囲だけ調べてみたんだけど……、結構面白い事が分かったから報告するよ？」

「おう、何だ？」

「男の個人情報なんて聞いても、面白く無いとは思うがな」

大して気にも留めない様子で促した面々に気を悪くした様子も見せず、明良は淡々と衝撃の事実を告げた。

「故意か偶然か、清香ちゃんに接近してきた男は自称『角谷聡』。この名前で小笠原物産営業部第一課勤務の２５歳。実は本名『小笠原聡』で小笠原物産代表取締役社長、小笠原昭の一人息子で……、かつ、清人さんの異父弟だ」

そう明良が口にした途端、一瞬店内に沈黙が発生し、次いで驚きの声が沸き起こった。

「はあぁ！？　ちょっと待て！」

「何なんだそれは！？」

「そんな話、初耳だぞ！」

しかしそんな中、年長組である浩一と友之だけは何とも言い難い顔で黙り込んでいるだけなのに気付いた玲二が、訝しげに声をかけた。

「……おい兄貴、友之さん。何で２人だけ平然としてんだよ？」

それに対し、浩一と友之はちらりと互いの顔を見合わせてから、不思議そうに問い返す。

「いや……、お前達知らなかったのか？」

「法事か何かで集まった時、小耳に挟んだ気がしたがな……」

それを聞いて唖然とする修、玲二、正彦の３人に、がっくりと項

垂れる明良。

「何だよ、2人とも知ってたのか……。気合い入れて調べて損したな……」

それを浩一は申し訳なさそうに宥めた。

「悪い明良。でも今日の午後に玲二から連絡を受けてから、それだけ調べられるとは大したものだ。伊達に人脈の広さを誇ってないな」

「どうも」

そう言われて苦笑するしかない明良から他の面々に視線を移しつつ、浩一が慎重に口を開いた。

「さて、どこからどう話せば良いかな……。佐竹の叔父さんが香澄叔母さんと結婚する前に、離婚歴があったのはお前達も知ってるだろう？」

「それは勿論」

「だから揉めたんだろうし」

素直に頷く従兄弟達に、軽く頷いて浩一が話を続ける。

「実は叔父さんと最初に結婚してたのが今の小笠原昭夫人の由紀子さんで、前小笠原物産会長小笠原幸之助の1人娘で、清人の母親だ。2年位で離婚して実家に戻り、その数年後に小笠原物産で頭角を現していた昭氏と再婚した。婿養子に入った昭氏とは盛大な挙式披露宴を催したが、清吾叔父さんとは駆け落ち同然で式も挙げなかったから、世間一般的には清吾叔父さんと由紀子さんの結婚の事実は知られていない。清人は佐竹家に置いていかれてその後没交渉だったし、余程の事情通でなければ親子である事実も知られていないな」

立て板に水の如く浩一が語り、ここで喉を湿らせる為にビールの入ったコップに手を伸ばす。何となくその場に重苦しい沈黙が満ちたがそのままにしておけず、控え目に正彦が問いを発した。

「……離婚の理由は？」
「そんな事、当人にしか分からんだろ。俺に聞くな」
「それもそうだな」
「それで？」
促してきた面々から僅かに視線を逸らし、浩一が如何にも言い難そうに言葉を濁す。
「……清人の記憶力が抜群なのは知ってたが、あいつ母親が出て行った時の一歳児当時の事をしっかり覚えているらしい。もう驚愕としか言いようがないな。それで……、表からは窺い知れ無い、精神的な部分で相当グレた」
（（（（身も蓋もない言い方だな……、否定できないが））））
浩一のその台詞を聞いた者は、この場に居ない人間の事を思い返して全員遠い目をしてしまったが、続く浩一の言葉で意識を引き戻された。

「その後、表向き佐竹家と小笠原家とは没交渉だったんだが、清人の話によると、母方の祖父に当たる小笠原物産の前会長が時々ちょっかいを出してきたそうだ」
「ちょっかい？」
「って、どんな？」
思わず好奇心に負けて尋ねてくる玲二や明良に、浩一は苦々しい顔を隠す事無く仔細を告げる。

「自分が認めない男との間に馬鹿娘が産んだ孫なんか歯牙にもかけてなかったらしいが、清人の優秀さが分かったら掌を反して嬉々として擦りよってきたらしい。国内最高峰の東成大経済学部に入学が決まった時、『学費は一切面倒みてやるし、小笠原の籍に入れてやる』と恩着せがましく言ってきたんだと」
「……うわ、うちらの祖父さん以上のＫＹ」
「そんな事を言って、本気で清人さんが喜ぶと思ってたのか？」

その場全員の気持ちを代弁して問いかけた正彦に、浩一が肩を竦めてみせる。

「『ありがたくお受けします』と言うとでも思ってたんだろうさ。だがさすがに清人が『今まで様子も見ずに放っておいたのに、厚かましくありませんか？』と言ったら、『養育費と慰謝料はたんまりくれてやると言ったのに、全て拒否して今後私達親子に関わらないでくれとほざいたのはお前の父親の方だぞ。俺は情けをかけてやったのに、好き好んで自分の息子に貧乏暮らしをさせた、甲斐性なしの上大馬鹿野郎だ』と暴言を吐いたらしい」

それを聞いた面々は何とも言えない顔で黙り込み、清人の出自は知っていてもそこまでの詳しい事情を知らなかった友之が、顔に嫌悪の表情を浮かべながら続きを促した。

「……それでどうなったんだ？」

「どうもこうも。清人は『丁重にお断りした』と言ってた」

「“丁重に”ねぇ……」

「“丁重に”の言葉の定義が変わりそうだな」

両手を広げてお手上げ、と言った風情で述べた浩一に、修と正彦が茶々を入れる。それでその場に失笑が漏れ、場の空気が少しだけ回復した。

しかし小さな笑いを収めた浩一が、更に容赦の無い話を続ける。

「それから大学四年の時、あいつの主席卒業が本決まりっぽい時に『うちに入れ。ゆくゆくは社長の椅子を渡してやっても良いぞ？』と厚かましく言われたらしい」

それを聞いた浩一以外の面々は、揃って呆れ顔になった。

「一度で懲りなかったんだ？　その祖父さん」

「…ある意味、根性あるよな」

「いや、もう意地じゃないのか？」

「それにしても、もう少し言い方を考えても」
それを受けて、浩一が重々しく口を開く。

「その時、殊勝に小笠原物産にエントリーシートを提出してあっさり内定を貰ったから、小笠原物産に取られるかと焦ったんだ。だが、……卒業直前に某出版社の新人賞を受賞した事と作家デビューを公にして、華麗に就職を辞退しやがった。……同時期に柏木産業でも内定を出してこちらも断られたから、小笠原と二股かけられてたと分かった時に祖父さんと父さんに『早く向こうを断らせろ』と散々責められた挙げ句、内定を辞退された時には『何で気がつかなかったんだ。お前もグルか！』と怒鳴られまくった」
そんな過去を告白して座卓に突っ伏した浩一を、周りの皆が同情の眼差しで見詰めた。
「……大変だったんだな」
「華麗にって……」
「絶対一悶着あったよな？」
ぼそぼそと男達が囁き合う中、再び浩一がゆっくりと上半身を起こし、陰鬱な口調で再び話し出した。

「それから5年位前」
「まだあるのかよ！？」
「おいおい、かんべんしてくれ」
心底うんざりした様な声が上がる中、些か自棄になりながら浩一が話を続けた。
「前会長がいよいよ駄目らしいって事になった時、自分の死後、今現在辣腕を振るってる婿養子の社長が会社を私物化するんじゃないかと不安になったらしい。まだ孫は学生だったし、幾らかでも社長の重しになる駒が必要と考えたんだな。入院先から弁護士を介して『相続人に加えてやるから、大して金にもならんくだらん物書きなど止めて小笠原の経営に参画しろ』と命令してきたそうだ」

「……馬鹿か？その祖父さん」
「見苦しいね、人生の最後に」
「清人さん、怒ったよな。“くだらん物書き”呼ばわりされて」
ある者はがくりと項垂れ、またある者は溜息を吐いて清人に同情したが、続く浩一の言葉に全員固まった。
「当然だ。会長の病室に、山ほど仏花を送りつけようとしたらしい」
言われた内容が一瞬理解できなかった一同は、頭の中でそれを反芻してから引き気味に感想を述べた。

「いや、幾らなんでも」
「さすがにそれはちょっと……」
「人間としてどうかと思う」
「第一、病室にそんな物を配達する花屋があるのか？」
「モラルに反するだろうが」
それを聞いた浩一が、事も無げに頷く。
「ああ、さすがに配達先を聞いたら、引き受ける所は無かったらしい。どう考えても嫌がらせにしか思えないし、それの片棒担いで店の信用を落としたくは無いだろうからな」
「それじゃあ清人さんは諦めたんですか？」
一縷の望みをかけて顔を引き攣らせながら明良が尋ねたが、浩一は苦々しく吐き捨てた。

「そんな訳あるか！　お前達も昔からの付き合いで、あいつはやると言ったら手段を選ばず必ずやり遂げる奴だって事は分かっているだろう？」
「言ってみただけです……」
「清人の奴、複数の花屋に日時を合わせて仏花を大量発注した後、その日に運転手付きで幌付きの軽トラック3台を手配して、その荷台に準備した花束を容器毎詰め込んで貰って、翌日の朝八時に入院先の玄関の車寄せに乗りつけやがったんだ」

「……げ、マジかよ？」
「警備員に追い返され無かったんですか？」
「同時にガタイの良過ぎる体育会系の学生を、３０人も現地集合で動員してな。バイト料を提示した上で、『今から１５分以内に指定する病室にこの荷物を全て運び終えたら、各自プラス１万円の料金を支払うから頑張ってくれ』とやったそうだ。清人は『職員の妨害なんてものともせず、皆嬉々としてきっかり１５分でやってくれたぞ』と嬉しそうに言ってたな」
「ただでさえその時間帯は、外来の準備とか夜勤と日勤の引き継ぎとか、検温採血その他諸々で職員が忙しい時間帯じゃないですか」
「それを狙ったな。……どこまでえげつないんだか」
過去に看護師と交際でもしていたかの様な冷静なコメントを零す友之に、呆れ果てた呟きを漏らす玲二。最早同意するのも馬鹿らしくなったらしく、浩一が淡々と話を続けた。

「職員に迷惑をかけたのは勿論、他にも入院患者が居る中、病棟をそんなものを抱えて走りまわられてはたまったものじゃない。百歩譲って菊の花束だけだったら病人の好みだと弁解する事も出来るが、当日持ち込んだのは菊の後ろにシキミが段々に整えられている奴だったから、どう見ても仏花以外の何物でもないからな。しかも『小笠原の指示で運び込んでますので、抗議は後から纏めて小笠原がお受けします』と叫ばせながら運ばせたそうで、後から会長側に『何を考えているんだ縁起でも無い！』と非難轟々だったそうだ。勿論激昂した前会長の指示で、遺言書から清人の名前は綺麗さっぱり削除されたらしい」
（（（（（（人生の最後に、とんだ災難だったな……））））））
そこまで聞いた面々は、ほんのちょっとだけ前会長に同情した。
そこで何を思ったか、急に浩一が座卓に両肘を付き、文字通り頭を抱える。

「その時の事を聞いた時、清人が『花が広い病室だけに収まらなくて廊下にまで溢れて、なかなか壮観な眺めだったぞ？　そのまま憤死しそうな会長の記念写真を撮ってあるから見るか？』といいながら当時の写真を差し出してきたんだ。その時のあいつの、悪魔的な壮絶過ぎる笑顔っ……。今思い出しても寒気がする。それ以降、俺は絶対にこいつを本気で怒らせまいと心に誓った」

本気で呻いている浩一を見ながら、他の者はさもありなんと頷いた。

「なるほど。そこまで拗れたら没交渉ってのも納得だな」

「互いに良い感情なんて持てないと思うし、妥当ですね」

「だけど今回、これまで一切面識の無かった弟が、清香ちゃんに接触を試みた、と」

「その前に、一度清人に電話をかけてきたそうだ。話を聞かずに速攻でブチ切ったらしいがな」

「清人さんらしい…」

話が次のステップに進んだのを捉えて、浩一が顔を上げて経過を告げると、皆が苦笑いした。しかし続く台詞に、その場の空気が再び不穏なものに逆戻りする。

「その話を聞かされた時、俺が小笠原社長夫人が最近入院してるって事をあいつに教えたら、途端に嫌な顔をされてな」

「ちょっと待ってくれ、浩一さん。それじゃまさか、その聡って奴が偽名名乗ってまで清香ちゃんに近付いたのは、単に清人さんに渡りを付ける為だって言うのか？」

「そうとは限らないさ、明良君。偶々仕事上で使ってる通称で自己紹介して、偶々自分の異父兄が作家だって事を知らなくて、偶々知り合った女性がその人の異母妹だった事を知らなかっただけかもしれないだろう？」

飄々と口を挟んで来た友之に、明良が思わず白い目を向けた。

「……友之さん、自分でも全っ然信じてない口調で言うのは止めて貰えませんか？」
「はは、自分で言ってみても信憑性が無さ過ぎるな」
苦笑いで返した友之の横で、玲二が軽く腕を組みながら納得する。
「う～ん、でも何となく分かったな、今回清人さんの反応が鈍かったわけ。全然気にしていない様でいて、やっぱり母親の話を聞いて多少は動揺してるとか？　締切位で清香ちゃんの観察を怠るとは思えなかったから」
「それはそうだろうな」
浩一が賛同を示した所で、比較的大人しく話を聞いていた修が話を纏めにかかった。
「じゃあ取り敢えず、清人さんもそんな不純な動機で清香ちゃんに近付く男は即刻強制排除するだろうから、この際俺達も全面的に協力するという事で。清人さんには締め切りとやらが落ち着いた頃合いを見て、浩一さんか友之さんから報告して貰うって事でどうかな？」
「賛成」
「異議なし」
「右に同じ」
「全く厄介だな」
「他人の迷惑を考えろよ」
そんな風に兄弟従兄弟で意見の集約をみた所で、先程から議論の様子を窺っていた奈津美が、新しいつまみの小鉢と酒を運んで持ってきた。そして各人の前に手早く並べてから、最後に夫に配りつつ幾分探る様に問いかける。
「さっきから随分物騒なお話をしているけど、もし万が一さっき言った様に何の下心も無く、偶然2人が知り合っただけだとしたら、

その小笠原さんとやらをどうするつもり？」
　その問いかけに、修達は淡々と言い返した。
「それは、まあ……、そうだな」
「俺達も鬼じゃないし？」
「一応、強制排除なんて手段は取りませんよ？」
「年長者としての立場から色々言い聞かせて」
「納得ずくで、自主的に身を引いて貰うとか」
「そんなところだろうな」
（どちらにしても、清香ちゃんの周辺からは排除する方針は変わらないわけね）
　笑いだしたくなるのを必死で堪えながら、奈津美は夫に言い聞かせた。

「どうでも良いけど修さん？明日朝からお仕事の方もいらっしゃるんだから、際限なくお酒を勧めちゃダメよ？」
「分かってるって！」
　苦笑して頷いた修に、早速他の面々から冷やかしの声がかかる。
「おいおい、もうすっかり尻に敷かれてるな～」
「何とでも言え！　家庭円満の秘訣は、何と言っても黙って女房の尻に敷かれてやる事だ。覚えとけ、この独り身集団！」
　ふんぞり返った修の言葉に、傷ついた様に玲二が胸を押さえてみせた。

「はぁぁ～、言われちゃったよ」
「独り身集団で思い出したな、清香ちゃんへの求婚指令。どうするよ」
「取り敢えずそいつの邪魔をしつつ、清香ちゃんとデートしてアリバイ作りにするか？」
「そうだな、あの祖父さんの事だ。俺達に尾行を付けて、清香ちゃんと接触が無いと呼び出されて説教されかねない」

「じゃあそういう事で、当面の方針は決まったな」
そんな風に賑やかに、《くらた》での夜は更けて行った。

第6話　込み上げる怒り

「じゃあお兄ちゃん、ちょっと駅前のカフェまで出かけてくるね？」
その声に、朝食後リビングのソファーに座って寛いでいた清人は、読んでいた新聞から顔を上げ、ドアの方を見やった。

「ああ、例の角谷さんから、お母さんの本を受け取って来るんだな」
「うん。お兄ちゃんがサインしてくれるって伝えたら、とても喜んでくれたわ」
「そうか。しかしわざわざこの近くまで足を運んで貰って申し訳無かったな。先方に住所を教えても良かったかも……」
僅かに表情を曇らせた清人に、清香が宥める様に明るく言葉を継ぐ。
「何でも今日は、もともとこの近くに用事があったんですって。本を渡したらそこに行くからって言ってたから」
それを聞いた清人は、どこか安堵した顔付きになった。
「そうか……、それはお互い都合が合って良かったな」
「うん。帰りにケーキでも買って来るね。行ってきます！」
「ああ、気をつけて行っておいで」
そんなやり取りをして清香を見送った後、再び新聞を読み始めた清人だが、電話の着信音に不快気に顔を上げた。

「誰だ？土曜日の朝っぱらから」
小さく悪態を吐きながら新聞を横に置いた清人は、壁際の電話に真っ直ぐ向かった。そして受話器を取り上げて応答する。
「はい、佐竹ですが」
『お久しぶりです、清人さん。友之です』
「……何の用だ？」
妙に嬉しそうに聞こえてきた男の声に、清人の機嫌は確実に悪く

なった。

浩一を初めとする清香に纏わりついてくる彼女の従兄弟達の1人で、清人の一つ下の友之は、一見人当たりが良く穏和な気質を持っている好青年と思われがちだが、実際は松原工業次期後継者と見込まれるだけの人物であり、その内側に鋭敏な観察眼と胆力を兼ね備えた、早く言えば一癖も二癖もある人物だった。

しかしそれは清人も同様であり、同族嫌悪と言う言葉がぴったりなこの2人の関係は、浩一とのそれとは異なり以前からとても友好的とは言えない代物だった。

『そんな露骨に嫌な声を出さなくても良いじゃないですか。一つ悪い事を教えてあげようと思ったのに』

「“良い事”じゃなくて“悪い事”か？相変わらずだな」

清人は思わず皮肉ったが、相手は平然と切り返してくる。

『あなたには負けますよ。ところで清香ちゃんは？』

「今外に出たところだ」

てっきり清香に電話をかけてきたと思った清人は、言外に「目的を果たせなくて残念だな」という意味合いを含ませたが、友之は全く気にせずに用件を口にした。

『それは好都合。実は彼女が今、会いに行ってる人物は男です。それを教えてあげようかと』

「は？」

いきなり思考停止する内容に清人が絶句すると、友之がどこか思わせぶりに伝える。

『もっと詳しく言えば……、あなたの異父弟だったりするんですよ』

その台詞を聞いた清人はたっぷり数秒は固まった後、電話の向こうに怒声を浴びせかけた。

「何だと!?　そんな馬鹿な!!　お前、いい加減な事をぬかすな!!」

『……五月蠅いですよ。彼女、その人物をどう言ってたか、思い出してみたらどうです?』

迷惑そうに指摘してくる友之に、清人は取り敢えず怒りを抑えて考え込む。

「そう言えば……、“角谷”って言う苗字は、確かあの小笠原社長の旧姓!?　迂闊だった……。おい、ちょっと待て!　大体どうしてお前がそれを知ってる!?」

矢継ぎ早の言葉に、清人の動揺ぶりが容易に推察できるらしく、友之が笑いを堪える様な口調で説明してくる。

『最初の情報源は玲二です。しかし色々平静さを欠く事があったかもしれませんが、らしくないですね。清香ちゃんに近付く男の影に気がつかないなんて』

「勝手に言ってろ!」

忌々しげに吐き捨てた清人に、友之が口調を改めて問い質してきた。

『それで、どうするんです?』

「どう、とは?」

衝撃の事実を告げられた為、些か失調気味の清人が言われた意味を掴み損ねて眉を寄せると、友之が淡々と畳み掛けてきた。

『清香ちゃんに小笠原との一部始終を話した上で、彼らに金輪際近付くなと厳命しますか?』

「それは……」

思わず口ごもった清人に、友之が追い討ちをかける。

『そうもいきませんよね?実の母親を死んだ事にし、実の祖父に対して仕出かした非常識な行為の数々を聞いたら、あの素直で純粋な子が『お兄ちゃん酷い、あんまりだわ!人として最低よ!軽蔑する

わ、大っ嫌い！』とかなんとか言いそうだ。そんな事を面と向かって言われたら、妹命のあなたにはダメージが大でしょうし』

「……うるさい、黙れ」

律儀にも清香の口調を真似て言われたそれに、清人が静かに恫喝し、そのこめかみに青筋が浮かんだ。それがまるで見えているかの様に友之がクスクスと笑いを漏らしてから、いつもの口調に戻って確定事項を告げる。

『取り敢えず今日は2人の待ち合わせ場所に、体の空いていた正彦を出向かせてます。さり気なく邪魔しますから心配しなくて良いですよ』

その台詞で、清人はおおよその事情を把握した。

「全く……、俺が知らないところで皆で集まったのか？」

『ええ、意思統一しました。それで清人さん、今日は病人になって下さい』

「はあ？」

唐突な申し出に流石に清人が戸惑った声を上げたが、友之はそれに構わず話を続ける。

『携帯の電源を切って、家電も出なければ完璧です』

そこで元々聡い清人は、友之の思惑を瞬時に理解した。

「……なるほどな。清香に心配をかけるのは不本意だが仕方がない」

『どこまでも清香ちゃん本位の人ですね。それじゃあ連絡はしましたから、失礼します』

「ああ、手間かけさせたな」

最後は互いに苦笑しあって通話を終わらせ、清人は静かに受話器を元の位置に戻した。しかし（くだらない小細工を弄しやがって……）と聡に対する清人の怒りは、それから暫く燻り続けていくのだった。

清香が目指す店に入ると、入り口近くのテーブルに着いていた聡が軽く手を上げて自分の位置を知らせてきた。それに微笑みながら、清香が歩み寄る。
「すみません、遅くなりました」
「いえ、清香さん、こちらこそわざわざお呼び立てしてすみません。しかも先に自分の分だけ注文してしまいましたし」
聡の前に置いてあるコーヒーカップを見ながら、清香は向かい側の席に座った。

「いえ、自宅のごく近くですし、角谷さんの方がご自宅から距離がありますよね。……あの、ところで今の“清香さん”と言うのは……」
前回とは違う呼び方でサラリと呼び掛けられた清香は、戸惑いながら尋ねたが、聡は事も無げに言い切った。
「ああ、この前は佐竹さんってお呼びしてましたけど、お兄さんである先生も同じ佐竹さんですから、自分の中で何となくお2人の呼び方を変えてたんですよ」
「はぁ」
「清香さんがお嫌なら止めますけど、どうしても駄目ですか？さやかって言う名前が素敵だから、できればそちらでお呼びしたいと思っていたのですが」
「……えっと、そういうことなら」
「良かった。ありがとうございます、清香さん」
にこやかに微笑みながら微妙に押しの強さを発揮する聡に、清香は何故か既視感を覚えた。

（あれ？　何か、前に似た様な事が無かったっけ？）

何かにつけ、顔に貼り付けた聖人ぶった笑顔とソフトな物言いで、

清人に知らず知らずのうちに舌先三寸で丸め込まれている清香だったが、あまりの頻繁さの為に逆にはっきりと意識出来なくなっていた。何となくモヤモヤした気持ちを抱えながら、近寄ってきたウエイトレスにカフェオレを注文すると、清香が落ち着いたのを見計らって、聡が小さめの手提げ袋を差し出す。

「それで……、早速なんですが、この本に先生のサインを貰えますか？ハードカバーの物を持ってきてしまったので、かさばるし重くて申し訳ありませんが」

「構いませんよ？本一冊位。角谷さんったら、そんなに恐縮しなくても」

クスクスと笑い出してしまった清香に、聡も自然と目元を緩める。そしてここで唐突に清香は気がついた。

（あ、そうか！　角谷さんって、何となくお兄ちゃんに似てるんだわ！）

そうと気付いた清香の頭の中で、目の前の人物の徹底観察が始まった。

（パッと見は似てないのよね。強いて言えばお兄ちゃんはキラキラ王子系で、さしずめアレクシス様だし、角谷さんは精悍な騎士様って感じで、例えればジュノーだし……）

密かに愛読しているライトノベルの登場人物に清人と聡を置き換え、清香が軽く妄想に突入していると、ここでウエイトレスがカフェオレを運んできた。軽く会釈して目の前に置かれたカップを取り上げた清香は、それに軽く口を付ける間も注意深く聡に視線を向ける。

（瞼もくっきりとした二重だし、目つきが鋭いけど怖くは無いのよね。笑った時に目を細める感じが似てるかな？　それに……、そうか！　髪質が同じなんだ！）

自分の顔を真正面から見ながら難しい顔で考え込み、次いでニコニコと微笑みだした清香に、聡は幾分怖じ気づきながら声をかけた。
「……あの、清香さん。俺の顔に何か付いてますか？」
その問い掛けに、清香は瞬時に我に返った。
「あ！？　えっと、ジロジロお顔を見てすみません。ちょっと考え事をしてまして」
「いえ、大した事でなければ良いんですが」
「あの！　今お兄ちゃんと角谷さんの事を考えてまして。２人がちょっと似てるかな～と」
弁解する様に清香が口にした台詞に、聡がピクリと反応した。そして若干言葉を選ぶ様に確認を入れる。
「……先生と俺が、ですか？　因みにどの辺りがでしょうか」
「はい、髪質とか笑った時の感じが」
「そうですか……」
公表されている写真で顔は知っているものの、未だ直接対面した事の無い兄に似ていると言われた聡は面映ゆい感じがしたが、素直に喜んで良いか分からずに微妙な顔をした。しかし何とか清香に無難な言葉を返す。
「光栄です。先生の様な高名な方に似ていると言われて、嬉しいですね」
「高名だなんて、ちょっと大袈裟ですよ？」
クスクスと笑った清香に、聡は慎重に話題を逸らした。
「ところで…、この前お会いした時、清香さんは先生と１１歳違いだとか伺いましたが、随分年が離れてるんですね。２人の間に他のご兄弟はいらっしゃらない様ですし」
「ええ、実は兄とは母親が違うんです」
（よし、かかった！）と話題を誘導するのに成功したと喜んだのも

束の間、続けて聡の耳にとんでもない内容が飛び込んできた。

「兄の実母に当たる人は、兄が一歳の時に亡くなったそうで、その後父が再婚して私が生まれたんです」

「……お亡くなり、に、なった？」

顔面を蒼白にした聡が呆然と呟くと、清香は小さく頷いて続けた。

「はい。亡くなった後に位牌とかは実家の方で引き取ったとかでありませんし、写真も皆無なので、どんな人だったのか私は知らないんです。兄も私の母に気兼ねしていたのか、そんな話は一切しませんでしたし」

それを聞いた聡は少しの間黙り込んでから、常より幾分低めの声で謝罪の言葉を口にした。

「……そうですか。すみませんでした清香さん。好奇心からつまらない事を聞いて」

「大丈夫です、気にしないで下さい！　半分しか血が繋がってない異母兄妹でも、お兄ちゃんと私は並の兄妹より仲が良いって自覚と自信がありますから！」

「確かにそんな感じがしますね」

ドンと自分の胸を叩く真似をして明るく保証してくる清香に、聡は辛うじて笑顔らしきものを顔に浮かべながら言葉を返したが、内心は怒りで煮えくり返っていた。

（母さんを死んだ事にしてるだと？　幾ら行き来が無いとは言え、あんまりじゃないのか！？　妹に向ける愛情の１００分の１でも向けられないのかよ！？　母さんが可哀想だとは思わないのか？）

そんな事を考えながら必死に激情を抑えていた聡の頭上から、唐突に男の声が降ってきた。

「……あれ？　清香ちゃん。どうしてここに居るの？」

「あ、正彦さん。こんにちは。どうしてって……、何がですか？」
かけられた言葉の意味が分からず、清香は不思議そうにテーブルの横に立つ男女二人組を見上げたが、対する正彦は怪訝そうな顔付きで口を開いた。
「実はさっき、清人さんに電話したんだ。今度一緒に飲みに行く約束をしてたからそれについて。そしたら何だか急に具合が悪くなってきた様な話をしだして」
「え？それ、いつの話ですか？」
途端に顔色を変えた清香に内心ほくそ笑んだ正彦が、連れの女性を軽く指差しながら続ける。

「こいつと待ち合わせしてる最中だから１０分位前かな？　何かキツそうな口調だったから救急車は呼ばないのか聞いたら、清香に付き添って貰って病院に行くから大丈夫って言われて。……何だよ清人さん、まさか俺に心配させない為に、清香ちゃんが側に居るって嘘ついたのか？」
わざとらしく顔をしかめた正彦の前で、すっかり狼狽した清香が立ち上がる。
「本当ですか？　やだ、どうしよう？　家で倒れてたりしたら！」
「落ち着いて清香ちゃん。取り敢えず電話してみたら？」
「そ、そうですね！」
慌てまくって携帯を取り出した清香は、立ったまま電話をかけ始める。その側に佇んだままの正彦達と共に店中の注目を浴びてしまったが、清香にはそんな事に構っていられる精神状態では無かった。

「正彦さん、どうしよう？　お兄ちゃんの携帯も家の電話も繋がらないの！」
すっかり涙ぐんでしまった清香に、正彦は宥める様に言い聞かせた。
「たまたま電源を切って、病院に行ってるだけかもしれないよ？

家はここから近いんだから、取り敢えず戻ってみたら？　清人さんなら出かけるにしても行き先位書き置きしてると思うし」

「それもそうですね。ありがとう正彦さん。それじゃあ角谷さん、慌ただしくて申し訳ありませんけど、これで失礼します！！　お兄ちゃんにサインをして貰ったら、また改めてご連絡しますねっ！！」

そう叫ぶやいなや清香は持参したバッグと先ほど聡から預かった紙袋を引っ掴み、もの凄い勢いで店を飛び出した。

「清香さん！　何かあったらまずいですから、俺が送りま」

「引っ込んでなボーヤ」

すっかり傍観していた聡もここで慌てて立ち上がり、清香の後を追おうとしたが、その腕を正彦が素早く捕らえる。そしてその耳元に口を寄せて囁いた。

「俺はちょっとばかりお前に話があるんだ。……小笠原聡」

その一言が、瞬時に聡の全身の動きを止めた。

第6話　込み上げる怒り（後書き）

本来は次の話と纏めて出すつもりだったのですが、長くなりすぎて切ってしまいました。なるべく早く続きを出すつもりです。

第7話　地雷

（彼女には角谷と名乗ってるのに、その知り合いらしいこいつが、どうして俺の本名を知ってるんだ？）

聡が自分の腕を掴んだままの男を疑惑に満ちた目で眺めていると、当の正彦は鼻で笑う様に聡の内心を当ててみせる。

「“彼女の知り合いなのに、どうしてそれを知ってる？”って顔だな」

「……失礼します」

長居は無用とばかりに聡がその手を振り払って立ち去ろうとしたが、正彦は益々腕を握る右手に力を込めた。

「俺は話があると言った。……じゃあ今日はここで。後で必ず埋め合わせするから」

正彦の後半の台詞は連れの女性に対するもので、彼女は予め予定を聞いていた為、小さく肩を竦めて苦笑いしたのみだった。

「全く……、デートの時間が5分足らずなんて、最短記録だわ。しかも乗り替える相手が男なんて、ちょっとバカにしてない？」

「でもなかなか良い男だろ？」

「そうね。後10年位したら正彦と張るかしら？」

「容赦ないな。初対面の相手をこき下ろすなよ」

「あら、坊やだと思ってこれでも手加減してるわよ？　それより埋め合わせ、忘れないでよ？」

「ああ、期待しててくれ」

聡が黙ったままなのを良いことにかなり辛辣な事を好き勝手に言い合った男女は、正彦が未だ聡を拘束して片手が使えない状態の為、彼女の方から正彦に顔を寄せて唇が触れあうだけのキスをして、あっさりと店を出て行った。

「座るぞ。お前も座れ。……あ、俺はブレンドね」
「畏まりました」
「……」
聡を逃がす気は無く、その腕を引っ張りつつ半ば恫喝する正彦。聡の待ち合わせ相手かと勘違いしたウエイトレスが水とお絞りを持って近寄って来ると、振り返った彼は途端に愛想笑いを浮かべながら注文した。
それを仏頂面で見やった聡が、取り敢えず再び席に座る。続いて正彦が先程まで清香が居た席に腰を下ろした。

「じゃあ、取り敢えず自己紹介といくか。こっちはお前の事は一通り知ってるし。他人の周囲を色々嗅ぎ回るのは、お前だけの専売特許じゃないんでな」
「それはどうも、お気遣いありがとうございます」
皮肉を込めて返した言葉にも全く動じる事なく、正彦は顔に薄笑いすら浮かべながら一枚の名刺をテーブルの上に取り出し、そのまま聡の方へ押しやった。それを受け取ってしげしげと眺めた聡は、以前目にした報告書の一部分を思い出す。
「《倉田運輸株式会社経理部主任、倉田正彦》……って事は、ひょっとして清香さんの」
「きちんとそこまで調べたのは誉めてやるが、彼女の前でその先は口にするなよ？」
途端に目つきを険しくして恫喝口調に戻った正彦に、聡も不快気に眉を寄せた。

「どうしてですか。あなた達はれっきとした従兄妹同士で、先程も仲良さげに会話してたじゃ無いですか」
「確かに仲は良いが、従兄妹同士としてじゃない。単なる“父親同士が幼なじみの知り合いの、優しいお兄さん”って言う関係だ」
「はぁ？　何ですかそれは」

理解不能な内容を聞かされた聡は思わず間抜けな声を上げてしまったが、ここで正彦は反撃に出た。
「お前だって人の事は言えんだろう？　本名隠してコソコソと彼女に近付きやがって。清人さんを刺激したくなかったんだろうが、とっくにバレてるぞ？」
その台詞に、聡が僅かに顔を強張らせてから、慎重に問い掛けた。
「……それなら、どうして彼女が未だに俺の話を信じてるんですか？」
「清人さんとしてはできれば本当の事を言いたくないんだろ？　なにしろ実の母親とは死別って事にしてるし」
そこで聡が弾かれた様に拳でテーブルを叩き、正彦に問い質した。
「それをさっき彼女から聞いて、耳を疑いましたよ！どこの世界に勝手に母親を死んだ事にしている息子がいるんですか！　幾ら何でもあまりに酷過ぎます！」
憤慨する聡を見た正彦は思わずテーブルに肘をつき、多少呆れを含んだ表情でしみじみと感想を述べた。
「酷過ぎる、ねぇ……。お前、随分幸せに育ったんだな」
「何が言いたいんですか」
ここでウエイトレスが珈琲を運んできた為会話が一時中断し、腹立たしげな聡を前に正彦がブラックで一口珈琲を味わってから、真顔である事を尋ねた。
「一つ聞くが、お前は清人さんの事を、子供の頃から知ってたか？」
すると、その途端、聡が歯切れ悪く答える。
「……いえ、二十歳の頃に、父から初めて聞かされました。そして『今では行き来はしていないから関わるな』とも」
「と言う事は、五年前位？　あの騒動の前後、だろうなあ……。流石に外野が五月蝿くなると思ったか」
「1人で勝手に納得しないで貰えませんか？」

小さな笑いを漏らしながら頷いた正彦に聡の不機嫌さは増大するが、相手はそんな事は斟酌せずに畳み掛けた。

「母親を大事にしようとする心掛けは良いと思うがな。お前が二十歳になる前に、母親から清人さんの事を一度でも聞いた事が無かったんだろ？」

「確かにそうですが……」

「普通に考えたらおかしくないか？」

「それは……、父と再婚した手前、前の家庭に関する事はあまり口に出来なかったと」

「お前の父親は小笠原に婿養子に入ったんだろ？　それなのに他で育ってる子供の名前すら口に出来ないって？　随分気を遣ってんだな。それともお前の両親、そんなに夫婦仲が悪いのか？」

明らかに挑発する台詞を立て続けに述べる正彦に、以前から両親の微妙な距離感を気にしていた聡は思わず中腰になって片手を伸ばし、その胸元を掴みながら礼儀正しさを投げ捨てつつ唸った。

「ふざけるなよ？　部外者があまり好き勝手抜かすと」

「それが今更？　と言うか、お前が勝手に暴走してるだけで、母親は清人さんの事なんか何とも思って無いんじゃないか？」

「そんな事はっ……」

何かを言いかけてそこで急に口ごもってしまった聡は、至近距離で正彦と見つめ合っていた視線を自分から逸らし、同時に腕も離して元の様に椅子に座った。それを興味深そうに眺めた正彦は、片手で服の乱れを直しながらぼそりと呟く。

「清人さんにしてみればこれまでの母親との関係が有る無し以前に、清香ちゃんの為にもお前達の事は口にしたくない筈だけどな」

「……どういう意味ですか」

先程の勢いがどこかに消え失せてしまった聡が、取り敢えず聞いてみたという風情で尋ねると、正彦が苦笑気味に理由を告げた。

「あの子の両親はもう亡くなってて、近親者って言えば清人さんだけなんだよ。それなのにその兄に『実は母親と半分血が繋がった弟が居る』って事が分かったら、清香ちゃんが1人疎外感を感じるとでも思ってるかもな」

「そんな……。ですがそれは」

「それ以上に、母親は死別して弟なんて勿論居ない事になってるから、その事実を話したらあの優しい子だったら『実のお母さんを勝手に死んだ事にするなんてあんまりじゃない！見損なったわお兄ちゃん、最低！鬼！人非人！』なんて罵倒しそうだ」

どことなく遠い目をしながらそんな事を言い出した正彦に、思わず聡は真顔で問い掛けた。

「……その場合、どうなると思います？」

「どう、って、……そうだなあ。そうしたらあの《妹命》の清人さんのダメージ大は決定だし、再起不能寸前まで行きそうだな。そうなるとその反動で、猛烈な怒りが真っ直ぐそれをバラした人間に向かうのは確実だし」

「ちょっと待って下さい！　そうすると清香さんには清人さんと俺達の関係を知らせないまま、清人さんの怒りを回避しつつ接触を図れと？」

清人の怒りを買う事を思って流石に青ざめた聡を、正彦は他人事の様に眺めた。

「道は険しそうだな。助けてやるわけにはいかないが、まあ頑張れ。何も知らないで決定的な亀裂を生む類の墓穴を掘らない様に、忠告だけはしてやったからな。俺の好意を無駄にするなよ？」

「好意なんですか？　単に面白がっているだけじゃ」

「一理あるな、所詮他人事だし」

「……っ！」

テーブル上で強く両手を握り締め、顔を引き攣らせた聡に、正彦は椅子から立ち上がりながら更に容赦の無い言葉を投げつけた。

「ああ、肝心な事をもう一つ言うのを忘れてた。さっきも言ったが、柏木、倉田、松原の家が清香ちゃんと縁戚関係にある事は本人には漏らすなよ？　もし万が一口を滑らせたら……、その時は清人さんじゃなく、俺達が制裁を加えるからそのつもりで」

「ちょっと待って下さい。だからどうしてそんな事になってるんですか！」

聡は慌てて正彦の左手を掴んだが、相手は軽々と振り払いつつ、テーブルの横をすり抜けて行った。

「あ～、説明するのが面倒だから、興味が有るなら本人にさり気なく母方の親族について聞いてみてくれ。それじゃあそろそろ時間なので失礼。コーヒー御馳走様」

「ちょっと待って下さい、倉田さん！？」

しっかりと珈琲代を聡持ちにしつつあっさりとその場を立ち去っていった正彦を、会計をしないまま追い縋る事もできず、聡は諦めて見送った。そして文字通りテーブルに両肘をついて頭を抱える。

「ちょっと待て……。一体これから、俺に何をどうしろと？」

今の話で複雑すぎる現状の一端を把握し、困惑の渦に叩き込まれてしまった聡は、自分の見通しというものが如何に甘いものであったのかを実感していた。

何やら騒々しい物音がドアの向こうから響いて来たと思ったら、自分が寝ている寝室のドアを開けながら叫んだ妹の声に、清人はすこぶる満足した。

「お兄ちゃん、居るっ！？」

ドアに背中を向けて寝ていた為、清人の薄笑いの顔は当然清香に

は分からず、さも今目が覚めたという風情を装いつつ清人はゆっくりと寝がえりを打ち、清香の方に向き直る。

「……清香？　どうした、そんなに慌てて」

「どうしたもこうしたも！　お兄ちゃん、急に具合が悪くなって病院に行ったんじゃなかったの？　正彦さんに偶然会って聞いたんだけど！？」

ベッドに歩み寄りながら問い質してくる清香に、清人は多少考え込む様子を見せてから、気まり悪そうに微笑んでみせた。

「そうか……、悪い。正彦君との電話の後、急に痛みが落ち着いてきたから、腹痛で救急車を呼ぶのも気恥ずかしいし、休んでれば良くなるかと思ったんだ。実際もう落ち着いたし、大丈夫だから」

「電話は？　家の電話も、携帯も繋がらなかったんだけど？」

「眠ってたから気が付かなかったかな？　携帯は……、ああ、正彦君からの電話を切った時、うっかり電源を落としてしまったみたいだね。ほら」

枕元に置いておいた携帯を取り上げて清香に差し出すと、確かにディスプレイが真っ黒になっており、清香は呆れ半分安堵半分の溜息を吐きだした。次いでベッドの端に腰かけ、清人の顔を見下ろしながら猛然と説教モードに突入する。

「もう、本当に人騒がせなんだから！　どれだけ心配したと思ってるのよ！！　それに腹痛だって甘く見ちゃいけないのよ！　第一お兄ちゃんは仕事し過ぎよっ！　不摂生な生活してると、病気にもなりやすいんですからね！　言われ無くても自重して頂戴！！」

「うん分かった、反省してる。これからは十分気をつけるから、そろそろ許してくれるかな？　清香」

「反省してるならもう良いわ。もう……、本当に何かあったらどうしようかと思ったんだから……。お父さんとお母さんだって病気じゃなかったのに、急にいなくなっちゃったし……」

「清香……」
最後は涙声の清香の訴えに、清人は流石に罪悪感を覚えた。布団の中から片手を出して伸ばし、清香の頬を軽く撫でながら謝罪しつつ、これ以上暗い雰囲気にならない様に話題を変える。

「すまなかったな、心配かけて。そう言えば角谷さんには会えたのか？　途中で引き返したなら相手にも申し訳無かったが……」
待ち合わせ場所で正彦がちょっかいを出した事は知りながら、素知らぬふりで清人が尋ねると、清香は気持ちを落ち着かせながらそれに答えた。
「ええ、大丈夫。本の受け渡しをした直後に正彦さんとカフェで会ったの。デートだったみたいよ？　綺麗な女の人を連れてたから」
「そうか、それなら良かった」
「あ、ちょっと待っててね。今、その本を取って来るから」
そこで清香がパタパタと寝室を出ていき、すぐに一冊の本を手にして戻って来た。

「お待たせ。ほら、素敵でしょ？」
そう言って嬉しそうに清香が差し出した一冊のハードカバーの本を、清人はいつもよりゆっくりとした動作で上半身を起こし受け取った。そして手に本来感じる以上の重みを感じながら、黙って見下ろす。
いつもの清香なら常には見せない、その表情を消した清人の状態を訝しんだかもしれなかったが、緊張が一気にほぐれた事で些細な事には気が付かなかった。

「このお手製のカバーって、和紙を使ってるんだよね。それでこんな綺麗な流水紋のデザインの物なんて、私初めて見た。凄いセンス良いのね、角谷さんのお母さんって。そう思わない？」
「ああ、確かに綺麗だな。これは」

微妙な言い回しで、清人は個人のセンス云々ではなくカバーに対してのみの感想を述べたが、清香は益々笑顔になって言い募った。
「それに墨を使って、細筆でタイトルを書いてる。達筆だよねぇ、私昔お母さんに習わされたけど、全然ものにならなかったし」
「……安心しろ、俺も習字は大してできない」
「あと、本棚の肥やしとかにしてるんじゃなくて、本当に大切に読み込んでくれてるんだね。だって少し角が擦り切れてるし、ページの真ん中辺りに指で捲った跡がうっすらと付いてるもの。角谷さんのお母さんって、本当にお兄ちゃんのファンなんだね！　こういう人達に心配かけさせない為にも、自己管理は徹底しようねっ！」
「……そうだな。気をつけるよ」
明るく結論付けた清香に、清人は胸中を綺麗に押し隠して素直に頷いて見せたが、ここですっかり気分を良くした清香が、自覚しないまま余計な事を言い出した。

「何だか角谷さんに益々親近感湧いてきちゃったな～。お兄ちゃんと大学も学部も同じな上、どことなくお兄ちゃんに似てるし」
「……俺に似てる？　どこが？」
途端に若干目を細めて問い返した清人だが、清香は清人のそんな変化に気付かないまま口を滑らせた。
「えっと、ちょっと明るめの色調でくせ毛の髪質もそうなんだけど、笑った時の目元の辺りが何となく似ていて格好良いなぁって」
テレテレと笑いつつ清香としては（やっぱりお兄ちゃんは格好良いと思う）という意思表示のつもりで言った台詞だったのだが、清人は（俺と似てるだと？　しかも清香が俺以外の男の事を格好が良いだなんて、冗談じゃない！）との認識しか持てなかった。

「じゃあお兄ちゃん、今日は一日寝てるのよ？お昼ご飯は食べられそう？」
密かに怒りまくっている清人の心中など分からない清香が無邪気

に尋ねてきた為、清人は辛うじていつもの口調を保った。
「……いや、あまり食欲が無いからこのまま寝ている。夕飯だけ準備してくれるか？」
「分かった。消化の何か良い物を準備するね」
そう言って寝室のドアを静かに閉めて清香が出て言ってから、清人は押し殺した声で腹立たしげに吐き捨てた。

「ふざけるなっ！人の領域にずかずかと踏み込んで来やがって！！」
如何にも憎々しげに手の中の本をベッドの端に投げ捨てた清人は、怒りに燃える目で携帯に手を伸ばし、迷わずにアドレス帳からある番号を選択する。待つ事数秒で、向こうが応答すると同時に、清人は捲し立てた。

「長野さん、佐竹です。大至急お願いしたい事があります。今回は色ボケ学生の素行調査とはわけが違いますから、経費は使い放題で構いません」
『ほう？　それはそれは豪勢な。それで、依頼内容は？』
「小笠原物産営業部第一課が今現在取り扱っている業務内容が何か、可能な限り調査して下さい。報告書に纏める必要はありません。分かった時点でその都度連絡を」
『そりゃあまた、随分毛色の変わったご依頼で』
電話の相手は面白そうに笑いを堪えていたが、清人は冷たい声のまま核心に触れた。
「特に、第一課の角谷聡の業務内容に関してを集中的に」
その口調で何かを察したのか、電話の向こうで小さく溜息を吐く気配がしてから呟きが漏れる。

『……要するに、そいつが今回の先生の標的ですか。気の毒に』
「宜しくお願いします。請求書が回ってきたらいつもの口座への振り込みで宜しいですね？」

『はい、それで。こちらこそ宜しく。それじゃ早速動きます』
お互いにどこまでもビジネスライクに話を進め、2人はあっさりと通話を終わらせた。

「……俺を本気で怒らせたな？　聡。たっぷり後悔させてやるぞ？」
手にした携帯をまるでそれが本人でもあるかの様に睨みつけながら、清人がまだ見た事も無い弟の名前を口にしていた事など、当の本人は知る由も無かったのだった。

第8話　八つ当たりの末に

清香に置いてけぼりを食らわされた挙げ句、色々と頭を悩ませる内容を聞かされてしまった聡は、悩んだ末夜になって清香の携帯に電話してみた。病院に付き添っているなら電源を落としているかと思いきや、予想に反して普通に応答がある。

『はい、佐竹ですが』

その落ち着き払った声に、聡は（兄さんは大した事は無かったんだな）と安堵する半面、（俺の名前をアドレス登録してくれて無いんだろうか……）と微妙に気落ちしながら口を開いた。

「清香さん、角谷です。今日はわざわざ出向いて頂いて、ありがとうございました」

そう礼を述べると、電話の向こうの気配が途端に慌てたものになる。

『そんな！　角谷さんにお礼を言って貰う必要なんかありません！　いきなり中座して、私の方こそ却って失礼してしまいましたし。その上こちらからご連絡しないで、本当に申し訳ありませんでした！』

声の調子だけで清香が最敬礼している様子が見える気がして、聡は思わず笑い出しそうになった。それを何とか抑えながら、清香を宥めにかかる。

「それは構いませんから。自分の家族の具合が相当悪そうだと聞いたら、誰だって動揺しますよ。それで……、先生のお加減はいかがですか？」

それを聞いた清香が、益々申し訳無さそうな口調で詳細を伝える。

『ご心配かけてすみませんでした。実は思ったより酷く無かったみ

たいで、帰宅したら大人しく横になってたんです』
「そうだったんですか？それは何よりでしたね」
『はい。病院にも行かずに済みましたし、夕食も消化の良い物を食べられましたし、もう心配要らないと思います』
「それを聞いて俺も安心しました」
聡は口ではそう述べたものの、内心では（ひょっとしたらと思ったが……。やっぱり仮病で、あの男とグルか）と断定し、密かに項垂れた。
しかし1人で悶々としている訳にもいかない状況を思い出し、慎重に会話を再開する。

「それで……、清香さん。実はあなたにお話ししないといけない事があるのですが……」
『はい、何でしょうか？』
怪訝そうに問い返す清香に、（もう兄さんにばれているなら、変に名前を偽っていたら益々印象を悪くするに決まっているし、ここは思い切って）などと考えつつ、聡が口を開いた。
「俺は初対面の時から自分の事を角谷と名乗ってましたが、実は本名は違うんです」
『え？　それなら角谷と言うのは偽名なんですか？』
「いえ、偽名では無くて職場で使っている通称です。初めてお会いした時、プライベートにも関わらず、ついうっかりそちらを名乗ってしまって、なんとなく訂正する機会を逸したままズルズルと。申し訳ありません」
『それは構いませんが、そうなると本当のお名前は何て仰るんですか？』
不思議そうに尋ねた清香に、聡は一拍空けて本名を告げた。

「……小笠原です」
『小笠原、さん、ですか？』

「はい」
怪訝な声でどこか躊躇いがちに問い返す清香に、聡は叱責もしくは非難されるのを覚悟した。
（やはり《小笠原》の名前位は知ってたか？　どうして黙っていたのかと責められても仕方が無いが、ここで正直に言っておかないと、後々面倒になりそうだし）
聡が自分の周囲に無自覚に醸し出すそんな緊迫した空気とは裏腹に、清香はどこかのんびりと答えた。

『私は全然気にしてませんよ？　ついうっかり、慣れた名前を口にしただけなんですよね？　私を騙そうとして意図的に名乗ったわけじゃ無いんですから』
（やっぱり母さんに関しての事は、兄さんから微塵も聞いて無いんだ……）
明るく朗らかに言われた為、却って絶望的な心境に陥ってしまった聡だが、更に予想外の台詞が耳に飛び込んできた。

『でも角谷さ、ええっと……、小笠原さんが、２５歳ってお伺いした年齢の割に落ち着いて見える訳が分かりました』
「え？　それはどういう意味ですか？」
『どういうって……、小笠原さんはもう結婚していて、結婚を機に奥様の方の苗字に改姓したけど、仕事上は旧姓のまま通しているんですよね？』
「は？」
『もう既に家庭を持っているなら、年齢より落ち着いて見えるのも道理です』
しみじみと語られた清香の話に聡は固まり、次いで慌てて弁解した。

「それは誤解です清香さん！　俺は結婚なんかしてませんから！」

『え？　そうなると本人に向かってはもの凄く言い難いですし、口に出すのもとても失礼なのかも知れませんが……、ひょっとして小笠原さ』

「あのですね！　今、何か変な想像をしてませんか？　お願いですから俺の勤務先を思い出して欲しいんですが！？」

何やらまた妙な考えを口にされる前にと聡が必死で訴えた内容に、携帯を介して清香が考え込む気配が伝わる。

『小笠原さんの勤務先ですか？　えっと、確か小笠原物産の営業部で……、小笠原？　え？　あ、まさか……』

そこで言葉を区切った清香に、聡は心底安堵しながら事情を説明した。

「ええ、父がそこの代表取締役社長を務めていまして。色々対外的な事があって、入社するに当たって父の旧姓を名乗らせて貰っているんです。父は婿養子ですから」

『ああ、そうなんですか。良く分かりました。親の会社に入社したりすると、確かに色々大変そうですよね』

（何だかもう、どっと疲れがっ……）

一連のやり取りで精神的な疲労感を一気に覚えてしまった聡は、これ以上会話を続行させる事を諦めた。

『それでは先生の容態が確認できましたし、これで失礼します』

「いえ、こちらこそ心配して頂いてありがとうございました。お兄ちゃんにサインして貰ったら、お渡ししますのでまた連絡しますね？」

『ありがとうございます。おやすみなさい』

そうして表向き平穏に会話を終わらせた聡は、携帯を耳から話して深々と溜め息を吐いた。

「……とても諸々を打ち明ける雰囲気でも、気力も保てなかったな。……また今度にしよう」

極めて後ろ向きな発言をして現実から目を逸らした聡は、初手の躓きが後々祟るという事に、この時まだ気付いていなかった。

「う〜ん、やっぱり社長の息子って分かると色々大変なのかな。あまり気にしなくても良いんじゃないかと思うけど」

リビングで首を傾げながら清香が携帯を閉じると、パジャマ姿で起き出してきた清人がドアから顔を覗かせていた。

「清香？　誰かと電話してたのか？」

「うん、小笠原さんと」

「小笠原？」

途端に目を細め、ピクリと眉を動かした清人に、清香が事も無げに聞いた内容を伝える。

「角谷さんの事。初めて会った時、つい職場で使ってる通称を名乗ってしまって、今までうっかり訂正するのを忘れていて申し訳無かったって謝られたの。別に大した事無いのに、律儀な人だよね」

「……へぇ、つい、うっかり、ねぇ」

かなり皮肉を交えた清人の口調だったが、自分の考えに浸っていた清香はそれに気がつかなかった。

「それにね？　お兄ちゃんの具合を心配して、わざわざ電話してくれたのよ。お店に置き去りにしちゃって失礼な事をしたのに、気を悪くしたりしないで。やっぱり思いやりのある、優しい人だわ。そう思わない？」

「……ああ、そうだな。今度本を渡す時にでも、俺も礼を言っていたと伝えてくれ」

苦々しい思いを抑えつつ清人が型通りの受け答えをすると、清香は益々嬉しそうに言い出した。

「うん、ちゃんと伝えるね。それで、そんな優しい人のお母さんってどんな人だと思う？」

「さあ……、どんな人だろうな……。あまり想像できないな」
話が嫌な方向に向かって行くのを察した清人は、不機嫌そうに話の流れを断ち切ろうとしたが、清香は思うまま話し続ける。
「やっぱり凄く優しくて、子供思いの人だと思うな～。あのカバー1つ見ても繊細で上品そうな印象を受けるし、一度会ってみたいな～なんて」
「駄目だ！！」
「お、お兄ちゃん？　急にどうしたの？」
突然自分の台詞を遮って怒鳴った清人に、清香は驚いて目を丸くした。次いで恐る恐る清人に問いかけると、幾分バツが悪そうに目を逸らしつつ、しかし語気強く清人が言い聞かせてくる。
「その女性は病気で入院中なんだろう？経過が良いと言っても見ず知らずの他人が押し掛けて良い状態の筈が無い」
「それは勿論、そんな事はしないわよ？　会えるなら会ってみたいな～って言ってみただけで」
「それから、その小笠原さんとやらの前で『お兄ちゃん』とか連呼してないだろうな？」
「え？」
慌てて弁解しようとした清香だが、今までまさに清人の事をそう連呼していた清香は固まった。それを見越した様に清人が畳み掛ける。
「常々『子供扱いされたくない』と文句を言ってる割には、言動が子供じみてるぞ。相手がそういう風に気遣いができる大人で、それにふさわしい言動をしているなら、対するこちらもそれ相応の対応が必要なんじゃないか？　俺に向かって『お兄ちゃん』と呼び掛けるのは構わないが、他人に向かっては『兄』と表現する位の分別は持って欲しいものだな。清香はもう二十歳なんだし」
「……はい」

「そして、必要以上相手に馴れ馴れしい態度を取らないのが大人というものだろう。これから言葉遣いに気をつけろよ？」
「気をつけます」
すっかり項垂れてしまった清香を見て、清人は八つ当たりだと完璧に理解していたものの、怒りを抑える事ができずに素っ気なく言い捨てながら踵を返した。
「じゃあ、俺は水を飲んで寝るから」
「うん、おやすみなさい」

後日、清香と聡は連絡を取り合い、その週の土曜日に某ホテルの一階ロビーに入っている喫茶店で待ち合わせた。
しかし席に追い付いた清香が聡に問われて清人について話そうとする度に、妙に口ごもったり、言い直したり、口癖の『お兄ちゃん』が『兄』に置き換えられていたりと、聡からすると挙動不審さが際立っており、サインして貰った本を受け取るのもそこそこに、清香を問い詰めた。
「……という事があったんです。おに……、あの、兄にしてみれば、私は相当子供に見えてるんだろうなって思……、見えているかと思いますし、小笠原さんに対しても、初めて会った時から結構馴れ馴れしい言葉遣いをしてたかな～って、いえ、失礼をしていたのではと、今更ながらに不安になりまして」
清人に叱責された夜の経過を一通り語り、俯いて黙り込んだ清香を見た聡は頭痛を覚えた。

（……兄さん、何も清香さんに八つ当たりする事はないでしょう？……そもそもの原因の俺が言うべき事じゃないが。さて、どうしようか？）
いつも明るい笑顔を向けてくる清香が、すっかり萎れて落ち込んでいるのを可哀想に思った聡は、何とか慰めようと口を開いた。

「清香さん、先生は何もあなたが憎くてきつく当たったわけでは無いんですから。それは分かっているでしょう？」
「ええ、はい、それは重々」
「どうやら先生が危惧したのは、俺が年相応に見えずに落ち着いていると清香さんが評した為に、清香さんのいつもの口調だと失礼に当たるかもと考えた事らしいですし。言わば老婆心ですから、あまり気にされない方が良いです」
「それはそうなんですが……」
「だからその対策として、俺はこれから清香さんに対して、同年代の人間に対する様に喋るから。清香さんもそのつもりで」
「はい？」
いきなり聡の口調が変化したのと、言われた意味を捉え損ねた清香は、思わず軽く目を見開きながら相手を見返した。すると聡は面白い物でも見つけた様に、ニヤリと笑いながら主張を繰り出す。
「俺も見ず知らずの女性に馴れ馴れしく話しかけるのはまずいと思ってたから、これまでは仕事上の口調に準じて喋ってたけど、もう見ず知らずじゃないから構わないよね？」
「あ、えっと、それは……」
「だから、俺が馬鹿丁寧な言葉遣いをして、かなり年長者に感じさせる事が問題なんだろう？　こういう言い方をする相手には、清香さんも気兼ねなく話せるよね？　ああ、いっそのこと『清香ちゃん』とか『清香』とでも呼ぼうかな？」
「いえ、あのっ！そ、それは……」
流石に気恥ずかしいものがあり、それは止めて貰おうと口を挟みかけた清香に、聡があっさりと告げた。
「勿論俺の事は『聡さん』とか『聡』で良いよ？　寧ろ聡って呼んで欲しいな」
「……小笠原さんって、実はタラシなんですか？」

「タラシ？　俺が？」
清香が思わず疑惑の目を向けると、それを真正面から受けた聡は一瞬キョトンとし、すぐにお腹を抱えて爆笑した。いきなり大笑いされた清香が、些かむくれながら文句を言う。

「そこまで笑わなくても……」
「ごめん、悪かった。だけど自分の名前を呼び捨てにして欲しいって口にしただけで、女たらし扱いされたのは初めてだったから」
何とか呼吸を整えた聡は、清香に謝ってから苦笑交じりに話を続けた。
「話を戻すけど、だから俺の前では幾らでも『お兄ちゃん』って言って大丈夫だよ？　君の事を笑ったりしないし、寧ろ清香さんが先生の事を『お兄ちゃんが』って話している時は凄い良い笑顔をしてるから、見ているこっちまで嬉しくなる。『兄が』って緊張して話している時とは雲泥の差だ」
そう嘘偽りの無い本音を漏らすと、清香がそれを吟味する様に聞き終えてから、小さく笑って礼を述べた。

「ありがとうございます。やっぱり小笠原さんは私と比べると随分大人だと思います」
それに聡がすかさず突っ込みを入れる。
「ほら、清香さん。そういう時は何て言うんだっけ？」
それに清香は反射的に「うっ……」と詰まりながらも、嬉しそうに言い直した。
「えっと……、その。ありがとう、聡さん」
「ああ。まだ二十歳なんだし、そのうち自然に慣れるよ。無理に急いでつまらないしがらみに捕らわれる事もないさ」
そうして2人の周囲の空気が穏やかになった所で、聡が徐に話題を変えた。

「ところで……、清香さんと図書館で会った時、確か榊原康孝の本を借りてたよね。この作家が好き？」
「ええ、作品は大体目を通してるし」
「そうか。それならこれ、要るかな？」
「何ですか？」
ゴソゴソとジャケットの内ポケットから長方形の白い封筒を取り出した聡は、その封をされていない中身を取り出して見せた。
「映画の試写会の招待券。榊原康孝の『春の波濤』が原作だって。小耳に挟んだ所では、当日監督と原作者も来るらしいよ？」
「え？　映像化の話が有ったんですか！？　全然知らなかった！　これどうしたんですか？」
驚きと期待で目を輝かせた清香が、思わず身を乗り出して手元を覗き込んで来た為、聡が笑って続けた。
「職場が総合商社の営業部だからね。付き合いとかで色々回ってきたりするんだ。それでこれを見つけたから2枚掠め取ってきたんだけど、良かったら一緒に見に行かない？」
「勿論行きます！」
打てば響くように答えた清香に、聡も満足そうに頷く。
「良かった、貰って来た甲斐があったよ。じゃあここに書かれてある日時に、どこかで待ち合わせしようか。予定は大丈夫？」
「はい、空いてますから。ありがとう、凄く嬉しい！」
兄に怒られた事などすっかり忘れ去ってしまったかの様に、ニコニコと上機嫌に微笑む清香を見て、聡は思わず本音を漏らした。
「うん、清香さんは落ち込んでる顔もそれなりに可愛いけど、笑うとそれより数倍可愛いな」
常には清人以外の者にあまり口にされない賛辞を耳にして、清香は動揺して声を上げた。
「お、小笠原さんっ！？」

「聡」
容赦の無い笑顔での駄目出しに顔を若干引き攣らせつつ、清香が窘めようとする。
「う、……え、さ、聡さん。つまらない冗談は」
「本気だけど？」
「……っ！」
真顔でサラッと言い返されてしまった清香は、本人が自覚しないままその頬を赤く染めていた。絶句して僅かに俯いてしまったその顔を真正面からじっくりと眺めながら、聡は自分の中で愛おしさが込み上げてくるのを自覚する。

（うん、やっぱり兄さんが清香さんを溺愛しているのが分かる気がする）
この時、聡の頭の中を占めていたのは清香と清人の事のみで、あれほど重要だった母親の事は綺麗に忘れ去られていた。

第9話　愛しのマスクメロン様

試写会が行われる小さなホールの前で待ち合わせた清香と聡が談笑しながら中へ入ると、こじんまりとしたロビーの向こう側から一組の男女が目敏く清香達を見付けて近寄って来た。
「あら、清香ちゃんじゃない。こんな所で奇遇ね～」
ビジネススーツ着用でも華やかさが漂う真澄が偶然を装って声をかけ、聡にしてみれば些かわざとらしいその問い掛けに、清香が笑顔で応じる。
「あ、真澄さん！それに浩一さんも、お久しぶりです！」
「ああ、元気そうだね、清香ちゃん」
「2人も試写会に来たんですか？」
「ええ、そうなの。付き合いで招待券を貰ってね」
女同士でその場で和やかに話し始めると、男2人はその背後で微妙な視線を交わし合った。
（確かこの2人、柏木家の……。このタイミングって事は、絶対兄さんが仕組んでるよな）
（やっぱり清人から連絡を貰って、お邪魔要員として顔を出した事を分かってるよな、彼。あからさま過ぎるし）
聡が溜め息を吐きたいのを堪え、浩一が神経質そうに眼鏡のブリッジを指で僅かに上に押しやると、この状況を面白がっているとしか思えない真澄が思い出した様に聡に顔を向ける。

「そういえば……。どこかでお見かけした事があると思ったら、そこに居るのは確か小笠原物産営業部の角谷さんじゃないかしら？清香ちゃんの彼氏？　なかなか隅に置けないわね」
「い、いえっ、あのっ！　か、彼氏とかって言うのは聡さんに失礼でっ！」
くすくすと笑いながらの問い掛けに、聡は（白々しい……。ライ

バル会社の課長クラスと顔を合わせた事なんかあるか）と思っただけだったが、清香は少々焦った。
（そうか！　聡さんと真澄さんって同業者だから、仕事関係で顔を合わせた可能性が有ったんだ。良かった、まだ本名で小笠原さんって紹介してなくて）
　そして互いの紹介がまだだった事に気がつき、初対面ではない空気だったものの一応声をかけてみる事にした。

「えっと、真澄さんがおっしゃる通り、こちらは小笠原物産の角谷さんです。最近ちょっとした事でお知り合いになりまして。私、角谷さんに今回の招待券を頂いたんです」
「あら、そうだったの。良かったわね」
　にこやかに頷いた真澄から視線を移し、清香は聡に向かって説明を続けた。
「角谷さん、こちらは昔から家族ぐるみで親しくお付き合いしている、柏木真澄さんと弟の浩一さんです。お2人とも柏木産業に勤めてますから、角谷さんとはどこかでお会いしてるかもしれませんね」
「ああ、そうなんですか。清香さんから話は聞いてますし、勿論柏木のご令嬢と御曹司の事は、以前から存じ上げてました。この機会にお見知り置き下さい」
「こちらこそ、小笠原物産のホープと評判の高い角谷さんとお知り合いになれて、光栄です」
「ご冗談を」
　思い切り社交辞令的な会話を交わす3人に、清香がのんびりと声をかけた。

「会場が開いたみたいですし、後は中で座って話しませんか？」
「あら、そうね」
「何も立って話し込む事もないか」
　そう言ってスタスタとホール内に向かって歩き出し、（2人きり

になんかさせないわよ?）というオーラを醸し出しつつ、「清香ちゃん、ここら辺にしましょう?」と当然の如く手招きする真澄達に、聡は今度こそ小さな溜め息を吐いた。

結局４人は向かって左から聡、清香、真澄、浩一の順番で横に並んで着席し、主催者の挨拶や上映開始まで時間があるのを幸い、女２人は連れそっちのけで四方山話に花を咲かせていた。

「そういえば清香ちゃん、年が明けたら成人式があるのよね」

「はい、お兄ちゃんが振袖を勝ってくれました。それに久しぶりに同級生と会えるのが楽しみで」

嬉しそうに語る清香を見て、真澄がしみじみと口調を改めて言い出す。

「本当に……、月日が流れるのって早いわね。おじさま達が亡くなった時、清香ちゃんは中一だったのに」

「そう言えばお葬式の時は一家揃って来て貰いましたね」

「ええ。今の清香ちゃんを見たら、ご両親もお喜びになるだろうなと思って」

思わずしんみりとなってしまった空気を払拭したかったのと、以前から気になっていた人物の事が話題に上っていた為、ここまで黙って２人の会話に耳を傾けていた聡が、礼儀正しく会話に割って入った。

「清香さん、ちょっと聞いても良いかな?」

「どうかしたんですか?聡さん」

「その…、ご両親ってどんな人達だったの?」

「え?　どうしてですか?」

キョトンとしながら尋ね返す清香に、聡は幾分言い難そうに話を続けた。

「いや、ちょっとした好奇心なんだけど……。先生が公表している顔写真を見ると、かなり整った顔立ちをされているから、ご両親が

結構美形だったのかと思って」
「美形、ですか？」
（うっ……、かなり苦しい言い訳だったか。何だか柏木さん達の視線が痛いし……）
以前から母親の前夫に対しての好奇心はあった為、思い切って口にしてみたのだが、清香の背後から自分に向かって投げかけられる柏木姉弟の胡乱気な視線を受け、聡は一気に居心地が悪くなった。しかし自分越しにそんな無言のやり取りが交わされているなど夢にも思っていない清香は、怪訝な顔で考え込みながら自分の考えを口にする。

「う～ん、確かにお兄ちゃんは美形の部類に入るけど、お父さんは娘の私から見ても、間違ってもその範疇には入らないと思いますよ？　お兄ちゃんは母親似なんじゃないかな？　どういう人なのか分からないけど」
「そうなんだ」
冷や汗をかきつつ言葉を返した聡の声に、真澄達の声が重なる。
「そうねえ、清香ちゃんも香澄おばさん似だと思うし」
「だからパッと見、２人は兄妹に見えにくいんだよね。年も少し離れてるし」
「う……、浩一さん、微妙に気にしてる事を。それじゃあ私達が親子に見えるとか言うんですか？」
少し恨みがましく言われた台詞に、浩一が苦笑しながら弁解した。
「いや、流石にそこまでは。でも初対面の人に、叔父姪位の関係に間違われたりしない？」
「……時々間違われます」
ボソッと呟かれた言葉に、清香以外の３人が小さく吹き出す。それに「皆酷い！」とむくれた清香を３人がかりで宥めてから、再び会話が再開した。

「佐竹のおじさまはハンサムって言うよりは、貫禄がある顔立ちって言った方が良いわよね」
「そうだね。気後れしないでどっしりとしてて、人に安心感を与えるって言うか……」
実際に会った事のある真澄と浩一が、清香の父である佐竹清吾について分かるような分からないような論評をしていると、清香がうんうんと頷きながら同意した。
「その通りですよね。強いて物に例えるならお兄ちゃんはマスクメロンですけど、お父さんはジャガイモですし」
「「「は？」」」
「え？　私、何か変な事を言いました？」
（もの凄く変な事を言った）と全員が思ったが、それをストレートに清香に告げたら傷付くだろうと思った3人は黙ってアイコンタクトを行う。その結果、3人の中で一番年下かつ一番立場の弱い聡が、慎重に口を開いた。
「あの……、清香さん？　そのジャガイモっていうのはどういう意味？」
「えっと、だって茄子の様につるんとした印象じゃなくて、どっちかって言うとちょっとごつい感じで。でもちゃんとお料理すれば色々な料理や味付けに合いますし、見た目によらず万能食材なんですよ？」
「あ、ああ。つまり、見た目も中身も良く知ると、結構味のある人だったと」
「ええ、そんな感じです！」
「……良く分かったよ」
小さく溜め息を吐いて無理やり納得してみせた聡だが、柏木姉弟から視線で無言の圧力をかけられ、更に清香に質問した。
「それで清香さん。先生を例えるとマスクメロンって言うのはどう

いう事？」
「何となく似てるかな～って思ってるので」
「……どこら辺がそうなのか聞いても良い？」
理解不能のまま思わず懐疑的な視線を向けてしまった事を聡は自覚していたが、清香はそれに気を悪くした様子を見せず、何かを思い出す様な風情で話し始めた。

「あれは……、そうですね、私が幼稚園の頃の出来事なんですけど、当時住んでいた団地の側に昔からある商店街があって、いつもそこで買い物をしてたんです。そこに結構大きな八百屋さんがあって、大抵棚の上の方に５０００円位のマスクメロンが果物の盛り合わせの籠とかと並べて、ドンと置かれてあったんです」
「ああ、そういうのはお見舞い用とかお祝い用とかで、結構需要があるよね」
納得しながら口を挟んだ聡に、軽く頷きながら清香が話を続けた。
「当時は背が低かったから、普段上の方まで見なくて気がつかなかったのに、ある日何気なく顔を上げたらそれを見付けて、何だろうって凝視しちゃって」
「何だろうって、どうして？」
「私の中でメロンって言えば、いつもお母さんが買ってたプリンスメロンとかの表面がつるんとした物で、大きさも違うしそれがメロンってその頃認識できなかったんです」
「……なるほどね。それで？」
悪いことを聞いたかと微妙に視線を逸らしながら聡が続きを促すと、清香は淡々と状況を説明した。

「動かないでじっと見ていたら、顔見知りの八百屋のおじさんがどうかしたのかと聞いてきたから、あれは何かと尋ねたらメロンだよって教えてくれたんです。そうしたら私、腹を立てまして」
「え？　どうしてそこで怒るの？」

思わずと言った感じで真澄が口を挟んだ為、清香は今度は真澄の方に体を向けて説明を始めた。

「さっきも言いましたけど、それまでメロンと認識していた物にはあの独特の模様は無かったから、『あんなのメロンじゃない！気持ち悪い模様！』って思い切りけなしたんです。そしたらおじさんが笑って説明してくれて」

「どんな説明を？」

「『これはマスクメロンって言って、外の皮より中身が大きくなるのが早くて、中から押されて皮が裂けちゃうんだ。だけど中から出てきた汁がそこを塞いで、覆った瘡蓋がこの模様なんだよ？　だからこのメロンは自分が甘くなる為に一生懸命努力して、体全体痛い思いをして頑張った奴なんだ。それで変な模様が付いてるけど、その分とっても美味しいし、凄いな～って皆が尊敬するから値段も高いんだよ』って。それを聞いて子供心に凄く感動して、一目惚れしたんです！」

「そ、そうだったの」

「一目惚れ、ねぇ」

「……」

所謂上流階級に生まれ育った面々は、マスクメロンなど見慣れた代物であり、そこまで感動を露わにする清香の気持ちがいまいち理解出来なかったが、適当に話を合わせた。

「それでその時、お母さんに『あれ買って！　清香が美味しく食べてあげるの！』と言ったら、お母さんの顔が見事に引き攣って、『清香は子供だからまだ駄目なの！』って断言されて、無理矢理八百屋さんから引きずり出されちゃって……」

（（（やっぱり庶民的な生活してたんだ。困っただろうな）））

突然店先で子供に「マスクメロンを買って」と言われて動揺したであろう当時の香澄に、３人は思わず同情した。

「それで商店街をズルズルと引きずられる様にして帰ったんですけど、どうしても諦めきれなくて、ちょうどアーケードの真ん中辺りで『マスクメロンさま～！　清香が大きくなったら食べてあげるから、待っててね～！　清香の事忘れないで～』と涙声で叫んで、後からお母さんに滅茶苦茶怒られました」

そこまで言って仏頂面になった清香だが、聞いていた3人は揃って微妙に顔を歪めた。

「マスクメロン、さまっ……」

「忘れないで、って……」

「聞きようによっては、凄い愛の告白……」

そんな事をボソッと呟いてから、3人は申し合わせた様に爆笑した。

「い、嫌ぁぁぁっ！　さ、清香ちゃん、笑わせないでぇぇっ！！」

「酷い真澄さん！　私にとってはちょっと切ない思い出なのにっ！」

「この場合、値段が唯一2人の間に立ちはだかる高い壁だったんだね」

「今だったら大丈夫だね。美味しく食べてあげられるよね？」

「うもぅ～っ！　浩一さんも聡さんもバカにしてぇぇっ！　もう知らないっ！」

大笑いした為にすっかり拗ねてしまった清香を、何とか笑いを収めた3人が宥めた。

「ごめんなさい、悪かったわ」

「いや、当時幼稚園児だし、可愛いエピソードだよね」

「うん、清香さんがマスクメロンに並々ならぬ思い入れがあるのは分かったよ。だから同じように大好きな先生をそれに例えたの？」

その聡の問い掛けに、清香はちょっと考えてから反論した。

「確かに最上級で好きですけど、それだけで例えてる訳じゃないです」

「と言うと？」

「お兄ちゃんっていつも飄々としてるから、意志が強くて才能があってすぐに何でも出来るスーパーマンみたいに思われがちですけど、実は結構繊細で不器用な所があるんです」
「そうなの？　あまり想像しにくいけど」
意外な表情を浮かべた聡に対し、思うところのあった真澄と浩一は清香の話の行方を黙って見守った。

「基本的にお兄ちゃんは凄い努力家なんですけど、それを隠すと言うか、あからさまにしたがらないタイプなんです。ああ見えて、実はある意味恥ずかしがり屋？　それにいつも穏やかに笑ってるイメージがありますけど、結構感情の起伏が激しくて、それを当たり障りのない笑顔で隠してる気がします。だから交遊関係はそれなりに広いけど、本当の意味で心を許してるって人は、ほんの一握りじゃないかと。……あ、浩一さんは勿論、その一握りの筈ですよ？」
「それは光栄だね。ありがとう」
取り成す様に付け加えられた言葉を聞いて、いつもは冷たく見える眼鏡の奥の目を優しく和ませた浩一が、嬉しそうに礼を述べた。
それに小さく笑い返して清香が話を続ける。

「それで、いつ頃からか、どうしてそんな風に思う様になったのかは分からないんですけど、お兄ちゃんって自分の苦しい事とか悲しい事とかは一切表に出さないで、しかも嫌な事に目を背けたりしないで真正面からぶつかった挙げ句、全部自分の中に抱えて最後には自分の力だけで昇華させてしまうとことん不器用なタイプなんじゃないかなって思って。そういう心の痛みってものが今のお兄ちゃんを形作って、お兄ちゃんを魅力的に見せてると思うんです。だからその時聞いた、自分自身が傷つきながら自らを作ってるって聞いた網目模様の話とダブって、ひょっとしたら似てるかな～って思って。う～ん、これって身内の欲目かしら？　どう思います？　真澄さん」
そこで唐突に意見を求められた真澄は、些か呆然とした表情で口

を開いた。

「清香ちゃんって……、天然かと思ってたけど意外に鋭いのね……」

「いや、姉さん。この場合、天然だからストライクゾーンど真ん中を突いてくるんじゃないですか？」

「そうとも言えるかもね」

「どういう意味ですか？」

思わず小首を傾げた清香の頭を、真澄が軽く撫でながら穏やかに告げた。

「清人君の妹に清香ちゃんがいてくれて、本当に良かったって事。できるだけ一緒に居てあげてね？」

「勿論ですよ。あんまり私にかまけててお兄ちゃんが結婚できなかったら、老後の面倒を見てあげるって約束してますから」

「あら、それなら彼の老後の心配はなさそうね」

思わずくすくす笑ってしまった真澄を、横から浩一が小声で窘める。

「姉さん、清香ちゃん。そろそろ主催者の挨拶が始まるから」

「あ、そうね。じゃあ話はまた後で」

「はい」

そうして会話は中断し、挨拶の後に上映が始まったが、聡は先程まで交わされていた会話の内容を暫く黙って頭の中で反芻していた。

それから無事映画は終了し、会場内の明かりが点くと共にざわめきが戻って来た。

「やっぱり榊原先生の作品は良いなあ、世界観が独特だし。映像化しても原作に沿ってしっかり人物描写も出来てたし」

「時代考証もしっかりしてたみたいね。ただテーマが家族愛っていう地味な物だから、売り出すのは難しいかもしれないけど」

「それはそうですよね。派手な殺陣とかもないですし、大衆受けはしないかも」

「でもそれはそれで、最近では平凡な日常とか人生とかを深く掘り下げた作品が見直されてるから、こういう物も上映期間の後半になったら観客動員数が延びるかもしれないわよ？」
「そうですよね」
女２人が上映された映画について好意的なやり取りをしていると、横から聡が声をかけた。
「清香さん、榊原先生がお帰りになるみたいだけど、もし会えたらサインをお願いしてみるとか言って無かった？」
そう言いながら聡が指差した前方を見て、１人の老人が今まさに席を立とうとしているのを認めた清香は、慌ててバッグを手に立ちあがった。

「本当だわ！　聡さん、ごめんなさい！　ちょっと行ってきます！」
「焦らないで良いよ。ちゃんと待ってるから」
笑顔で言い聞かせ、自分も立ち上がりながら聡が出入り口に向かって駆け出す清香を見守っていると、横から今までとは打って変わった不機嫌そうな声がかけられた。

「小笠原さん、あなた清香ちゃんは単なるツテで、本来の目的は貴方の母親とお兄さんを会わせる事よね？」
「……そうだと言ったら、どうなんです？」
本名で問いかけた事で明らかに嫌がらせと分かる口調に、清香がこの場に居ない為聡も些か挑戦的に返したが、それ以上に冷たい浩一の声が響いた。
「止めておけ」
「あなた方には関係ないかと思いますが？」
途端に睨み合う聡と浩一に、少ししてから真澄は疲れた様な溜息を吐いた。

「全く……。もう放っておきなさい、浩一。見ず知らずの間柄でも、

一応忠告はしてあげたんだから」
「分かりました」
そう言いながらも納得はしていない顔つきで自分を睨みつけている浩一を、聡も負けじと睨みかえしていたが、ここで明るい声が割り込んだ。
「聡さんっ！　榊原先生から首尾良くサインを貰えたの、ほら！」
「あ、ああ、良かったね、清香さん」
自分の背後から駆け寄って来た清香に、慌てて険しい表情を戻しながら振り向くと、満面の笑みを浮かべた清香が手にした本を差し出し、表紙を捲って流れる様に書かれたサインを示して見せた。、
「うん、もっと気難しい人かと思ってたのに、『貴方の様なお嬢さんに読んで貰っているとは嬉しい限りですね』って快くサインして貰えて！　聡さんにここに連れて来て貰ったお陰だわ。本当にありがとう！」
心の底から喜んでいるのが分かる笑顔に、聡は胸の中に溜まっている色々な物が、すっかり消え去った様な錯覚を覚えた。少しだけそんな穏やかな心地を味わいながら、自然な動きで片手を伸ばす。
「そこまで喜んで貰って嬉しいな。できればお礼してくれると、俺も嬉しい」
「お礼ですか？　私にできる事だったら何でもしますよ？」
「じゃあちょっと触らせて」
「はい？」
「え？　ちょっと！」
「何をする気だ！」
さり気なく聡が口にした内容に真澄と浩一が慌てて事の真意を確かめようとしたが、それには構わず聡は清香の頭を撫で始めた。
「えっと……、聡さん。そんなに私の頭が撫でたかったんですか？」
「うん、そうだね。本音を言えば初めて会った時に言った様に、そ

のポニーテールを引っ張ってみたいけど我慢するから」
　当惑して尋ねる清香に、聡が些か残念そうに本音を告げたが、それを聞いた清香は少しの間だけ考え込み、クルッと後ろを向いて聡に背中を向けた。
「う～ん、この際、ちょっとだけなら引っ張ってみても良いですよ？」
「本当に？　じゃあ遠慮なく」
　そう言いながらも実際には引っ張ったりはせず、髪の束に指を通してサラサラとした手触りを堪能している聡を見て、真澄達は顔を顰めつつ囁き合った。

「外見と違って良い度胸してるわね、こいつ。すっかり私達の事忘れて無い？」
「この場に清人が居なくて正解だった。これを見たら問答無用で殴りかかる」
　そうして下手するとバカップルに見えかねない行為を止めさせる為、真澄は2人の間に容赦なく割り込んだ。

「さあ、食事にいきましょ！　今夜は私が奢ってあげるから。大人しく付いていらっしゃい」
「え？　真澄さん。それは流石に悪いし、これから聡さんと」
「柏木さん、俺はそれほど親しいわけではありませんので、遠慮させて頂き」
「四の五の言わないで付いてきなさい。この中で一番稼いでる人間が奢るのが当然でしょ？　それとも何か？　私の奢りじゃ食べられない理由でも？」
　清香と聡が固辞しようとする台詞を遮り、真澄が半ば脅しをかけると、横から苦笑しながら浩一が言葉を添えた。

「悪いね。姉は言い出したらきかない性格だから、付き合ってくれ

ると嬉しいな」
そこまで言われて清香と聡は苦笑いの表情を浮かべた顔を見交わした。
「それじゃあお言葉に甘えて」
「ご馳走になります」
「最初から素直にそう言えば良いのよ。じゃあタクシーを拾うわよ！」
そう高らかに宣言して率先して歩き出した真澄の後ろに付いて、3人は諦めた様な苦笑を浮かべつつホールの外へ出て行ったのだった。

第１０話　反発と後悔と

休み明けで何となく仕事の効率が悪い月曜日の午前中。自分の仕事に一区切り付けた聡は、席を立って壁際のコーヒーメーカーが置かれている場所へと足を向けた。

各自好きな時に飲める様に、出入りの業者がコーヒーと共に常に過不足無く備え付けているカップにコーヒーを注ぎ、その場でブラック飲みつつ一息入れていると、背後から明るく声がかけられる。

「よう、角谷。先週招待券を渡した例の試写会、どうだった？」

（そう言えばこいつはほぼ一週間出張だったか）と思い出し、出社早々自分と顔を合わせる事なく、上司や関連部署への報告を済ませ、漸く自分の部署に戻って来たらしい同期の高橋に、聡は礼を言いながら手にしたカップを軽く持ち上げて尋ねた。

「ああ、譲ってくれてありがとう。連れも喜んでくれたしな。ところで飲むか？」

「サンキュ、頼む。砂糖入りで」

「了解」

すかさず注文を付けてきた高橋に気を悪くする事なく、聡は軽く笑いながら手早くコーヒーを新しいカップに注ぎ、砂糖を入れてかき混ぜる。そして完成したそれを相手に手渡しながら、思い出した様に苦笑混じりに付け加えた。

「そう言えば、『譲ってくれた会社の人にお礼を言っておいて欲しい』と言われてたのに忘れてた。朝一番で言わなくて悪いな」

「そんな事気にするなよ。生真面目な奴だな、将来禿げるぜ？」

「それは避けたいな」

「それはそれとして……、やっぱり女と行ったんだな。男とは有り得ないと思ってたが」

途端にニヤニヤ笑いを隠さずに突っ込んできた高橋に、聡は小さ

く溜め息を吐いてから、微妙に視線を逸らしつつ答えた。

「……誤解しないでくれ。彼女はただの知り合いだから」

勿論それで納得する高橋では無く、わざとらしく目を見開く。

「単なる知り合い？　それでお前がわざわざ趣味でない作品の試写会の招待券を目にするやいなや『譲ってくれ』と懇願するわけか？

お前、経理部の美里ちゃんとか人事部の真紀ちゃんとか情報統括本部の陽菜ちゃんとかと付き合ってた時に、わざわざそんな事したことないだろ？」

「だから……、清香さんはそんなんじゃ無いって。第一彼女達なら間違ってもあの手の映画は見ないし」

「へぇ～、さやかちゃんって言うんだ～。可愛い名前だな～。どんな字を書くんだ？」

「……」

弁解の台詞が却って相手の興味を引く結果になった上、入社以来の社内での女性遍歴まで口にされた聡は、憮然としてコーヒーを一口啜った。それをチラリと横目で見ながら、高橋が微かに苦笑しつつ容赦のない指摘をしてくる。

「お前、『来る者拒まず去る者は追わず』とはちょっと違うが、基本的に女のご機嫌を取ったりしないタイプだから、長続きしないんだぞ？　皆良い子ばっかりなのに入社三年目で3人と付き合って別れたって、男としてどうかと思うが」

最後はしみじみと語った高橋に、聡が些かムッとしながら言い返す。

「言っておくが二股をかけたりはしてないぞ？　それにどうしてそんな卑屈になって、付き合ってる女の機嫌を取らなきゃならないんだ？」

「そりゃまあ、卑屈になるほどする事は無いと思うが、お前は逆に気を遣わなさ過ぎ」

「そうか？　自分ではそうは思ってないが」
淡々と自分の考えを述べた聡に、今度は高橋が溜め息を吐いてから口を開く。

「お前さ……、実は身内に超フェミニストの男が居て、それへの反発心から付き合ってる女には無意識のうちに『黙って俺に付いて来い』的なオーラを発してるんじゃないのか？　そんなの今時流行らないと思うが」
「何だそれは……」
予想外の内容を聞かされた聡は思わず脱力しかけたが、高橋は真顔で続けた。
「うん、そう考えると単なる知り合いの清香ちゃんで、女への気の遣い方に関してリハビリするのも良いかもな」
「だから、リハビリって何だ」
「ところで知り合いってどんな知り合いだ？　仕事関係じゃ無いよな」
自分の話を聞かずに一方的に断定してくる高橋に、色々諦めた聡は多少自棄気味にそれに答えた。

「図書館で知り合った二十歳の女子大生。偶々あの映画の原作者のファンだって知ってたから、券を融通して貰ったんだよ」
「お！？　五歳下の女子大生とはやるな～角谷。それで？　映画の後機嫌の良い彼女を、どこぞに連れ込んだとか？」
「するかっ！！　第一、会場で出くわした彼女の知り合いに、俺が逆に拉致されたぞ」
「はぁ？　何だそれ」
嬉々として食い付いてきた高橋を仕事中の周囲を憚りながら小声で叱責すると、案の定怪訝な顔をされた。勢いで口を滑らせてしまった事を後悔しつつ、聡は適当に誤魔化すのを完全に諦めた。

「柏木物産企画推進部第二課長の柏木真澄と、その弟の営業部第一課長の柏木浩一と遭遇したんだ。彼女がその2人と家族ぐるみで親交があって、両者とも清香さんを妹みたいに可愛がってるらしい。映画の後、彼女共々無理矢理食事を付き合わされる羽目に」

「げっ！　あの長男の弟を押し退けて踏み付けて、名実共に柏木産業次期後継者レース筆頭と言われてる、あの《柏木の氷姫》に可愛がられてる女ぁ！？」

（何か微妙に浩一氏が気の毒になって来たな。確かに姉の方がインパクトは強烈だが）

自分の話の途中で突然呻いて指を差してきた高橋に、聡は無意識に眉を寄せた。そんな聡の内心など分からない高橋が、慌てて尋ねてくる。

「おい、ちょっと待て。さっき食事を付き合わされたとか言ったか」

「ああ。『私の奢りだと食べられないとか言わないわよね？』とか半ば脅迫されて。浩一氏は終始申し訳無さそうにしてたが。その後カラオケにも連れて行かれて、門限が21時の彼女の携帯にお兄さんから電話がかかってきたら、名乗りもせずにそれに出て『私が後から送り届けるわよ。黙ってお座りして待ってなさい！』と問答無用でブチ切ってた。そう言えば……、その後かかって来なかったな」

（やっぱり兄さんもあの猛女には適わないらしい）と妙な親近感を感じながら苦笑混じりにその夜の事を思い返していると、高橋が頭を抱えて呻いた。

「“あの”柏木真澄の妹分に言い寄ってるだけじゃなく、おそらく超ゴージャスな食事を奢って貰った挙げ句、仲良くつるんでカラオケに行っただと？」

「いや、言い寄ってはいないし、奢られたのは不可抗力で、つるんでなんて表現は以ての外なんだが」

そこでいきなり棚の上にカップを置いた高橋は、空いた両手で聡

の肩を掴み、真剣な表情で睨み付けてきた。
「ぐだぐだ言うな角谷！　悪い事は言わん、今すぐその清香ちゃんとはすっきりきっぱり別れろ！」
「藪から棒にいきなり何だ？」
「その清香ちゃんと付き合ってるのがバレたら、お前、最悪仕事干されるぞ？」
「おい、高橋落ち着け。だからどうしてそうなる」
呆れた様に見返す聡に、高橋はゴクリと唾を飲み込んでから声を低めて話し出した。

「課長、去年数社参加したプレゼンで柏木物産に負けたんだ。覚えてないか？当時日本未進出だったドイツの《Ｆｒｅｉｈｅｉｔ》の商品を、某系列百貨店とタイアップして全国展開させようって案件」
「あったな、そう言えば。……まさか、その時の向こうの担当者が」
思い当たった内容に聡が軽く驚きを示すと、高橋は重々しく頷いた。
「ああ、泣く子も黙る柏木女史だった。その時、俺も担当者の一員だったから課長と係長に同行したんだが、提案内容もさることながら実に威風堂々としていたな。最後に会場を後にする時、わざわざ向こうからこちらに挨拶しに来たんだ」
「何て？」
「『小笠原産業の提示した内容もなかなかでしたわ。よほど《Ｆｒｅｉｈｅｉｔ》の商品に愛着を感じていらしたんですね。ご安心下さい。我が社が御社の分まで日本全国で商品の魅力を十分に知らしめて、思う存分売り上げて見せますわ』って上から目線で、実際見下ろされながら。実際に言われなかったが、背後から高笑いが聞こえてきそうなオーラを醸し出してた……」
「あの人、女性にしては上背があるからな……」
（そして課長は男性にしたら背が低いからな）
ハイヒールを履くと１８０ｃｍの自分とさほど目線が変わらない

真澄の姿を思い返した聡は、当時の上司の心境を思って少し切なくなった。しかしそんな感傷を打ち消す様に、高橋が話を続ける。
「なあ、嫌味だろ？　仕事奪った上、そこまで追い討ちかけなくても良いだろ？　鬼だよな。その晩居酒屋で係長と一緒に課長に散々愚痴られてさ。酷ぇ目にあった」
「……お疲れ」
切々と訴える相手を一応労った聡だが、ここで漸く高橋が話を戻した。

「だから！　坊主憎けりゃ袈裟まで憎いって言葉もあるし、その柏木女史と懇意の女の子と付き合ってるなんて事が課長にバレたら、絶対お前目の敵にされるって！」
「それとこれとは関係無いだろう。それに付き合ったりはしていないと、何度言えば分かるんだ？」
（第一、そんな事をしたら、飛ばされたり干されたりするのは向こうだし……）
呆れつつも、どちらにしても自分の立場からすると少々困った事になりそうだと考えていると、高橋が慌てた様に動き出した。

「うわ、やべ。課長が睨んでる。俺行くわ」
「ああ、無駄話をし過ぎたな。俺もそろそろ机に戻る」
聡も険しさを含んだ上司の視線を察知し、２人はカップの中身を一気に飲み干し、横に設置されているゴミ箱に空のカップを突っ込んで業務へと戻って行った。

その日の夜、病院の面会時間ギリギリに聡が母親の病室を訪れると、電動式のベッドの半分を持ち上げた状態で由紀子がそこに上半身を預け、静かに本を読んでいた。
「あら、聡。来てくれたの？」

自分の姿を見付けて嬉しそうに笑いかけてくる由紀子に、聡も照れ笑いで応じる。
「今日は何とか消灯前に来れたね。いつもバタバタしてごめん。土日とかにゆっくり来れば良いんだけど、色々あって」
「良いのよ？　もういい大人なんだし。良い加減母親より彼女を優先にしないと、振られてしまうわよ？　えっと……、何てお名前だったかしら、三宅さん？」
笑って確認を入れてきた由紀子に、聡は幾分気まずそうに視線を逸らした。
「……彼女とは、もう別れたから」
「あ、そうだったの？　ごめんなさい、知らなくて」
「いいよ。俺もわざわざ言わないし」
しかも最後ではなく二代前の彼女の名前を口にされた事で、聡は（俺ってそんなに彼女の入れ替わりが早かっただろうか）と微妙に反省した。そして多少気まずくなってしまった室内の雰囲気を一掃しようと、ここで聡が持参した物を鞄から取り出す。
「母さん、今日はこれを持って来たんだ」
「これって、私の本よね。どうしてわざわざ本棚から持って来たの？」
見覚えの有りすぎる手製のカバーをかけられたそれを受け取った由紀子が不思議そうに見返すと、聡は表紙を捲って見せた。
「母さんが喜ぶかと思って、東野薫先生のサインを貰ってきた」
『喜ぶかと』と口にした割には些か心配そうに告げた息子に、由紀子の目が驚きで軽く見開かれ、サインと聡の顔を何回か交互に見てから、喘ぐ様に囁いた。
「貰った……、って、聡？　あなた、まさか……、本人に直接名乗って、サインして貰ったわけじゃ……」
由紀子の顔色は白を通り越してもはや蒼白になっており、その反応をある程度予測していた聡は、冷静に宥めにかかった。

「勿論、面と向かって『俺はあなたの弟です、宜しく』なんてやってないから。兄さんの妹の清香さんって子と最近知り合って、俺と兄さんの関係は明かさないまま、その子経由で頼んだんだ。角谷って名乗ったし、心配要らないよ」

（名乗ったけど兄さんにはバレバレだったみたいだが）

余計な事は自分の胸の中だけにしまって説明した聡だが、それを聞いた由紀子が何かを思い出そうとする様に、前方の壁の一点を見やりながら呟く。

「清香さん……。そう言えばあの時、側にかなり年下のお嬢さんが制服を着て座って居たような……。あの子かしら？」

「あの時って……、母さん。ひょっとして彼女と面識があったの？　初耳だけど」

「……いえ、そんな事は無いわ。言い間違っただけよ」

驚いて確認を入れた聡だが、それで瞬時に我に返った由紀子は誤魔化し、それ以上は余計な事を口にせずに黙り込む。何分かそんな沈黙が続いたが、開いたページに目を落とし、そこに書かれたサインを愛おしそうに手で軽くなぞっていた由紀子が漸くそこから顔を上げ、聡の顔を見据えながらゆっくりと口を開いた。

「聡？　嬉しいけど、こんな事はもう止めてね？　相手を怒らせるだけだから」

「怒っていたらサインなんかしてくれないと思うけど？」

「それはこちらが身元をきちんと告げなかったからよ。第一、清香さんにも迷惑だろうし」

「彼女に母さんが兄さんの作品を愛読してる事を話して聞かせたら、凄く喜んでくれて快諾してくれたけど？」

「余計な事はしないでって言ってるの！　人の気も知らないで、自分の自己満足の為に他人を騙して平気でいるなんて、人として最低

でしょう！　黙って親の言う事を聞きなさい！！」
　いきなり由紀子が声を荒げながら叱責してきた為、常には有り得ないその光景に聡は驚いて固まったが、次に激しい怒りに駆られた。
「……へぇ、母さんは余計な事だって言うんだ」
「当たり前でしょう？　先方とこちらとは、今ではもう無関係なんだから！」
「じゃあ発作で倒れて意識が朦朧としてた時、兄さんの名前を何度も口にしてたのは？　父さんは勿論、俺の名前だって一度も出なかったけどね」
「……え？」
　そこで由紀子の声に勢いが無くなり、逆に静かに語り掛けた聡の口調が、段々激しいものに変化していく。
「ああ、確かにそうだね。兄さんと俺達は無関係だ。現に五年前に父さんから話を聞いた時、だから母さんが東野薫の本を読んでるんだと納得したけど、本当にそれだけだったし。母さんが倒れるまで、正直存在すら忘れてたさ！」
「聡、ごめんなさい。さっきは私が言い過ぎたわ」
　慌てて謝ってその場を治めようとした母親の台詞を、聡は聞かぬふりで続けた。
「だけど母さんはずっと忘れて無かったって事だろ？　そりゃあそうだよな。何と言っても家付き娘の母さんが、本気で好きになって駆け落ち同然に結婚した相手との間の子供だし。そりゃあ可愛いだろうさ！　あの頑固爺に押し付けられた再婚相手の、あの面白味の無い父さんの子供の俺なんか、二の次だろうし！」
「聡！　そんな事は無いわ！」
　血相を変えて激しく由紀子が否定したが、それを見て逆に落ち着いた聡は、いっそ冷たいとも言える口調で淡々と続けた。

「何を今更……。あれではっきり分かったから、別に遠慮しなくて良いさ。正直に言ったら？　俺は兄さんの代わりだって」
「聡。だからそれは誤解よ。私は別に清人とあなたを比べたりなんかしてないわ」
　必死で弁解する由紀子を真正面から見据えながら、母親が初めて“清人”と兄の名前を読んだ事実に訳も無く苛ついた聡は、以前からの疑問を母親にぶつけた。
「未だに気持ちを残してるなら、佐竹さんと別れた時、どうして兄さんを引き取らなかったんだ？　佐竹さんは再婚するまで１０年近く男手１つで兄さんを育てていて大変だったろうし、うちは昔から金だけは十分過ぎる程あるんだから。母さんが言えばあのジジイだって、いけ好かない男の子供でも兄さんを手元に引き取ったんじゃないか？」
　言うだけ言った聡は母親の反応を慎重に窺ったが、由紀子は聡から視線を逸らして俯いたまま、ボソッと呟いたのみだった。

「……あなたには関係の無い事よ」
「分かった。もういい、俺は帰る。おやすみ」
　何となく母親に裏切られた気持ちで一杯になってしまった聡は衝動的に立ち上がり、吐き捨てる様に別れの言葉を口にしながら由紀子の顔を見ずに足早に病室を去った。
　廊下に出た瞬間、幾らか頭が冷えて残してきた母親の事が気になったが、どうしても病室内に戻る気にはならず、苛々しながらそのまま歩き出す。ちょうどその病棟で待機していたエレベーターに乗り込み、一階フロアに降りて廊下に足を踏み出した直後、我慢できなくなって廊下の壁を拳で力一杯叩いた。

「くそっ……」
　考え無しに殴った拳も痛かったが、これまで穏やかな性格の由紀子に怒鳴ったり嫌味を言った事など皆無だった聡はそれ以上に胸の

痛みを覚え、そんな自分自身の感情を持て余していた。

第１１話　親友の裏事情

一時限目の開始までに余裕を持って目指す教室に着いた清香は、既に机に座っていた親友の朋美に声をかけ、その隣に座った。そこで必要な物をショルダーバッグから取り出し、机の上に並べ終わった清香が、突然何を思ったか俯いたまま不気味な笑い声を上げる。

「うっふふふふ」

「……ちょっと清香。何よ、その変な笑いは」

さすがに隣席に辛うじて聞こえる程度の押し殺した笑い声だったが、現にそこに座っている朋美が薄気味悪そうな視線を向ける。すると清香が如何にも嬉しそうにバッグから一冊の本を引っ張り出し、朋美に向かって掲げて見せた。

「これっ！　今日の講義は午後に１コマ空くから、その時間にじっくり読み返そうと思って持って来たの！」

もう頬擦りせんばかりの上機嫌で告げる清香に、朋美は些か呆れた様に言い返した。

「ああ……、この前聞いた、試写会場で榊原康孝本人に直に会って、サインして貰ったってやつね。あんたもつくづく渋い趣味してるわ」

「ほっといて。……う～ん、だけど何か、最近運気が増してる気がするわ。聡さんに会ったお陰かな？　招待券も貰ったし」

ウキウキと誰に言うとも無く呟いた清香だが、それを耳にした朋美はピクリと反応した。

「ところで清香」

「なあに？」

「その聡さんとやらの事は、お兄さんも知ってるのよね？」

慎重に問い掛けた朋美に、清香は無邪気に答える。

「勿論よ。同窓生だし、今時珍しい親孝行だねとか色々誉めてたわ

よ？」

「ふぅん、“誉めて”ねぇ……」

（あんたの前で本心から他の男を誉めるわけ無いじゃないの！）

清香とは高校時代からの付き合いの為、既に清人の性格を看破してしまっている朋美は心の中で断言し、今後の方針について１人考えを巡らせた。

（さて、このパターンは初めてなのよね。今まで清香に纏わりついてくるのは学生だったから、いつも私から情報発信してたし……）

本人は全く知らない事ながら、清人は清香と仲の良い朋美を《清香に纏わりつく男の情報提供及び工作活動要員》として目を付け、幾らかの交渉を経て双方合意に至った協力関係にあった。

既に五年目に突入するこの関係の為、今では朋美の周囲で清香に言い寄る男がほぼ皆無であり、その事に対して朋美は多少親友に罪悪感を抱いていた。それで一瞬（あのシスコン兄貴が認めている男なら、清香の恋を応援してあげられるかも）とは思ったものの、（その可能性はあり得ない……）と自分自身でそれを否定したのだった。

初めて聡の名前を清香から聞かされてから、注意深くその人となりなどを尋ねたりしていたのだが、清人の方からその人物について何も言ってこないと言うのが、朋美にしてみれば不気味と言えば不気味だった。

（聞いている感じでは、まだ好きとか意識してるわけじゃ無さそうなのよね。それに社会人だから学内で接触する事はまず有り得ないし、私が知っていなくても良いって事かしら？）

そんな考えを巡らせながら、朋美は相変わらず本を抱えて楽しそうに語る清香に大して、適当に相槌を打ちながら笑顔を見せていた。

そんな状況が一変したのはその日最後の講義が終わり、２人で帰り支度をしていた時だった。講義中電源を落としていた携帯の電源を立ち上げ、メールチェックをしていた清香が突然当惑した声を上げた。

「……え？　聡さん？　嘘、やだ、後五分位しか無い。どうしよう」

急に携帯を握り締めながらオロオロし始めた清香に、朋美は冷静に声をかける。

「ちょっと落ち着きなさい。例の聡さんがどうかしたの？」

「それが……、聡さんには私がここの学生なのは話してあったんだけど、今日は午後から営業の仕事でこの近くに来ていたみたいで、『ちょっと顔が見たいのと話したい事があるから、迷惑で無ければ正門の所で待ってる』って。それで到着予定時刻まで五分切ってて」

それを聞いた朋美は素っ頓狂な声を上げた。

「はあぁ！？　清香、あんた別に約束なんかしてないのよね？」

「うん、してないけど」

「それなら『用事があるので失礼します』って断れば良いだけの話でしょ？　とっとと西門から帰るわよ！」

「でも朋美、わざわざ聡さんが仕事の途中で立ち寄るなんて、何か大切な話かもしれないし」

「大手総合商社のバリバリエリートサラリーマンが、一介の学生相手にどんな大切な話があるって言うのよ！」

教室内の級友達の怪訝そうな視線を一身に浴びながら、朝の心境とは打って変わって朋美は内心で焦りまくっていた。

（まずいわっ！　校内で清香に男が近付くのを黙認なんかしたら、私の入学金がっ！）

朋美が高三の夏、実家が自身の進学費用を用立てるのはかなりギリギリだろうと判断していた朋美は、レベルを上げて地方国立大学を受験して１人暮らしの生活費を何とか工面するか、余裕で入学で

きる自宅から通学可能な私立のここにするかの二者択一を迫られていた。そして考えた挙げ句、清香が同じくここを志望校にしていた事から、高一の時から清香の周囲の男どもの情報を横流しする度に、惜しげもなく過分な“お小遣い”をくれていた清人との直談判に及んだのだ。

「すみません、入学金を全額無利子12年返済の条件で貸して下さい。その代わり大学内で清香には一切男を近付けさせません！」

その申し出を聞いた清人は如何にも楽しそうに笑い、幾つかの条件を出した。

《清香に気付かれると不味いので、男との多少の接触は許容範囲とする。その代わり2人きりにはさせない》

《卒業まで虫除けができたら、貸した全額は返却しなくて構わない》

《もし失敗したら全額返済、当然銀行金利程度の利子はつけて貰う》

その条件で清人と手を結んだ朋美としては、かなり切実な問題だった。

（この不景気な時代に、卒業したって稼ぎの良い職にありつけるかどうかなんて分からないわ。百万単位のお金がチャラになるなら、悪魔にだって魂だろうが何だろうが売ってやるんだからねっ！）

そう決意を新たにしながら、未だに某財団から奨学金を貸与されたと本気で信じている両親に対しても腹を立てた。

（大体、保護者に書類の一枚も見せない書かせないでポンとお金を渡すなんてあり得ないでしょ？　それを疑いもしないなんて、そんな事だから出世コースから弾かれてうだつが上がらないのよ！　もう頼りにできるのは自分自身だけだわ！）

頭の中で脳天気な親への八つ当たりも済ませて気持ちを落ち着けた朋美は、素早く頭を回転させながら清香に声をかけた。

「ねえ、清香。この場合、わざわざ相手に付き合う義理は無いと思

うんだけど、清香としては取り敢えず話を聞きたいのね？」
「うん。わざわざここに立ち寄るなんて始めてだし、電話じゃ出来ない話なのかと思うと気になるし」
「じゃあ取り敢えず門まで行きましょう。案外すぐ済む話かもしれないわよ？　私も付き合うから」
「ありがとう、そうしてくれる？」
「私は構わないわ」
鷹揚に頷いて見せた朋美だが、実は（変に引き止めてムキになられたり、あの時の代わりにとか変な交換条件にされたら面倒だもの。この際徹底的に観察させて貰うわ）などという思惑の結果だった。

そんな風に話が纏まり、何やら朋美が携帯を操作してから2人連れ立って校舎から正門への真っ直ぐな道を歩いて行くと、門柱の側に佇む1人の男性の姿が目に入ってきた。
「ねえ、清香。もしかしてあの人？」
「うん、あの人が小笠原聡さんよ」
「……へぇ」
相手も歩いてくる清香を認めたらしく、鞄を持っていない方の手を軽く振りつつ、笑顔で真っ直ぐ2人の方に向かってくる。校内では見掛ける事の少ないビジネスマンの出で立ちの彼と、それに近付いていく自分達に周囲の視線が集中していくのが分かったが、朋美はそれには構わず徐々に近付いてくる聡を食い入る様に眺めた。

（清人さんとはまた毛色が違ったイケメンだわ。体つきも均整取れてる感じだし、着ている物も上物そう。だけど……、どことなく温室育ちって感じが。あの清人さんに真正面から刃向かえるだけの根性が有るかしら？）
そんな結構失礼な事を考えている間に、両者は1メートル未満の距離まで接近した。

「こんにちは、清香さん。突然メールして学校まで押し掛けてごめんね？」
「いえ、ちょうど今日の講義は全部終わった所でした」
「それは良かった。それでちょっと時間を貰いたいんだけど」
「お話中すみません。清香、こちらの人に私を紹介してくれないの？」
自分の目の前で2人が和やかに話し出したところで、朋美が些か強引に会話に割って入った。それを受けて清香が慌てた様に友人を紹介する。
「あ、ごめんね、朋美。……聡さん、こちらは高校時代からの友人で緒方朋美さんです。クラスも一緒で、2人で帰るところだったんです」
「小笠原さんの噂は、清香から色々お聞きしてます。初めまして」
にっこりと笑って清香が親友を紹介すると、今度は聡が愛想笑いを浮かべつつ、目の前の女性の観察を始めた。

「こちらこそ初めまして。知って頂いていて光栄です、宜しく。だけど高校から一緒って長いし、もう親友って域だよね」
「そうですね。若干腐れ縁っぽいですけど」
「酷いわ、朋美」
「そうなると……、当然彼女のお兄さんともお知り合いかな？」
「ええ、良～く存じてます。色々清香の事について相談を受けたりもしてますし」
（やっぱり裏で兄さんと繋がってるか……。彼女の親友面して、陰で何をしてるか分からないな）
含みのある会話を交わし、互いに相手の言わんとする所を察した2人は、愛想笑いを更に深くした。

「ところで、小笠原さんは清香にお話があるとか」
「ああ、ちょっとね」

「お時間かかりますか？実はこの後、私達用事がありまして」
「え？　特に何も無いよね、朋美」
キョトンとして問い掛けてきた清香に、朋美は幾分すまなそうに、しかし余裕で言い返した。
「ごめん、今思い出したの。今度の学祭でのチャリティーオークションに、スタッフでの参加を頼まれてたでしょう？　その打ち合わせが後４０分位で始まるのよ」
「えぇ？　聞いてないそんな話！」
「だからごめんって」
当惑した声を上げた清香に朋美は詫びを入れ、改めて聡に向き直った。

「そういう訳なので小笠原さん、清香と話をされても構わないんですが、外に出てどこかお店に入ってとなると、それに間に合わなくなる可能性があるんです。宜しかったらあそこの学食でお話ししませんか？今の時間はカウンターは開いてませんが、自販機は揃っていますし」
そう言いながら朋美は前庭に面したガラス張りの学食を指差した。
本校舎から渡り廊下で連結されているそれは上層階に図書館や研究室を抱えており、チラホラと調べものや研究に一区切り付けて、一息入れに降りてきたらしい人間の姿も見える。それを無言で眺めてから聡は快諾した。

「俺は構わないよ。君達の都合も聞かずに押し掛けたのはこちらだし。せっかくだから2人に奢るよ。何が良い？」
「それならカフェオレをお願いします」
「分かった。清香さんは？」
そんな事を言いながらさっさと学食に向かって歩き出した聡と朋美を、一歩遅れて清香が追い掛けた。
「え？　朋美も一緒に居るの？」

「何か都合が悪い？」
「俺との話が終わったら一緒に打ち合わせに行くんだろう？　一旦離れてまた呼び出しとかするのは面倒だろうしね。俺は構わないし」
「そうですよね。一人前の社会人が、人に聞かれちゃマズい話なんかしないですよね」
「そうだね。相手の都合を聞かずに押し掛ける程度の非常識な事位はするかもしれないけど」
「あら、自覚はおありだったんですね。良かった」
（どうあっても彼女と2人きりにはしないつもりだな？　この女）
（ふっ……、1分で打ち合わせ前倒しの根回しは完了よ。意地でも清香は離さないわ！）

笑顔と友好的な口調を取り繕いながら聡は朋美と嫌味の応酬をし、微妙な顔をしながらも清香ははっきりとそれを認識できないまま学食へと入って行った。そして聡の支払いでそれぞれ好みの飲み物を手に入れた3人は閑散としている学食の片隅のテーブルに落ち着き、聡が幾分迷う様な素振りを見せてから、自分のコーヒーを入れた紙コップに口をつけないままゆっくりと口を開いた。

「清香さん。呆れないで聞いて欲しいんだけど」
「はい、何ですか？」
一口レモンティーを口に含んでから問い返した清香に、聡が予想外の事を言い出した。
「実は……、三日前に母と喧嘩をしたんだ」
「「はい？」」
もの凄く深刻そうな顔で語られた内容に、清香と朋美は揃って戸惑った声を上げた。それには構わず、聡が紙コップの中身を見下ろしながら淡々と続ける。
「あまり詳しい事は言えないけど……、母に良かれと思った事が、

実は本人にとってそうでは無かったみたいで。あ、いや、少しは反発みたいな物があるかもしれないとは予想してはいたんだけど、初めて母から大声で叱責されて動揺したと言うか、ついこっちも口を滑らせて売り言葉に買い言葉で結構酷い事を……」

段々ボソボソとした口調になってくる聡の話を清香は唖然として聞いていたが、恐る恐る尋ねてみた。

「あの、聡さん。喧嘩の内容が全然分からないので判断出来ないんですが、客観的に見たら悪いのは聡さんですか？　それともお母さんですか？」

「……殆ど俺が悪いと思う」

がっくりとうなだれてしまった聡を、清香は励ます様に続けた。

「それがちゃんと分かっているなら、一刻も早くお母さんに謝った方が良いですよ？」

「次の日謝りに行ったんだ。そしたら『気にしてないから』と言われたけど、母の態度がぎこちなくて。でもそれ以上どうしたら良いのか分からなくて。しかも当日俺が飛び出した後、母が体調を崩してナースコールで看護士を呼んだって主治医から聞いて」

「え？　お母さん、どうかされたんですか？」

驚いて聡の話の腰を折ってしまった清香だが、聡は力無く笑って続けた。

「狭心症の発作で入院してて予後は良かったんだけど、興奮させたのが不味かったのか血圧の上昇と不整脈が出て、予定してた退院日を半月は延ばして経過を見る事になったんだ。１１月末に退院予定だったのが、年内退院が微妙になった」

「そうだったんですか」

どう言葉をかけて良いか分からなくなってしまったらしい清香の表情を窺いながら、聡は１人自己嫌悪に陥った。

（俺は一体何をやってるんだ？　全く無関係とは言えないが、彼女

にこんな愚痴を聞かせた挙げ句、自分の母親の事にまで気を遣わせる結果になって。情けないにも程があるだろう……）

そうして小さく溜息を吐いた聡は、深刻そうな顔の清香をチラリと見ながらしみじみとここに来た理由を告げた。

「その他にも色々あって、この2日間どうしても気分が晴れなくて、清香さんの顔が見たいなと切実に思」

「馬っ鹿じゃないの？」

そこで朋美が聡の独白を容赦なくぶった切り、舌戦の火蓋が切って落とされたのだった。

第１１話　親友の裏事情（後書き）

長くなりすぎてここで一度切る事にしました。続きは今日中に纏めて明日更新予定です。

第１２話　教育的指導

「部外者は口を出さないで貰えるか？」
「部外者だろうが何だろうが、耳障りな事を目の前で垂れ流されるのを黙って甘受しなくちゃいけない理由なんてないわ。たかが親と気まずくなった位で、いい年した男が年下の女子大生に愚痴零してんじゃないわよ、みっともない」
「ちょ、ちょっと朋美落ち着いて、聡さんも」
聡が向けてくる、これまでの苛立ちも相俟った険しい視線を、朋美は恐れ気も無く真っ向から受け止め、吐き捨てる様に言い返した。間に挟まれた格好の清香は、ただオロオロとするばかりである。

「随分お気楽に育ったみたいだな。いつも『ごめん』の一言で何でも済ませて来れたのか？　いっそ羨ましいな」
「はん！　何よ深刻ぶって。これまで親とまともに喧嘩した事がない、人間的に未成熟な人間に、好き勝手言われる筋合いは無いわ！」
「何で人間的に未成熟とまで言われなくちゃならないんだ！？」
「その年で、親を怒らせてどうしたら良いか分からないなんてうろたえている様じゃ、まともに反抗期なんか過ごして無いんでしょ？　終始親の顔色を窺う“良い子”だったんじゃない？　それに当然兄弟が居なくて1人っ子よね」
「……どうして断言できる」
見事に言い当てられ憮然として尋ねた聡にわざと直接答えず、朋美は清香に顔を向けた。

「清香。この人に今年私が選択してて、あんたが選択してない科目を教えてやって」
「えっと……、児童心理学と行動分析学と精神発達論、です」
チラリと聡の方を気にしながらも清香が素直に答えると、朋美は

語気強く言い放った。
「私に言わせればね、今時の小学生の方が鬱屈して屈折してるわよ。何？　その幼稚園レベル。ひょっとして家族なんだから、時間が経てばその内自然に何とかなるとか思ってんじゃないの？　甘いわね」
「朋美、家族なんだから何とかなるものじゃないの？」
黙り込んだ聡とは対照的に怪訝そうに清香が口を挟むと、それを聞いた朋美は深い溜息を吐き出す。

「あのね、清香。血の繋がりが有る分、余計に人間関係って厄介なのよ。家族だから何でも分かり合えてたら、家族同士で保険金殺人とか、遺産相続で骨肉の争いなんか、この世に存在しないわよ？」
「……ごもっともです」
神妙に頷く清香に、朋美は苦笑しながら言い聞かせた。
「子供が社会性を身に付ける過程で、まず目の前に存在しているのは親兄弟でしょう？　その人達とぶつかった上で、その人間関係をどう修復していくかの過程で、他の人間との関係を構築して行くスキルを身に付けるのよ。どこまでなら許されるのか、どうすれば許して貰えるのかって学習しながらね。喧嘩したら同じ数だけ仲直りしなきゃいけない。これ、常識だから。喧嘩したらそのままで良いとか、嫌われるのが怖いから絶対喧嘩できないなんて考えの持ち主は、精神構造がどこか歪だって言われても文句は言えないと思うわ」
「う……、それはそうかと思うけど。でもよくよく考えてみれば、私、お兄ちゃんと喧嘩ってしたことあるのかな？」
思わず漏らされた清香の呟きに、朋美は苛々した様に話を続けた。

「まあ、そんな事だと思ってたけど。要するに小笠原さんは経験値が殆どゼロだから《喧嘩したら相手に二度と許して貰えないんじゃないか》って喧嘩する前から怖気づく根深い人間不信型で、それが高じて積極的に人間関係を広げられない《来る者拒まず去る者追わず》の淡泊なタイプ。清香は『喧嘩する状態まで持っていかれない』

過保護もしくは無関心家族型で、それが逆な方向に働いて《特定の狭い範囲だけに強固な関係を結びたがる》固執タイプってとこかな？」

キッパリと言い切られて清香と聡は絶句した。

「なんか随分酷い事を言われた様な気が……」

「私、そんなに固執するタイプじゃないと思うけど……」

そんな控え目な抗議も、朋美はあっさり受け流した。

「まあ、他人がどうこう言う事じゃないかと思うけど。小笠原さんはぶつぶつ愚痴ってる暇が有るなら、もっときちんと謝る事ね。何か物を壊したなら代わりになる物を。それで代替えできない思い出とかなら、それ以上に楽しい思い出を作ってあげられる様に努力する事。そして家族なんだから、思った事はきちんと口にして正面からとことんぶつかる事。何かを始めるのに遅すぎるって事は無いのよ？　ヨボヨボの爺さんになって死ぬ前に『ああしておけば良かった』って後悔するより良いじゃない」

「確かにね」

最早苦笑するしかないといった表情の聡から、朋美は清香に視線を向けた。

「前から一度言いたかったんだけど、清香は何でもかんでも清人さんに任せっきりにしないで、色んな事柄や物をきちんと自分で選ぶ事。あまり物事に執着しないのは美点かもしれないけど、度が過ぎると周りが見えなくなるわよ？」

「私そんなにお兄ちゃんに依存している様に見える？」

不満げに訴える清香を、朋美は鼻であしらった。

「判断基準が何でもかんでも《お兄ちゃん》じゃない。お兄ちゃんが好きな髪型、お兄ちゃんが好きな服装、お兄ちゃんが好きな料理、お兄ちゃんが好きな場所。他にもこれまで色々聞いたけど？　別にお兄ちゃんの言う通りにしなかったからって、あの人はあんたを放

り出したり、あんたの前から急に黙って消えたりしないわよ」
「……そんな事、思って無いわよ」
何やら微妙な空気を察した聡が思わず清香の顔をまじまじと覗き込もうとした時、学食の正面入り口付近から女性の声が響いてきた。

「ちょっと朋美！　見つけたわよ！？」
「あんた、さっきのメールは何なの？」
急な打ち合わせ日時の変更を一斉にメール送信した為、当惑した彼女達が自分を探していたと瞬時に察した朋美は、清香達に不審に思われない様慌てて立ち上がった。
「あっと、ごめん清香。ちょっと真希子達と話があるから、ここで待っててくれる？」
「うん、良いわよ？」
断りを入れて級友の元に駆け寄っていく朋美を見送ってから、清香は黙り込んでいた聡に幾分心配そうに声をかけた。

「あの、聡さん、気を悪くさせてしまったらすみませんでした。朋美は思った事をストレートに口にするタイプで。でも基本的に世話焼きの、優しい子なんですよ？」
自分に気配りしつつもちゃんと友人をフォローする清香に、聡は強張っていた表情を緩め、優しく笑いかけた。
「いや、気にしてないから。俺が情けないのも結構子供なのも、言われてみればその通りだし。寧ろ目が覚めて良かったよ、もう少し頑張ってみるから」
「そうですか？　それなら良いんですが」
そこで聡は苦笑混じりに呟いた。

「本当に……、清香さんの顔を見たら気分が良くなるかも位の、軽い気持ちで来てしまったんだけど」
「う、ごめんなさい」

「え？　どうして清香さんが謝るの？」
予想外の反応をされて聡が戸惑うと、清香が如何にも申し訳無さそうに呟く。
「だって聡さん、気分転換にポニーテールを触らせて貰いに来たんですよね。それなのに私、今日はバレッタで留めてるだけですし」
「は？」
そう真顔で告げられた聡は反射的に清香の髪型を確認し、今日彼女に会った時から感じていた微かな違和感の正体に漸く気がついた。そしてどれだけ自分が失調していたかを自覚すると共に、自分の中から笑いが込み上げてくる。

（俺って、彼女の中ではとんでもないポニーテールフェチだとでも思われてるのか？　しかし自分に会いに来たとは微塵も考えない所が、なんとも笑える……）
そんな事を考えて笑いを堪えていた聡は、ふとある事を考え、早速それを実行に移した。

「ねえ、清香さん。じゃあ俺に気分転換させて、慰めてくれる？」
「それは……、できればそうしてあげたいですが」
「じゃあヘアブラシとシュシュを買おう。駅前まで行けば小物は幾らでも売ってるよね。今日のお詫びに、清香さんの気に入った物を買ってあげるから」
「え？　あの、まさか……、それで私にポニーテールにしてくれとか……」
自分の腕を軽く引っ張りながら立ち上がった聡に、清香は若干引き攣った顔であまり考えたくない可能性を口にしたが、聡は笑顔であっさり肯定した。

「ああ、勿論。実は五時までには一度社に戻らないといけないから、ここにあまり長居はできないんだ。そういう事だから行くよ？」

「あの、ちょっと待って下さい！　一応朋美に断りを入れないと！」
「大丈夫大丈夫。親友なんだろ？　これ位で怒らないから」
「何で聡さんが断言するんですか！」
「彼女とは腐れ縁なんだろ？」
「もっとマシな言い方をして下さい！」
　そんな言い合いをしつつ2人は朋美達が立ち話をしている入り口とは反対方向の扉を目指し、朋美が話を終えて再び座っていたテーブルに視線を向けた時には、2人の姿は影も形も見あたらなかった。

「清香をあっさり丸め込んで、まんまと逃走しやがったわね？　あいつ……」
　忌々しげな口調とは裏腹に、朋美はどこか楽しんでいる様な表情で清香達が出て行ったと思われる奥の出入り口を見詰めた。そして徐にバッグから携帯を取り出し清人の携帯を呼び出すと、短いコール音の後冷静な清人の声が響いてくる。

『もしもし、朋美さん？　何かあったのか？　こんな時間に』
「ええ、ちょっと。実は大学に小笠原氏が清香を訪ねてきて、先程まで3人で顔を合わせていたんです」
　そう告げた瞬間清人は電話の向こうで一瞬押し黙り、次いではっきりと不機嫌だと分かる口調で問い掛けてきた。
『……何をしにそこまで押し掛けたんだ？　あいつは』
「私に凄まないで下さいよ。一言で言えば、ぐだぐだっぷりを露呈しにですね。あれじゃ付き合う以前の問題でしょう。恋人なら自分の格好悪い所なんて、意地でも見せたく無いでしょうし。あ、でも……、却って気を許してるからこそ、洗いざらい話せるのかな？」
『君の見解はどうでもいい。さっさと話の内容を教えろ』
「はいはい。それでですね……」
　何気なく口にした推論を完璧に無視されたが、朋美は気を悪くする事無く、薄笑いさえ浮かべながら一部始終を語った。

「……そんなわけで、清香と纏めて説教しちゃいましたよ。あのぐだぐだ男に」
　肩を竦めながら朋美が語ると、電話の向こうの清人は更に不機嫌そうに問い掛けた。
『話の内容は分かった。それで？　清香とあいつはまだそこに居るのか？』
「居たらこんな電話できないじゃありませんか。あの男、ちょっと目を離してる隙に、清香を丸め込んで遁走しやがったんですよ。言っておきますけど、これは不可抗力ですからね！　それ以降の事は清香が帰ったら本人に聞いて下さい」
　腹立たしく思いながら弁解の言葉を繰り出すと、予想に反して清人は微かに笑う気配と寛大な言葉を返してきた。
『さすがの君も勝手が違って油断したのか？　まあ、今回は良いさ。その代わり次回は宜しく頼む』
「分かりました」
　当初はそこで大人しく通話を終わらせるつもりだった朋美だが、ふと悪戯心が芽生えて自然に口から言葉が転がり出た。
「それにしても……、清人さんと小笠原さんって、似てる所がありますね」
『どこが。どんな風に』
　如何にも不機嫌そうに吐き捨てた清人に、朋美は必死に笑いを堪えながら理由を述べた。
「お二人とも頭は良い筈なのに、揃ってお馬鹿さんです」
『なっ……！？』
「頭が良い＝賢いとは一概に言えないと、前々から密かに思っていたんですが、それを実証してくれる人間が二人も現れてくれて、とても嬉しいです」

全く悪びれずに告げた朋美に対し、絶句していた清人が小さく唸った。

『俺は君と契約するに当たって、暴言を吐く事まで容認した覚えは無いんだが？』

「暴言を吐くなと禁止されてもいませんよね？　もう三十過ぎのいい年をした大人が、ガキの台詞に一々目くじら立てないで下さい。それでは失礼します」

そう言ってあっさりと通話を終わらせた朋美の携帯には、わざわざ清人からかけ直してはこなかった。それをバッグにしまい込んだ朋美は、今後のキャンパスライフに一抹の不安と楽しい変化の予感を覚えつつ、校内を後にしたのだった。

第１３話　嵐の予兆

「……ええ、じゃあそういう事で。それじゃあその時に、お休みなさい」

「清香、電話は終わったか？」

耳から携帯を離した瞬間、背後から軽いノックの音と清人の声が聞こえた清香はゆっくり振り向いた。すると開いたドアの隙間から、顔を覗かせている清人を認める。

「うん、終わったけど、どうかしたの？」

「浩一が袖の下持参で来てるんだ。顔を出すか？」

「うん、今行く！ちょっと待ってて」

「じゃあ紅茶を淹れておくから」

慌てて机の上に有った手帳に何かを書き込み始めた清香に、清人は声をかけながらその場を後にした。

そして用事を済ませた清香はすぐにリビングに向かい、ソファーに落ち着いているスーツ姿の浩一に笑顔で駆け寄った。

「浩一さん、今晩は。お兄ちゃんが袖の下を持って来たなんて言ってたけど、何か頼み事をしに来たの？」

その清香の台詞に、苦笑を禁じ得ない浩一。

「全く……、あいつは土産と言えないのか。単に清香ちゃんのご機嫌取りなんだけどね。ヨハンのクリームチーズケーキを買って来たんだよ、好きだろう？」

「うわ、浩一さんありがとう。大好き！」

思わず横に座って浩一の首に腕を回して抱き付いた清香を、抱き返しながら浩一が笑みを深くした。

「あはは、凄く嬉しいけど、清人に殺されるから、こういう事はあいつの目が届かない所でね」

「……その方が、お互いの身の為だな」
いつの間にかティーセットを乗せたトレーを持った清人がやって来て、頭上から冷え冷えとした声を降らせた為、清香はくすくすと笑いながら手を振った。
「もう、お兄ちゃん！ふざけて何物騒な事言ってるのよ！」
（（いや、本気なんだが））
清人は黙ってポットとカップをテーブルに置いてキッチンに戻り、再びケーキを乗せた皿を持ってきた。その間斜め向かいに座って世間話をしていた浩一と清香だが、清人が浩一の正面に座り、茶漉しを持ちつつ蒸らしていた紅茶をカップに注ぎ始めたところで、清香が素朴な疑問を発した。

「ところで浩一さん、平日の夜にどうしてわざわざうちに来たんですか？」
「ちょっと清人に相談に乗って欲しい事が有ってね。男同士の話だから、ケーキを食べたら両手で耳を塞いでくれているとありがたいな」
ふざけた口調で告げた浩一に、清香も笑顔で応じる。
「安心して。それなら食べ終わったらちゃんと部屋に引き上げるわ」
「ごめんね、清香ちゃん。お詫びと言ってはなんだけど、今度の土日、どちらかドライブに行かない？行きたい所があれば連れて行ってあげるから」
さり気なく誘いをかけた浩一に対し、清香は申し訳無さそうに断りを入れた。

「ごめんなさい浩一さん。どちらも予定が入ってて。土日は再来週も無理なの」
「それは忙しいね。友達との約束が色々詰まってるの？」
「友達との約束もあるんですけど、最近浩一さんみたいに皆が色々誘ってくれて」

「へえ、色々って、どんな？」
　柏木総一郎から孫達への通達を浩一経由で聞いている清人は、笑いを堪えながら素知らぬふりで尋ねると、清香は考え込みながら口にした。
「えっと……、玲二さんとはボーリングの日と、それとは別に新しいネイルサロンで新着の物を試してみる事にしてて、正彦さんとは今度結婚する友人の結婚祝いを一緒に選んでから、食事をする予定で、明良さんにはエステに連れて行って貰った後写真を撮って貰う事になってて、その他に水族館に連れて行って貰う日もあって、友之さんには……、あ、そうだ、お兄ちゃん！」
「うん？何だ、どうかしたのか？」
　何か思い出したらしい清香に唐突に呼び掛けられ、清人は紅茶を飲もうとした手を止めて訝しげに妹を見やったが、続く話に僅かに目を細めた。

「友之さんに『二十歳になったんだからプールバーに連れて行ってあげる。だからいつもは門限は２１時だけど、清人さんに帰りはそれより遅くなる事を了解して貰っておいて』って言われてたの。『２３時までには着く様に送ってあげるから』って言ってくれてるし、良いでしょ？お兄ちゃん」
（……あの野郎、どさくさに紛れて清香をどこに連れて行く気だ！？）
　怒りまくっている清人の内心には気付かないまま、おねだりモードに突入する清香。
「ねえ、お兄ちゃん、良いでしょう？友之さんが帰りは責任持って送ってくれるって言ってるし」
　上目遣いでの訴えに、清人は歯軋りしたいのを堪えながらボソッと呟く。
「……２２時」

「え？」
「それ以上遅くなるなら、それ以降あいつと出掛けるのは無しだ」
素っ気なく宣言した清人に、清香がたちまち不満げな声を上げる。
「ええ？　お兄ちゃん、横暴！　せっかくビリヤードを徹底指導して貰えるかと思ってたのに！」
「清香。俺の言う事が聞けないのか？」
「う……、はい。分かりました」
途端に凄んできた清人の表情と声音に、清香はこれ以上逆らってはまずいと判断し、不承不承頷いた。そこで浩一が呆れた様に口を挟んでくる。

「清人、お前な……。清香ちゃんにも色々付き合いがあるだろう。二十歳になったんだし、コンパとかも『飲酒は厳禁だと兄に言われてるから参加できません』で片端から断らせるのも無理があるんじゃないのか？」
「他ではどうか知らんが、うちでは俺の方針でやらせて貰うだけだ」
「……全く、変な所で頑固だな、お前は」
「放っておいてくれ」
浩一の取りなしの台詞をすげなく一刀両断し、黙々とケーキと紅茶を味わっている清人をよそに、浩一と清香は苦笑交じりに目と目で会話した。

（過保護で心配性の兄が居ると、色々苦労が多いね清香ちゃん）
（今更です。もう慣れてますから）
そしてまた一口紅茶を味わってから、清香がしみじみと言い出した。

「でも皆の誘いがこんなに重なるなんて珍しくて。おかげで土日とか平日の早く終わる日とか、これから二週間ほぼ予定が埋まってるんだもの」

「随分モテてるな」
「茶化さないでお兄ちゃん。それで聡さんとの都合がなかなか合わないからさっき相談したんだけど、今度の大学祭の時に構内で待ち合わせする事にしたの」
「はあ？　ちょっと待って清香ちゃん！？」
「清香！　何だそれは！？」
淡々と語る清香とは対照的に男2人は目を見開いて問いただしたが、当の本人はきょとんとして言葉を継いだ。

「何だ、って……、二人ともどうしたの？　単に大学祭で聡さんと会う事になったってだけの話じゃない。どうしてそんなに驚くわけ？」
途端に黙り込んで物騒な気配を醸し出し始めた清人から視線を逸らしながら、浩一はさり気なく突っ込んでみた。
「いや、その……。聡さんって、この前試写会で会った角谷さんの事だよね。試写会の券は清人のサイン本を貰ったお返しに、って事で何となく分かるんだけど、まだ2人が会う必要性とか理由があるのかな、と」
「それは、聡さんが浩一さん達と同じだからだと思いますよ？」
「え？お、俺達と同じ？」
動転して問い返した浩一だが、清香は事も無げに答える。
「ええ。だって私が小学生の頃に『どうして浩一お兄ちゃん達は清香と遊んでくれたり、色々プレゼントをくれるの？』って聞いた時、『俺の所は気の強い姉さんだけだし、倉田さんと松原さんの所は息子ばかりだから可愛い存在ってものに飢えててね。清香ちゃんみたいな可愛い子を、皆妹みたいに無性に可愛がりたいんだよ。だから好き放題構われて、遠慮無くプレゼントを受け取ってくれたら嬉しいな』って言ってたでしょう？」
「あ、ああ、言ったね。確かに」
過去の自分の発言を振り返り、浩一は清人から冷たい視線が全身

に突き刺さるのを感じながら、密かに冷や汗を流した。

「聡さんも一人っ子だから、私の事妹みたいに可愛がりたいんですよ。特にこのポニーテールがお気に入りで、良く触ってますし」

「触っ……」

「……」

（清香ちゃん！　お願いだから、これ以上清人を刺激する様な発言はっ！！）

（親はともかく子供まで邪険にするのは気が引けたから、こいつらが清香に纏わり付くのを半ば黙認してたが……、間違いだったか。しかしあいつは俺の知らない所で、清香に何をしてやがるんだ！？）

怒りのあまり無表情の清人を見て、真っ青になっている浩一に気付いた清香が、心配そうに声をかけた。

「どうかしたの？　浩一さん。何だか顔色が悪いような……」

「い、いや。大した事は無いから気にしないで。それで、どうして彼は清香ちゃんの所の学祭にわざわざ出向く事に？　出身大学でもないのに」

何とかその場を取り繕った浩一に、清香はそれに至った経過を話し出した。

「正式に私が所属してるわけじゃ無いんですけど、友達関係で時々お手伝いしてるボランティアサークルが院内学級の慰問をしてるんです。家庭教師みたいに勉強を教えたり、子ども達の遊び相手になったりとか」

「ああ、清香ちゃんの大学は医学部付属の病院があったね。そこでの活動？」

「主にそうです。それで学祭でその諸々の活動内容のポスター発表と、その院内学級の備品購入や活動費捻出の為のチャリティーオークションをする事になっていて、それに関わってる話をしたら聡さんが興味を持って」

そこで唐突に清人が皮肉混じりの口調で口を挟んだ。

「へぇ、一介のサラリーマンの角谷さんが、どうしてそんな事に興味を持つんだろうね？」

（どうせ全然興味なんて無いくせに、口からでまかせを言って清香を丸め込んだんだろうが！）

（うわっ、清人の奴目が笑ってない！　本気で怒ってる証拠だ。清香ちゃんは全然気付いて無いけど……）

そんな男達の心境など全く理解できないまま、清香は話を続けた。

「それがね？　聡さんのお母さんってある民間団体の設立者の1人で、良く小児病棟の慰問に行ったり、小さな子供が長期入院してる親に対して、病院近くの宿泊施設や賃貸物件の費用を助成したりする活動をしてるんですって」

「……そうなんだ。それは偶然だね」

辛うじて声を絞り出した浩一に、清香は大きく頷いた。

「私も話を聞いてそういう活動もあるんだって初めて知ったの。そうよね、難病の子供とかだと全国各地から設備の整った大病院に集まるし、そうしたら小さな子供だけ1人で送り出すのは可哀想だから、親が付いてくるのが人情ってもので。だけど治療費に加えて、親の経済的精神的負担は相当だと思うし。やっぱり学生とは視点が違うなあって思って」

（小児病棟の慰問だと？　あの偽善者が、どのツラ下げてそんな事を！？）

如何にも感心した様に呟く清香の横で、清人はカップを砕かんばかりに両手で握り締めていた。

「それでお母さんがそういう活動をしてる事を知ってたから、私の話に聡さんが興味を持ったらしくて『できれば案内して貰えないかな？』って言われたから快諾したの。別に悪くは無いでしょう？

……って、本当にどうしたの？　何だか浩一さんもお兄ちゃんも顔色が悪いけど」

ここで漸く清香は怒りのあまり血色を無くしている清人と、その清人を見て生きた心地がしていない浩一の異常に気がついて声をかけた。しかし浩一が引き攣った笑いを浮かべながら、何とか誤魔化そうとする。

「いや、何でもないよ。ちょっと仕事が忙しくて疲れたかな？」

「本当に大丈夫？そうは見えないけど。……う～ん、ちょっと待っててね」

何かを思いついたらしい清香は、力無く笑ってみせる浩一に断りを入れて立ち上がり、真っすぐキッチンの方へと向かって行った。そこから扉を開けたり何かを置く様な気配が微かに伝わる中、浩一が正面の清人に目を向けて、思わずうんざりとした声を漏らす。

「清人……、清香ちゃんが居なくなった途端、人相悪くなってるぞ。気持ちは分かるが」

「それなら、俺がこれからする事の見当もつくよな？」

「正直、あまり考えたくないんだが」

「お前に……、もそうだが、柏木産業に少し無茶して貰うぞ。アポを取って、今度社長にも頭を下げに行く」

地を這う様な声で発せられた容赦の欠片も無い台詞に、思わず浩一は泣きたくなった。

「……せめて全面戦争は回避してくれ」

「それはあいつの心掛け次第だ」

それを聞いて浩一ががくりと項垂れた所で、清香が嬉しそうにリビングに戻って来て2人に告げた。

「良かった～、今確認してみたら材料が全部揃ってたの。これから真澄さん直伝、特製スタミナドリンクを作るから2人とも待っててね？」

その台詞に瞬時に顔色を変え、背中を向けた清香に慌てて声をかける2人。
「あのっ！　清香ちゃん!?　もう夜も遅いし構わないで良いから」
「ちょっと待て、清香。2人ともって、俺も飲むのか!?」
「もう材料は揃えたし、あとはミキサーにかけるだけだから遠慮しないで浩一さん。お兄ちゃん、この前急に体調崩したくせに何言ってるの。この際浩一さんにお付き合いしなさい！」
そう言って再び清香が壁の向こうに姿を消すと同時に、浩一は無言で立ち上がった。しかし清人がすかさずその腕を捕らえ、低い声で囁く。

「……どこに行く気だ？　浩一。折り入っての相談とやらがまだだろう」
「いや、今夜はもう良いから。それは日を改めて電話ででも」
遠くからウィーンという振動音が微かに伝わる中、一層顔色を悪くした男2人の、些かレベルの低い攻防が小声で続いた。

「お前がここで帰ったら、俺が2人分飲まされる羽目になるだろうが。　俺を殺す気か？」
「お前だったら清香ちゃんを何とでも言いくるめて、飲まない様に持っていかせられるだろ？」
「清香が俺の為に作った物を、口にしないで捨てられるか！　そんな事をする位なら死んだ方がマシだ」
「泣かせる兄妹愛だな。俺に構わず潔くそれに殉じろ。だから頼むから俺を巻き込むな」
「お前は家で耐性ができてるだろう、お前こそ潔く俺に付き合え！」
「清香ちゃんが言う代物なんて、家で口にした事は無い！　第一“姉さん直伝”ってだけでもう、俺的にはアウトなんだ！」
「2人とも。出来たわよ？　さあ、どうぞ？」
そこで満面の笑みで現れた清香が携えて来た物を見て、清人と浩

一は何とも言えない顔で黙り込んだ。その反応を見ながら清香がトレーの上の大きめのグラスをテーブルに二つ置き、苦笑交じりに説明する。

「2人とも……、見た目で判断しないでよ。確かにほうれん草とかピーマンとか紫キャベツとか入っているからこんな色だけど、他にも色々入っているし見た目ほど味は酷くないのよ？　私、風邪気味の時に飲んでみたら、次の日はすっかり回復してたし。騙されたと思って飲んでみて？」

（（いや、“騙されたと思って”じゃなくて、実際騙されてると思う））

清人と浩一そうは思ったものの、にこにこと促す清香に対しそれを口にできなかった。

更に大抵の物を“美味しい”という部類に括れる清香の幅広い味覚であれば、“見た目ほど酷くない”と評する味がどんなものかは想像もできなかったのだが、基本的に清香に甘い浩一と甘過ぎる清人はそれを突っぱねる事ができず、覚悟を決めて濁った濃緑色の液体の入ったグラスにゆっくりと手を伸ばしたのだった。

第１４話　過去の残像

「母さん、少し話があるんだけど良い？」
消灯時間ギリギリに病室に現れた息子が、神妙な顔をして自分にお伺いを立ててきた為、ベッドの上で本を読んでいた由紀子は、本を閉じながら優しく微笑んだ。
「勿論構わないわよ、聡。どうかしたの？」
手振りで傍らの椅子を勧めると、聡がおとなしくそれに座ってから、どこか言い辛そうに口を開く。

「……一応、事前に母さんには話しておこうと思って」
「あら、何を？」
不思議そうに問いかけると、聡はまだ少し迷う素振りを見せたものの、意を決した様に口を開いた。
「その……、この前も謝った事だけど……。母さんが兄さんに会いたがってると思ってたから、俺は兄さんに母さんに会って貰おうとしてたけど……」
「聡、だからそれは」
「それは、現時点ではお互いの本意では無い事が良く分かったから、この件については潔く諦めようかと思ってる」
「……ええ、そうね。そうして頂戴」

窘めようとしたものの聡にはっきりと宣言され、由紀子は俯き加減で微妙な表情を見せた。しかし続く聡の台詞で、弾かれた様に顔を上げる。
「だけどそれとは別に、清香さんとはこれからも会うから。早速次の約束もしたし」
「聡！？」
驚いて聡を見やった由紀子と、黙り込んだ聡の視線が絡まる。

互いに視線を逸らさないまま十数秒が経過し、どうやら息子が本気らしいと悟った由紀子は、聡の顔を眺めながら穏やかに問い掛けた。

「それはどうしてか、聞いても良いかしら?」

しかしその問いに、聡は幾分困った様に曖昧に笑いながら答えた。

「さあ……、正直に言うと、まだ自分でも良く分からないかな」

「あら、そうなの?」

「だけどそのせいで、これから母さんに嫌な思いをさせてしまうかもしれないから、先に謝っておこうと思って」

何かを吹っ切ったらしく悪びれずに言ってのける聡に、今度は由紀子が小さく笑う。

「馬鹿ね……、私なんかに詫びる必要は無いわ。清香さんと今後も関わっていくつもりなら、私の事で嫌な思いをするのはあなたの方よ?」

「その事なんだけど、今日はその理由を聞かせて貰おうと思って。それは単に佐竹さんと離婚後に、兄さんと会ってないだけじゃ無いよね?」

いきなり真顔で切り込んできた聡に対し、由紀子も表情を消して無言で見つめ合った。そして小さく溜め息を漏らす。

「……分かったわ。前々からあなたには一度ちゃんと話すべきだと思っていたし、良い機会かも」

そう言ってから、由紀子は重い口を開いた。

「私が清吾さんとの結婚を親に反対されて、家を出た経緯は知っているかしら?」

「ああ、五年前に父さんから兄さんの話を聞いた時、簡単な流れだけは。二年強で小笠原に戻った事も。どうして佐竹さんと離婚したのか、兄さんを手放したのか聞かせて欲しい」

「手放したんじゃないわ。置き去りにしたの」
「え？」
その言葉の不穏な響きに反射的に聡がたじろいだが、由紀子はどこか懐かしむ様に話し始めた。

「清吾さんと結婚した事については、私、後悔はしてないわ。確かに生活は大変だったけど、最初はそんなに苦痛に感じて無かったし。好きな相手と一緒だったし、結婚してすぐに清人を妊娠して、あまり細かい事に構っていられないって言うのが正直なところだったかもしれないけど」
「それで？」
そこで一旦話を区切った由紀子を、聡は慎重に促した。それを受けて由紀子が淡々と話を続ける。
「清人を産んでから、何か少しずつ歯車が狂っていったみたいで。何もかもが嫌になってきたの。後から育児ノイローゼだって言われたけど、その頃はそんな意識全然無かったわ」
「母さん、それは…。どういう状況だったか俺には正確には分からないけど、仕方なかったんじゃない？」
一応庇う様な発言をした息子に、由紀子は軽く首を振って否定した。

「そんな事は無いわ。私がさっさと変なプライドを捨てていれば良かったのよ。家を飛び出した手前何も出来ないなんて思われるのが嫌で、所詮お嬢様のお遊びだなんて陰で馬鹿にされてる様な気がして、親切にしてくれた周囲の人に素直に頼れなかったから。何でも1人で完璧にやろうとムキになって、段々全ての事が苦痛になっていった……」
当時の事を思い出しているらしい由紀子が無意識に布団をきつく握り締めたのを見ながら、聡は黙って話の続きに耳を傾けた。
「慣れない家事で神経をすり減らすのも、少ないお金で家計の遣り

繰りするのも、手のかかる清人の世話も。何よりもそれ以上に、私のせいで必要以上に負担がかかっている筈の、清吾さんに対する負い目もあって！」

「母さん」

段々激しい口調になってきた由紀子を抑える様に聡が口を挟むと、由紀子は聡に向かって頷きながら、自分自身を落ち着かせる様に呟いた。

「ええ、良く分かっているわ聡。今となっては言い訳に過ぎないのは。同じ様な環境で育った香澄さんはちゃんと家計を切り盛りして、立派に子育てもしてたもの。単に私は清吾さんと一緒に暮らしていけるだけの覚悟も力量も無い、父が言う通りの馬鹿で無分別の女だったと言うだけだわ」

「そこまで自分を卑下しなくても良いんじゃない？」

流石に母親が気の毒になり、聡が宥める様に言葉を発したが、それを受けた由紀子は自虐的に笑った。

「私はそれだけの事をしたもの。発作的に清吾さんと暮らしていた部屋から飛び出した時、私が何をしたと思う？」

「ごめん、全然想像できないんだけど。何かあったの？」

全く予想がつかなかった聡が本気で困惑した声を出すと、由紀子は真顔になってとんでもない内容を口にした。

「一歳直前のやっとよちよち歩きしてた清人を、空の浴槽の中に入れて上から蓋をして出て行ったのよ。勿論その時清吾さんは仕事で居なかったわ」

「母さん！？　まさか本当に、兄さんにそんな事をしたのか？」

言われた内容に驚愕した聡は思わず椅子から立ち上がり、ベッドに両腕を付いて由紀子に詰め寄ったが、由紀子は固い表情のまま小さく頷いた。

「清人は最初何が起こったのか分からなかったみたいだけど、蓋を閉められた途端大泣きし始めて。でも浴室の外にはあまり響いてなかったわ。まともな判断力を無くしてた私は、そのまま周りの誰にも言わずに、小笠原に帰ったの」

あまりと言えばあまりの内容に、聡は思わず目眩を覚えた。そしてふらりと元の椅子に腰掛けてから、無意識に問い掛ける。

「……その後、どうなったの？」

「人伝に聞いた話では、団地の一階下に住んでいた岡田さんっていう方が『お風呂場の窓辺りから、子供の泣き声が微かだけどずっと続いてる。呼び鈴を鳴らしても中から応答が無いし、もしかしたら奥さんが倒れてるかもしれない』って管理人室に駆け込んだそうよ」

「普段から付き合いがあった人？」

「多少ね。それで管理人の方と岡田さんが合い鍵で部屋に入って、清人を発見したそうよ。私の姿は無いし、連絡を受けた清吾さんも居場所を知らなかったから、事件かと警察沙汰になりかけたらしいわ。その頃実家に戻っていた私は、訳の分からない事をわめき散らして父に精神科に強制入院させられてたから、詳しい事は知らないの。その間に協議離婚の手続きも勝手に進められていたし」

「じいさんがそんな事してたのか！？」

先程の由紀子の衝撃告白に驚愕した聡だが、血の繋がった祖父の行為にも愕然とした。しかしそんな聡の反応に、由紀子は悲しそうに首を振る。

「一方的に父を責めないで。一番悪いのはこの私なんだから。事実、父に『この離婚届にサインしろ』と目の前に持って来られるまで、1ヶ月の間病室で自分だけの世界に浸っていて、清吾さんや清人の事をろくに思い出しもしなかったんだから。……本当に、最低の妻で母親だわ」

どこか遠くを見ながらうっすらと笑って見せた由紀子に、聡は慎重に問い掛けた。

「それで、大人しくサインして別れたの？」
それに対する由紀子の反応は、聡の予想を裏切った。
「いいえ、私別れたくは無かったの。逆にはっきりと自覚したわ。もう一度清吾さんと清人とやり直したいんだって。それでこっそり病院を抜け出したの」
「そんな事、良く出来たね？　あのじいさんの事だから、付き添いって名目の見張りとか張り付けそうだけど」
本気で驚いたらしい聡に、由紀子は苦笑いで応じた。

「詳細は省くけど、家の使用人で味方してくれる人が居てね、服とかお金とか調達して貰ったわ。それで暮らしていた団地に、1ヶ月ぶりに戻ったの」
「そうだったんだ……」
「それで、そこに着くまでに決心してたのよ。清吾さんを怒らせたかもしれないけど、本気で謝ってやり直そうって」
「それで謝ったの？」
その何気ない聡の問いに、由紀子はピタリと口を閉ざした。

「母さん？」
流石に不審に思った聡が再度問い掛けると、由紀子が徐に口を開く。
「いいえ。……結局、清吾さんとは、私が家を飛び出した朝に玄関から見送って以来、会ってないわ」
「え？　どうしてそうなるんだ？」
予想外の話の流れに聡が軽く目を見開くと、由紀子が静かに語り出した。

「団地の入り口に公園があって、そこで岡田さんが清人を遊ばせてくれてたの。それを家に向かう途中で通りかかった私が認めたと同時に、私と目が合った岡田さんが清人を抱えてやって来て『佐竹さ

ん、心配してたのよ？　ご主人から外出先で倒れてそのまま病気療養中って聞いてたけど元気になったのね。良かったわ』って笑顔で挨拶してくれて。清吾さんが、私が戻ってきた時に気まずい思いをしない様に、私が家を飛び出した事や父と揉めている事を、周囲に誤魔化してくれてたのよ」

「そうなんだ。佐竹さんって、優しい人だったんだね。でも、それならどうして会ってないだなんて……」

先程聞いた様な騒ぎになった後では、さぞかし戻った時に気まずかったのではと、密かに母を気遣っていた聡は思わず本心から安堵したが、と同時に先程の由紀子の話の内容と食い違う事に違和感を覚えた。それを受けて由紀子が説明を続ける。

「岡田さんが『清人君は私達で面倒みてたけど、手がかからないとっても良い子だったわよ？　ほら、清人君、お母さんに抱っこして貰いなさい。久しぶりで嬉しいでしょう』って言いながら、私に清人を渡そうとしたの。私も清人を抱き上げようとして手を伸ばしたら……、思い切り指先を噛まれたわ」

「え？」

「まだ乳歯が生え揃っていないのに、前歯だけでね。目を閉じて、渾身の力を込めて歯を食いしばったのよ。凄かったわ。食いちぎられるかと思った」

「かあ、さん？」

そこで小さくクスクスと笑った由紀子を見て、聡は母が精神的にどこかおかしくなったのかと恐る恐る呼び掛けたが、次の瞬間由紀子は真顔に戻って続けた。

「思わず悲鳴を上げてしまったけど、見ていた岡田さんも真っ青になって『清人君、どうしたの！　お母さんでしょう！　口を開けなさい！』って慌てて片手で清人を抱き抱えながら、もう片方の手で清人の口をこじ開けようとして。だから岡田さんは清人の口元だけ

見てたから、見ていなかったわ」
「何を、見ていなかったの？」
唐突に主語を省いて話した母の顔を見て、聡は何となくそれを確認しない方が良い予感に駆られたが、そのままにしてもおけない為、敢えて続きを促した。
すると由紀子が決定的な一言を放つ。

「清人がゆっくり目を開けたと思ったら、私を睨み殺しそうな視線で見上げてきたの。私があの子にした事を、きっとしっかり理解してたのよ」
「ちょっと待って母さん！　兄さんは当時一歳前後だろう？　理解できないし覚えてるわけないだろう！」
再び腰を浮かし、殆ど悲鳴で訴えた聡を、由紀子は悲しそうに見やった。
「ちゃんと理解してたわよ。母親としての勘ね」
「そんな馬鹿な！？」
「それで《この子は私を憎んでるし絶対許さない》って思ったら、もう駄目だったの。清人の顔をとても正面から見られなくて、やっと清人が私の指に食いつくのを止めた瞬間に、振り返りもしないで実家に逃げ帰ったわ。そして離婚届にサインしたの。……それで全部お終い」
淡々の述べた由紀子に、聡は呆然となりつつも何とか声を絞り出した。

「だから佐竹さんと会わなかった？」
「ええ。手続き一切は、父が手配した弁護士が全てやってくれたらしいわ」
自分から視線を逸らしながら、どこか他人事の様に告げた母親に、聡は激しい怒りと憐れみを覚えたが、何も口にしなかった。
そのまま重苦しい沈黙が少し続いてから、由紀子が再び静かに語

りかける。

「未練がましいって笑われるかと思うけど、その後も定期的に2人の様子を興信所で調べて貰ってたの。ひょっとしたら清人が私を必要としてくれる時がくるんじゃないかって」

「未練がましくなんかないさ。親としては当然の気持ちだと思うけど？」

「でも、あの子は本当に聞き分けが良くて、手のかからない子に育ったみたい。親子2人で支障なく、仲良く暮らしてたわ。きっと清人は自分が父親の手に余る子供だと、私が戻ってくるかもしれないから、それが嫌で物分かりの良い子供を演じてたのよ」

「それは考え過ぎだって！　単に兄さんはそういう性格の子供だったってだけの話だろ？」

どんどん後ろ向きな考えになっていく母親の話を、何とか打ち消そうと試みた聡だったが、由紀子は泣き笑いに近い表情で告げた。

「清吾さんが香澄さんと再婚してからは流石に調査するのは止めて貰ったんだけど、いつかはちゃんと2人の顔を正面から見て、謝ろうと思ってたの。本当にそう思ってたのに私が意気地が無さ過ぎて、とうとう間に合わなかったわ。あんなに早く亡くなってしまうなんて、思って無かったのよ……。もう、本当にどうしようもない馬鹿なんだから」

自分に対する悪態を吐いた由紀子の姿を、聡はただ黙って見守った。

「清吾さん達が事故死した時死亡記事を新聞で見つけて、どうしても行かないといけないと思って、昭さんに断りを入れて通夜に出向こうと思ったら、一緒に行ってくれる事になって」

「え？　父さんが？　本当に一緒に行ったの？」

意外すぎる話に思わず話の腰を折ってしまった聡だったが、由紀子は気を悪くした風でもなくそのまま続けた。

「ええ。そうしたら通夜の会場になっていた集会所に入ろうとした途端、私の姿を目ざとく見つけた清人に、昭さん共々腕を捕まれて凄い力で引きずり出されて。その時一瞬だけ、清香さんらしい女の子を見かけたわ」

「……そうだったんだ」

数日前の気になった言葉の意味が分かり、思わず納得した聡に、由紀子はあっさりと言ってのけた。

「その時、人気の無い所まで連れて行かれて、清人に『今更何の用だ？　自分を追って来ない様に俺を閉じ込めてトンズラしやがった人間が、今度は邪魔な人間が居なくなったからと嬉々としてちょっかい出しに来たってのか？　どこまでも自分本位の女だな！』って怒鳴られて殴られたの。だからやっぱりこの子は、私のした事を分かってて、今でも恨んでるんだなって」

「ちょっと待って！　殴られたって、一緒に行った筈の父さんは何してたんだ!?」

聞き咎めて思わず憤慨して詰め寄った聡に、由紀子は落ち着かせる様に言い聞かせた。

「ちゃんと二発目は止めて、その場を何とか取りなしてくれたから怒らないで？　それで清人の『この人を連れてさっさとお帰り下さい』で話は終わったし。本当に、少しでも力になってあげられたら、なんて、自分本位でおこがましい考えだったわ」

そう言ったきり俯いた母親に、聡はどういう言葉をかけたら良いかが分からず、再度病室内に沈黙が訪れた。

下手をすると永遠にこのままかもしれないと、埒もない事を聡が考えていると、思い切った様に由紀子が再び話し出す。

「それでね、聡。今日この話をしたのは、あなたにお願いしたい事があったからなの」

「何？　お願いって」
そこで由紀子は一瞬迷う様な素振りを見せてから、切々と語った。
「もし……、この先清人が本当に困る様な事があったら、一度だけで良いから無条件であの子の力になってあげてくれない？　あの子は絶対私には頼らないと思うし、なんとなく私が生きているうちは、困った事態にもならない気がするから」
「母さん……、縁起でも無いんだけど」
「それに、私の存在は認めて貰えなくても構わないけど、あなた達はちゃんと血の繋がった兄弟だから仲良くして欲しいの。ううん、仲良くはしなくても良いから、せめてお互いに存在だけは認め合って欲しくて。これは私の我儘でしかないんだけど」
段々呟き声になっていく由紀子の台詞に、聡は力強く請け負った。
「母さん、分かったから心配しないで。そんな事態になったら、どれだけ邪険にされようが必ず兄さんの力になるから。約束する」
「ありがとう、聡」
そこでやっと微かに笑った由紀子の気持ちを幾らかでも楽にしようと、聡は些かわざとらしく明るく言ってみた。
「でも、あの人の事だから『お前なんかの手を借りる位なら、舌を噛み切って死んだ方がマシだ』とか言い放ちそうだな。やっぱり少しは心証を良くしておく必要があるか」
「苦労かけるわね、聡。清香さんには私と清人の関係は、無理に話さなくて構わないから」
「取り敢えずはね。だけどまずは目障りな馬の骨としてだけでも、兄さんに俺の存在を認めさせるから」
「聡……、それは心証を良くするのとは、真逆の様な気がするんだけど」
「そうかもしれない」
そんなやり取りをした親子は、ここで2人でクスクスと笑い出し

てしまい、先程までの深刻な空気は夜の闇の中に徐々に消え去っていった。

第１５話　どうしようもない男達

柏木産業社長である柏木雄一郎は控え目なノックの音に顔を上げ、隣室から現れた無機質な秘書の顔を見やった。
「社長、佐竹様がお見えです」
「通してくれ」
秘書が一礼して引っ込むと雄一郎は仕事を迷わず中断し、ゆっくりと椅子から立ち上がった。そうして机を回り込んで応接セットに近付いて行くと、今度は清人が姿を現す。
「失礼します」
礼儀正しく頭を下げて入室してきた清人は、細いストライプ入りの濃いグレーのスーツを纏い、普段とは違った雰囲気を醸し出していた。雄一郎が１人掛けの椅子に収まり、向かい側の長椅子を手振りで示すと、清人が大人しくそこに腰を下ろして再度軽く頭を下げる。
「柏木社長、本日は貴重なお時間を割いて頂き、ありがとうございます」
「堅苦しい話は抜きだ。時間を無駄にする気はないからさっさと用件を話したまえ」
雄一郎が如何にも経営者らしい物の言い方をすると、清人は心得た様に持参した鞄から薄い書類の束を取り出し、無言で相手に差し出した。対する雄一郎も無言で受け取り、それに目を走らせて怪訝な顔をする。
「これがどうかしたのか？」
「これを柏木で取って下さい」
「何？」
何か聞き間違ったかと清人の顔に視線を向けた雄一郎だったが、相手がすこぶる真剣なのを認めて一気に顔を強張らせた。

「君は、自分が言った事の意味が分かっているのか？」
「勿論です」
「無関係の一般人が何の気無しに言った言葉ならいざ知らず、君は我が社の外部取締役に名を連ねている人間だ。その責任と義務位、弁えていないのか？」
「それに伴う損失は全て私が補填します。必要なら、以前前払いして頂いた役員報酬も全額返却した上で取締役も辞任します」
少しも揺らぐ事なく言い切った清人と睨み合ってから、雄一郎は匙を投げた様にテーブル上に書類を投げ捨てソファーの背もたれに背中を預けた。

「小笠原、か。君の事だ。おそらくこの他にも手を打っているな？」
「ご明察です」
にこりともせず冷徹に言い切った清人に対し、雄一郎は再び身を乗り出しながら探る様な視線を向ける。
「なあ、清人君。どうして今頃になってそこまで目の敵にするんだね。今までは存在自体を抹消してきただろう？」
そこで清人は僅かに怪訝な表情を見せた。
「浩一から聞いていませんか？」
「何をだね？」
当惑した雄一郎から僅かに視線を逸らしつつ、清人は独り言の様に呟いた。
「最近……、無視できない程の馬鹿が居まして。目障りなんです」
「ふむ……」
雄一郎が顎を掴み、興味深そうに清人を眺めた所で、再びドアがノックされた。

「社長、柏木真澄課長がお見えになりました」
「通してくれ」

「社長！？」
今度はその顔にはっきりと驚愕の色を浮かべた清人に、雄一郎は満足そうな笑みを向ける。
「私は時間は有効に使う主義だ。君が私に会いに来るのは厄介な頼み事、かつ仕事関係でしか有り得ない。呼ぶ手間を省いただけだ」
清人が思わず絶句している間に、ノックの音と涼やかな女性の声が室内に響いた。
「社長、失礼します」
「ああ、柏木課長、そこに座ってくれ」
勤務中は役職での立場を貫いている父娘は型通りの挨拶を交わし、示された長椅子に既に清人が座っているのを見た真澄が片眉を僅かに上げたが、無言のままその隣に座った。

「それでご用件は？」
「君にこの仕事を取って貰いたい。万事上手くやってくれ」
雄一郎がテーブルの上を滑らせてきた書類を真澄が受け止め、軽く持ち上げて中身を確認し始める。しかしすぐに顔を上げ、先程の雄一郎と同様の反応を示した。
「社長？　この仕事は既に小笠原で取り組んでいる事例の様ですが？」
「だから君に“盗ってくれ”と言った」
「……」
微妙なニュアンスの違いを込め、雄一郎が意地悪く笑いつつ再度説明すると、言わんとする事を察した真澄が横で無言を貫いている清人に一瞬険しい視線を向けた。次いで雄一郎に向き直り、些かきつい口調で指摘する。
「社長。お言葉ですが、そんな事を強行した場合、下手をしたら同業者からの失笑を買うばかりか他社からの信頼も失いかねません。有形無形の損害も」

「だから“上手くやってくれ”と言った。金銭的な損失については柏木家で埋める」
「社長！」
流石に声を荒げた真澄に、雄一郎が冷たく言い捨てた。
「真澄。お前が承服できないなら、浩一にやらせるまでだ。こんな公私混同な事を他の社員に命じる訳にはいかんのでな」
それを聞いた真澄は歯軋りせんばかりの表情で父親と清人を交互に見た後、その書類を手に勢い良く立ち上がった。

「これは浩一向きではありません。分かりました、早速取り掛かります。年内中には目処をつけますので」
そう言って挨拶も無しにドアに向かって歩き出した真澄に、雄一郎はからかう様な声をかけた。
「ほう？　もう2ヶ月切っているが？　何もそこまで急がなくても良いと思うのが。どうかな？　佐竹君」
「いえ、俺は……」
いきなり話を振ってきた雄一郎に清人が口ごもると、真澄がドアを開けながら腹立たしげに告げる。
「こんな馬鹿馬鹿しい仕事、さっさとけりをつけて本来の業務に集中したいからです！　時間外勤務手当は割増で頂きますので。それでは失礼します！」
バタンと乱暴に閉められたドアを見やって、雄一郎は苦笑いしながら肩を竦めた。

「ははは、これは完璧に怒らせたな」
「……それではお仕事の邪魔をしては申し訳ありませんので、私も失礼させて頂きます」
些か気まずい思いをしながら清人も腰を上げると、雄一郎が上機嫌に声をかけてきた。
「なあ、清人君。昔の罪滅ぼしになるならこれ位の頼まれ事は容易

い事だが、変なプライドとこだわりは早く捨てた方が君の為だぞ？」
「……ご忠告、感謝します」
「それから、今からでも我が社に入る事は」
「お邪魔しました」
まるで聞く耳を持たず、清人はその場をあっさりと辞去した。
「やれやれ……、相変わらず頑固だな。そんな所も結構気に入っているんだが……」
そんな清人を見送った雄一郎は、ただ苦笑を深めるのみだった。

そんな不穏な動きが柏木産業内であったものの、表面的には何も変わらない日常が過ぎ、清香の大学の学際期間に突入した。
予定を摺り合わせ、2日目の午後に清香と待ち合わせた聡は、指定された中央棟一階の売店の前に着いて時間を確認する。
「充分余裕を持って来れたな」
腕時計を見ながら満足そうに呟き、聡は門を入ってからここに来るまでに貰ったパンフレットに目を走らせた。
勿論ここは聡の出身大学とは異なるが、やはりキャンパス内にはどことなく共通する空気があり、最近思い出しもしなかった今よりのびのびと過ごしていた学生時代の懐かしい記憶を呼び起こされる。
（結構強引に来てしまったけど、良かったな）とか（今度母校にも顔を出してみようか）などと考えているうちに、パタパタと走り寄ってくる気配を察した。

「聡さん！　お待たせしました！」
「いや、そんなに待って無いから。大丈夫だよ？」
聡が清香に笑顔を向けてからチラリと腕時計を見ると、気がつかないうちに待ち合わせ時間を何分か過ぎていた。
「ごめんなさい、こんなゴチャゴチャした所で待ち合わせなんて。しかも遅れてしまって」

「構わないよ。友達と展示を回ったり、館内案内の係もやって忙しかったんだろう？　俺の事はともかく、ちゃんとお昼は食べられた？」
「はい、隙を見て」
清香の慌てぶりを見て思わず心配になって尋ねたが、清香が笑って答えた為、聡も安堵した。

「それなら良かった。清香さんはちょっと痩せてる感じだから、もう少し太っても良いと思うよ？」
「う……、お兄ちゃんと同じ事を。お子様体型って事ですか？」
「そうは言ってないよ」
途端に拗ねた様に尋ねてくる清香に笑いを誘われつつ、聡は彼女を宥めた。そして話題を逸らそうと目の前でパンフレットを広げる。
「さっき貰ったのを見てたんだけど、結構色々な展示や発表があるんだね」
「聡さん、例のサークルの展示の他に、どこか見たい所は有りますか？　一緒に回りますよ？」
「そうだな……、それじゃあ、ここここらへん、とか……」
２人でパンフレットを覗き込んで相談していると、いきなり清香の背後から誰かが腕を回して抱き付いてきた。

「さ～や～かちゃん！」
「きゃあぁっ！」
「おい！　何だお前はっ！」
「こらこら、乱暴は止めようか」
驚いた清香は悲鳴を上げ、聡が慌ててその男を清香から引き剥がす。しかし相手はのんびりと言い返し、その声を聞いた清香は振り向いて戸惑いの声を上げた。
「れ、玲二さん？」
「今日は、清香ちゃん。びっくりした？」

「びっくりしましたよ、もう！」
悪びれなく言ってのける玲二に、聡が胡散臭そうな視線を投げる。
「清香さんの知り合い？」
それを受けて、清香は聡に向き直った。

「ええ。紹介しますね、柏木玲二さんです。真澄さんと浩一さんを試写会の時に紹介しましたけど、あの二人の弟さんで、私の」
「専属美容師だよ。君がやたら気に入ってるらしいこの髪は、俺の作品」
「え？」
清香の台詞を途中でもぎ取り、玲二は清香の肩を抱き寄せつつ、もう片方の手を清香のポニーテールに伸ばし、それを手で梳きながら意味ありげに小さく笑った。それを見た聡が僅かに顔を引き攣らせる。

「清香ちゃんから聞いてる。角谷聡君、だよね。宜しく。しっかし本当は野郎にベタベタ触らせる為に、清香ちゃんに秘伝のヘアケア法を伝授したんじゃ無いのにな。清香ちゃん、お兄さんは本当に悲しいよ」
「もう、玲二さんったら、こんな所で泣き真似なんか止して下さいよ」
「……」
わざとらしく清香に抱き付き泣き真似をする玲二に、笑いながらそれを諫める清香。そのやり取りを無表情で眺める聡。そしてその聡の顔をチラリと見た玲二は、さらりと言ってのけた。
「本当に泣きたい気分なんだよ？　こっちの優男なんかほっといて、今日は俺に付き合ってくれない？」
「なっ！？」
ここで聡が声を荒げかけたが、流石に清香が窘めた。

「玲二さん悪ふざけは止して。でないと怒るわよ？」
「はは、分かった。清香ちゃんに本気で嫌われたくないから、今日はここら辺にしておくよ。それじゃあ聡君、またね？」
「……はあ」
一方的にまくし立てた玲二が機嫌良く立ち去って行くのを見送ってから、聡は困惑した顔を清香に向けた。

「彼は一体、何をしに来たのか分かる？」
「……さあ、ナンパでしょうか？」
キョトンと首を傾げた清香に、聡が更に尋ねる。
「清香さんを？」
「いえ、他の女の人を、ですけど？」
「……取り敢えず移動しようか」
「そうですね」
（何か、噛み合っていない気がする……）
密かにそんな事を思ったものの、聡は口に出さずに清香と連れ立ってその場を後にした。

それから清香と聡は研究棟に移動し、そこで研究されている新素材のポリマーや合金の展示、実験等を興味深げに眺めていた。
「はあ……、門外漢ですけど、やっぱり画期的な素材の開発過程を見ると、そこに至るまでが凄いのが分かります」
「うん、もう執念だよね。やっぱり日本は技術立国なんだから、こういう最先端の技術をどんどん官民協力して開発活用していかないと」
「やあ、清香ちゃん。こんにちは」
「え？　友之さん、どうしてここに？」
突然背中から肩を叩かれた清香は話を止めて振り向き、聡もそれに倣った。すると聡に向かって一瞬薄笑いを浮かべた３０前後の男が、清香に対して一転爽やかな笑顔を向ける。

「どうしてって…、酷いな。学部は違うけど、俺がここの工学部卒だって忘れた？」
「あ、そうでした！　すみません先輩」
「許せないな。どう落とし前つけて貰おうか」
「お手柔らかにお願いします」
くすくすと仲良さ気に笑っている2人に、聡の今胸中がざわついたが、それを知ってか知らずか友之が清香を促した。

「清香ちゃん。見かけない男を連れてるね。紹介してくれないの？」
「あ、ごめんなさい。聡さん、こちらは松原工業にお勤めの松原友之さんです。玲二さん達と同じく昔からの知り合いなんです。友之さん、こちらは小笠原物産にお勤めの、角谷聡さんです」
「やあ、初めまして、角谷さん」
「こちらこそ」
（松原……って言う事は、この人も柏木さんや倉田さんと同じく、彼女の隠れ従兄弟の1人……。どう考えても、ちょっかいを出しに来たとしか思えない）
笑顔で挨拶を交わしながら様子を窺う聡の前で、友之がにこやかに話し出した。

「そう言えば清香ちゃん。あの後大丈夫だった？」
「お兄ちゃんには盛大に雷を落とされました」
「いや、本当に悪かった。清人さんがザルだから、清香ちゃんも少しはいける口なのかと」
「お兄ちゃんレベルで判断しないで……」
がっくりと項垂れた清香を見て、友之が苦笑いしつつ額に落ちていた前髪をかき上げる。そこで会話の中身に不穏な物を感じた聡は、思わず問いかけた。

「清香さん。松原さんと最近お酒でも飲んだの？」
「はい。プールバーに連れて行って貰った時、ビリヤードを教えて貰う合間に少し。でも友之さんったら結構強いカクテルを勧めるんだもの。こっちは初心者だから勧められるまま飲んだのに！」
　些か恨みがましい目で見上げてくる清香に、友之は苦笑を深める。
「本当にごめん。あれ位で立てなくなる位酔っぱらうなんて、とても想像できなくて。ちゃんとお姫様抱っこして送り届けたから勘弁して欲しいな。今度改めてお詫びするし」
「それで余計にお兄ちゃんが酷かったんですよ。『酔っぱらって帰って来るのはともかく、抱かれて帰って来るとは何事だ！』って。……次の日たっぷり一時間、床の上に正座させられてお説教されました」
「実は……、泥酔した状態で帰したら清人さんに説教されるのが目に見えてたから、近くにホテルでも取って清香ちゃんの酔いが醒めるまで朝までででも面倒みようかなと一瞬思ったんだけど」
「そんな事したら友之さん、お兄ちゃんに殺されますよ？」
「ああ、そう思って踏みとどまった。俺はまだまだこの世に未練があるからね」
　そう言って2人で「あははは」と能天気に笑っているのを見て、聡は激しく脱力した。

（清香さん、男と2人で飲みに行って、それは危機感無さ過ぎだろう！　それにこの男、本当は兄さんの事が無ければ、彼女をどうにかしてたんじゃ……）
　1人密かに怒りを覚えていた聡を満足そうに見やった友彦は、ここで清香に断りを入れた。
「じゃあ俺はここで。恩師の所に顔を出すついでに声をかけたんでね」
「はい、じゃあまた誘って下さいね？」
「勿論だよ。角谷さんも失礼します」

「はい」
そうして表面的には友好的な笑みを振りまきつつ、友之はその場を立ち去って行った。

「……清香さん。お酒を飲む時は、相手を選んだ方が良いね」
「まだお兄ちゃんと友之さんとしか、飲んだ事ありませんし、大丈夫ですよ？」
（だから！　それが問題だから！）
その聡の心中の叫びは、声にされる事は無かったのだった。

「あ、清香ちゃん偶然だね。そっちの彼もどうも。角谷さん、だったよね？」
２人で移動中、唐突に通路の向こう側から現れた正彦を見かけた清香は笑顔を向け、聡は顔を引き攣らせながらも挨拶を返した。
「今日は、正彦さん」
「またお会いしましたね」
（また出たか……）
そのまま世間話に突入するのか、はたまた自分への嫌がらせトークが始まるのかと心の中で身がまえた聡だったが予想外の声が耳に飛び込んで来た。

「正彦、知り合いなの？」
そこで大柄な正彦の後ろに隠れる様にして歩いていた小柄な女性が、彼の背後からひょっこりと顔を出し、今までその存在に気がつかなかった２人は僅かに驚いた。そんな２人を指差しながら、正彦が事も無げに語って見せる。
「うん、ああ、知り合いの子とその彼氏だよ」
「あああのっ！　正彦さん？　そういう言い方は語弊があって！」
慌てまくる清香には構わず、正彦は大人と子供程の体格差がある女性を促してあっさり２人に背を向けた。

「それじゃあ清香ちゃん、俺達デートの最中だからまたね」
「「え？」」
思わず呆然とその背中を見送りながら、小さく呟く清香と聡。
「えっと……、デートって、この前会った女性とは別人……」
「あれから三週間経って無いんだけど……」
そこで思わず2人は、何とも言い難い顔を見合わせた。
「見なかった事にしようか？」
「そうですね」
（本当に、何しに来たんだあの人は？）
しみじみとそんな事を考え、精神的疲労が徐々に蓄積して行く聡だった。

それから写真同好会の作品展示会場に足を向けた2人は、飾られているパネルの一つ一つを眺めながら、思うまま感想を述べ合っていた。そして半分ほどを見終わった所で、清香が聡の顔を見ながら、しみじみと述べる。
「でも意外ですね。聡さんがカメラに興味を持ってるなんて」
「そう？　俺ってどんなイメージなの？」
「なんとなくアウトドア系な感じが。勿論山男系とは違いますけど」
真顔で答える清香に、聡は思わず噴き出しかけた。
「写真撮影も屋外と言えば屋外だよ？」
「それもそうですよね。でもそうすると私の知り合いに、聡さんと気が合いそうな人が1人」
「あれ、清香ちゃんじゃない？」
何かを言いかけた清香の声を遮って、また背後から男の声がかけられた。聡と共に振り返った清香がそこに佇んでいる人物を見て、目を輝かせる。
「あ、明良さん！　噂をすれば影だわ。聡さん、こちらは倉田明良

さん。フリーのカメラマンなの。明良さん、こちらは角谷聡さんです」
「ああ、兄さんから聞いてるよ。宜しく」
如才なく右手を差し出してきた健康的に日焼けした男に、聡も内心はどうあれ手を差し出して挨拶を返す。
「初めまして、角谷です。倉田さん……、と言う事は正彦さんの」
「弟でね。清香ちゃん、例の奴、良い感じに仕上がったよ？」
「え？　本当ですか？」
途端に何かの話に食い付いた清香に、聡は（何事？）と怪訝な表情を浮かべた。

「うん、俺としても自信作。急遽今度の個展に出す事にしたから」
「えぇぇっ！？　良いんですか？　あれで」
「勿論。それで本人の許可を取ろうと思っててね。ここで会えて良かったな。どう？」
「はい、構いませんよ？　でも周りの作品の質も、一緒に下げないか心配ですけど」
「自信持って。大丈夫だって」
すっかり2人の世界に入っているのを聡は無言で見やってから、控え目に清香に声をかけてみた。

「あの、清香さん、倉田さんの作品のモデルになったとか？」
「はい、実は」
「あ、悪いけどそれは俺と清香ちゃんの秘密って事に。だって公にする前段階だしね」
清香が何かを言いかけたのを遮り、明良がわざとらしく声を潜める。それに清香が真顔で頷き、聡に笑って手を振った。
「あ、えっと……、そうですね。聡さん、大したことじゃありませんから、気にしないで下さいね？」
「そうそう、俺達2人だけの話だから」

そうして五分程顔を突き合わせてボソボソ話し込んでいた2人を見て、聡の不機嫌度は更に増していくのだった。

それから明良と別れた2人は、本来の目的であった場所に辿りついた。

「聡さん、こちらの教室がサークルの発表の場所で」

「あら、清香ちゃんじゃない、久しぶり！」

その教室に入ろうとした瞬間、入口付近でいきなり声をかけられた2人は面食らった。しかしすぐに相手を認めた清香が、笑顔でその女性と手を取り合う。

「奈津美さん！　どうしたんですか？　こんな所で」

「うふふ、子供が産まれたらそうそう気軽に出歩けないもの。最近休みの日は、専ら修さんとデートなの」

そこで教室の中から二十代後半の、髪を短く切り揃えた男が現れ、人の良さそうな笑顔を見せた。

「今日は清香ちゃん。俺達どちらも大学には行ってないから、前々からどんな感じなのか興味があったんだよ。ここからなら家から地下鉄一本で来れるしね」

それを聞いて清香は納得して頷き、続いて聡を紹介した。

「そうだったんですか。聡さん、こちらは倉田修さんと奈津美さん。夫婦で小料理屋を経営してるの」

「初めまして。角谷聡です」

すると奈津美の目がキラキラと輝いた。

「あら、あなたが正彦さん達が噂してた、“あの”聡さんね？　思ったより格好良くて目の保養だわ～」

「は、はは……、一体どんな噂をされていたんでしょうか？」

思わず顔を引き攣らせた聡だが、それを無視した夫婦の会話が始まった。

「おいおい、亭主の前で言う台詞か？」
「あら修さんは勿論別格よ。比較にならないわ」
「まあそれはそうだろうな」
（何だ？　今回はひたすら惚気られるだけか？）
そんな事を考えてうんざりしかけたところで、奈津美が清香の手を引いて中へと促す。
「清香ちゃん、この前はお手伝いに来てくれてありがとう。助かったわ～」
「大したことありませんよ。それより悪阻はもう大丈夫ですか？」
「もう五ヶ月だし平気平気」
「まだお腹は目立ってませんね」
「そりゃあね。でも以前よりウエスト回りは大きい物を着てるのよ」
「そうですか？　全然分からないな～」
女2人で和気あいあいと話し始めた為、半ば放置された聡は苦笑いしつつ室内へと入ったが、ここで修が並んで歩きながら気安げに声をかけてきた。

「流石に、女同士の会話に割り込もうとは思わないだろう」
「ええ、想定外でしたね。彼女が隠し玉でしたか？」
それほど気を悪くしたりもせず聡は笑顔で応じたが、ここで修は真顔でボソッと呟いた。
「……真打ちは最後に登場と、相場が決まってるが」
「何か言いましたか？」
「いや、何でも無い。気にしないでくれ」
「はあ」
「まあ色々大変だろうが頑張れ。不憫過ぎるから心の中では応援してやる」
「……それはどうも」
何故か不自然に視線を逸らした修を、聡は憮然とした顔で見やった。ここで室内の奥の方から聞き覚えのある声が響いてくる。

「あら角谷さん、いらっしゃい」
その声の方に向き直った聡は、瞬時に愛想笑いを顔に貼り付けた。
「やあ、緒方さん。どうも。ここは君が所属してるサークルなんだよね」
(兄さんと繋がってるのがはっきりしてる以上、油断は出来ないな)
そんな聡の心境とは裏腹に、朋美はニコニコと笑いかけた。

「はい、清香に色々協力して貰って助かりました。……聡さんとのデートの時間を割かせちゃってごめんね?清香」
「なっ、ちょっと朋美!　いきなり変な事言わないで!」
「どこが変な事なのよ。……ところで聡さんは、清香がチャリティーオークションに出品した物を知ってます?」
「そう言えば…、清香さんからは頼まれて何かを作って出したとしか……。何を出したの?」
「いえ、あの……、たいした物じゃ……」
途端に口ごもって視線を彷徨わせた清香を、聡は不思議そうに眺めた。その聡に朋美が真剣な顔で訴える。

「清香は箱に詰めたプリザーブドフラワーのアレンジを作ってくれたんです。ケースのまま飾ってもとっても素敵なんですよ?」
「へえ、どんな物?」
「午前中はここに飾っておいたんですが、あと20分位でオークションが始めるので会場にもう運び込んでて。でも写真を撮ってあるので見て下さい」
「朋美、良いってば!」
「何言ってんのよ」
何やら女2人で揉めながら朋美が携帯を操作し、データフォルダ内の画像を表示させて聡に見せた。聡がそれを覗き込むと、長方形の枠の中に右下から左上に向かって流水の様に配置された青系の花

の両側に、それぞれ違った系統のグラデーションになっている花々が、バランス良く配置されている物を認めて表情を和らげる。

「素敵なインテリアだね、清香さん」

「でしょう！？　それなのにこの子ったら恥ずかしがって、『最低落札価格は１００円からで良いから』なんて言い出して」

「どうして？　もっと高く値が付くと思うよ？」

本気で驚いた聡が尋ねると、清香はボソボソと弁解した。

「だって……、朋美が『お祭り騒ぎがしたいだけなんだから、手作りでもご愛敬よ』って言うから安心して出したのに、他の品物がどこでもすぐ売れる様な、ゴージャスなものばっかりで……」

「確かに金が有り余ってる所からは良い物も出てたけど、手作りの物もあったでしょ？　それにあれ、どうみても力作じゃない。材料費だってかかってると思うし。その点では正直清香に悪かったって思ってる位なのに」

「それに……、ああいうのって好みがあるでしょう？　気に入らなければ見向きもされないし、売れ残ったら恥ずかしいもの」

「そんな事は無いったら！」

「そうだよ、清香さん。自信持って良いよ？　少なくとも俺は気に入ったし。母の退院祝いにしても良いかと」

「じゃあ角谷さん、清香の作った物を会場で競り落として頂けません？」

「「え？」」

唐突に言われた内容に清香と聡が揃って戸惑いの声を上げたが、朋美は当然の如く話を続けた。

「それなら一石二鳥じゃありません？　清香は売れ残らなくて安心するし、角谷さんはお母さんの退院祝いを首尾良く手に入れられますし。どうです？」

そう言って意見を求めて来た朋美に、聡は笑顔になって応じる。

「そうだね、そうしようか」
「あのっ、でも、聡さん！？」
慌てて何か言いかけた清香を、聡は笑って制した。
「別に支障は無いだろう？ちょうど良い物が見つかって嬉しいよ」
「そ、そうですか？　ありがとうございます」
「どういたしまして」
そんなやり取りをしてから聡は一通り朋美から活動内容の説明をして貰い、それからオークション会場になっている講堂へ清香と倉田夫妻と共に向かって行った。
一方でそれを見送った朋美は、携帯を取り出してどこかへと電話をかけ始める。そして大して待たされず応答があった。

『緒方さん、首尾は？』
「上々です。上手く誘導して、焚きつけておきましたよ？」
『御苦労様。あいつに清香の前で、赤っ恥かかせてやる』
そこで携帯越しに薄笑いの声が伝わり、朋美は僅かに眉を顰めた。
「……本っ当に容赦無いですね」
『清香にちょっかい出す男限定だ。バイト料は後で支払う』
「楽しみにしてま～す。それじゃあ」
最後は猫撫で声で告げて携帯を閉じた朋美は、バッグにそれをしまっていそいそとその場を後にした。
「さて、私も見に行かなくちゃ！」

その頃、講堂に入った清香達は、空いている席を探して周囲を見回していた。しかし前方で1人の人物が立ち上がって清香に手招きして来た為、それを認めた清香は満面の笑みでそこに走り寄り、修と奈津美は聡の顔色を窺いつつ苦笑いし、聡は心中で深い溜息を吐いた。

（そうだよな。最大の敵はラスボスだって、相場が決まってる……）

そんな聡の視線の先には彼が初めて直に顔を合わせる、自分の妹である清香を愛して止まない清人が立っていた。

第１６話　もうどうにも止まらない

正面のステージに向かって続く真ん中の通路を、笑顔の清人に向かって清香は足早に進み、聡はその後をゆっくりと歩きながら相手の様子を注意深く窺った。そして清人が立っている所まで来た清香は、兄を見ながら不思議そうに尋ねる。

「お兄ちゃん、どうしたの？　今日ここに来るなんて言って無かったじゃない？」

「ちょっと次回作の構想を練ってたら、急に大学構内の資料が欲しくなってね。学生時代を思い返しながら書いてみても良かったんだが、ここの学祭期間中だったし、気分転換がてら川島さんと来てみる事にしたんだよ」

つい、と視線を流した先に、ショートカットの女性が座っているのを認めた清香は、驚いて目を見張った。

「あ、本当だ。恭子さんまで」

「ふふ……、流石に驚いたみたいね、清香ちゃん」

「もう！　言ってくれれば色々案内したのに」

半ば呆れ半ば拗ねた口調で話しかける清香に追い付いた聡は、清香の見ている方を眺めて内心で首を捻った。

（誰だ？　この女性。特に興信所の報告書には載っていなかったが、兄さんの恋人か？）

そんな事を考えてから、その女性の座っている向こうの席に浩一が、更に前後の列に先程まで入れ替わり立ち替わりちょっかいを出してきた面々が、いつの間にかちゃっかりと腰を下ろしているのを認め、聡は確信した。

（今日、どうしてこの人達と遭遇してたのか、漸く分かった。俺達にちょっかいを出す為に現れたのかと思いきや、それは単なるついでで、実際は俺と兄さんが顔を合わせる所を見物に来たんだな！？）

（（（（（（こんな面白そうな物、見逃してたまるかよ！））））））
聡の視線を受けて一同がにやにやと笑う中、清香は笑顔で聡の方に僅かに体を向けた。

「お兄ちゃん、紹介するわね？　こちらが以前から話していた角谷聡さんで」
「あれ？　実はそれは仕事上の通称で、本名は小笠原って言ってなかったかな？」
聡を紹介しかけた清香だったが、笑顔の清人から突っ込まれ、思わず口ごもった。
「あ、え、えっと……」
（そう言えばお兄ちゃんには謝罪の電話があったことを伝えた時に、本名が小笠原さんだって教えてたっけ！　でもそれをすっかり忘れて皆には角谷さんって紹介しちゃったし、この場をどうすれば……）
（白々しい……。これは絶対、俺が本名を隠して清香さんに近付いた事に対する嫌がらせな……）
狼狽する清香と苛立たしさを押し隠す聡に対し、ここで能天気な声がかけられた。

「あれ？　小笠原って名前なの？　まあ俺はどっちでも良いけど」
「確か職場が小笠原物産だったか。偶然だね」
「へぇ、ラッキーじゃん。小笠原物産の小笠原って名乗れば、一発で名前を覚えて貰えるよな」
「それなのにわざわざ角谷って名乗ってるのか？　勿体ないな」
「それは別に本人の自由だろ？　部外者があれこれ言うなよ」
「まあ、とにかく、今はプライベートなんだし、小笠原で統一しても問題ないよね。どう？　聡君」
「……はい、俺は構いませんので」
口々にサラッと何でも無い事の様に語り合う面々に、清香は肩すかしをくらった思いだった。

（あ、あれ？　何か皆、軽くスルーしちゃってるんだけど。やっぱり皆大人だなあ……、些細な事に拘らないで物事を捉えられるんだ。変に気にした私が馬鹿みたい）

（揃いも揃ってこの連中……。絶対わざと嫌味言ってるだろ！……清香さんはそうは思っていないみたいだが）

そんな諸々の思いを綺麗に封じ込め、聡は笑顔で清人に向かって右手を差し出した。

「改めて名乗らせて頂きます。小笠原聡です、初めまして。先日は母の本にサインをして頂き、ありがとうございました。母も大変喜んでおりました、先生には改めてお礼申し上げます」

「佐竹清人です。あんな物で喜んで頂けたかどうかは分かりませんが、お気に召して頂けたら何よりです。それに加え、最近妹が色々お世話になっているようですね。こちらこそ宜しく。それに先生などと呼ばれると仰々しいので、本名の佐竹で構いませんよ？」

差し出された手を清人が握って、ギリギリと力任せに締め上げた。対する聡も負けじと握り返したが、双方顔は爽やかな紳士的笑顔のままである。終いには両者の手首の辺りが微かに震え、こめかみに青筋が浮かび上がっているのが見て取れたが、清香はにこにこと両者の顔の方だけを眺めていた為、そんな不穏な状況を察知できなかった。

聡にとっては不幸な事に、２人の身長差がこの状況に更に影を落とした。

聡が１８０ｃｍ、清人が１７５ｃｍである関係ではさほど違わないにしろ、どうしても聡の方が若干視線を見下ろす体勢になるため、必然的に清人の不興を買ってしまう結果となったのだ。

（初対面なのにふてぶてしい面しやがって！　しかも何だ、弟の分

際で兄を見下ろしやがるとは生意気な！！）
（何を考えているか何となく分かりますが……、好きでこの身長になったわけじゃありませんよ！　不可抗力です！！）
（（（（（普段は滅多に読ませないけど、理性吹っ飛ばしてると考えてる事が丸分かりで、面白いな～、この二人）））））
手を放しても笑顔を保ちつつ視線だけは険しい物を向けてくる清人から、聡はさり気なく視線を外しつつ控え目に清香に尋ねた。

「それで清香さん、そちらの方は……」
清人の向こう側に居る、小さな泣きぼくろが印象的な女性の素性を尋ねると、清香は笑顔のまま紹介してくる。
「川島恭子さんです。お兄ちゃんのアシスタントをしてくれてます」
「川島です。初めまして」
「……いえ、こちらこそ。小笠原です宜しく」
座ったまま軽く会釈して来た相手に、聡が何となく微妙な顔で挨拶を返すと、一見二十代後半に見える恭子は、何を思ったか悪戯っぽく問い返した。

「何だか小笠原さんは、今の説明に納得がいかない様な顔付きをされてますね。私の事、何だとお思いになりましたの？」
「あ、いえ……、一瞬、佐竹さんの恋人なのかと思いまして」
「「……」」
聡が思った事を正直に述べると、何故か清人と彼女の向こう側に座っている浩一は無言で眉を寄せ、恭子と清香は互いの顔を見合せてクスクスと笑い始めた。

「恭子さんは違いますよ。私達と一時期、一緒に暮らしてた事もありますけど」
「良く誤解されるんです。先生にはご迷惑をおかけしてるんですよ」
「そんな事無いわ恭子さん。恭子さん位の美女と噂が立つなら、お

兄ちゃんだって本望だし」
「あら、ありがとう、清香ちゃん」
それを聞いた聡は、益々混乱した。
（一緒に暮らしてたって……、それなら尚更恋人の様な気がするんだが。あの派手な真澄さんとは真逆の、お似合いの和風美女だし……）
そんな事を考えながら1人で悶々としていると、清人が声をかけてきた。

「二人とも、ここが空いてるが座らないのか？　そろそろ次のイベントが始まる筈なんだが」
確かに通路側から三つ席が空いており、どうやら浩一と恭子に続く席に清人が座っていたらしいと見当を付けた清香は、素直に頷いた。
「じゃあ座らせて貰うわ。聡さんもここで良いですか？」
「……ああ、勿論構わないよ」
僅かに引き攣った笑顔を見せながら聡は了承し、奥から清人、清香、聡の順に席に着いた。気がつくと一緒について来た修と奈津美は、自分たちの後ろの席にちゃっかりと座っている。
（何かもう……、狼の巣穴に飛び込んだ気分だな）
半ば自棄になりながら聡がステージの方に視線を向けると、司会者らしい学生が出て来て、マイク片手に陽気に宣言した。
「皆様、お待たせしました。それでは当サークル主催、チャリティーオークションを開催致します！」
会場から結構な数と音量の拍手が起こる中、周囲でステージ上に運び込まれた品々を見ながら、囁き声での会話が交わされる。

「ふふ、ちょっとドキドキするわね。ねえ修さん、午前中見たあのクリスタルガラスの一輪挿し、落としてみても良い？」
「財務大臣のお前が良いと判断する範囲でな」

「よぅし、頑張るわよ！」
やる気満々の奈津美の声に、思わず苦笑しながら背後を振り返る清香。
「奈津美さん、妊婦なんだから、あまり興奮しないでね？」
「ん～、俺はあのペアウォッチにしようかな？」
独り言のように言った正彦に、キョロキョロと周囲を見渡し不審に思った清香は、前の座席に身を乗り出して正彦に尋ねた。
「正彦さん、彼女さんにあげるんですか？　そう言えばさっきお会いした彼女はどこですか？」
「うん？　取り敢えず別れた。あげるのは次の彼女」
「……いつか女性に刺されますよ？」
清香だけでなく、他の人間からの突き刺さる様な冷たい視線ももものともせず、正彦は苦笑いしたのみでステージの方に向き直った。
そんな観客席の細々した事には構わず、ステージ上では滞りなくオークションが進行して行った。

「……それではこちらのティーセットですが、最低落札価格千円から始めたいと思います。ご希望の方は挙手の上金額をどうぞ！」
司会者がそう促した途端、会場のあちこちから楽しげな声が上がる。
「千五百」
「千八百」
「二千」
「二千五百」
購入希望者の声を聞き洩らさない様にマイクを持ったスタッフが何人か会場を駆け回り、物によっては結構白熱した競り合いになったりして、出品物が何品か競り落とさせた後には会場に心地よい熱気が溢れて来た。

「けっこう盛り上がってるね」

聡が隣の清香に囁くと、清香も楽しそうに言葉を返す。
「こういうのって、日常生活の中ではありませんからね。皆お祭り騒ぎをしたいんですよ」
「確かに。何だか楽しくなってきたな。次だよね？　例の花は」
「うぅ……、こっちは何だか緊張してきました」
「大丈夫だよ、落ち着いて」
徐々に強張った顔になってきた清香を見て、聡は苦笑しつつ宥めてからステージに向き直った。

「さて、それでは次に移ります。こちらのプリザーブドフラワーのアレンジメントです。最低落札価格千円から始めたいと思います。ご希望の方、挙手をお願いします！」
明るく声を張り上げた司会者の台詞を聞いて、清香が反射的に俯く。
「……やっぱり、百円からにすれば良かった」
「まだ言ってる」
「だって……」
まだグズグズ言っている清香をよそに、会場のあちこちから声が上がった。
「千五百」
「二千」
「二千三百」
「ほら、他にも買いたがってる人は居るだろう？　今、俺が競り落としてあげるからね。清香さん、ちょっと待ってて」
そう言って宥めた聡は、清香の作品を競り落とすべく、正面を向いて片手を上げながら声を発した。
「五千」
「一万！」
「お兄ちゃん！？」
しかしその時、鋭く馳せられた誰かの声で聡の声が遮られた。手

を上げかけた体勢で反射的に声の聞こえた方に顔を向けると、涼しい顔で片手を上げている清人と目が合う。その全く笑っていない目が一瞬緩み、フッとせせら笑われた気配を感じ取った瞬間、聡の闘争心に火が点いた。

清人と同様に視線を険しくした聡が、真っ向から相手を睨みつける。それを見た清香以外の周囲の者達は、試合開始のゴングが鳴り響く幻聴を確かに聞いた。

「おぉっと！　ここで一万の声が上がりました。他にご希望の方はございませんか？」

狼狽した清香の声に、嬉しそうな司会者の声が重なり、更にやる気十分の声が会場内に響いた。

「三万！」

「さ、聡さんっ！　ちょっと待って下さい！」

「五万！」

「お兄ちゃん！　恥ずかしいから止めて！　家族が競り落とすなんておかしいわよ！　サクラみたいじゃない！」

「家族が競り落としては駄目だと言う規則は無いから、別に構わないだろう？」

何とか説得しようとした清香だったが、清人は平然と自分の正当性を主張した。そこに火に油を注ぐ様な発言が重なる。

「八万！」

「聡さん！　あれは材料費を入れてもそんなにしませんから！」

「でもそれだけ払っても良い気がするから。何か無性に気に入ったものでね。あれだったら母も絶対気に入ると思うし」

清香の懇願をあっさりと聞き流し、聡ももっともらしい理屈を述べる。

「十二万！……奇遇だね小笠原君。実は俺もあれが結構気に入ってしまってね」

（このクソガキが！　俺に盾突こうなんて百年早いぞ！）
「十七万！……意外ですね佐竹さん。でも俺と好みが一緒だなんて嬉しいですよ」
（この３０男が！　自分で大人げないとは思わないのか！？）
下手をすればバチバチと火花が散っているのが見える様な緊迫した雰囲気に、最初は盛り上がっていた会場も、いつしか静まり返って胡散臭げにその一角を遠巻きに眺めていた。

（誰でも良いから、この２人を止めてぇぇぇっ！！）
清香が本心からの訴えを込めて周囲の者達を見やったが、全員不自然に視線を逸らした。
（（（（（止められないから……、もう気の済むまでやらせとけ））））
そんな諦めムードが漂う中、事態はどんどんエスカレートしていった。

「お兄ちゃん、聡さん！　そんなに欲しいなら後から同じ物を作るから！　お願いだから今日の所は！」
「二十万！……そうか、それならそっちは川島さんにプレゼントしよう。清香が川島さんの部屋に行った時、殺風景なのが気になったと言っていたし。そうだろう？」
「そ、それは確かにそう言ったけど！」
「先生！　勝手に人を巻き込まないで下さい！」
「川島さん、落ち着いて」
「二十五万！……それじゃあもう一つは、俺の部屋に飾るから俺の為に作ってくれる？　ああ、いっその事更にもう一つ作って貰って、俺の部屋と清香さんの部屋でペアにして飾っても良いよね」
「あ、あのっ！　ペアって何ですか！？」
「二十七万！……ああ、忘れていた。もう一つは奈津美さんの出産祝いとしてでも贈ろうか？」

「ちょっと！　そんな大金はたいたもの、怖くて部屋に飾れないわよ！」

「待って！　奈津美さんにはちゃんと別の物を考えてて！」

「おい、あんまり興奮するな。お腹の子に障るだろうが」

巻き添えを食った形の恭子と奈津美の悲鳴も上がり、浩一と修が宥めに入ったが、当事者2人は気にも留めなかった。

「あああのっ！　二人とも、言っておきますけど競り落としたらこの場で現金で引き換えですよ？　カードとか小切手とか使えませんよ！？　下手したら恥をかいちゃうからっ！」

狼狽しながらある事を思い出し念を押した清香だが、男2人は微塵も動揺しなかった。

「三十万！……安心して清香さん。出先で何かあれば一大事だから、普段から大抵は纏まった現金を持ち歩いているものでね」

「三十二万！……やっぱり君とは気が合うな。これ位社会人としては当然の嗜みだからな。そういう訳だから清香は気にするな」

「きき気にするなって言われてもっ！！」

最早涙目になっている清香を半ば無視し、清人と聡は多少引き攣った笑顔で対峙していた。

（オークションの話を聞いて、何か清香さんが気に入った物があれば購入しようと思って現金を多目に用意してきて助かった。しかし流石にそろそろ……）

（この成金の小倅が！　いつもどれ位親の金を持ち歩いてやがるんだ！　やっぱり何もかも気に入らない。一気にケリをつけてやる！）

（（（（（（やっぱりお前達似た者同士の、間違い無く血の繋がった兄弟だよ……））））））

周囲の者がうんざりしてそのやり取りを見守る中、ステージ上で青くなっていた司会者が、何とか言葉を絞り出した。

「さ、さあ……、今現在、こちらのプリザーブドフラワーのアレンジメントに三十二万の値がついておりますが……、他にご希望の方はございませんか？」

そこで勢い良く叫んだ声が上がった。

「三十五万！」

「五十万！」

「百万！！」

聡と清人の声に続き、後方から誰かの声が高らかに響いた瞬間、今度こそ講堂内の空気が凍った。

「ひゃ……」

「百万って、おい！」

一瞬遅れてザワザワと空気が揺れる中、先程の女性の声に聞き覚えのあり過ぎる十名程だけは、狼狽しながら後方を振り返った。

「ちょっと待て！」

「今の声って」

「まさか！？」

激しく嫌な予感を覚えた一同の視線の先に、パンツスーツ姿の真澄がゆっくりとステージに向かって通路を歩いて来るのを認め、全員瞬時に固まった。コツコツとヒールの音を僅かに響かせながら近付いて来る間に、清人が小声で浩一に凄む。

「浩一！？」

「いや、俺は何も言って無い！」

顔を蒼白にして首を振る浩一に、清人は舌打ちしたい様な顔を向けたが、そうこうしているうちに真澄が通路に面した聡の座っている場所までやって来て、ピタリと立ち止った。そしてゆっくりと四方を見渡しながら、良く通る声で会場中に厳かに宣言する。

「私はそのアレンジメントに百万出します。ですが皆さんの中でそ

れ以上出せる方は、どうぞご遠慮なく申し出て下さい」

にっこりと慈愛に満ちた微笑みを見せながら不特定多数の者に促すが、勿論そんな事を申し出る者は皆無である。

「真澄さん……」

突然過ぎる闖入者の出現に、清香はただ呆然とするのみだった。

第17話　そして最強な彼女

清香の呟きを受けた真澄は聡と清人の方に体を屈め、その周囲だけに聞こえる程度の小声で毒吐いた。
「全く……、大の男が二人、揃いも揃って判断力ぶっ飛ばして。場を盛り上げるどころかドン引きさせるとは何事よ！　あんた達が関係者だと分かったら、清香ちゃんの立場が無くなるでしょうが！」
そう言われて、漸く清人と聡が我に返った。
「う……、悪い、清香。大人気なかった」
「すみません清香さん。ついムキになって……」
「ううん、それは良いんだけど……」
言うだけ言って通り過ぎた真澄は躊躇う事無く設置してある階段を登り、ステージに立った。一時のざわめきが消えて会場が不気味に静まり返る中、司会者にまっすぐ歩み寄って声をかける。

「すみません、少しだけマイクを貸して頂ける？お騒がせしたのは本意では無かったので、会場の皆さんに一言お詫びしたくて。駄目かしら？」
殊勝げな物言いをしながら小さく首を傾げて見せた真澄に、相手は大人しく従った。
「どうぞ、お使い下さい」
「ありがとう」
そうして真澄はステージの中央で、マイク片手に微塵も臆する事無く語り始めた。

「会場の皆様、この場をお借りしてご挨拶とお詫びをさせて頂きます。私は柏木産業創業家の柏木真澄と申します」
そこで軽く頭を下げた真澄を見て、再び講堂内にざわめきが広がる。

「柏木？」
「あの老舗企業の？」
「一体何だ？」
　するとそれを見計らった様に、真澄はゆっくりと会場中を見渡しつつ再度口を開いた。

「我が家では、前々から福祉事業に並々ならぬ力を入れて、定期的に複数の福祉財団に寄付しております。こちらには知人が在籍している関係で、今日立ち寄ってから某団体の事務所にすぐ出向くつもりが、なかなか興味深い活動報告を目に致しました」
　そこで真澄はにこやかな笑顔を見せた。
「院内学級など普通ならあまり日の目を見ない箇所で活動するとは、流石にその辺の学生ボランティアとは目の付け所が違います。それに比較的短期のフォローで終えられる外科患者ならともかく、長期入院を余儀無くされている難病の子供に対しては、それこそケアは千差万別の筈。それを試行錯誤しつつ、手探りで一つ一つの事例に真摯に取り組んでおられる活動の様子に、心から感服致しました」
　軽く胸を押さえつつしみじみと語る真澄に、会場がいつしか静まり返る。
「それで是非ともこの活動にご助力したいと思った所、こちらでチャリティーオークションが開催中なのを耳にして急遽足を運んだわけです」
　そこで一旦話を区切った真澄は、悪戯っぽい笑顔を見せた。

「実は、先程申し出た百万はこれから出向く団体へ寄付するお金だったのですが、明日にでも改めて届ける事にします。そことは長い付き合いですので、まさか1日遅れただけでいつもの金額に色を付けてくれなどとは言わないでしょう」
　そこで真澄が冗談を言ったらしいと分かった者達が会場のあちこちでクスクスと笑い、場の空気が僅かに緩んだ。そこで真澄が再び

真顔になって話を続ける。
「今回唐突に百万と金額を出して皆様を驚かせてしまいましたが、そういう訳ですので決して金持ちの道楽や気紛れで大金を投げ捨てた訳ではありません。このお金はきっと有意義に使って頂けるものと信じております。ところで……、こちらのサークルの責任者の方はどなた？」
真澄が司会者の方を振り向くと同時に、舞台袖のカーテンの向こうから事態の推移を見守っていた男性が、転がり出る様に真澄の元にやってきた。
「わ、私です」
その男に、真澄はハンドバッグの中から封筒を取り出し、更にそれから銀行の帯封の付いた札束を出して優雅な動きで差し出した。
「この度は有意義な発表を見せて頂きました。これからも活動を頑張って下さい。応援しています」
微笑みを浮かべた真澄がそう言って札束を手渡すと、感極まった相手は真澄の手を取り頭を下げた。
「あっ、ありがとうございます！　多大なご協力感謝します！　今後、より一層実りある活動を続けて行きますので！」
「皆様！　当サークルの趣旨に賛同して頂き、多大な寄付をして頂きました柏木さんに、盛大な拍手をお願い致します！」
司会者役の学生も感動した様に会場に向かって声を張り上げると、会場中から割れんばかりの拍手と感嘆の声が沸き起こった。
「きゃあぁぁ、あのお姉様カッコイイ～」
「流石柏木、ただの金持ちじゃねぇな」
「凄いな百万単位でポンと寄付かよ」
「脱税やって溜め込んでる様な奴とは、そもそも格が違うよな……」
「ああいう人が居る家がトップを占めてる会社なら、福利厚生とかも良さそうだよね？」

「うん、寄付して社会還元してるなら、社員にだって還元してそうだし」
「来年、柏木産業にエントリーしようかな？」
「元々優良企業なのに、今回のこれで学内で一気に人気が上がるな」
清香達の周囲からもそんな声が伝わり、ステージ上で手を振りながら愛想笑いを振り撒いている真澄を見た一同は、揃って感心した様に唸った。

「流石真澄さん。会場全体が柏木からの寄付の事に意識が向いて、直前に常識外れの大金で競り合いをしていた馬鹿男2人の事は、すっかり頭の中から消し去られたか」
「おい！」
遠慮なく感想を述べた友之に対し清人が文句を言おうとしたが、次々と他の者が口にする言葉に不満をかき消された。
「ここは国立の東成大には一歩及ばないが、私立の雄だからな。優秀な卒業生を確保するのに社名をアピールする絶好の機会だ」
「真澄姉、《ピンチをチャンスに変える》を地でやってみせたか。やるなぁ」
「ＣＭ１スポット幾らで考えたら、百万は安いかもな。学生の口コミはバカにできないし」
「学祭だから他の大学の学生や関係者も出入りしてる筈だし、効果絶大か」
「しまった……、これが親父の耳に入ったら、『どうしてお前がやって《倉田》の名前をアピールしなかった！？』ってどやされる……」
「正彦……、それ、間違ってもお前には無理だから」
そう冷静に浩一が突っ込んだところでステージから紙袋を提げた真澄が戻り、無言で促された正彦と友之と明良が奥に一つずつずれて真澄に席を譲った。そこに同然の如く真澄が腰を下ろし、それから滞りなくオークションが進行していった。

そしてオークションが終わり、講堂内の人間がぞろぞろと入れ替わる様に移動し始め、清香達もそれに倣って立ち上がった時、ステージの袖下で何人かと輪を作っていた朋美が手を振りながら声をかけて来た。

「清香、ちょっと来て！」

「あ、うん、今行く！」

それに応じた清香は、聡に向き直って断りを入れた。

「ごめんなさい聡さん、ちょっと朋美の所に行ってきます」

「ああ、講堂を出た所で待っているよ」

「すぐ行きますね」

そうして互いに笑顔で別れた2人を見ながら、周囲の者達も立ち上がり通路に出る。

「じゃあ俺達も出ているか」

「そうだな」

「それならこれを持って貰えるかしら？」

そこで真澄が先程手に入れたアレンジの入った紙袋を、立ち上がった清人に向かって無造作に突き出した為、周囲の者達は恐れ慄いた。

（ちょっ……、真澄姉！）

（どうしてここで、事を荒立てようとするんですか！？）

（今の清人さんを刺激したら、後が怖いですよ！）

（さっさと帰りたいが、無視して帰ったら余計面倒な事になりそうだし……）

案の定、清人は真澄の顔と差し出された物を交互に眺めてから、不機嫌さを隠そうともせずに冷え切った口調で尋ねた。

「……どうして俺がそれを持たなければいけないのか、理由を説明して頂けますか？」

（ああ、怒ってる怒ってる……）
（只でさえ邪魔をされて、不機嫌だってのに）
（こうなるのが分かってて兄さんに命令出来るなんて、この女性は勇者だな……）
柏木に連なる男達が戦々恐々とする中、聡だけは予想外の展開に呆然とし、かつ真澄に心の中で賛辞を贈った。そしてどう対応するのかと様子を窺っていると、真澄が一見上品で邪気に無い笑みをその顔に浮かべる。

「深窓育ちなもので、箸とお茶碗より重い物を持った事が無くて指が千切れそうなの。そんなか弱い女性が目の前に居るのに、無視できないわよね？」
（深窓？　誰がだ？）
（白々し過ぎる……）
（……姉さん、勘弁してくれ）
周囲が揃ってうんざりする中、清人は嘲笑めいた笑みで応戦した。
「それはそれは大変ですね。しかし札束は平気で持ち歩けるみたいですが、そうなると金だけは持ち歩くのに必要なのは手では無く、図太い神経みたいですね。それで重さも感じないとは羨ましい。こちらは人並みの神経しか持ち合わせていないもので、一つ勉強になりました」
（うわ～、負けてないよこっちも）
（つうか、この人に真っ向勝負挑めるのは、清人さん位だろ）
（2人とも笑顔が極悪だよな）
揃って周囲が顔を引き攣らせていると、真澄が真顔になって清人を睨みつけた。

「つまらない御託を言ってくれるわね。人を本気で怒らせて、金を払って頭を下げる位で勘弁して貰えると本気で思ってるわけ？」
「……」

真澄が言っている内容に心当たりのあり過ぎる清人は、反射的に黙り込む。他の者達が（何事？）と不審がる眼差しを向ける中真澄が一歩足を踏み出し、清人の耳元で小声で脅迫した。

「この場であんたが仕掛けてるえげつない“あれ”を洗いざらいぶちまけて良いの？」

「真澄さん」

「それが嫌ならさっさと私の言うとおりにする事ね。……さあ、これを持つの？　持たないの？」

聡の前で小笠原に対する小細工を暴露された日には、密かに進めている諸々が無駄になる可能性があり、清人は舌打ちしたいのを何とか堪えて真澄の方に片手を差し出した。

「……お預かりします」

「最初から素直にそう言いなさい」

ふんぞり返って清人に紙袋を渡す真澄を見て、周囲の人間は皆驚愕した。

（え！？　清人さん、一体どんなネタを握られてるんだ？）

（真澄さん……、楽しそうですね）

（初めて見たな。清人さんのすげぇ仏頂面）

（外面が良いのが、この人の特技の一つだったのに）

そんな呆然としている面々を、真澄が容赦なく追い立てる。

「ほら、さっさと出るわよ。あなた達もグズグズしない！　通路で立ち止まってたら他の人の邪魔でしょう」

それに従い一同はぞろぞろと何とも言えない表情で外に向かって歩き出したが、中ほどで並んで歩いていた修と奈津美の間で、小声で会話が交わされた。

「……奈津美」

「分かったわよ、もう……」

基本的に男に厳しく女に優しい真澄に対しては、自分よりも妻の

方が口を聞きやすい筈と判断した修が妻に目線で懇願し、奈津美は肩を竦めてから夫を初めとする男達の疑問を解消するべく、前を歩く真澄に声をかけた。

「真澄さん、ご無沙汰しています。今日は偶然お会いできて嬉しいです」

「ええ、奈津美さん、珍しい所で会うわね。また今度お店に伺うわね」

「お待ちしています。それで……、今日はどうしてこちらに？　しかも大金持参で。寄付に行く直前に寄ったなんて、話を作っただけですよね？」

慎重に核心を突いた奈津美に、真澄は笑いを堪える表情になった。

「勿論そうよ。大学祭の事は清香ちゃんから聞いていて、もともと顔を出すつもりだったの。ついでに彼女がオークションに出品する事も知っていたし」

「あら、どうしてですか？」

色々お忙しいでしょうにという思いを顔に出しながら不思議そうに奈津美が尋ねると、真澄が機嫌良さそうに奈津美と並んで歩きながら話を続けた。

「先月の初め位に相談を受けたの。『アレンジのデザインをどうしたら良いか迷ってる』って。単なる左右対称とかにしたく無かったみたいね。『真澄さんはセンスが良いから何かアイデアを出して貰えませんか？』なんて言われたら、とても邪険にできないじゃない？」

「あら、凄い殺し文句」

思わずふふっと笑った奈津美に、真澄も目許を和ませる。

「本当よね。それで持っている画集から作品化出来そうなパステル画の幾つかを選んで、こんなのを題材にしてみたらって写メールで送ったの。それを元にあれを作ったみたい」

そう言って一歩後ろを歩いている清人の手元を指差した真澄に、奈津美は感嘆の眼差しを送った。

「確かに一枚の絵みたいな、素敵な作品ですものね。使えそうな絵を選んだ、真澄さんの眼は確かですね」

「あら、私の選定眼より清香ちゃんのデザイン感覚とアレンジ力の方が凄いと思うけど？」

「清香ちゃんには、後で改めて誉めてあげます」

「そうして頂戴」

そこで女2人で笑い合ってから、奈津美は何を思ったか顔付きを改めて口を開いた。

「でも真澄さん。修さんともさっき少し話していたんですけど……」

「なあに？　遠慮しないで言ってみて？」

「どうしてあんな大金を持って、こちらに出向いたんですか？」

「単なる女の勘ね。揉め事が起こる様な予感がしたものだから。勿論普段はこんな無造作に持ち歩かないわよ？」

「「……」」

そこで真澄がチラッと背後を振り返った為、その視線の先の清人と聡は揃って顔を逸らした。それを認めてから、奈津美が更に意見らしき物を口にする。

「今回は確かに事態の収拾に役立ったかもしれませんが……。余計なお世話かもしれませんし、私達と真澄さんの経済観念は違っているのかもしれませんが、それに百万も出すのはちょっとどうかと思いまして……」

そう言って気まずそうに若干俯いた奈津美だが、それを聞いていた男達は心の中で拍手喝采を送った。

（偉い！　奈津美さん！）

（もっと言ってやって！）

（そうだよな。それが真っ当な金銭感覚ってものだよな！）
対する真澄は講堂の外に出て来た為歩みを止め、奈津美に向かい合って苦笑いしてみせた。

「そんな恐縮しないで？　心配してくれたんでしょう？　ありがとう。でも費用対効果は十分だから」
「それは……、ここの大学で《柏木》の名前を効果的、好意的にアピールできたからですか？」
先程の夫達のやり取りを思い返し、まだ何となく納得しかねる顔で尋ねた奈津美に対し、真澄がきっぱりと断言する。
「そうね。それだけでも百万以上の価値はあるけど、この場合、原資もしっかり回収可能なの。だからどう転んでも私が損をする事は無いわ」
「え？　どうやって回収するんですか？」
本気で目を丸くした奈津美に向かって、真澄は飄々と言ってのけた。

「簡単よ。家でお祖父様の前で『この清香ちゃんの手作りアレンジメントを百万で競り落として来たわ』って言えば、『二百万出すから儂に譲ってくれ！』って飛び付いて来るに決まってるもの。話の持って行き方によっては、下手したら三百万位出すかもね」
「……はあ、なるほど。良く、分かりました」
盛大に顔を引き攣らせながら奈津美が頷き、男達は真澄の容赦の無さにうんざりすると同時に、毟り取られる事決定の祖父を哀れに思った。
（（（（（（実の祖父から巻き上げる気満々なのか、この人は……））））））
そこで思わず清人が忌々しげに呟く。
「相変わらず……、勝機と商機を逃さない人ですね」

「誉め言葉として受け取っておくわ」
清人の嫌味も真澄が軽く受け流した所で、出入り口から清香が走り出て来て一同の元にやって来た。

「お待たせしました！　真澄さん、今日はありがとうございました」
駆け寄ってくるなり盛大に頭を下げた清香に対し、真澄が裏表無しに顔を綻ばせる。
「どういたしまして。こんな素敵な作品になって、私もアドバイスした甲斐があったわ」
「サークルのメンバーからも、改めて私からお礼を言ってくれって言われましたけど……、あんな大金を出して、本当に良かったんですか？」
心配そうに見上げてくる清香に、真澄が悪戯っぽく問いかける。
「清香ちゃん。私がお金と時間を浪費するタイプの人間に見える？」
そう問われた清香は何秒か真剣に真澄の顔を見つめてから、にこりと笑った。

「見えないです。ご協力ありがとうございました」
「うん、素直で宜しい。本当に、性格が捻れ捲った馬鹿どもに、清香ちゃんの爪の垢でも煎じて飲ませたいわね」
「「……」」
頗る上機嫌で清香の頭を撫でつつさりげなく視線を投げてくる真澄に、清人に聡はぐうの音も出ない。他の者が密かに面白がったり気の毒に思っていると、更に真澄の仕切り発言が飛び出した。

「さて、それじゃあ私はここで失礼するわね。門の所に車を呼ぶから。清香ちゃん、お兄さんが車が来るまでこれを持って待っててくれるそうだから、約束とかがあったら悪いけど一緒に行くわね」
「はぁ！？」
「いえ、待ち合わせとかの約束はしていなかったですけど……、お

兄ちゃん？」
　流石に清香が怪訝な顔を見せ、清人も怒りの形相で真澄に詰め寄り、小声で噛みついた。
「ちょっと待って下さい、何ですかそれはっ！！」
「何か文句でも？」
「何で俺がそこまで！」
　しかし真澄も負けじと、ドスの効いた声で囁く。
「清香ちゃんの前で“あれ”を言っても良いの？　そんな事をしたら弟君に対抗策を取られるだけじゃなく、清香ちゃんに『信じられない、お兄ちゃん最低！』って言われる位で済めば良いけど最悪」
「お付き合いします」
「そう、宜しくね」
　如何にも悔しげに了承の言葉を口にする清人と、余裕たっぷりで頷いた真澄を見て、聡は不審に思うのを通り越して唖然とした。

（あの人に、一体どんな弱みを握られてるんだ？　兄さんは）
　その内容を知ったらとても心中穏やかではいられなかった聡だが、現時点でそれを知る由も無く、只首を捻るのみだった。そして真澄の指示が更に続く。
「そういう訳だから清香ちゃんの事を宜しくね。でも言っておくけど、夕飯前にきっちり家まで送り届けるのよ？」
「分かりました」
　つい先程までとは異なり、幾分きつい視線で念を押してくる真澄に、聡は苦笑いしかできなかった。
（まあ、さすがに全面的に味方をしてくれるわけでは無いが、門前払いよりはマシか）
　そんな事を考えていると、清人はジャケットのポケットから手帳を取り出し、そこに挟んであったメモを恭子に向かって差し出しながら声をかけた。

「じゃあ川島さん。このリストで残っている場所の、写真を撮っておいて貰えますか？」
「はい、分かりました」
それまで控え目に皆の後ろに付いて歩いていた恭子が前に出て来て、清人からそれを受け取る。他の皆が（え？　ここに押し掛ける方便じゃなくて、本当に取材してたんだ）などと密かに驚く中、淡々と清人が話を続けた。
「終わったらそのまま帰って貰って構いません。今日は日曜なのに付き合わせて、申し訳ありませんでした」
軽く頭を下げる清人に、恭子は笑いを堪える表情で応じた。

「いえ、とても楽しかったです。先生の普段とは全く違った一面が見られましたし」
そう言ってクスクスと笑い出してしまった恭子に誘発された形で、周囲から「くっ……」とか「ぶふっ……」とかの失笑が漏れる。それを耳にした清人は、疲れた様に溜息を吐いた。
「川島さん……」
「それじゃあ解散。他の皆も寄り道しないで帰りなさいよ？」
追い払う様に片手を振ってから、真澄は清人を従えて正門に向かって悠然と歩き出した。その背中を見送りながら、男達が顔を見合わせる。

「すっかり悪ガキ扱いだな」
「まあ、あんまり品行方正とは言えないだろう」
「違いない。じゃあさっさと帰るか」
「じゃあ清香ちゃん、またね」
「聡君、ちゃんと清香ちゃんを送り届けろよ？」
「でないと後が怖いからね？」
そうして他の者達が三々五々その場を立ち去っていくのを見送りながら、清香は隣に立つ聡に苦笑しながら声をかけた。

「はあ……、皆が揃って賑やかだったから、急に静かになりましたね」
「確かにね。清香さんはやさしいお兄さんみたいな人達がいて、楽しいし退屈しなさそうだね？」
「はい」
（……ちょっと皮肉が入ってたんだけど、分からなかったか）
即座に迷い無く返答された為、聡は若干溜息を吐きたくなった。
それを何とか抑えて意識を切り替える。
「ごめんね、清香さん」
「何ですか？　聡さん」
突然の謝罪に清香が首を傾げると、聡は言い難そうに言葉を継いだ。
「その、さっきも謝ったけど……、つい先生と張り合って、清香さんを随分ハラハラさせてしまったみたいだし……」
「本当です、もう！　大の大人が二人揃って、何をやってるんですか！？」
「うん、本当に悪かった」
本気で怒られて益々気まずい思いをした聡だが、次の瞬間清香が小さく笑った。
「もう怒って無いですよ。そんなにしょげないで下さい。私が苛めたみたいじゃないですか。その代わり、もう同じ事はしないで下さいね？」
「分かった。誓うから」
真顔で頷いた聡に、清香は少し意外そうに言い出した。
「それならもう良いです。でも……、正直言って、凄く意外でした。お兄ちゃんも聡さんも、どんな時でも冷静に対応できる人かと思ってたのに」

「それは自分でも意外だったかな？　俺も自分がこんなに熱くなるタイプだとは思って無かったからね。本当に、楽しい場を台無しにしかけてごめん」

（兄さんに多少煽られたからって……。まだまだ精神修行が足りないって事だな）

そんな事をしみじみ思いながら聡が苦笑すると、清香も多少悪戯っぽく笑って打ち明けた。

「真澄さんが上手く纏めてくれて、良かったですね。だけど……、正直に言うと、私もちょっとだけワクワクしてました」

「え？」

「最後の方、どっちが競り落とすんだろうって、密かに楽しんでました。あ、でも、本当にほんのちょっとだけですからねっ！　あんな心臓に悪い事は二度と御免です！！」

「肝に銘じておくよ」

勢い込んで訴えてくる清香に、聡は苦笑しながら頷いた。すると清香が口調を変えて聡を見上げてくる。

「でも、真剣な顔でお兄ちゃんと張り合ってた聡さん、とても格好良かったですよ？」

「……え？」

意外な言葉を耳にして聡が固まったが、そんな事は察しないまま清香が無邪気な笑顔で続けた。

「きっとお仕事中はあんな顔をされてるんですよね？　笑ってる顔も素敵ですけど、ああいう“戦ってる顔”っぽいのも魅力的だな～と思って眺めてました」

「ありがとう……」

（落ち着け、俺！　彼女に他意は無いから！　素直に感想を口にしてるだけで）

変な動悸を覚えながら何とか動揺を抑えようとした聡だが、つい気になった事を口にしてしまった。

「……先生は」
「え？　お兄ちゃんがどうかしましたか？」
「あ、いや、その……。俺と張り合ってる先生については、どう思ったのかと……」
口ごもりつつ相手の反応を待った聡だが、清香は事も無げに言い切った。
「お兄ちゃんは笑っていても怒っていても大抵の男の人より魅力的なのはもう十分分かりきっているので、一々口に出す事では無いと思って別に言わなかったんですけど」
「……ああ、そうだよね」
「聞きたいですか？」
「いや、結構。ごめんね？　変な事を聞いて」
「はぁ……」
（変な聡さん。一体何が言いたかったのかしら？）
（やっぱり俺は、その他大勢での一括りなんだな）
微妙に落ち込む聡に、首を捻る清香。しかし清香は悩むのをすぐに止め、次の話題を口にした。

「それで……、聡さん」
「うん？　どうしたの？」
「お母様の退院までに、あのアレンジと同じ物を作ってお渡ししますね？」
そう言われて、聡は少し驚いた表情を見せた。
「え？　大変じゃないの？　そんな気を遣ってくれなくても大丈夫だよ？」
「でも随分気に入ってくれたみたいで、嬉しかったんです。勿論、ご迷惑なら止めますけど」
心配そうに顔色を窺って来る清香に、聡は心からの笑顔を向けた。

「そんな事はないから。寧ろ嬉しいから、ありがたく頂く事にするよ。母も喜ぶだろうし」
「良かった。じゃあ年末までには渡せる様にしますね」
「色々と忙しい時期だし、無理はしないで良いからね」
「はい！」
そう言って輝く様な笑顔で請け負った清香を見下ろして、聡はしみじみと思った。
（ああ、その笑顔って、やっぱり最強かもしれない……）
聡の中で、また何かがゆっくりと動き出した瞬間だった。

第18話　計り知れない女性（ひと）

「……とまあ、大学祭はこんな感じで終わったんだけど」

聡が仕事帰りに由紀子の病室に寄り、請われるまま先日の出来事の一部始終を語り終えると、それまで黙って相槌を打ちながら聞いていた由紀子が、我慢できなくなった様に口元を手で押さえてクスクス笑い出した。

「ふふふっ……、清香さんの従兄弟さん達に散々邪魔された挙げ句、彼女の前で頑張って清人と競り合ったのに、残念だったわね？　聡」

「仕方ないさ。全く……、兄さんがあんなに大人気ない人だとは思わなかった」

憮然とした聡の表情が面白かったのか、由紀子は益々笑みを深くした。

「それにしても……。2人で散々張り合った挙げ句、一番最後においしい所を全部柏木さんに持って行かれるなんて、笑えるわね」

「何故だかは分からないけど、兄さんはあの人には頭が上がらないみたいだから」

溜め息を吐きながら聡がその時の情景を思い返していると、何か思い付いた様に由紀子が真顔で尋ねてきた。

「ねえ、聡」

「何？」

「話を聞いていて思ったんだけど……、ひょっとしてその真澄さんって方、清人の恋人なのかしら？」

「有り得ないから！」

「なぁに？　その即答は」

口にした途端即座に力一杯否定され、由紀子は目を丸くした。そして聡は何となく気まずい思いをしながら、微妙に視線をさまよわ

せる。
「あ、いや、何となく。あの女性が兄さんの恋人って、あまり考えたくないと言うか、考えられないと言うか……。でも、本当にそんな空気は皆無だったから。強いて言えば……“天敵”？」
「そうなの？　それなら川島さんって言う方は？」
そう言われて、聡は眉を寄せて黙り込んだ。そして当日の清人の様子を思い返し、慎重に言葉を選ぶ。
「……川島さんは、柏木さんとはまた違った意味で、何となく違う気がする」
「そうなの。でも本当に楽しい顔合わせだったみたいね。見られるものなら、是非この目で直に見たかったわ」
しみじみと、如何にも残念そうに溜め息を吐かれ、聡はげっそりと肩を落とした。

「母さん……、他人事だと思って……」
「だっておかしいんですもの」
そう言って先ほど聞いた話を思い出した様に再び小さく笑い出した由紀子を見て、聡は少々うんざりしながらも自分自身を宥めた。
（まあ、良いか。こんなに楽しそうに笑う母さんを見るのは久しぶりだしな）
そんな事を考えて苦笑いしていると、由紀子が予想外の事を口にした。

「何だか清香さんに会ってみたくなってきたわ。私の退院祝いを作ってくれると言うし、一度家に招待できないかしら？」
由紀子に首を傾げて尋ねられた聡は、盛大に顔を引き攣らせた。
「それはさすがに……、兄さんが黙っていないかと」
（一緒に展示を見る約束をしただけであの妨害っぷり。もし家に招待なんかしたら、どんな制裁を企ててくるか……）
考えを巡らせて戦々恐々としている聡の耳に、更に驚愕する内容

が飛び込んできた。
「それはそうよね。清人は勿論だけど、あれだけ派手に殴られた昭さんも清人の事は警戒してるから、清香さんを招待する事には反対するだろうし。その辺りはどうしたものかしら？」
（母さんの中で、彼女を家に招待するのは決定事項なのか！？　いや、それより……）
動揺しながらも、聡は慌てて難しい顔で考え込んでいる由紀子に確認を入れた。

「母さん、父さんが殴られたって何の話？」
「あら、話したでしょう？　清吾さん達のお通夜に出向いた時の事」
不思議そうに問い返した由紀子に、聡は納得しないまま尚も問い掛けた。
「聞いたけど、確か母さんが兄さんに殴られて、二発目は父さんが止めたって話で……」
「ええ、私が平手打ちされて倒れ込んだのを庇った昭さんが、拳で殴り倒されたのよ。昭さんが盛大に地面に転がったものだから、それで清人も少し落ち着いたみたいだったわ」
「母さん！　俺はまさかそんな事態だったとは思って無かったんだけど！？」
事の次第を知ってさすがに顔色を変えた聡だが、由紀子は平然と話を続けた。

「説明不足だったかしら？　でもそれで少し安心したの」
「その状況で安心って、何に？」
「幾ら憎くても私は平手打ちで済ませてくれた訳でしょう？　あんな状況でも女性には手加減してくれるなんて、なんて優しい子に育ててくれたんだろうと思って、もう清吾さんと香澄さんに会う事が出来なくなって悲しいのと同時に、２人に感謝する気持ちで胸が一杯になったわ」

片手で軽く胸を押さえながらしみじみと語った由紀子に、聡は心の中で絶叫した。

（母さん！　そこ、絶対感動する所じゃないから！！　第一、本当に優しいなら、間違っても母親に手を上げたりしないって！！）

そうして少しの間項垂れてから、聡は誰に言うともなくボソッと呟いた。

「何か意外だな……」

「え？　何が？」

ゆっくりと顔を上げ、尋ねてきた由紀子の顔を眺めながら、聡は苦笑いした。

「父さんが体を張って母さんを庇うとは思ってなかったから。親戚連中はこぞって、やれ『財産目当てだ』とか『会長の腰巾着が』とか好き放題言ってたし」

「確かに財産目当てで結婚したって所は否定できないけど、ちゃんと私の事は守ってくれる、結構律儀な人なのよ？」

穏やかに言い聞かせてくる由紀子に、聡は一気に脱力した。

「……母さん。爽やかに財産目当てって断言しないでくれるかな」

「でも、実際そう言われたし」

「何て言われたって？」

思わず眉を顰めた聡に、由紀子は苦笑しながら思い返す様に話し始めた。

「あれは……、小笠原の家に戻って二年位過ぎてからね。父が『今度こそは儂が認める男と再婚しろ！』と五月蠅くてね。断るのも面倒臭くなって、もう適当にお見合いしてたのよ」

「適当って……」

相当自棄になっていたであろう当時の母親の心境を想って、思わず聡は溜め息を吐いたが、由紀子は淡々と続けた。

「父は私の結婚と離婚を必死になって隠そうとしてたけど、お見合

いの席で私から暴露してたの。その途端に破談というパターンを繰り返してたわ」

「……じいさん、怒ったよな」

（そうだよな。お嬢様然としてても、駆け落ちまがいの事もした人だものな。こうと決めたら引かない所はあるだろうし）

思わず呻いた聡に、由紀子は小さく笑った。

「勿論よ。父が顔を真っ赤にして怒ってたけど構わずそれを続けていたら、噂が広がって次第に縁談が来なくなってね。相手が父が言うことを聞かせられる、社内の人だけになったの」

「それで父さんが？」

「昭さんに引き合わされたのは、結構な人間に引き合わされてからね」

「それまでどうして断ってたの？」

これまで父親の謹厳実直さと無愛想ぶりと、面白味の無さを散々目の当たりにしてきた聡としては、他にもっとマシな結婚相手が居たのではと思ったのだが、由紀子は小さく肩を竦めてその理由を述べた。

「だって……、父から事前に言い含められたのか、皆揃いも揃って『辛い経験をしましたね』とか『これからは俺が面倒を見ますから安心して下さい』とか『子供だってまたすぐできますよ』とか、分かった様な事を言って愛想笑いをしてくるんだもの。話に付き合う気にもなれないわ。どうせ小笠原の社長の椅子と財産目当てなのに」

「そう言い切ってしまうのも、どうかと思うんだけど……」

（あのじいさんの息のかかった人間なら、間違い無くそうだろうけどな）

一応フォローらしき物をしてみたが、聡自身母の意見に賛同した。

すると由紀子が真顔で話を続ける。

「それで悉く突っぱねてるうちに昭さんとお見合いする事になって、

その席で開口一番『あなたは自分の資産が今現在どういう状態なのか、きちんと把握しているんですか？』って言われたの」

「……えっと、本当に初対面の場で？」

（それって一般的に見てどうなんだ？）

流石に聡が心の中で突っ込みを入れたが、由紀子は平然と肯定した。

「ええ。それで私、正直に『全て父が管理していますので存じません』と言ったら鼻で笑われて、『無駄に年だけ食ってるんですね。あのごうつくばりの会長が生きている間は大丈夫でしょうが、あれがくたばったら忽ち路頭に迷いますよ。あの会長が一応頭を下げてきたので、俺に管理を一任してくれたら、そんな事態からは回避させてあげます。ゆくゆくは社長にも就任させて貰える事で話はついてますし』って言われて」

そこまで言って当時の事を思い出したのかクスクス笑い出した由紀子に、聡は半ば悲鳴を上げた。

「母さん、笑い事じゃないだろ！？　何だよ、その如何にも財産目当ですって感じ丸出しの台詞はっ！！」

「だって、聞いててあんまり清々しくて。思わず『じゃあ私の財産が全て無くなったら、私と離婚する事になるんですね？』って聞いたら『そうなりますね』って真顔で言うし」

（父さん！　俺はあなたを流石にここまで守銭奴だとは思ってませんでしたよ！）

愕然として心中で父に非難の声を上げた聡に、由紀子は更に予想外の内容を口にした。

「だからね？　お愛想笑いなんかしてくる人より、そんな正直な人の方が良いかなって思って、いい加減清吾さんとの事は諦めて再婚してみる事にしたのよ」

「してみる事にしたって……」

呆然と呟いた聡に、由紀子が徐に言い出した。

「それで……、結婚して十年近く経った時、昭さんが如何にも申し訳なさそうに私に謝ってきたの」
「何を謝ったわけ？」
「『君の資産が倍になった。半分は聡名義に振り替えたから』って」
「は？」
意味が分からずとうとう絶句した聡に、由紀子は真顔で解説した。
「初めて会った時に私が『資産が無くなったら離婚しますか？』って聞いたから、どうやら昭さんは私が離婚したくて資産を減らす事を期待していると思っていたみたい。だから『増えて困るものでも無いですよ？』って笑ったら、何だか安心してたわ」
（ちょっと待ってくれ。母さんと父さんは普通の夫婦とは違うとは思っていたけど、何だか益々意味が分からなくなってきたんだが……）
思わず椅子から降りて床に蹲りたくなってしまった聡だが、由紀子はすこぶる冷静だった。

「それに、私は最初の結婚と離婚で親戚中から白い眼を向けられてたんだけど、再婚してからは昭さんが『ろくな家の出じゃない』とか『財産目当て』とかって集中砲火を浴びてたわ。父が事ある毎に『社長にしてやった』って恩着せがましく言ってくるのを黙って聞いて、外でのお付き合いでは気難しい顔で周囲を睥睨して、下手な人は寄って来ない様にしてくれていたし」
そこで聡がどこか疑わしそうに口を挟んだ。
「じゃあ父さんって……、昔から結構矢面に立って、母さんを庇ったりしてた？」
「そんな風には見えなかった？　私が社長にしてあげた訳じゃ無いのに、本当に律儀な人でしょう？　だから清吾さんみたいに好きと言うのでは無いけれど、昭さんの事も大事に思ってるわよ？」
慎重に尋ねたが由紀子に事も無げに言われてしまい、聡は本気で

項垂れた。
（見えなかったから、余程夫婦仲が悪いのかと、俺が1人で気を揉んでたんだよ！！）

それから幾つかのやり取りをしてから、聡は由紀子に別れを告げて病室を後にした。
いつもならまっすぐ家に戻る所だが、色々な精神的疲労が重なったせいか足取りが重く、病院出入り口近くの長椅子にドサリと腰を下ろす。そして盛大な溜め息を吐き出した。
（何か疲れたな。これまで色々気を回していたのが、馬鹿みたいに思えてきた……。熱愛夫婦って訳じゃないけど、実はそんなに仲が悪いってわけじゃ無かったみたいだし）
そこまで考えた聡は頭に手をやって苛立たしげにガシガシと掻いた後、ポケットから携帯を取り出し、迷わずある番号を選択した。
そしてすぐ応答があった事に安堵しつつ口を開く。

「もしもし、清香さん？」
『こんばんは、聡さん。どうかしましたか？』
「うん、何か精神的疲労が激しくて、ちょっと癒されたくなって……」
『はい？』
思わず本音を漏らした聡に、清香が戸惑った声を返してくる。それを聡は軽く誤魔化した。
「いや、こっちの話。それで用件なんだけど、今週の水曜の夜とか空いてるかな？　一緒に食事でもどうかと思って」
誘いの言葉を口にした聡だったが、清香は申し訳なさそうに断ってきた。

『ごめんなさい、その日は玲二さんと正彦さんと食事をした後カラオケに行く事になってて……』

「ああ、それじゃあ仕方無いね。えっと……、それなら金曜日の夜とかは？」

手にした手帳に記入されているスケジュール内容を確認しながら更に聡が尋ねたが、清香は再度断りを入れる。

『その日は明良さんと映画を見に行く予定にしてまして……』

「はは……、やっぱり清香さんは皆と仲が良いね。因みに土曜日は？」

自分の顔が徐々に引き攣るのを自覚しながら、聡は諦めずに尋ねた。

『土曜日は……、お昼までお兄ちゃんと買い物をして、その後は浩一さんと友之さんが家に来るので、４人で麻雀をする予定です』

「は！？　麻雀って何それ？」

予想外の単語を耳にして声を裏返しながら尋ねた聡に、清香は真面目に説明した。

『何か、お兄ちゃんが今度小説の中で登場人物に麻雀をさせたいみたいで、実際にやってみないと臨場感溢れる文章が書けないから実践してみるとかで。面子が足りないから付き合ってくれと頼まれたんです』

「へぇ……。先生って、割と凝り性なんだ」

思わず皮肉っぽい声を出したしまった聡に、清香がすこぶる真剣に返してくる。

『そうなんですよ。それでお兄ちゃんも私もした事がないので、友之さんが教えてくれる事になって。友之さんって「娯楽の類には精通してる」って豪語するだけあって、何でも知ってて凄いんですよ！』

「……そうだね。さすがに俺もまだやった事は無いな」

感心した様に語る清香に辛うじて言葉を返した聡だったが、内心怒り狂っていた。

（これは……、以前にもチラッと思ったけど、俺が清香さんを誘う

暇が出来ない様に、絶対兄さんが仕組んでる。もの凄い悪意を感じるんだが！？　第一「精通してる」って……、単に遊びまくってるだけだろうがっ！　ふざけるなよっ！？）

「清香さん、じゃあ日曜日は誰かと約束がありますか？」

多少ムキになりつつも、精一杯穏やかな口調を装って尋ねた聡に、清香は何気なく答えた。

『日曜日は特に約束してはいませんけど、ちょっと出掛ける事にしてます』

「1人で？　買い物か何か？」

『いえ、久し振りに思いきり体を動かしてこようかな～とか思ってまして』

「俺も付き合うから」

『え？』

唐突に言われた言葉に清香が戸惑っていると、聡がその隙を逃さず畳み掛けた。

「俺も、最近体がなまってると思ってた所なんだ。そういい事なら是非とも付き合わせて貰いたいんだけど」

『いえ、でも……、聡さんに付き合って貰うのは無理かも……』

何故か言葉を濁した清香に、聡は半ば自棄になりながら言葉を継いだ。

「これでも運動神経には結構自信があるんだ。テニス？　水泳？それともジョギングとか？　1人で行くならバレーとかバスケとかの団体競技じゃないよね？　あ、それとも現地集合で待ち合わせとかするのかな？」

『いえ、待ち合わせとかはしないで、場所を借りると言うか、手合わせをお願いすると言うか』

「それなら俺も一緒に参加させて欲しいな。どうしても無理かな？」

殆どごり押し状態になっているのも自覚せず聡が訴えると、清香

が微妙に口調を替えてきた。

『それは……、大丈夫かと思いますけど。ちょっと移動に時間がかかりますよ?』

「じゃあ尚更、俺が車を出すよ。その方が移動も楽だよね」

『良いんですか?』

「勿論。ところで何を持って行けば良いかな?」

半ば押し切られた格好で清香が同行に控え目な了解を告げて来ると、聡は機嫌良く詳細について尋ねた。それに清香がまだ幾分躊躇いがちに応じる。

『えっと……、私はいつも向こうで必要な物を貸して貰ってますので、事前に聡さんが一緒に行く事を話しておけば、持ち物はタオル位で良いんですが……』

「じゃあ予め連絡をしておいて貰える?」

『それは構わないんですけど……。聡さんは柔道の経験は有りますか?』

「え?」

そこで清香から告げられたあまりにも予想外の台詞に、聡の頭の中は一瞬真っ白になった。

第１９話　男のプライド

何とか2人で待ち合わせをした日曜日。都心から一時間ほど愛車のＢＭＷを軽快に走らせてきた聡に、助手席の清香が笑顔を向けた。
「聡さん、ありがとうございました。もうすぐ着きますけど、道場の近くに駐車場が無いので、駅前の駐車場に入れて少し歩きますね？」
「ああ、構わないよ。もう少し近くなったら誘導してくれるかな」
「分かりました」
そこで来る道すがら清香から聞いた話を思い返しながら、聡が前を見たまましみじみと呟いた。

「しかし……、清香さんのご両親が結婚する時は、大変だったんだね」
「ええ、お母さんは私が大きくなってからも、散々文句を言って愚痴を言って悪態吐いてましたね。向こうからの連絡も皆無でしたし」
「そうなんだ……」
今まで疑問に思いながらも、つい詳細を尋ね損ねていた事柄を時間潰しに聞いた聡だったが、尋ねた途端清香が激しい口調で両親の結婚に至るいきさつを語り出し、一気に車内の空気が険しくなった為、尋ねた一分後には激しく後悔していた。
（しかし、従兄弟達はあの通り平気で接触してるんだが？）
清香が一通りの事情を語り尽くした後も、内心の疑問を完全に払拭できてなかった聡は、さり気なく清香に尋ねてみた。

「……因みに、お母さんの旧姓は何て言うの？」
「旧姓、ですか？　そう言えば何て言ってたかしら？……でも、未来永劫関わり合いなんか有り得ない人達ですから、知らなくても全っ然支障ありません！」

「は、はは……、それはそうかもね」
聡の問いに清香は一瞬キョトンとしたものの、すぐに苦々しげに吐き捨てた為、聡は僅かに顔を引き攣らせながら同意した。
（やっぱり皆の素性は隠したままなんだ。俺がそれをバラしたら、立場がより一層まずくなる事確実なんだろうな……）
そんな事を再認識して冷や汗を流しつつ、聡は清香の指示で駅前の通りを走り、一本横の細い道に入って首尾良くコインパーキングに車を入れた。
「じゃあ行こうか」
「はい、こっちです」

車を降りた聡が清香の案内で歩き始めると、並んで歩く清香が深呼吸でもするように軽く両手を広げながらしみじみと呟いた。
「う～ん、やっぱり落ち着くな～」
その自然な笑顔に、聡もこれまで聞いた話を振り返りながら笑顔で尋ねる。
「確かこの辺に、ご両親が亡くなるまで住んでいたんだよね？」
「はい、もう少し歩いて坂を上った所に、住んでいた団地があるんです。あ、あそこの商店街で良く買い物をしてて」
再び広い道路に出た2人の向かい側に見える、アーケードの入り口を指差しながら清香が説明してきた為、思わず聡はクスクスと笑いながら確認を入れた。
「ああ、いつか聞いた、清香さんがマスクメロンへの愛を熱く叫んだ商店街？」
「さっ、聡さん！　笑わなくても良いじゃありませんか！？」
途端に顔を赤くして喰ってかかる清香に、聡はますます笑いを誘われる。
「ごめん、でも見てみたかったな、当時の清香さん。きっと可愛かっただろうし」
「もう！　聡さんって結構意地悪です」

プイと顔を背けてしまった清香を聡が何とか宥めつつ歩いていると、ふと清香が思い付いた様に口を開いた。

「あ……、マスクメロンって言えば……、あの後おじさん達と初めて顔を合わせたんだっけ。何となく思い出しちゃった」

「え？　おじさん達って誰の事？」

不思議に思って尋ねると、清香は懐かしそうに思い返しながら当時の事を語った。

「実は商店街で『マスクメロンが欲しい』ってゴネた直後、お母さんと幼稚園から帰宅したらお客さんが三人いまして。お母さんが『清香、ご挨拶しなさい。“お父さんと昔からの知り合いの”柏木さんと倉田さんと松原さんよ』って教えてくれたんです。そして何故かおじさん達全員、マスクメロンをお土産に持って来てまして」

「……へぇ、豪勢だね」

何とも言えない表情で取り敢えず感想を述べた聡に、清香は大きく頷いた。

「そうですよね。それに3人ともなんて凄い偶然。それで私、夢にまで出てきたマスクメロンが3個も目の前に有るので、もう嬉しくて嬉しくて！」

「……それはそうだろうね」

「皆『さあ、私の持ってきたメロンも食べなさい』って次々勧めるからウキウキで食べて、食べ過ぎてお腹が痛くなったっていうオチなんですけど。それ以降“マスクメロンのおじさん”って三人に凄い懐いちゃいまして」

喜色満面で当時の事を語る清香から聡は何となく視線を逸らし、遠い目をしてから再度慎重に問い掛けてみた。

「清香さん……、ちょっと聞くけど、柏木さん達が来ている間、お母さんはどんな顔してた？」

「どんな顔って、何ですか？」

「その……、迷惑そうな顔とか、睨んでたとか……」
それを聞いた清香は不思議そうな顔をしながらも、真面目に答えた。
「最初から最後まで、もの凄くにこにこしてましたよ？　帰ってからも文句とか言いませんでしたし、その後尋ねて来た時もいつも笑顔で応対してましたし」
「そうなんだ……」
（なんとなく分かった……。恐らく柏木サイドが香澄さんと和解したくて周囲を興信所とかで探らせてた時、マスクメロンの話を偶然耳にしたんだろう）
そこまで考えた聡は、かつての地元であるこの周辺の事について、嬉々として話している清香をチラリと横目で見やった。

（それで喜び勇んで押し掛けて清香さんに好印象を持たれるのには成功したものの、恐らく終始怖すぎる笑顔の香澄さんから『余計な事清香に一言でも漏らしたら承知しないわよ！？』って無言の圧力を受けて、結局実の伯父だと打ち明けられなかったんだな）
そこで柏木兄妹の心境を思い、思わず小さな溜め息を吐く聡。
（しかしそのまま十数年経過ってどうなんだ？　しかも香澄さんはもう亡くなってるのに。香澄さんの執念深さもそうだが、妹の前にまず子供の懐柔をと、いそいそとマスクメロン抱えてご機嫌取りに出向くのもどうかと……。柏木三兄弟と言えば柏木総一郎氏の長男である雄一郎氏は勿論、婿入りした次男、三男も業界内ではいずれ劣らぬ切れ者揃いと評判なのに、そんなイメージが音を立てて崩れて）
「……さん、聡さん！」
「え？　何？」
強い口調での呼び掛けに思考を遮られ、慌てて聡が清香に注意を向けると、彼女は幾分心配そうに聡を見上げてきた。

「いえ、話しかけても上の空なので……。ひょっとして運転して疲れましたか？　それともお仕事の疲れが残っているとか……」
その問い掛けに、聡は慌てて首を振った。
「ああ、ごめんね。ちょっと考え事をしてて。何かな？」
「そろそろ道場が見えてきましたから。あれです」
「あれかい？　へえ……、思っていたよりも本格的だね」
清香が指し示す先には、昔ながらの町並みに突然出現した、かなり幅が取られている門柱の向こうに、広い戸口を開けている白い壁と瓦葺きの道場が見えた。聡を促してその門を通り抜け、開けっ放しの玄関に入り靴を脱いで下足箱に入れると、清香が躊躇う事無く奥の引き戸を開けて元気の良い声を放つ。

「師匠、こんにちは――――っ！」
戸を開ける前から勇ましい掛け声や衝撃音が響いていたが、清香がそう叫んだ途端その喧騒がピタリと静まり、畳が広がる向こうの空間からカラカラと笑う声が聞こえてきた。
「お う来たな、嬢。珍しく彼氏連れとは、骨のある男も居たもんだ。ほら、遠慮せんで入れ入れ」
「かっ、彼氏って！　そんなんじゃ！」
「本日は、お邪魔させて頂きます」
「あのっ！　聡さん!?」
清香が何と説明すれば良いかと狼狽えている間に、聡は声をかけてきた小柄で白髪だが張りのある肌の老人がここの責任者であろうと見当を付け、スタスタと歩み寄って頭を下げた。
そして男2人で何やら小声で言葉を交わしている間に、柔道着姿の小学生から中学生位までの少年達が、清香の周りにわらわらと走り寄って来る。

「さや姉、久し振り――！」
「あ～、師匠が言ってた通り男連れ～」

「清人さん公認？　んなわけ無いよな～」
「ねえ、本当に師匠が言ってた様に彼氏？」
「でも絶対清香さんの方が強いよね？」
「あ、あのねぇぇっ！」
好き勝手に言われてさすがに清香が切れかけた時、何やら話が纏まったらしい聡と清香の柔道の師匠である槙村が、笑顔で声をかけてきた。
「それじゃあ、嬢！　儂はこのボンを連れて更衣室に行っとるからな。貸す奴はいつもの所に置いてあるから勝手に使え！」
「あ、は、はい。分かりました」
「牧村さん。そのボンと言うのは……」
控え目に主張してきた聡に、槙村が真面目くさって言い返す。
「嫌かの？　なら小僧、若造、若いの、ハナタレ」
「もうお好きな様に呼んで下さい」
「うむ、人生諦めが肝心だからのぅ」
そう言って「うわははは」と槙村が高笑いしながら聡を引き連れて道場を出て行くのを見送った清香は、自分も周囲を振り切って更衣室に飛び込んだ。

「それじゃあこれを使って貰おうかの。使い終わったらこちらで洗濯するから、そのまま置いて行って構わん」
「ありがとうございます。お借りします」
更衣室に入ってすぐ準備されていた柔道着を槙村に手渡され、聡は素直に礼を述べた。そして視線で示された棚に脱いだ服を畳んでしまっていく。何故か柔道着を渡した後もその場に居残っていた槙村は、インナー姿になった聡をしげしげと眺めてから、徐に口を開いた。
「……ちょ～っと尋ねても良いかの？」
「はい、何でしょうか？」
「お前さん、見た目に似合わず結構引き締まった身体しとるの～。

何か運動はしとったか？」
「中学から大学までテニスを」
淡々と答えながら下履きを穿いていく聡に、槙村は納得した様な口調で続けた。
「ほう、まあそれなりに瞬発力と動体視力はありそうじゃな。ちなみに柔道の経験は？」
「中高一貫の男子校だったので、体育の授業でそれなりに」
何故か苦い物を含む様な言い方に、槙村は面白そうに口許を歪めながら話を続けた。

「なかなか偏った指導をされてそうじゃの～。受け身の取り方と寝技からの抜け方は、散々やらされて結構上手くなったじゃろ」
「どうして断定口調なのか、お聞きしても良いですか？」
そこはかとなく嫌な予感を覚えた聡が上衣の袖に腕を通しながら尋ねると、槙村は事も無げに言い切った。
「お前さんみたいに金持ち顔良し頭良しだと、体育会系の嫉妬を一身に受けて、散々しごかれそうじゃからの～。違っとるか？」
「……ご想像にお任せします」
思わず顔を引き攣らせながら聡が答えると、相手はわざとらしく目を見開き、感心した様に言ってのけた。
「清人の奴と違って素直じゃの～。“金持ち顔良し頭良し”の所を否定せんとは」
「……」
もう何も言う気がしなくなった聡は、黙って白い帯を締めた。
そして2人で連れ立って道場に戻ると、殆ど同時に清香も戻って来たのを見て、槙村が指示を出した。

「じゃあ儂は子供達に稽古をつけてくるから、お前達は体を解しておけ」
「「分かりました」」

頷いて道場の隅の方に移動した2人は、二人一組でストレッチを始めた。
「じゃあ始めましょうか」
「ええ。……清香さん、先生もここに通っていたんですよね。どれ位なんですか？」
柔軟体操をしながら聡が尋ねると、清香は体を折り曲げて考え込みながら答えた。
「えっと……、期間の長さなら１０歳の頃からですね。強さって事なら二段です」
「黒帯ですか……」
淡々と口にされた言葉に、思わず溜め息を吐きたくなる聡。両手を組んで互いに引っ張り合い、筋を伸ばしながら清香が当然の如く話を続けた。

「最近は何ヶ月かに一度ここに顔を出す位ですけど、学生の頃は週に何回も通ってましたし。講道館にも月に何回か、形の指導を受けに通ってましたね」
「相当強いみたいだね」
聡がそう口にした瞬間、清香は繋いでいた手をパッと解き、満面の笑みで聡に訴えた。
「ええ、もう、とても格好良いんですよ!?　バッタバッタと相手を投げ飛ばしているお兄ちゃんは！　近所のお姉さんやおばさん達が、私設ファンクラブを作ってた位ですから！」
「そうだろうね……。因みに清香さんは？」
多少やさぐれた心境に陥った聡が話を逸らそうとしたが、更に落ち込む結果となった。
「私、ですか？　１２の時に引っ越して、近くにめぼしい道場も教室も無かったんです。それでも以前は週一でここに通って来てましたが、流石に最近は真面目に通って無いので、二級止まりです」
「……それでも立派だと思うけど」

真顔で告げられた後は少しの間黙々と準備運動をしていたが、一区切り付けて深呼吸した所で、タイミング良く槙村から声がかけられた。

「よし、準備は良いかの？　嬢、久し振りに小僧達と乱取りせんか？　そっちの男は儂が基本を教えといてやるから」

そう言われた清香はちょっと驚いた様な表情で槙村を見詰め、次いで幾分心配そうに聡を見上げた。

「構いませんか？」

「ああ、俺だと相手にならないと思うからね。遠慮しないで」

「じゃあ行ってきます」

その場に槙村と二人で取り残された聡だが、別に怖気づく事は無く平然と相手を見下ろした。その視線を受けた槙村が、如何にも楽しそうに笑う。

「なかなか度胸は有るようじゃな」

「先程も言いましたが、投げられるのには慣れています。投げられていた頃は、それに感謝する日が来るなんて、予想だにしていませんでしたが」

苦笑いをその顔に浮かべた聡を見て、槙村は小さく噴き出した。

「ふっ……、それこそ『人生万事塞翁が馬』と言うやつじゃな。じゃあまず組んでみるか」

「お願いします」

そうして頭を下げた聡に手を伸ばし、まずは最初に槙村は基本的な立ち位置の確認や、重心のかけ方などをしてみせたが、一通りやってみて聡が基本はできているのを確認してからは、実戦に沿った動きをしてみせ始めた。

「ほう、ど素人で無くて安堵したわい。それだったら流石に投げ飛ばしたりしたら良心が痛むからの」

「それは良かったです」

そんな会話を交わしていると、少し離れた所から甲高い声が響き渡った。

「さあ、どっからでもかかってきなさいっ！」
「いっくぜーー！　ぶん投げてやるからな。後で泣くなよっ！」
「十年早い！」
「ぐわぁっ！」
「さや姉！　あんまり暴れてると、そこの彼氏に振られるって！」
「余計なお世話っ！」
「ぐはぁっ！」
「次、俺ね。嫁の貰い手が無かったら、俺が貰ってやっ」
「んな事言ってないでしっかり踏み込めーーっ！」
「ぐわぁぁっ！！」

年下とはいえ体格的には負けていない少年たちを次々投げ飛ばし、押し倒し、絞めまくっている清香を見て、思わず槙村は動きを止め、カラカラと笑い声を上げた。

「相変わらず元気じゃの～」
「はあ……、良いと思いますよ？」

それ以上何とも言えずに苦笑いした聡だが、次の瞬間、槙村がその懐に踏み込みながら勢い良くその襟を掴み上げた。

「嬢はな、『お兄ちゃんみたいに強くなりたい』と言って、柔道を始めたんじゃ。ほれ、しっかりかわせ！　襟を取られるな！」
「すみません」

足払いをかけて来る槙村から動いて距離を保ちつつ、再度聡が注意深く相手の動きを追う。

「それでな？　清人の奴は『強くないといけないから鍛えてくれ』と言ってきおった。ほれ」
「え？　ぐっ……」

何気ない世間話をしながら槙村が聡の一瞬の隙を突いて片手を取

り、予想外の方向に重心を崩されて聡は引き倒され、呆気なく畳の上に転がった。そんな仰向けの聡を見下ろしながら、槙村がしみじみと続ける。

「『強くなりたい』と『強くないといけない』では、響きは似とるが天と地ほどの違いがあるからの。まあ、柔道には身体的鍛錬と精神的修行の両側面があるから、取り敢えず面倒をみてみる事にしたが」

「そうですか」

なんとなく気まずい思いを抱えて立ちあがった聡だったが、先程より動きが鈍った聡の足を蹴り上げる様にして、横方向から投げ飛ばす槙村。

「ほら、甘い！」

「うっ……。本当に容赦ないですねっ！」

「馬鹿にするな。初心者相手に本気でできるか。なら本気でやってやるぞ？」

「うわっ……、ちょっ……、待っ」

起き上がろうとした所をあっさり転がされ、圧し掛かられつつ動きを封じられた聡が呻く。

「あいつは確かに腕っぷしは強くなったが、他の所はな～。師匠の儂に『気に入らん奴が行くからボロボロにしてやってくれ』と電話してくるなんぞ全くなっとらんし、相変わらず嬢に関しては馬鹿丸出しで困ったもんだ。なあ、そうは思わんか？」

「押さえ込みながら、同意を求めないで下さいっ！！」

何とか腕を抜こうとしながら足を使って体を捻っていた聡が、畳を叩きながら切羽詰まった声で訴えた。それに軽く笑いながら、槙村が手を放して立ち上がる。

「おお、すまんすまん。つい力が入ってな～」

飄々と告げた槙村の前で、聡も憮然としながら柔道着の乱れを直

しつつ立ち上がったが、そこで威勢の良い掛け声が道場内に轟いた。

「とぉりやぁぁぁっ！！」

「うっわーー、さや姉、容赦なさすぎ！！」

周囲が悲鳴を上げる中、槇村が見事な一本背負いをかけた清香を見ながらしみじみと言い出した。

「……嬢が真っ直ぐに育ったのはな～、あやつが自分の根性がねじ曲がってる事を自覚しとったから、その分気合い入れて守って真っ直ぐ育ててきたせいじゃな。まあ、それが悪いとは言わんが。……ところで、お前さんの名前をまだ聞いとらんかったが、何聡と言うんじゃ？」

「……小笠原、です」

いきなり名字を問われた聡は、一瞬口ごもったものの観念した様に本名を口にした。すると槇村が微妙に目を光らせ、探る様な視線を向ける。

「ほう？　何やら以前、聞いた事が有るような無いような名前が出てきたの」

「そうですか？　そんなに珍しい名前でも無いので、何かの折りに耳にされたんでしょうね」

「そうかもしれんな～」

その場に白々しい空気が流れる中、聡は確信した。

（この人は……、絶対に兄さんから聞いてるし分かってる。兄さんの性格がねじ曲がってるって言うなら、この人から精神的影響を受けたのも一因なんじゃ）

「それは邪推と言うものだぞ？　若いの」

「俺は何も言ってませんよ！　一体何なんですか！？」

突然前振り無く真顔で言い聞かせてきた槇村に、思わず畳にへたり込みそうになった聡だった。

そして小休憩を挟みつつ小一時間程経過した所で、槙村が徐に言い出した。
「嬢～。そろそろ小童どもに稽古をつけないといかんから、お前がこれと組んでくれんか？　そんなに筋は悪く無いから、投げの練習相手位にはなるじゃろう」
「はあ？」
思わず当惑の声を上げた聡を、槙村はじろりと睨みつけた。
「なんじゃ、不服か？」
「……いえ」
「じゃあ嬢、暫く揉んでやれ」
軽く言われて、流石に清香も不安な表情を見せる。
「はあ……、でも大丈夫ですか？　聡さん」
「ええ、何とか。無理にお付き合いさせて貰いましたし、練習台位にはなりますよ？」
「そうですか？　それなら宜しくお願いします」
そうして一礼して組み合った2人だが、聡の予想以上に清香の動きが早く、一分持たずに足を払われて畳に転がった。
（早いな……、やっぱり手加減してくれてたって言うのは本当だったか……）
苦笑いしながら槙村の表情を窺うと、笑いを堪えて自分達の方を見ているのが分かった。それで逆に聡の中で冷静さが戻って来る。
「もう一度お願いします」
「はい」
清香の手足の動きに神経を集中させながら、聡は慎重に攻め方を考えていた。
（とにかくまず動きに慣れる事だな。そして投げ技だと敵う筈がないから、なんとか寝技に持ち込めれば……）
そんな事を考えながらも聡は次々と技を決められてしまい、忽ち五回を数えた。

（冗談じゃない。投げられっぱなしで終わってたまるか！！）
そんな決意も新たに、片手を付いて立ち上がりながら清香に申し出る。
「すみません、清香さん。もう一回お願いします」
「えっと、あの……、本当に大丈夫ですか？　聡さんは初心者ですし、そろそろ休憩した方が……」
「何となくコツが掴めて来たので、続けてもう少しやっておきたいんです」
「……分かりました。それではお願いします」
「はい」
瞬時に真剣な顔つきになり構える清香に、聡も再度気を引き締めた。そして時を置かず清香が足を踏み出し、道衣を掴もうと手を伸ばして来る。対する聡も素早く体を捻りつつ手を払いのけ、すかさず逆に清香の懐に踏み込んだ。
（とにかく、より素早く踏み込んで、良い形を取る）
自分に言い聞かせながら両手で柔道着の襟近くを掴んだ瞬間、聡は力一杯清香を手前に引っ張った。それと同時に清香が僅かに体勢を崩した隙を突いて、彼女の足の間に右足を勢い良く踏み込み、その反動をつけて清香の左内腿を自分の右脚で跳ねあげようと試みる。しかし流石に年季の入り方が違う清香は、片足になった状態で踏み止まり、逆に左脚を畳に着けた瞬間、体を捻って再度手を伸ばして来た聡の右足の踵の上方を、勢い良くつま先の方向に払った。
堪え切れず背中から倒れた聡だが何とか受け身は取り、体を捻って逃れようとしたが、清香が素早く覆いかぶさる体勢になる。体重差が有る為このまま崩れて逃れるかと思いきや、清香は隙の無い動きで聡の右腕を自分の左腕で深く挟みこみ、右腕を聡の首の下から差し込んで首を抱え込みつつ柔道着の前襟を掴んで袈裟固めの体勢に入った。しかし聡も体格差と長い手足を生かして、体を捻って何

とか逃れようと抵抗する。
その一部始終をひやかし気分で見ていたギャラリーは、呆れ半分感嘆半分の呟きを漏らした。

「すっげ～、あの兄ちゃん」
「さっきまでバッタバッタ投げられてたってのに」
「ああ、初心者の癖に、何とか形になってんじゃね？」
「さや姉の腕が鈍ってるって事じゃないよね？」
「素人の根性を舐めちゃいけないって事かな」
「だよな～。惚れた女に投げられっぱなしってのは、プライドズタズタだろうし」
少年達が好き勝手な感想を口にしているのを耳にしながら、槙村は一人ほくそ笑んでいた。

「ほう？　なかなか頑張るのぉ、若いの。まあ、あの清人と真っ向から張り合おうとする男なんだから、これ位は当然じゃろうなぁ……」
そう言ってから、槙村はチラリと明かり取り用の窓を眺める。
「さて……、それではついでに余計な小ネズミにも、稽古をつけてやろうかの？」
そして畳の上で組み合っている清香と聡に背を向けた槙村は、含み笑いをしながら道場の外へと足を運んだのだった。

その日の夜。清香と夕飯を食べてから自室に引き籠った清人は、早速ある人物に電話を入れたのだが、相手の話を聞き始めてすぐに激しい怒りに駆られた。
『……いや～、こっそり覗いていたつもりが、爺さんに見つかっていきなり道場の中に引きずり込まれまして……』
「……随分なヘマをやらかしましたね。それでもプロですか？」

自分の声が万年雪より冷たいのを自覚しながら、清人は電話の相手に対する憤りを堪え切れなかった。そして清香が帰宅時に何も言っていなかった為、可能性は無いと思いつつも一応気になった事を尋ねてみる。

「それで？　俺が清香に尾行を付けていたのがバレたんですか？」

『いえ、それが……。流石に相手の男は勘付いて嫌な顔をしてましたが、爺さんが「この若いのも体験希望だそうだ。今日は多いの、皆で揉んでやれ」と誤魔化してくれまして……。妹さんにバラさせる代わりに、ガキどもに寄ってたかって散々投げ飛ばされました。今回は酷い目に合いましたよ』

（完璧に面白がってますね？　師匠……。相変わらずお達者の様で何よりです）

思わず清人は溜息を吐いてしまい、相手は多少情けない声で報告を続けた。

『妹さんが帰るのと殆ど同時に開放して貰いまして、あの男がちゃんと寄り道せずにお宅まで妹さんを送り届けるのは確認しましたから、勘弁して下さい』

「分かりました。今後はそんな失態が無い様にお願いします」

『はい、勿論です。ああ、今日の報告分をメールに添付して送信しましたので、確認お願いします。それでは』

そこで忌々しい会話を終わらせた清人は、机に向かってＰＣのメールボックスを開いてみた。すると新着メールの中に告げられた内容の物を認め、何も考えずにそれを開いてみる。

そこには今日一日の清香の行動内容の報告と、その時々の様子を示す写真が添付されていたが、ある所で画面のスクロールが止まり、清人の顔が憤怒の表情に染まった。

「あの野郎……、やはり徹底的に叩きのめしてやる……」

清人にそんな決意を新たにさせたのは、清香と聡が互いに寝技をかけようと、畳の上で絡み合っている何枚かの写真だった。

小笠原物産営業部第一課の不幸過ぎる冬は、もうそこまで来ていた。

第２０話　吹き荒ぶ寒風

学食で日替わり定食を食べていた朋美は、何を思ったか唐突に箸の動きを止め、テーブルの向かい側に座っている清香に目を向けた。
「うふふふっ……」
そのどこと無く薄気味悪い笑いに、ナポリタンを食べていた清香がフォークの動きを止めて怪訝そうに見やる。
「何？　朋美。気持ち悪い笑い方をして」
「もう１２月だなぁって思ったのよ」
「そうね。それが？」
不思議に思いながらコップに手を伸ばし、清香が一口水を飲んだ所で、朋美が幾分強い口調で尋ねてきた。
「寝ぼけてるんじゃないわよ！　１２月と言ったらクリスマスでしょうが！　どうするのよ？」
「……そうね、そろそろツリーを出さなきゃ」
若干考え込み、真顔で今後の予定を口にした清香に対し、朋美は僅かに苛々した様に箸を皿に乗せて問い掛ける。
「そうじゃなくて！　今年はイブをどうするのかって聞いてるの！」
その問いに、清香は首を傾げた。
「どうするって……、いつも通りお兄ちゃん特製のディナーを食べて……。他には特に何も」
「はあ？　聡さんはどうするのよ」
「だから、どうするも何も……、聡さんからは何も言われて無いし」
怪訝な顔した清香に、朋美が呆れた果てたといった表情で問い質した。
「どうして！？　あんた達付き合ってるんじゃなかったの？　この前あんたの兄貴に対して一歩も引かずに、オークションでガチンコ

勝負してたくせに！」

「あれは、聡さんも『ついムキになって大人気なかった』って後から謝ってたもの。元々競り落とそうとしたのも、私があのアレンジが売れ残ったらどうしようって心配してたから、親切心から気を回してくれただけだしね」

そうして何事も無かった様に食事を再開した清香に対し、朋美は如何にも疑わしげな視線を向けた。

「……その状況で、付き合って無いって？」

「うん、別に聡さんに告白とかされて無いし。それに私、女性としてはよっぽど魅力が無いと思うから、聡さんは他の人達と同様私の事を妹みたいに思って可愛がってくれてるだけよ」

事も無げに言い切った清香に、思わず朋美が憮然として尋ねる。

「なんでそんなに自分に魅力が無いと思うのよ？」

「だって私、これまで告白されても、『やっぱり気が変わった』とかでお断りされたり、『他に好きな人ができた』って謝られたりしてすぐに別れる事になってるし。最短記録は1日だよ？　どう思う？」

「さあ……、どうしてかしらね」

その理由に心当たりが有り過ぎた朋美は、気まずい思いを抱えて清香から視線を逸らした。

（全く……、あのシスコン男にちょっと脅された位で、悉く尻尾巻いて逃げ出すんじゃ無いわよ！　それを考えるとあの聡さんって、未だに粘ってるみたいだから貴重な存在なのよね……）

そんな事をしみじみ考えていると、清香が再び食事の手を止めて独り言の様に言い出した。

「やっぱり男の人って、朋美みたいに世慣れてる感じの人が好きなのかな？」

「……どうして比較対象が私なのよ」

「だって心変わりした人の九割位の人が『実は朋美さんの方が好きだった』とか『朋美さんを好きになった』とかって言って、別れを切り出してきてるから……」
そう言って幾分気まずそうに自分を見てくる清香の視線を受け、朋美は心の中で過去に清香をふった男達に罵声を浴びせた。

（どいつもこいつも腰抜け野郎どもがっ！　確かに清香の親友の私を好きになったけど、申し訳無くて近付けないって風にすれば、私と付き合わなくても不自然じゃないけど。勝手に人を別れの理由にするなっ！！　そのせいで私は親友の彼氏を悉く奪ってる、性格悪い女って陰口叩かれてるんだからね！）
これまでに陰で散々とばっちりを受けまくりで憤っていた朋美だったが、流石に清香に対しては弁明しておこうと口を開いた。

「え、え～っと、清香？」
「何？　朋美。さっきから何か変よ？」
「あの……、清香をふった馬鹿な連中が何を言ったのかは知らないけど……。それは私は全然預かり知らない事なんだからね！」
その切実な訴えに、清香は何も含む所の無い、晴れやかな笑顔を見せた。
「大丈夫よ朋美。そんな事はとっくに分かってるし、全然気にしてないわ」
「そ、そう？　ありがとう」
「だってその人達、その後実際に朋美と付き合ったりしてないし。いつも私が朋美の側にいるから、きっと声をかけ難いのよ。だから朋美の交際範囲と可能性を狭めているみたいで、却って悪いな～と思ってる位だし」
（うっ……、清香の性格が良いから、私達未だに友人付き合いが出来てるのよね……。清香ってそれほど親しく無い人間に対してはそれなりに警戒心を持ってるけど、身近な人間の言う事は素直で疑い

もしないタイプだから、本当に気が咎めるわ……）

淡々と自分の思いを語る清香に、朋美は改めて罪悪感にまみれながら、清香に言い聞かせてみた。

「あのね、清香。少なくともあの小笠原さんだけは、あの馬鹿な連中やお兄さんもどき達とは違うと思うんだけど」

「え？　どこが？　どういう風に？」

本気でそう問い返してきた清香に、朋美はどう言ったものかと少しの間落ち着かなさげに左右に視線を彷徨わせたが、結局項垂れて突き放す様な言葉を返した。

「ごめん……、そこの所は自分で考えて判断してくれるかな？」

「……うん。分かった」

何となく納得出来なかったものの取り敢えず清香は頷き、それからは二人で黙々と食べる事に専念した。そして少ししてから、ふと清香がその手を止める。

（クリスマス、かあ……。今までお兄ちゃんと過ごす事以外に、考えた事無かったなぁ……）

しみじみとそんな事を考えながら、清香は何となく窓の外で揺れている木立を眺めていた。

外回りから戻った聡が課長に簡単な報告をしてから机に戻ると、横の机に座っている高橋が自分の仕事に一区切り付けたらしく、軽く伸びをしてから聡の方に椅子を寄せて来た。

「お疲れ。１２月に入ると流石に忙しないな～。神谷工業の感触はどうだった？」

「まあまあだな。そっちの調子はどうだ？」

「……最悪だ」

自分のＰＣを起動させながら問いかけた言葉に、高橋が項垂れつ

つ暗い声で返してきた為、聡は思わず目を見張った。

「どうして。確か菱倉グループのあれ、お前が担当だろう？　結構良い線まで進んでるって、この前聞いたばかりなんだが？」

「3日前までな。……あれはボツになった」

「はあぁ！？　ボツって、お前一体何をした？　本契約寸前で納入計画の作成まで済んでた筈じゃ！」

驚いて思わず声を荒げた聡を、高橋が僅かに腰を浮かせつつ宥める。

「おい、声が大きい！」

「悪い」

流石に周囲の目を集めてしまった事に気が付いた聡が慌てて声を潜めると、高橋は途端に憤懣やるかたない風情で愚痴りだした。

「それに人聞き悪いぞ。俺は何もしていない。急に社内の方針が変わったの一点張りで、協議を打ち切られた」

「何なんだそれは……」

唖然とする聡に、高橋が尚も続ける。

「先方だってかなり乗り気だったんだぜ？　あの新素材の梱包材の導入には。軽量かつ裂いても屑が出ないのは、引越しや梱包作業の現場でメリットが大きいって。しかも従来の物より低コストで製造・納入できるし。あそこは色々な業種の子会社があるから、幅広く導入していきますって話で」

「それでも断られたのか？　訳が分からないな……」

思わず怪訝な顔で眺めた聡に、高橋は再度声を潜めて続けた。

「実は後日談もあってな。3日前に断りの電話が入った後、納得できない課長が昨日再考をお願いしに出向いたら、同じ製品が柏木産業の仲介で納入される事に決まってたそうだ」

「おい、ちょっと待て」

流石に高橋の言いたい事が分かった聡が声を荒げかけると、高橋が真顔で同意を求めた。
「なあ、きな臭過ぎると思わないか？」
「……」
そこで何とも言えずに黙り込む聡。
（まさか……、単なる偶然だよな？　ここで柏木産業の名前が出てきたのは。おそらく菱倉の内部に、柏木の人間と懇意にしてる人間が居たとかで、偶々今回出しぬかれただけで……）
不吉な予感を覚えて冷や汗を流しながら自問自答していた聡に、高橋が更に不安を煽る内容を口にした。

「……ここだけの話、他にもうちの課が手掛けている話が、立て続けに何件か潰れている様なんだ。先週辺りから課長がピリピリしてるだろ？」
「確かに神経質になっているとは思ってたが……、そのせいだったのか……」
顎で向こうの机を示され、聡が強張った顔のまま反射的に頷く。
「この不況下でも、他課の売上高は何とか昨年実績をギリギリ保つレベルで推移してるからな。うちの課だけ業績ガタ落ちだと、課長の評価にも響く事確実だし」
「どうしてこう年末に重なるかな……」
気難しげな上司の顔を見ながら思わず溜息を吐いた聡に、高橋は自分の気持ちを奮い立たせる様に、深刻そうな表情を一変させて苦笑いしてみせた。
「年末ですっきり厄落としして、新年からはガンガン行きたいもんだな」
「同感」
思わず笑いを誘われて聡が頷き、報告書作成の為のページを開いた所で、高橋が口調を変えて尋ねてきた。

「ところで話は変わるが、年越しの前にクリスマスだろ。お前どうするんだ？」
「どうするって？」
「この前話した“さやかちゃん”。誘うんだろ？」
思わず手の動きを止めて高橋を見やった聡に、相手はにやりと笑ってみせた。しかし聡は真顔になって一瞬考えてから、再び画面に向き直って手を動かしながら淡々と告げる。
「それは……、無理かな？　彼女は多分、クリスマスはお兄さんと過ごすと思うし」
「はあ？　なんだそれ？　彼氏より兄貴なのか？　しかもお前、誘う前から諦めてどうするよ！」
「そう言われてもな……」
身を乗り出して来た高橋に苦笑しつつ、聡は頭の中で冷静に考えていた。
（誘っても兄さんが許す筈無いし、下手にちょっかい出して怒らせても……）
そんな事を思いながら、同僚を納得させる様に結論付ける。
「前にも言ったけど、彼女は恋人ってわけじゃないし」
「じゃあ全然会って無いのか？」
「時々は会ってるけど。でもここ半月近くは、メールのやり取りと電話だけだな」
「へぇ……。まあ、師走だしな。因みにクリスマスは他の女との約束は」
「無い」
即答した聡に、高橋が本気で驚いた目を向ける。
「珍しいな」
「……そんな珍獣でも見る様な目つきは止めてくれ」
思わず溜息を吐いてから仕事を再開した聡だったが、器械的にキ

ーボード上で指を動かしながら、清香の事を考え始めた。

（でも……、駄目もとで話をしてみようか。申し訳無く思って、他の日を調整してくれるかもしれないし）

そこまで考えて自然に笑みが浮かび、指の動きも止めて自分の考えに浸った。

（母さんも当初の予定の半月遅れで退院が決まったから、来週末にでも招待してみればちょうど良いかな？　母さんも彼女に何かあげたい物があるとか言ってたし、後は兄さんが横槍を入れて来ない様に、如何にも尤もらしい理由を付けて……）

そんな事を考えていた聡の思考を、どうやら隣から様子を窺っていたらしい高橋の声が遮った。

「……おい、何独りでニヤニヤしてんだよ」

「別に何も？」

反射的に惚けた聡に、高橋が白い目を向ける。

「い～や、絶対そのさやかちゃんの事を考えてた。や～らしいな～」

「そんなんじゃないから」

画面から目を離さず淡々と否定した聡に、高橋が苛立たしげに椅子の向きを変えて迫りながら訴えた。

「あぁ～ムカつく。仕事もプライベートも順調な奴なんて。お前が今関わってる近海でのレアメタル採掘調査事業は、今のとこ必要な機材や物品を調達して運用するって地味な仕事だけど、埋蔵量が確定して採掘量が実際に飛躍的に伸びたら、流通販売もうちで一手に引き受けようっていう、大化けするかもしれないビッグプロジェクトだろ？　よっぽど上に期待されてるんだよお前。どっちもボロボロの俺に少し運をよこせ！」

そこで相手の台詞に疑問を覚えた聡が、手を止めて不思議そうに問いかけた。

「仕事はともかく、プライベートもって。お前彼女は？」

「……先月末に別れた」
「……今度奢る」
そこで一気に沈鬱な雰囲気を醸し出した同僚に、聡が慰めの言葉をかけようとした時、少し離れた所で課長である杉野が驚きの声を上げた。

「……はぁぁっ!?　何ですか。そんな馬鹿な話があるわけ……、何ですって!?」
「何事だ?」
「さあ……」
尋常では無い上司の様子に、2人は勿論他の部下達も仕事の手を止めて杉野を凝視する。そんな視線にも気が付かない様子で、杉野は受話機片手に立ちあがったまま、必死の形相で電話の向こうの相手に訴えていた。
「……いえ、それは……、そんな!こっちは納得できませんよ!……ええ?もしもし!?」
何分かそんな押し問答をしてから杉野は放心した様に耳から受話器を離し、叩き付ける様に元の場所に戻した。そして少しの間机に両肘をついて頭を抱えていたが、思い出した様に声を張り上げる。

「角谷、ちょっと来い!……川北もだ」
「はい!　じゃあちょっと行って来る」
「ああ」
あまりありがたくなさそうな指名を受けた聡だったが、嫌がる素振りなど微塵も見せずに立ち上がり、高橋に声をかけて歩き出した。その背中を何事かと、心配そうに高橋が見送る。
そして杉野の机の前で、主任である川北と並んで立った聡は、神妙に杉野の言葉を待った。

「課長、どうかしましたか?」

怪訝な顔つきで川北が口火を切ると、杉野はいつもにも増して沈鬱な表情と声音で話し始めた。
「お前達が中心になって進めていた“あれ”なんだが……」
「はい、三宅研究室と高見重設の意見を集約して今後の計画作成は終わりまして、後は各種登録手続きをするだけです。角谷、行政手続きの進行状況は？」
如才なく杉野の言わんとする事を察した川北がスラスラと現状報告をし、中心となって動いていた聡に続きを促した。それに小さく頷いて聡が後を引き取る。
「経済産業省、及び国土交通省への折衝と手続き代行は、滞りなく進めています。プロジェクトに参加する各企業に対しての説明も済んでいますので、来週頭には各社に出向いて本契約を」
「駄目になった」
「「は？」」
聡の話の途中でいきなり口を挟んできた杉野にも驚いたが、それ以上に言われた内容が咄嗟に理解できなかった聡と川北が、揃って間抜けな声を上げた。それを聞いて再度杉野が端的に告げる。
「その契約は中止だ。ご苦労だった」
「「え？」」
苦々しげに短く告げた杉野に2人とも呆然となったが、驚きの後すぐに猛烈な怒りが湧き上がってきた。
「どうしてですか、課長！　納得できません！」
「特に大きな問題もこれまで出ていませんでしたし、どうして今更」
「そんな事俺が知るかっ！！　こっちが聞きたい位だ！！」
机に両手を力一杯叩きつけて絶叫した杉野に、目の前の二人はおろかフロア中の視線が集まる。
「課長……」
その剣幕に思わず黙り込んでしまった二人に、両手を組んだ杉野が押し殺した声で呻いた。

「理由は分からんが、今回のこれを仕組んだ奴は分かってるんだ」
「誰ですか？」
僅かに怒気を孕んだ声で問いかけた川北に、杉野が薄笑いを浮かべつつ淡々と告げた。
「効いて驚け？　先方の担当者が漏らした所では、何をどうやったのかは知らんが、柏木産業の企画推進課二課長様が裏で糸を引いていたらしい。今回弾かれたうちの代わりに、柏木産業がほぼ同じ条件で契約してプロジェクトを進めていくそうだ」
「なんですって？」
「……それは本当ですか？」
川北は怒りで顔を赤くし、聡があまりの事態に顔を青ざめさせると、その前で杉野は発狂したかの様に先程にも勝る怒声を発しながら、手にした書類をビリビリに引き裂いて周囲に盛大に撒き散らした。

「柏木は小笠原と全面戦争でもする気なのか？　一度ならず二度までも……、ふざけやがって、何様のつもりだ柏木真澄!?　俺に何か恨みでも有るってのか!?　あの冷血吸血鬼で嫁き遅れの年増女がぁぁぁっ!!」
完全に平常心を失った上司を見て、聡と川北は逆に落ち着きを取り戻した。フロア中からの驚きと非難の視線を背後に受けた2人は互いの顔を見合わせてから、二人がかりで杉野を宥めにかかる。
「……課長、気持ちは分かりますが、少し落ち着いて下さい」
「今の発言、社内セクハラ防止規則に抵触するかもしれませんよ？」
「分かってる……」
そこで何とか落ち着いたかに見えた杉野はフラリと立ち上がり、おぼつかない足取りで廊下へと歩き出した。

「……ちょっと喫煙室に行ってくる。後を頼む」

「分かりました」
すぐ近くの係長に断りを入れた杉野は、呆然とした表情で廊下に消え、一課には重苦しい沈黙が漂った。その中を聡は自分の机に向かって歩き始めたが、突如それを遮る様に杉野の机上の電話が鳴り響く。
一瞬反応が遅れたが、係長の海藤が慌てて受話器を取って応対した。

「お待たせして申しありません。杉野課長は只今席を外しておりまして……、はい？」
話を進めるうちに何故か上擦った声を上げた海藤は、受話器を持ったまま背後を振り返った。そして何となくその方向に目をやっていた聡と、しっかり目が合ってしまう。
「はい、……はい、分かりました。今すぐ向かわせます。……それでは失礼します」
海藤と目が合った瞬間激しく嫌な予感に襲われていた聡だったが、それは受話器を置く音と共に確信に変わった。

「角谷君、悪いが今すぐ湊専務の部屋に出向いてくれ。専務が君をご指名でお呼びだそうだ」
「……はい。今から行ってきます」
「係長、どういった用件で、角谷が呼ばれたんでしょうか？」
色々諦めながら頷いた聡だったが、ここで横から心配そうな顔で川北が口を挟んできた。しかし海藤は小さく首を振っただけで言葉を濁す。
「詳しい内容は説明されなかった。ただ……、湊専務は営業部担当の役員だし……。下手すれば今回の件で叱責される可能性も……」
その場に益々気まずい沈黙が漂ってから、立ち上がったまま考え込んでいる聡に向かって、川北が気遣わしげな声をかけた。
「この件は一応俺も関わっているし、一緒に行くか？」

「いえ、どうして自分が呼ばれたかも分かりませんし、取り敢えず俺だけで行ってみますので」
「そうか……。それもそうだな」
あからさまにホッとした様子で頷いた川北に怒る気にもなれず、聡は海藤に対して軽く頭を下げた。
「宜しくお願いします。それでは暫く席を外します」
「ああ、課長が戻ったら俺が伝えておくから」

すっかり顔色を変えている一課の人間の気遣わしげわな視線と、他の課の人間の好奇心に満ち溢れた視線を一身に浴びているのを感じながら、聡は一歩一歩床を踏みしめる様にして歩き出した。
自分でも険しい顔をしているのを自覚しながら、ふつふつと湧き上がってくる怒りを何とか押さえ込もうと努力してみる。

（あの切れる柏木さんが、進んでこんな強引な手法を取るとは思えない……。どう考えても、他の人間の意図が関わっている筈……）
一人きりのエレベーターの中で、腕組みした聡は壁にもたれながら考えを巡らせ、小さな声で吐き捨てた。

「……幾ら俺の事が気に入らないからといって、ここまでやりますか？　とことん迷惑な人ですね、兄さん」
そしてエレベーターを降りて廊下を進んだ聡は、目指すドアの前で足を止め、深呼吸してから重厚感溢れるドアに手を伸ばしてノックをしたのだった。

第２１話　遅れて来た反抗期

「失礼します」
秘書の先導を受けて聡が湊の部屋に入ると、正面の机で仕事をしていたらしい湊が相好を崩して声をかけてきた。
「ああ、すまないな角谷君。仕事中に急に呼びつけたりして」
「いえ、それはお構いな、く……」
如才なく言葉を返そうとした聡だったが、手前の応接セットに腰を下ろしている人物を認めて口ごもる。

「父さ……、社長もいらっしゃいましたか……」
「居てはまずいのか？」
「……いえ」
小笠原物産社長であり、自分にとって厳格な父親でもある小笠原昭に面白く無さそうな表情で睨まれて、聡も憮然とした表情で言葉を返した。そんな親子を取り成す様に、昭とは入社以来の友人であり聡とも自宅での面識がある湊が、椅子から立ち上がりながら聡に声をかける。
「まあ、そこに座ってくれ。いきなり社長室に呼び付けたら君の立場が無かろうと、私がこいつをここに呼んだのでな」
「……失礼します」
昭とは微妙に視線を外しつつ、湊に断りを入れて聡は長椅子に腰を下ろした。そして湊がその反対側で昭の隣に腰を落ち着けると、手にしていた書類を聡に向かって差し出す。

「それで君を呼びつけた理由だが……、まずこれを見て貰えるか？」
「はい」
素直に受け取って内容に目を走らせた聡だったが、次第にその顔が強張ってきた。

「これは……」
「まだ社内に公表してはいないが、見ての通り、この一月程の間に営業一課が関わっている業務内容のうち、駄目になった物の一覧だ」
「……こんなに、ですか」
思わず呆然と呟いた聡に向かって、昭が鋭い視線と口調で追い打ちをかける。
「今日は更に大きな仕事が盗られたようだが？」
「……っ！」
僅かに顔を紅潮させながら、盛大に喚きたいのを何とか堪えた聡だったが、ここで湊が口を挟んできた。

「ところで角谷君。調べてみたら、これらにはちょっとした共通点が有ってね」
「どんな共通点でしょうか？　確かに一課が取り扱っているのは資源・エネルギー関係と工業用品関係ですから、取引相手に共通点が有ると言えば有りますが……」
バサバサと書類を捲りながら、困惑気味に再度目を走らせた聡だったが、湊は手を伸ばしてその端を軽く何度かつつきながら、思わせぶりに話を続けた。
「取引相手の企業、及び横から参入した企業の担当者もしくはその上司に、東成大経済学部卒が名を連ねてる。特に特定の年度の卒業生が多いな。後は……、柏木産業の縁故企業とか、柏木兄弟の姻戚関係に当たる家が創業者の企業とか……」
「まだ私達が何を言いたいのか分からんか？」
父親に冷徹極まりない口調で駄目出しをされ、聡は必死に歯軋りを堪えた。
（やっぱり兄さんの仕業か……。たかが一介のシスコン作家と油断したのが間違いだったな……）
本人に面と向かって言えば叩きのめされる事間違い無しの事を考えた聡は、ここまでバレているなら仕方が無いと、潔く腹を括った。

「分かりました、お話しします。一月半位前から佐竹清香さんとお会いしてます。先月末には佐竹清人本人と顔を合わせました」
厳しい顔の昭に対し、微塵も臆することなく真っ向から言ってのけた聡の言葉に、湊が思わずといった感じで片手で顔を覆いつつ呻き声を上げた。
「やってくれたな、聡君」
「湊さんは彼の事をご存知なんですか？」
不思議に思った聡が湊に目を向けると、湊は苦笑いを零した。
「昭とは同期入社以来の腐れ縁だからね。因みに、君は《会長ご乱心仏花事件》を知っているか？」
「……何ですか、その得体の知れない名称は」
呆れて問い返した聡だったが、今まで耳にしていなかった祖父の清人への働きかけと、清人の実の祖父に対して行った常識外れの所業についての全てを湊から説明され、今度は聡が頭を抱えた。
（そんな事が……。いや、確かにあの爺さんは自己中心的かつ虚栄心の高い人でしたが、幾らなんでもそれはないんじゃないですか？兄さん）
愕然として呆然自失状態になった聡だったが、そこで冷え切った声が耳に届いた為、瞬時に意識を切り替えて心に防御壁を張り巡らせた。

「聡……。お前に彼の事を話して聞かせた時、私は『彼に関わるな』と言わなかったか？」
「仰いましたね、確かに。ですから彼では無く彼の妹と会っていただけです。彼とは学園祭で予想外に遭遇しましたので、不可抗力です」
「詭弁だな」
「どうとでもお取り下さい」
「おいおい、二人とも。人の部屋で親子喧嘩は止めてくれないか？」

正面から睨み合い、バチバチと火花が散りそうな雰囲気を醸し出す両者を見て、真っ先に湊が音を上げた。しかしここでノックの音と共に隣室に控えている秘書が顔を出し、新たな来客を告げる。

「失礼します。専務、望月様がいらっしゃいました」

「ああ、通してくれ」

「それでは俺は」

「まだ話は終わって無い」

鷹揚に頷いた湊を見て、自分は席を外した方が良いのかと腰を浮かしかけた聡だったが、面白く無さそうな口調で昭に引き留められ、憮然とした顔付きになる。それを取り成す様に湊が補足説明をした。

「君にも聞いて欲しい内容の話をするから、このまま座っていてくれ」

「はあ……」

何となく釈然としない顔つきながらも聡が再びソファーに座ると、三十代前半と見られる男が1人室内に入ってきた。

「失礼します」

「ああ、わざわざ足を運んで貰って悪いね。こちらにかけたまえ」

「はい」

役員室に呼び出されて緊張しているのか強張った顔つきで挨拶した彼だったが、指し示されたソファーに自分よりも若い聡が座っているのを見て、何となくほっとした様に僅かに顔を緩めた。勿論そんな心境など手に取る様に分かっている湊が、相手の緊張を解す様に笑顔で話しかける。

「望月君、そう緊張しないで。別に叱責しようとしてこんな所に呼びだしたわけじゃ無いんだ」

「は、はぁ……」

「役員に就任した途端、現場の人間と交流が持てなくなってね。私は時々将来有望な若手を選んで、現状の問題点や将来のビジョンに

ついて忌憚のないやり取りをするのを楽しみにしているんだよ。今日は偶々横に鬱陶しいのが居るが、置物だとでも思って率直な議論が出来たら嬉しいと思っているんだ」

「そうだったんですか？　こちらこそ光栄です！　宜しくお願いします！」

《将来有望》の一言で舞いあがったらしい望月は、横に無表情で座っている昭の事も忘れた様に喜色満面になって湊に頭を下げた。

そしてその瞳に思慮深い色を湛えながらの、湊の追究が始まった。

「それで……、私も経験があるが、営業だと仕事をする上で人脈作りと言うのは重要だろう？」

「はい、全くもってその通りです！」

「仕事関係でのそれも重要だが、商談での話題の幅を広げる上でも、経営畑だけではなくて異種業種の人間との交流は欠かせないんじゃないかな。ひょんな事からビジネスチャンスに結び付く事もあるし」

「そうですね…。以前囲碁が趣味と聞いていた商談相手と、碁石の材質について話が盛り上がった事があります。大学時代に博識な友人が話していたのを、聞きかじった程度の知識だったんですが」

「なるほど。……しかし普通だったら自分の知識としてひけらかすものを、望月君は友人の話から仕入れた知識と素直に述べる事ができるとは、率直で好ましいな。営業をする上でも真摯な態度は必須条件だからね」

「あっ、ありがとうございます！」

穏やかに微笑まれつつ高評価を受けたと感じた望月は、顔を紅潮させ涙ぐまんばかりに喜んだが、湊の眼が決して笑っていない事を見て取った聡は、内心で舌を巻いていた。

（……流石、営業部時代は『鬼の角谷、仏の湊』と、父さんと並び称されただけの事はある。喰えない人だ……）

「ところで……、大学時代の友人と言うと、その博識な友人とやら

も東成大の経済学部出身だね？　今は君と同じ様に営業の第一線で活躍しているのかい？」

（え？　ちょっと待て、それってまさか……）

何かを探る様に湊が言い出した内容に聡が嫌な予感を覚えたが、それは望月によって最悪の形で肯定された。

「いえ、実は彼は俺と一緒にここに内定を貰ったんですが、作家になるからと断ったんです。ご存知ありませんか？　東野薫の名前で活動しているんですが」

（やっぱり……）

思わず項垂れてしまった聡には構わず、湊は人の良い笑顔を望月に向けた。

「ああ、覚えているよ。佐竹君、だったかな？　面接には私も同席したしね。なかなか優秀な人材が来てくれると喜んでいたのに、縁が無くて残念だよ」

「本当に、彼位頭が良くて見た目も良くて性格が良い奴なんていませんでした。俺も彼と机を並べる事が出来なくて残念です。ここの内定を辞退をした後、俺に『自分の我が儘で今後の後輩の就職に差し障っては申し訳ない。勝手な事を言ってすまないが、俺の分まで小笠原で頑張ってくれ』って激励してくれて。あいつこそ本当の、男が惚れる男ですね！」

如何にも残念そうに嘆息して見せた湊に、望月も力強く頷く。しかし語られた内容から、望月以外の三人は望月と清人の関係を正確に把握した。

（（（性格が良いなんて、絶対騙されてるな……。こいつ友人とか言っていたが、相手はそう思って無いに決まってる）））

思わず白けた空気が漂ったのも束の間、望月がふと傍らの聡を振り返り、親しげに語りかけてきた。

「ああ、そう言えば！　君は一課の角谷君だよね？　こんな所で顔を合わせるなんて奇遇だな～。君、今佐竹の妹さんと付き合ってるんだって？」
「え？」
いきなりの予想外の台詞に聡が最大に顔を引き攣らせ、昭と湊が鋭く目を光らせた。そんな事とは露知らず、望月が嬉々として聡に話しかける。
「実は卒業以来没交渉だった佐竹が、どうやってか俺の連絡先を調べて最近電話してきたんだ。世間話の後『実は妹がそちらの営業部の男と付き合ってるみたいで、どうも心配だからどんな人物なのか知ってる事があれば教えてくれないか？』と言われたんだよ」
「あの……、それで……」
ソファーの向かい側から突き刺さる様な視線を浴びた聡は、冷や汗を流しながら一応先を促してみた。
「いや～、あいつは学生時代から妹の事になると目の色変えてたから。ミス東成大とのデートを『妹が風邪をひいたから帰って消化に良いものを作らないといけない』ってすっぽかす位で」
「は、はあ……」
当時を思い出したのか笑いを堪えながら望月は語ったが、聡は生きた心地がしないまま軽く頷いた。

「まあ、同じ営業部所属といっても課が違うから、電話があった時点で君の名前と顔も一致してなかったし。だから保留にしてもらって、君の事を調べて教えてやったんだ」
「因みに……、どんな事を……」
恐る恐る尋ねた聡の顔色を見て、何やら誤解したらしい望月は、バシバシと聡の肩を叩きながら気合いを入れる様に明るく言った。
「そんな心配そうな顔をするなよ！　同じ社員の事を悪し様に言うわけ無いじゃないか。レアメタル採掘調査プロジェクトとか、原油精製プラントでの新素材フィルター導入とか、遠心分離機の新型接

合部品の調達とか、社内でも有望と思われてる事業に関わったり任されたりしてる、若手でもピカイチの実力保持者で将来を嘱望されてるイケメンだって、目一杯ヨイショしてやったからな！！　安心してくれ！」

「……ありがとうございます」

（（（やっぱりこいつか……）））

墓穴を掘りまくりの望月を哀れに思って項垂れた聡に、流石に顔を引き攣らせた湊。しかしそれでも昭は無表情のままを無言を保った。

「まあ、そんなわけで、妹が関わってくる事だから流石にちょっとは風当たりが厳しいかもしれないが、頑張れ！　最後まで諦めるなよ？　角谷君」

「ご声援ありがとうございます」

もうほとんど自棄で聡が礼を述べると、湊が輝くばかりの笑顔で望月に話しかけた。

「なるほど。望月君は友人関係でも幅広い交流がある様だね。感心したよ」

「いえ、それほどでも」

照れている望月を一瞬気の毒そうに見やってから、湊は彼に別れの言葉を告げた。

「これからもどんどん見聞を広めて、小笠原の為に頑張ってくれたまえ。今日は時間を割いて貰って悪かったね。もう戻って構わないから」

「はい！　それでは失礼致します」

よくよく考えれば殆ど清人に関わる話しかしていないのだが、望月は湊の笑顔と話術によってその事実を誤魔化され、ほんの少しも疑問に思わずに上機嫌で自分の部署へと戻っていった。

そして彼が去った後の室内で、情け容赦無い評価が下される。

「全く……。笑顔の裏の裏を読めんとは、大した人物ではないな」
「仕方あるまい。この場合、相手が悪過ぎる。あの程度の人間を誘導するなど、佐竹君にとっては簡単だろう」
「彼は現在主任だったな。来年度の人事異動考察では係長へ昇格の打診がされていた筈だが、問答無用で却下だ」
「漏らしているつもりも悪気も無かったとはいえ、簡単に外部の業務内容を漏らしたのは問題だからな」
（兄さん……、あなた同級生の出世の機会を潰しましたよ……）
暗澹たる気持ちになっていた聡に、昭が再び向き直って声をかけた。

「今話が出た業務の進行状況はどうなってる」
「レアメタル以外は今の所順調に進行していますが……」
「なるべく早急に対策を取れ。……恐らく手遅れだろうが」
「了解しました」
思わず口ごもった聡に冷たく言い放つ昭。一言も反論できないまま、聡は頷く事しかできなかった。
「それに情報源は彼だけでも無いだろう。東成大出身者を中心に、洗い直す必要があるな」
「しかし恐らく本人は意図的に情報を引き出されたとは思っていないだろうから、厄介だな。女を使って誑し込んだりしてたら、誰も彼も調査対象になるぞ？」
今後の対応策として一通り湊と意見を交わした後、昭は腕組みをしながら聡を睨みつけた。

「さて、どう落とし前をつけるつもりだ？　角谷君。君の自分勝手な行動で、既に小笠原は甚大な被害を被りつつあるのだが？　あまりにも馬鹿馬鹿しくて、理由を公表する気にはなれんがな」
「……」
社長の顔で迫った昭に、聡は無意識に唇を噛みしめた。すると昭

が端的に告げる。
「さっさと手を引け」
「仰る意味が分かりません」
即座に言い返した聡に、昭の片眉が上がった。
「今更だが、今後一切佐竹清香嬢と接触する事を禁じる」
「いくら社長でも、プライベートに関して指図されるいわれはありません」
「……それなら、父親として息子に言っている」
「お断りします」
「ほう？」
表情を消しつつ淡々と断りを入れた聡に、昭は一層低い声になって凄んだ。

「叩き出されたいか？」
その脅しに似た台詞を、聡はせせら笑った。
「会社からですか？　家からですか？　俺は一向に構いませんが、その場合どちらにしてもあの人との関係が取り沙汰される事になりますね。馬鹿息子の俺の後始末を押し付けられるあなたが気の毒です。先に謝っておきます」
そう言って軽く頭を下げた聡を見て、昭は舌打ちでもしそうな表情を見せた。
「……口が減らなくなったな」
「あともう一つ。彼女の都合が良ければ、来週末にでも家に招待しようかと思っています」
「何？」
今度こそ殺気さえ感じる視線を昭が投げかけたが、聡はそれを真正面から平然と受け止めた。
「彼女から母さんの退院祝いを貰いましてね。母さんが凄く喜んで、彼女を招きたがっているんです。……ああ、勿論あなたはその日、家にいらっしゃらなくても良いですよ？」

睨み合う事数秒。何故か先に視線を逸らしたのは昭の方だった。

「……勝手にしろ」

ソファーから立ち上がりつつ捨て台詞の様にそう呟くと、昭は湊に軽く会釈だけしてその場から立ち去って行った。そして重圧感から解放された聡が、深い溜息を吐きだす。

（取り敢えず、なし崩し的に家に招待する事への了解は貰えたか？）

自分の気持ちを奮い立たせる様に、前向きにそんな事を考えていた聡の耳に、湊の笑い声が聞こえてきた。

「……っ！　はっ、ははは っ！　聡君、言うようになったじゃないか！　良い面構えにもなっていたし、今頃反抗期到来か？　あのひょろひょろして、おどおどしてた子供の印象しか無かったから、すっかり見違えたぞ」

「湊さん……。いつの話ですか」

腹を抱えて笑う湊に、小さい頃から顔見知りだった聡は憮然として文句を言った。それに気を悪くする素振りは見せず、ひとしきり笑ってから湊は真顔に戻り、心配そうに尋ねた。

「しかし、由紀子さんが清香さんとやらを招待したがっていると言うのは本当かい？」

「はい。兄の事を考えると、俺は難しいかと思っているのですが……。父もあの通り嫌がっているみたいですし」

「先方の都合は別として、昭の奴は反対しない筈だぞ？　由紀子さんが希望しているなら」

「どうしてですか？」

その聡の素朴な問いかけに、湊も平然と答えた。

「どうしてって……、昭は由紀子さんに惚れ込んでるから、頼まれたら嫌とは言えないだろう」

「……はぁぁぁっ！？」

予想外の事を言われて聡は本気で驚いたが、湊も予想外の反応をされて戸惑いの色を見せた。
「え？　どうしてそんなに驚くのかな？　聡君」
「いや、だって湊さん！　父さんが母さんと結婚したのは、社長の椅子と財産が目当てでしょう！？」
必死になって言い募った聡に、湊が反射的に眉を顰める。
「……聡君。幾ら何でも息子の君がそれは無いだろう。誰に吹き込まれてそんな事を信じてるんだ？」
「母から直に聞いたんですよっ！」
「はあ？……まさかあの馬鹿、誤解を正さないまま未だにそのままだって言うわけじゃあるまいな」
叫ぶ様に訴えられた聡の台詞に、湊は一瞬ポカンとしてから苦々しい表情をその顔に浮かべ、ボソボソと呟いた。それに逆に聡が疑問を覚える。

「何ですか？　誤解って……」
思わず尋ねた聡を見返し、湊は重い口を開いた。
「実は……、昭の奴入社何年目かの時に、偶々何かの用で来社した高校生の由紀子さんに、一目惚れしてな」
「……は？」
聡が（今、何か変な事を聞いた）という様な顔で呆けている為、湊は溜息を吐いて念を押した。
「言っておくが、冗談とかじゃないぞ？」
「あの、でも、まさかそんな！？　え、ええ！？」
動揺著しい聡が必死になって次の言葉を選んでいると、それを無視して湊が淡々と昔語りを始めた。

「だけどなぁ……、相手は社長が溺愛してる一人娘だし、あいつはしがない和菓子屋の倅だから、婿として社長のお眼鏡に適う筈も無いって最初から諦めててな」

「はあ……」
「あいつはそれでも他の女なんか見向きもしないで、密かに偶に見かける由紀子さんをずっと想っていたんだが、出会って十年しないうちにどこぞの馬の骨と駆け落ちしたって風の噂で聞いて、もう荒れる荒れる。『こんな俺でも勇気を出して告白してれば良かった』って。一晩中飲んで暴れたあいつに付き合って色々な後始末をしてやったのは、何を隠そうこの俺だ」
「……その節は、父が大変お世話になりました」
心の底から湊に申し訳ない気持ちになり、座ったまま聡は深々と頭を下げた。それに真面目くさって頷いてから、湊が話を続ける。
「全くだ。……結局、由紀子さんの最初の結婚は上手くいかずに何年かで実家に戻っただろう？　既に当時会長として実権を奮っていた君の祖父は早速縁談を企てていた様だが、由紀子さんは悉く拒否していたらしいな。まあ、彼女の心境を考えれば無理も無いが」
「そこら辺の事情については、母から聞いています」
「外部との縁談が難しくなると、会長は社内での有望株を漁りにかかってな。しかしやはり家柄とか縁戚とか後見とか、会長が納得する奴らから話を持ち掛けていったから、同期の中ではダントツに優秀でも、あいつの優先順位はかなり低くて最後に近い方だったと聞いてる」
「そうでしょうね」
当時の父親の心境を思って、思わず溜息を吐いた聡だったが、そこで何故か湊が苦々しげな顔つきになった。
「それで……、同年代の人間にはその時点で既婚者も多かったし、幸運な事にあいつにお鉢が回って来たんだが、いざ自分に話が舞い込んだ時に怖じ気づきやがって……」
「どうかしたんですか？」
「俺に真剣な顔で『由紀子さんに何て言って結婚を申し込んで良い

か分からないから教えてくれ』と言いやがった」
「……その話、作ってませんか？」
もの凄く疑わしげな視線を向けた聡に、湊がうんざりとした口調で言い聞かせる。
「実話だから。あいつは無愛想だがセールストークだけは抜群なんだ。必要なら笑顔の大盤振る舞いだってする。だが、進んで女を口説く様な真似はした事が無くてな」
「すみません。俺の記憶違いでなければ、母と結婚した時、父は３８歳だったような気がするんですが」
「ああ、それで間違いない」
「……」
最早匙を投げた様な口振りの湊に、聡は当時の父をフォローすべきかどうか真剣に悩んで黙り込んだ。
しかし何故かそこで、湊が居心地悪そうに視線を彷徨わせながら、気まずそうに言い出す。
「その……、だな、聡君」
「はい」
「それで……、どうも、財産目当て云々に関しての誤解は、多少は俺のせいかもしれない、と思うんだが……」
「どういう事ですか？」
本気で首を捻った聡に、湊は重苦しい口調で続けた。
「あいつの前に振られたのは、皆あいつより顔が良かったり、口説き文句なんか挨拶代わりに出る連中でな。そいつらと同じ様な事を喋ってもインパクトを与えられないし、感銘も受けないだろうと思ったんだ」
「それで？」
「思わず『どうせ財産狙いだって本人からも周囲からも思われるだろうから、通り一遍に惚れてる云々言うよりも、俺だったらしっかり財産を管理できるとかアピールしたら良いんじゃないか？』って

冗談半分で言ったんだが……。その様子ではそのままストレートに言った挙げ句、結婚してからもそのまま放置した可能性が……」

言われた内容を頭の中で反芻した聡は、あまりと言えばあまりの内容に一瞬遅れて非難の叫びを上げた。

「湊さん！　何なんですかそれはっ！」

「いや確かに、無責任な事を言った俺も悪かったかもしれん。だが聡君。両親を見ていれば、そこら辺は自然に分かるものじゃないのか？　由紀子さんは煙草の煙が嫌いだからあいつは家の中や彼女の前では吸わないし、常に率先して由紀子さんの前でドアの開け閉めはするし、小笠原の財産は全て由紀子さんと君の名義になってる筈だぞ？　他にも挙げればキリが無いが」

必死に弁解する湊に聡が吠える。

「それはっ！　父が婿入りした事で、見た目に似合わず母に対してひたすら卑屈になってる結果だと！　親戚連中もそう言ってましたし！」

「そんなわけあるか。単にあいつが由紀子さんにベタ惚れしてるだけだ。下手すりゃ箸より重い物を持たせるなんて、言語道断だとか思ってるかもしれん」

「……今更勘弁して下さい」

とんでもない驚愕の事実を知らされて、聡は一気に脱力した。

（父さんは母さんに惚れ込んでて、母さんもそれなりに父さんの事信頼してるなんて、俺が以前から思ってた関係とは全然違うじゃないか……。真剣に両親の不仲を疑って悩んでた、あの頃の俺の時間を返せ……）

思わず自分の思春期の頃を振り返って物悲しくなった聡だったが、そんな聡の心境を知ってか知らずか湊が朗らかに声をかけた。

「まあ、良い機会じゃないか。この際君が間に立って、そこの所を2人でじっくりと話し合って貰ってはどうだ？　何と言っても子は

かすがいと言うしな」
「努力してみます。……ところで他にお話は」
「もう無い。角谷君、戻って構わんよ」
途端に重役の顔に戻って指示した湊に、聡も一社員として立ちあがって頭を下げた。
「それでは失礼します」
そうしてドアに向かって歩き出した聡だが、その背中に能天気過ぎる声がかけられた。

「ああ、聡君。清香嬢との事も頑張れよ？」
「……」
その如何にも楽しんでいるとしか思えない声音に、思わず床に蹲りたくなった聡だった。

第２２話　思案の巡らせ方

聡から連絡を貰って自宅を訪問する事を了承していた清香だったが、師走の忙しさに加えてそこはかとなく醸し出している清人の不機嫌さに何となく怖気づき、その事を告げたのは１２月もそろそろ下旬に入ろうかという時期の、木曜日の夕食の時間帯だった。

相手の機嫌がそれほど悪くないのを確認した清香が声をかけ、その旨を説明したのだったが、話の途中で清人から鋭い却下の言葉が下される。

「……そういう訳で、明後日の土曜日の午後、聡さんのお家に招待されて」

「駄目だ」

「どうして？」

頭ごなしに言われて流石に気分を害した清香に、清人が箸を動かしながら淡々と言い聞かせた。

「先方にご迷惑だろうが。特に退院した直後だそうだし」

「そのお母さんが、是非にと言って下さってるのよ？」

「それは所謂社交辞令という奴だ。本気にする奴があるか」

取りつく島も無い清人の様子に、清香はムラムラと反抗心が湧いて来た。と同時に、黙々と食べている清人の顔を凝視して、少し前から考えていたある推測を口にする。

「……お兄ちゃん。この前の大学祭の時もチラッと思ったんだけど、ひょっとして聡さんの事があまり好きじゃないの？」

すると清人は清香の顔をチラリと見てから断言した。

「そうだな。はっきり言わせて貰えば嫌いだ」

「どうして！？　聡さんは親切だし優しいし、思いやりのある大人の人だと思うけど？」

「ちょっと外面の良い男に騙されるなんて、清香はまだまだ子供だ

な。だから心配で目が離せないんだ」
流石にそこまで言い切られると思っていなかった清香は本気で驚き、聡を庇う発言をしたが、清人は大人の余裕を醸し出しながら薄く笑った。それに清香が猛然と噛み付く。

「ちょっとお兄ちゃん！　それは幾ら何でも聡さんに対して失礼でしょう！」
「俺は本当の事を言ったまでだ」
「じゃあ聡さんが何をどう騙してるって言うの。その根拠があるなら言ってみて！」
「……」
きつい基調で迫った清香だったが、自分と小笠原の関係をばらしたくない、かつ考えるのも嫌な清人としては、本当の事を口にするのは躊躇われた。
結果無言になった清人を眺めて、清香が箸でご飯を口に運びながら、心底呆れた様にボソボソと呟く。

「そんな、子供じゃないんだから……、オークションで競り合ったのが幾ら気に入らないからって……」
「そんな事じゃない！！」
「お兄ちゃん？　どうしたの」
勢い良く箸をテーブルに叩き付ける様に置いて清人が怒鳴り、清香が驚いた顔を向けたが、すぐにそっぽを向いて吐き捨てる様に呟いた。
「……何でも無い。もう良い。勝手にどこにでも行ってこい」
「そうさせてもらうわ」
口調は冷たく言ったものの、清香は心配そうな視線を清人に向けた。
（本当に何なんだろう？　最近のお兄ちゃんって、絶対変よね……）
そんな事を考えていると、何やら考え込んでいた清人が声をかけ

てきた。

「清香」

「ん、何？」

口の中の物を飲み込んでから尋ね返すと、清人はいつも通りの顔で言いだした。

「明後日は午後から出かけるとか言ったな？」

「うん、言ったけど。それが？」

「それなら……、ちょっと午前中に行って来て欲しい所がある」

「どこに？　場所にもよるけど」

互いに相手の反応を窺いつつのやり取りになる。

（まさか聡さんの家に行かせない為に、仙台とか大阪とかに行って来てくれとか言わないわよね？）

（本当なら小笠原の家なんかに行かせない為に、北海道とか沖縄とかに行って来てくれと言いたい所だが仕方が無い……）

兄妹で似た様な事を考えていたが、清人が口にした内容は清香にとっては意外な事だった。

「都内だ。久しぶりに甘い物が食べたくなった。神田に行って例の奴を買って来てくれないか？」

そう言われた清香は、すぐに快く了解した。

「ああ、あれね。あそこなら十分時間内に戻って来れるし、分かった。行ってくるわ」

「頼む」

（そうよね。お兄ちゃんがそんな意地の悪い事考えるわけないものね。変な事考えて悪かったわ。大好きなあれ、多目にゲットして来ようっと！）

（あの男があの時の事をまだ根に持っているかもしれんし、旨い物は旨いからな。清香には何も言わなくても、ついでに買っていくだ

ろう）

二人の思惑はどうあれ、それからの佐竹家の食卓は平穏なものだった。

そして約束の土曜日。小笠原家の広いリビングでは、由紀子が1人そわそわしていた。

「聡、そろそろ清香さんが来る時間じゃないかしら？」

「落ち着いて、母さん。駅に迎えに行く事を話しておいたから、到着近くになったらメールか電話がくる筈だよ」

「それじゃあ、お迎えを宜しくね」

「ああ。だからソファーに座ってて」

緊張の為か、先程からうろうろと室内を歩き回っている母に聡が笑って促してから、真正面の1人がけの椅子に座っている父親に、胡乱気な視線を向けた。

「……ところで、父さんは今日午後から、共和工業と中西産業の社長とゴルフとか言ってませんでしたか？」

その問いかけに、読んでいた新聞のページをバサリと捲りながら、昭は面白く無さそうな声で答えた。

「先方の都合で延期になった。俺が家に居ると、何か不都合でもあるのか？」

「いえ、別に何も」

憮然として黙り込んだ聡だったが、ここで昭の横の1人掛けのソファーに座った由紀子が、慎重に口を挟んだ。

「あの……、昭さん？　聡は清香さんには清人と私達の関係は一切話していないの。勿論清人も清香さんには話していないし、そこの所は……」

「分かっている。余計な口は挟まん」

「……お願いします」
懇願口調にも昭は端的に答えるのみで、由紀子と聡は一抹の不安を覚えて目と目を見交わす。
（こんな調子で大丈夫かしら？　以前清人に殴られたのを恨んでても、まさか清香さんに手を上げる様な真似はしないと思うけど、嫌味の一つも言いそうで……）
（好き好んで騒ぎは起こさないだろ。……そう言えば、父さんの一目ぼれ云々の話、忙しさにかまけて母さんにするのをすっかり忘れてたな。まあ、そのうち何とかなるかな）
三人が三人とも何やら悶々と考え込んでいると、ドアをノックして家政婦の塚田が顔を出した。

「失礼します」
「あら、塚田さん、どうしたの？」
何気なく由紀子が顔を向けると、塚田は淡々と報告して来た。
「先程門の所に佐竹様と名乗る女性の方が見えられまして、奥様からお伺いしていたお名前でしたので、通用口から入って頂きました」
それを聞いて驚きに目を見張る由紀子と聡。
「はあ？　門に来てた？」
「駅まで迎えに行くんじゃ無かったの？　聡」
「いや、そのつもりだったけど。ちょっと出迎えてくる」
そう言うやいなやバタバタとリビングを走り出ていった聡を見て、新聞の裏側で昭が顔を顰めた。
「……騒々しいな」

清香は最寄駅到着が間近になったら迎えに行くので連絡をと聡に言われていたが、冬とは思えない陽気の良さに心がウキウキし、駅から歩いていく事を選択した。予め聞いていた住所を携帯のナビに打ち込んでみたら、意外に分かりやすい経路だった事もそれを後押ししたのだ。

「迎えに来てくれるとは言われたけど、歩いて15分だものね。ちょうど良い運動だったわ。駅からほぼ一直線で、分かり易かったし」
周囲の景色を眺めながらの散策気分で、上機嫌のまま歩いていくと、目指す門の前に首尾良く到達する。そしてその門構えに圧倒された。

「えっと……、ここ、よね？　住所は確かにここだし、小笠原って表示も有るし」
3メートル程の塀で囲まれたそこには、大型トラックでも悠々と通れそうな大きな両開きの門扉が存在しており、中を窺い知る事は出来なかった。そしてその傍らには、楽に二台か三台は車が入りそうなスペースの車庫がシャッターを下ろしていた。
それらをポカンと見上げた清香は、少しして辺りを見回してみる。
「社長さんのお宅だけあって、流石に大きいお屋敷よね。……これ、インターフォンだよね？」
門柱の横にポツンと設置されていたモニターとボタンを発見した清香は、迷わずそのボタンを押してみた。
すると大して時間もかからず、声が聞こえてくる。

『……はい、どちら様でしょうか？』
それを受けて、清香はモニターに向かって軽く頭を下げつつ、名前を述べた。
「すみません、佐竹と申します。今日こちらをお訪ねする旨を伝えてある者ですが」
『お待ちしておりました。横の通用口のロックを解除しますので、そちらからお入り下さい』
「ありがとうございます」
礼を述べるとほぼ同時に、門扉の横に設置されていた小さな扉の解錠する音が聞こえ、その戸を潜って清香は邸内へと入った。

「うわ……、広いお庭。手入れも行き届いてるわね」
左右に広がる綺麗に刈り込まれた庭園に清香が感嘆の溜息を漏らしつつ、門から奥にそびえ立つ屋敷の玄関へと繋がる舗装された道をのんびり歩いていくと、勢い良く玄関が開けられ、中から聡が焦った様子で転がり出る様に走り出て来た。
「清香さんっ！」
「あ、聡さん。今日はお招きありがとうございます」
血相を変えて駆け寄った聡に清香はいつものように頭を下げたが、聡はそれで幾らか落ち着いたものの心配そうに問いかける。
「いや、そんな事より、俺の携帯通じなかった？」
「はい？」
「駅に近付いたら連絡をくれと言ってたのに歩いて来てるから、何か行き違いがあったのかと」
そこでやっと聡の懸念に気が付いた清香は、慌てて謝罪した。
「あの、ごめんなさい。お天気も良いし、そんなに距離も無さそうだし、歩いてみても良いかなって思って、つい……。でも、聡さんに電話の一本でも入れるべきでしたね。気を揉ませてしまったみたいで、すみませんでした……」
申し訳無く思って口ごもってしまった清香に、聡はここで漸く笑顔を見せ、並んで家に向かって歩き出した。

「そうなんだ。何事も無かったのなら良いんだよ。でも駅からここまでは、だらだら続く上り坂だし、きつく無かった？」
「それは全く気になりませんでした」
「清香さんは普通の人とは鍛え方が違うみたいだしね」
「う……、聡さん、嫌味ですか？」
「まさか！　褒めてるんだよ？　だけど流石に帰りは薄暗くなるし、駅までちゃんと送らせて貰うからね？」
「はい、お願いします」
そんな事を笑顔で語り合ううちに、二人は玄関の前まで辿り着い

た。

「じゃあ、遠慮無く入って」

「はい、お邪魔します」

聡が開けた扉の中に清香が入ると、かなり広い玄関の上がり口に、使用人らしい女性を従えた上品そうな年配の女性が居て、清香に笑顔を見せてきた。

「こんにちは清香さん。聡の母の由紀子です。退院祝いに素敵なアレンジを頂いて嬉しかったわ。今日はゆっくりしていらしてね？」

早速丁寧な挨拶をされて、清香も笑顔で頭を下げる。

「初めまして、佐竹清香です。本日はお招きありがとうございます。あれを喜んで頂けて、私も嬉しいです」

「堅苦しい挨拶はそれくらいで、上がって頂戴？」

「はい、お邪魔します」

そこまでは全て順調に進んだかに見えたが、清香が靴を脱いで揃えられていたスリッパを履いて廊下を歩きだそうとしたところで、何故か彼女の動きが止まった。そうしてしげしげと自分の顔を見つめているのに気付いた由紀子は、不思議そうに清香に声をかける。

「どうかしたの？　清香さん」

「いえ、あの……。由紀子さんと私は初対面ですよね？」

「ええ、その筈だけど」

「何となく初対面の感じがしなくて……。どこかでお会いした事が有るでしょうか？」

「さあ、そんな筈は……」

「無いと思うけど……」

（お通夜の時に一瞬顔を見られたのを、覚えていたのかしら？　でもその事を言ったら、どうしてその場に居たのか聞かれるだろうし……）

（よくよく考えたら兄さんの容姿は母さん似か？　まさかこんな基

本的な所でばれるとは……）

首を捻って考え込んでしまった清香に、適当な切り返しの言葉が咄嗟に浮かばない由紀子と聡が揃って固まった。しかしそこで救いの手が差し伸べられる。

「世の中にはそっくりな顔の人間が三人存在すると言いますから。どこかで妻と酷似した人間を見た覚えがあったのかもしれませんね」

「あなた！」

「父さん」

そんな言葉と共に廊下の向こうから昭がのっそりと現れた為、由紀子と聡は驚きの声を上げた。そんな2人を昭が軽く睨み付けながら促す。

「客人をいつまで玄関先に立たせているつもりだ？　さっさと中に案内したらどうだ」

「あ、は、はい。清香さん、こちらへどうぞ」

「ああ、紹介するよ。俺の父で小笠原昭です」

その場を取り繕う様に慌てて聡が父を紹介すると、清香も慌てて挨拶して頭を下げた。

「は、初めまして。佐竹清香です」

「こちらこそ」

清香の挨拶に素っ気なく一言返しただけで、昭はさっさと奥へと戻っていった。それを見て小さく溜息を吐く清香と、内心で怒りを露わにする聡。

（うっ……、何か気難しそうなお父様。社長さんだからこれ位当然かしら？）

（あんの朴念仁！　誤魔化してくれたのは助かったけど、少しは愛想笑い位しろよっ！）

互いに何とか笑顔を貼り付けながら広い廊下を進み、全員リビングへと移動した。

触り心地と座り心地が抜群の応接セットに、清香が促されるまま腰を下ろし、他の者が空いている席に座って和やかに会話が始める。

「今日はわざわざ足を運んで貰って嬉しいわ」

「いえ、大した事じゃありませんし。それよりお母様……、えっと、由紀子さんとお呼びしても良いですか？」

「ええ、勿論構わないわよ？　若いお友達ができたみたいで嬉しいから」

「由紀子さんは、その後体調の方は大丈夫ですか？」

清人に『退院直後で相手に迷惑』と口にされた事もあり、自然に気遣う言葉が出たのだが、それを聞いた由紀子は笑顔で経過を述べた。

「一応服薬は続けているし、月一回の定期健診は必要だけど、無理をしなければ大丈夫と言われたし。至って順調なの」

「良かったですね」

心からの安堵の言葉を告げた清香に、聡も真顔で頷く。

「発作を起こして倒れた場所が場所だったからね。すぐ適切な処置をして貰えたし」

「どこで倒れられたんですか？」

疑問に思って尋ねた清香に、聡がしみじみとその時の状況を語った。

「難病の子供が集まってる小児病棟での慰問中に倒れてね。そのままその病院に入院したんだよ」

「それは……、本当に不幸中の幸いでしたね」

流石に驚きの表情を見せた清香だったが、納得して1人頷いた。

そして思いだした様に持参した白い紙袋を由紀子に向かって差し出す。

「あの、少しだけですけどお土産を持参しましたので、宜しかったら皆さんで召し上がって下さい」

「あら、清香さん、そんな気を遣って頂かなくても良いのに」
「いえ、やはり初めてのお宅に手ぶらでというのは少し気が引けまして。こんなご立派なお宅なのに、ほんの少しで却って申し訳無いのですが……」
「あら、そんな事言わないで。ありがたくいただくわ」
恐縮気味に述べた清香に対し、最初は断りを入れた由紀子もそれ以上固辞する事はできず、笑顔で紙袋を受け取った。すると続けて清香が恐る恐る尋ねてくる。

「それで……、今更なんですが、聡さんに事前に聞いておくのを忘れていまして。和菓子の類が苦手な方はいらっしゃいますか？」
「いいえ？　皆大好きだから安心して？」
笑顔で請け負った由紀子に、清香は安心した様に満面の笑みを浮かべた。
「良かった！中身は《すみのや》って言う神田にあるお店の練りきりと塩饅頭なんです。とっても美味しいんですよ？」
「「「え！？」」」
清香が嬉しそうに述べた瞬間、小笠原家の面々は揃って驚きの声を上げた後、彼女と何のロゴも店名も入っていない白無地の紙袋を交互に見やって固まった。

「あ、あの……、どうかされました？」
流石に異常を感じた清香の前で、昭と聡の間でやり取りが交わされる。
「……聡？」
「いや、俺は別に何も！　わざわざ言う事でも無いだろう！？」
「あの、何か、まずかったでしょうか？」
何かを探る様な目つきを息子に向けた昭に、聡が真顔で首を振る。そんな中口を挟んできた清香に、昭は比較的穏やかな声で問い返した。

「清香さん。一つ尋ねても良いかな？」
「はい、なんでしょうか」
「どうして今日、これを持参したのか聞きたいんだが」
「実は今日の午前中、お兄ちゃんに『すみのやに行って塩饅頭を買って来てくれ』と頼まれまして」
それを聞いた昭は、身内にだけ分かる位に、僅かに目を細めた。
「ほう？　以前から贔屓にしているのかな？」
「はい。お兄ちゃんはお酒も飲みますけど甘い物も結構好きで、家に来る出版社の担当の人が、良く甘い物を差し入れしてくれるんです。それで三年前位にこれを貰ったら『餡が変にベタベタしなくて口の中で溶けて旨い』と気に入りまして」
「ほう、そうなのか」
思わず頷いた昭に、清香が笑いながら話を続けた。
「それからは知り合いの編集さんに勧めたり、締め切り間近の時期になると食べたがって、私に買って来てくれと何度も頼まれて場所も覚えてしまったんです」
「なるほど」
清香の笑顔に釣られたのか、昭も僅かに顔を緩ませて納得した素振りを見せたが、それに安堵しつつも根本的な疑問がまだ解消していない事に気付いた清香は、改めて問いかけた。
「それで今日も午前中に頼まれたので、ついでにこちらのお土産分も買った訳なんですけど……。何か不都合でも……」
恐る恐るそう述べた清香に、由紀子と聡が慌てて取りなそうとする。
「あら、別に不都合なんかじゃ無いのよ？」
「そう、ちょっと凄い偶然で、驚いただけで」
「偶然って……」
「《すみのや》は私の実家でやっている店でね」

「え？」
そこで唐突に口を挟んできた昭の台詞に、清香の思考が一瞬停止した。
「これを作っているのは、私の兄と甥っ子なんだよ」
「……え、えぇっ！　そ、そう言えば、確かに聡さんからお父さんの旧姓が角谷ってお伺いしてましたけど、すみや、で、すみのや……、そ、そうなんですかっ！？」
「うん、そういう事なんだ」
淡々と昭が頷いて見せた途端、清香は顔を真っ赤にして頭を下げた。

「し、失礼しましたっ！　ご実家のお菓子なら食べ慣れてますよね？　すみません、そういう物をお土産に持参するなんてっ！」
（うぅぅっ！　私のバカバカバカっ！！　事前に聡さんに和菓子を持参して大丈夫かどうか一言聞いておけば、その話の延長でお父様の実家の話も聞けたかもしれないのに！　こんな事お兄ちゃんに知られたら『だからお前は思慮の足りない子供なんだ』って絶対言われる！）
恥ずかしさで思わず涙が出そうになるのを清香が必死に堪えていると、ここで予想外の声がかけられた。

「……そんなに恐縮しないで下さい清香さん。結構な物を頂戴しまして、ありがとうございます」
「え？」
思わず反射的に顔を上げた清香も発言した人物を見て驚いたが、思わず傍観していた由紀子と聡も呆気に取られていた。
（あら、まあ……、珍しい）
（げっ……、あれが父さん！？）
先程までの無愛想ぶりはどこへ行ったのかと思うほど、穏やかで如何にも人好きのする笑顔を浮かべた昭が存在していたのだった。

「確かに実家の物ですから小さな頃からこの味は食べ慣れていますが、この一年程は忙しさにかまけて実家を訪問していないんですよ。わざわざ買いに行く様な真似もしませんし、久しぶりにこれを味わう事ができて、私にとっては何よりのお土産です」

「そう言って頂けると、私も嬉しいです」

そう言われて本気で胸を撫で下ろした清香に、昭は穏やかな口調で話を続けた。

「それに兄上が殊の外(すみのや)をご贔屓にして頂いているとの事。聡から伺いましたが、お兄さんはあの作家の東野薫さんですよね？」

「はい」

「そんな有名な方に好んで買って頂いていると知ったら、実家の兄や甥も喜びます。二人に代わってお礼申し上げます」

ここで軽く頭を下げた昭に清香は却って恐縮し、慌てて言葉を継いだ。

「いえ、そんな。だって確かに美味しいですもの！」

「あなたの様な若い方にも好んで頂けるとは嬉しいですね」

そんな調子でにこにこと世間話に突入した2人を見て、由紀子は微笑み、聡は憮然とした表情を見せた。

（良かった。流石に清香さんに変な言い掛かりとかは付けないだろうとは思っていたけど、

彼女の事が気に入ってくれたみたい）

（なんなんだ、あの手のひら返した愛想の良さは……。詐欺だっ……）

そんな中、昭が慎重に清香に尋ねる。

「……ところで清香さん。先程お兄さんが締切間近の時期に和菓子を買いに行かせられると言う様な事を仰っていたが、そうすると今がその時期なのかな？」

「えっと……、あら？　そう言えば……、予定を書き込んでるホワイトボードには、そんな切羽詰まった予定は書いて無かった気がしますが……」
「そうですか」
首を傾げて考え込んだ清香を見ながら、昭は傍目にはあっさりと会話を終わらせた。しかし聡と同様、その意味する所を慎重に考えてみる。

（ふぅん？……この娘は間違っても腹芸ができるタイプには見えないが、あの“彼”がそうなる様に仕向けたか？）
（……何となく兄さんの意図を感じる。彼女に対する父さんの心証を良くする為、わざわざ午前中に買い物を頼んで買わせたのか？）
そして親子揃って、同じ結論に到達した。
（（できるなら妹を行かせくは無いが関係をバラしたくは無いし、行かせたら行かせたで粗雑な扱いをさせられるのも嫌だと言う事か）
）

そんな男達の思惑など関係無く、由紀子は塚田に指示を出しつつ、清香に笑顔を向けていた。
「それでは早速これをお茶受けにしましょう。塚田さん、お願いね」
「畏まりました」
（本当に、屈折しまくった男だな）
（本当に面倒な人ですね、兄さん）
この場に居ない1人の男の事を思って、昭と聡は深い溜息を吐いたのだった。

第２３話　イブの攻防

『清香さん、一昨日は来てくれてありがとう。両親も喜んでたよ』
「私の方こそ楽しかったです。でも……、由紀子さんからあんな高そうな物を貰ってしまって、本当に良かったんでしょうか？」
自室で聡からの着信を受けた清香は、型通りの挨拶をしてから聡が出して来た話題に、思わずこの二日考え込んでいた懸念を口にした。しかし聡はそんな清香の懸念を笑って打ち消す。

『気にしないで。確かに母さんにはもう若過ぎるデザインだし、家族や親しい人の中に若い女性が居なかったから、このまま箪笥で眠らせておくか捨てるかって話になってたんだ。流石にそれは勿体無いだろう？』
「それは……、やっぱり聡さんが……」
尚もごもごと口の中で何やら言って言葉を濁した清香に、聡は電話の向こうから不思議そうな声を伝えて来た。
『え？　……ひょっとして清香さんは、俺に女装しろって言うの？』
「そんな事一言も言ってません！」
慌てて清香が否定すると、聡が電話の向こうで我慢できないと言った感じで噴き出す気配を感じた。当然清香はからかわれたと思って拗ねる。

「聡さん！？　笑う事はないじゃありませんか！」
『いや、ごめん。でも良かった。本気でそう思われてたら、どうしようかと思った』
まだ若干笑いを含んだ声で言ってくる聡に、清香が何とか怒りを抑えながら、先程自分が考えた内容を口にした。
「もう！……そうじゃなくてですね、聡さんが結婚したら、その相手が由紀子さんの義理の娘さんになる訳じゃないですか。だから将

来その女性に譲る様に、大事にしまっておいたら良いんじゃないですか？　って言おうとしたのに、聡さんったらすぐふざけるんだもの！」

『……』

清香にしてみれば至極真っ当な理屈を述べたつもりだったのだが、何故かここで聡が無反応になって黙り込んだ。

何らかのリアクションが返って来ると思っていた清香は当惑し、いきなり会話が途切れるなんて珍しいと思いつつ、混戦でもしたのかとそのまま十数秒待ってみてから、相手に呼びかけてみる。

「聡さん？　どうかしましたか？」

それで漸く我に返った、という反応を聡が返してきた。

『……あ、ああ、何でも無いんだ。……ちょっと昔の事を思い出しただけだから』

清香は（どうして結婚相手云々の未来の話で、昔の事を蒸し返すんだろう）と疑問に思ったが、何となく聡が話題を逸らしたがっている様な気がした清香は、余計な事は口を挟まず話を合わせる事にした。

「昔の事って何ですか？」

『小さい頃、母さんにスカートを穿かせられた事があったんだ』

「はい？」

耳にした内容が咄嗟に理解できなかった清香が問い返すと、聡がしみじみとした口調で話し出した。

『実は……、母さんは娘が欲しかったみたいなんだけど、俺を産んだ時に結構身体に負担をかけたらしくて、医者に「今後子供は諦めて下さい」って言われたそうなんだ』

「……そうだったんですか」

何と言ったら良いのか分からず、取り敢えず当たり障りのない言葉で応じた清香だったが、聡はそれ以上に沈んだ声で続ける。

『それで仕方が無いって産むのは諦めたんだけど、どうしても可愛い洋服とかリボンやフリルの類は諦め切れなかったらしくて、物心付くか付かないかの頃から幼稚園時代の俺を相手に、時々』

そこで聡が唐突に言葉を途切れさせたが、相手の言わんとする内容が嫌でも分かってしまった清香は、慰める様に言葉を継いだ。

「あの、聡さん。もう何も言わなくて良いです。何となく分かりましたから」

『だけど酷いと思わないか？　清香さん！』

「な、何が、ですか？」

急に語気を強めて訴えて来た聡に、思わずびくっとしながら応じた清香だったが、続く話の内容に笑いを堪え切れなかった。

『あれもこれもと散々着せ替えさせられた挙げ句、最後に「聡は顔立ちは良いんだけど、やっぱり凛々しすぎて可愛い物が全然似合わないわ」って、盛大に溜め息吐かれたんだよ？　父さんに言い含められて、嫌だけど母さんの為だと思って一生懸命我慢してたのにその仕打ち！　子供心にどんなに傷付いたか！』

「……っ！……くっ、……ふぅっ、……」

『……清香さん。ひょっとして、笑ってる？』

思わず当時の光景を想像してしまった清香は、携帯を顔から離して口許を抑えて笑いを堪えたのだったが、そんな気配は容易に聡に伝わってしまっていたらしい。携帯から聡が些か鋭い声で問い質す声が聞こえた。

「わ、笑ってるなんて滅相も無いっ！何て微笑ましい親子愛だろうなって、思っ……」

弁解しようとして再び噴き出しかけた清香が言葉を詰まらせると、電話の向こうから聡が溜息を吐く気配と、苦笑交じりの声が伝わってきた。

『まあ、いいさ。そんなわけで、ずっと母さんは女の子を着飾らせ

て可愛がりたかったんだよ。そんな所に清香さんが飛び込んでしまった訳だから、申し訳無いけど少し付き合ってあげて？』

「分かりました」

何とか笑いを抑えて頷いた清香に、聡はここで真面目な口調になって話を続けた。

『それで話は変わるけど、清香さんはクリスマスとかの前後は空いている？』

「いえ……、ちょっと約束で埋まってて。それに毎年イブはお兄ちゃん特製ディナーを一緒に食べる事にしてますし……」

（こんな事言うと、朋美みたいに呆れられそうだけど……）

そんな事を考えながら正直に予定を告げた清香だったが、聡からは予想に反した言葉が返って来た。

『それなら家に居るんだよね。丁度良かったよ』

「え！？　聡さん、どうしてそんな事を言うんですか？」

すっかり驚いてしまった清香が素っ頓狂な叫び声を上げると、聡も本気で驚いた様な戸惑った声を返す。

『どうしてって……、何が？』

「だって、自分が言うのも何ですけど、イブの夜に兄妹でディナーって変に思わないんですか？　朋美や他の友達全員『お兄さん優先なんておかしい』って毎年言ってますし」

（自分で言ってて、何だか自分自身がもの凄く変に思えてきたわ。そんなにお兄ちゃんと過ごすのが変なのかしら？）

密かにそんな事を考えて落ち込み始めた清香に、聡が事も無げに言い返してきた。

『別に変じゃないだろう？　イブに誰と過ごそうが、それは人それぞれだと思うし。それだけ兄妹仲が良いって事だから、他人がどう言おうと構わないじゃないか』

不思議そうに告げられた台詞に若干救われた気持ちになりながら、清香は反射的に尋ねた。
「聡さんはそう思うんですか？」
『勿論、そう思うから言ってるんだけど？』
幾分笑いを含んだ声に、清香は心からの礼を述べた。
「そうですか。ありがとうございます」
（ちょっとだけ、聡さんに誘って貰えるかなって思ったけど……。でもそうしたらお兄ちゃんに何て言えば良いか分からないし、これで良いのね）
そんな風に僅かに残念な気持ちを抑えつつ自分自身を納得させた清香に、聡が穏やかに声をかけてきた。

『正直に言えば……、イブは清香さんを誘いたかったんだけどね？』
「え？」
『実は俺、今年は年末までびっしり仕事でスケジュールが埋まってて。……最近立て続けに潰れた仕事の後始末と、新規事業開拓の準備でてんてこ舞いなんだ』
密かに動揺したのは一瞬で、清香は如何にもうんざりとした口調で事情を説明する聡に、心の底から同情した。
「年末なのに大変そうですね。体調に気をつけて下さいね？」
『ありがとう。そんな訳でどこにも誘えないんだけど、プレゼント位は届けようかと思って。だから家に居てくれて助かったと思ったんだ』
先程の発言の意味が漸く分かり、清香は慌てて断りを入れた。

「え？　そんな忙しい時期にわざわざ家まで来て貰わなくても良いですよ？　それ以前に、由紀子さんからあれを頂いたばかりですし、聡さんからもプレゼントとか頂けませんから！」
『俺がそうしたいから。……ごめん、実は今、職場の廊下からかけてるんだ。仕事に戻らないといけないから、じゃあまた連絡するね

？』

「あ、あのちょっと、聡さん！？」

言うだけ言って切られてしまった携帯を見下ろし、清香は一人途方に暮れた。しかし流石にこのまま掛け直すのは躊躇われる。

「切れちゃった……。でも忙しそうだから、かけ直しちゃ悪いよね」

今度時間のある時に、改めて断りを入れようと決めた清香は、諦めて携帯を自分の机の充電器に刺し込んだ。そしてそれを見下ろしながら、しみじみと呟く。

「でも聡さんって優しいなぁ、あんな事を話しても全然馬鹿にされなかったし。それにスカートって……」

そしてぷふっと笑いを漏らしてから、晴れ晴れとした笑顔で頷いた。

「うん、聡さんってお母さん思いで、誰にでも優しい人だよね」

そんな調子で、清香の中で聡の株がこれまで以上に上昇していた頃、清人はリビングで厄介な相手からの電話を受けていた。

『……清人君。君に限ってと思っていたが、私達の期待を随分裏切ってくれたね？』

開口一番喧嘩腰の雄一郎の台詞に、清人は丁寧な口調は崩さないまま眉を寄せた。

「何の事を仰っておられるのか、全く分かりませんが？」

『君が今更小笠原に拘るなんておかしいと思って調べさせた。更に今、浩一を締め上げて洗いざらい吐かせた所だ』

「それはそれは」

（災難だったな、浩一……）

文字通り実の父親に締め上げられたに違いない友人を、清人は密かに不憫に思った。しかしすぐに目の前の現実に意識を振り向ける。

『一体何を考えているんだ？　向こうの家に清香ちゃんを出向かせ

るなんて！？』

段々伯父バカっぷりを醸し出して来た口調に、清人が溜息混じりに言い返す。

「……頭ごなしに駄目だと言ったら、益々ムキになって行きますよ。帰ってから粗方の話を聞きましたが、どうやら終始茶飲み話をしてきただけですから、特に問題は無いでしょう」

『そんな悠長な事を！　万が一小笠原なんぞに清香ちゃんをかっ攫われたらどうする気だ！』

「……させませんよ」

『ほぅ？』

不愉快な仮定話をされた途端、清人の声のトーンが一気に低下した。流石にそれを感じた相手も、興味深そうに一言漏らしただけで清人の反応を窺う様に黙りこむ。

そして短い沈黙の後、清人が徐に言い出した。

「柏木さん……。そこで一つご相談なんですが」

『何かな？』

「代わりにあいつにあてがうのを調達して貰えませんか？」

『は？』

流石に戸惑った声を上げた雄一郎に、清人は補足説明をした。

「柏木も小笠原も、表立って揉めたくは無いでしょう。要は“自然な形”で向こうから手を引かせれば良いわけです」

告げられた内容を頭の中で吟味した雄一郎は、ひとしきり忍び笑いを漏らしてから清人に声をかけた。

『……なるほど、良く分かった。今回、君と私達の利害が完全に一致したわけだな』

そう同意を求められ、清人が苦々しく呟く。

「初めてですし、これきりにしたいですね」

その本心からであろう台詞と口調に、雄一郎は豪快に笑った。

『そう嫌そうに言うな。分かった。和威と義則にも内容を伝えて、万事抜かりなく話を進めるよう準備しておく。女房達にも骨を折って貰う事にしよう。それでは清人君、くれぐれも』
「目は離しませんよ。それでは」
『ああ、失礼する』
最後は円満に会話を終わらせた清人は、口許を緩めながら受話器を戻した。

「さて、どう話を持って行こうかと思っていたが、向こうから突っ込んで来て貰えるとは助かった」
そして見るともなしに壁にかけられたカレンダーに目をやり、独りごちる。
「これでまた一つ片が付いたし、今年は最後にケチのつきっぱなしだったから、年末は静かに過ごして気分良く新年を迎えたいな」
……しかし清人と他の面々にとっての厄年は、まだ十日近く残っていた。

「清香、今年の料理はどうだ？」
「うん、舞茸のコンソメスープも美味しいし、鱸と鯛のパイ包み焼きも絶妙な味付けと焼き上がりで嬉しい。パンだって自家製だよね」
「ああ、暫くバタバタして手の込んだ料理を作って無かったから、今回はちょっと頑張ってみたんだ」
「それにしても雲丹と海老のジュレなんて、普通家で作らないよ？和牛サーロインのグリルとこのグレービーソースが最高っ！！」
自分の料理に舌鼓を打ち、一口ごとに称賛を惜しまない清香の笑顔で、清人の機嫌はその日最高潮だった。

もともとは料理人であった父親に、父子家庭ゆえ必要に迫られて叩き込まれた料理の腕前ではあったが、小さかった清香の「おにい

ちゃんのおりょーり、おいしーね？」という笑顔付きの賛辞にころっと参ってしまった清人は、その後独学で研鑽を積んだ結果、玄人裸足の腕前になってしまったのだ。しかしその腕前を披露するのは専ら清香に限定されている為、余程親しい人間でしか知りえない清人の特技の一つだった。

それを満面の笑みで褒められて悪い気などする筈が無く、清人は笑顔で更なるメニューの内容を告げる。

「最後のデザートはクレープシュゼットにするから。それから別にチョコケーキもあるぞ？」

「酷い、お兄ちゃん！　どこまで私を太らせるつもり！？」

「はは……、清香なら丸くなっても可愛いぞ？」

「もう、お兄ちゃんったら！」

そんな他愛も無いやり取りをしながら楽しく食事を続けていると、突然壁のモニターから呼び出しのメロディー音が聞こえてきた。

「え？」

「あ、聡さんだわ！」

「……何？」

こんな時間に誰がと清人の戸惑った声に、嬉しそうな清香の声が重なる。それを耳にして忽ち清人の機嫌が急降下した。

「今日は仕事が忙しくて誘えないけど、プレゼントだけ渡しにくるって言ってたの。玄関先で失礼するって言うから、ちょっとだけ開けるわね？　お兄ちゃんは食べてて」

「……」

清人の微妙な変化には気が付かないまま清香は席を立ち、インターフォンの受話器を取った。そして短く何かを話してからボタンを操作してエントランスの自動ドアを開け、そのまま玄関へと向かう。その間清人は無言で清香の背中を見詰め、その姿が見えなくなってから忌々しそうに舌打ちをした。

一方の清香は玄関で待機し、チャイムが鳴るのと同時に外を確認して扉を開けた。
「今晩は、清香さん」
「聡さん、お疲れ様です。今から帰るんですか？」
ビジネスバッグを手に提げた姿に清香は気遣わしげな視線を向けたが、カシミヤの温かそうなコートを纏った聡は、何でも無い様に笑って頷いた。
「うん、でも思ったより早く終わって助かったよ。清香さんが寝てしまう様な時間だったら、流石に悪くてインターフォンで呼び出せないしね」
そう言ってからバッグを開け、中からギリギリ掌に乗る位のサイズの箱を取り出した聡は、清香に向かってそれを笑顔で差し出した。
「はい、メリークリスマス。これまで俺に色々付き合ってくれたお礼も兼ねてるから受け取って？」
反射的に受け取ってしまったものの、包装紙とリボンで綺麗に包まれた長方形の箱に目を落としてから、清香は申し訳無さそうに聡の顔色を窺う。
「本当に良いんですか？」
「勿論。それから先生の分もあるから、後から渡してくれるかな？」
続けてもう一つ、先程の物より幾分小ぶりの箱まで渡されて、今度こそ清香は狼狽した。
「え？　お兄ちゃんの分まで用意してくれたんですか？」
「ああ、サインを頂いたり、学祭の時には親しく言葉をかけて貰ったしね。ほんの気持ちだから、受け取ってくれると嬉しいな」
にこやかにそう告げられ、清香は漸く笑顔になって頭を下げた。
「ありがとうございます。……実は、私も聡さんに用意してた物があって」
「本当に？」

そこで清香は予め用意しておいた紙包みを、玄関から奥に続く通路に設置してある棚から取り出し、聡に向かって差し出した。
「あまり高くはないんですけど、マフラーなんです。シルクだから肌触りは良いかと」
それを聞いた聡は、益々嬉しそうな顔を見せる。
「嬉しいな。ここで開けてみても良い？」
「はい、どうぞ！」
そこで早速中身を取り出して確認した聡は、表面に手を滑らせながら満足そうに目許を緩めた。
「うん、良い色合いだね。柔らかいし気に入ったよ、ありがとう」
「どういたしまして。聡さん、上がってお茶でも飲んでいきませんか？」
「……いや、お邪魔をするのは悪いし、今夜はここで失礼するよ。おやすみ」
「おやすみなさい」
清香の誘いを丁重に辞退して、聡はそのままあっさり引き揚げた。
それを忙しくて疲れて居るんだろうと好意的に解釈した清香は、素直に二つの箱を手にして大人しく奥へと戻って行った。

そして一人で戻って来た清香を見て、てっきり聡が押しかけて顔を見せるかと思っていた清人は肩すかしをくらった。
「……帰ったのか？」
「うん、お茶の一杯でもと思ったんだけど、今まで仕事で早く帰りたかったみたいだったから、無理に引き止めなかったわ」
「そうだな」
清香の言葉に（さっさと厄介払いができて良かった）とほっとしていたが、ここで意外な言葉を耳にした。

「それでね？　私の物と一緒にお兄ちゃんにもプレゼントを預かったの！」

「俺に？」
「うん！　『サインを頂いたし、学祭の時には親しく声をかけて貰ったし』って聡さんって本当に義理堅い人だよね？」
「……それはそうだな」
（嫌味か？　生意気な……）
聡の意図が今一つ掴めず眉を顰めた清人の前で、清香は食事そっちのけで自分用のプレゼントを解き始めた。
「早速開けてみようっと！」
そしてさほど時間がかからず、清香の目の前に細長い円筒形の物が現れた。

「うわ、可愛いアトマイザー！　ボトルの周りが銀の透かし彫りだよ？　凄いっ！」
瞳を輝かせて見せてきた清香に、清人は無難な感想を述べた。
「へぇ……、なかなか良い趣味をしてるな」
「あ、カードが入ってる。えっと……《好みが分からなかったので、中身は今度贈ります》だって。流石社会人の人だと色々心遣いが凄いよね？」
（今度って何だ、今度ってのは！？）
内心ムカついた清人だったが、表情はまだいつもの顔を保っていた。その為、清香が更に清人の機嫌を悪化させる事を言い出す。

「ねえ、お兄ちゃんのは？　開けてみて？」
「ああ、後からでも」
「今見たいの！」
「……分かった」
キラキラした瞳の妹に半ば脅され、清人はしぶしぶ渡された箱を開けた。しかしその中を見て目が点になる。
「は？」
「え？　そんな筈は……」

箱の中にはカードの一枚すら無い空箱状態で、流石に清香も呆然となった。そして清人は懸命に歯軋りを堪える。

（随分ふざけた事をやってくれるじゃないか。意趣返しのつもりか？）

その瞳に危険な物が浮かんできた時、清香が突然バタバタと自室に駆け込んだと思ったら携帯片手に戻り、電話をかけ始めた。

「これは何かの間違いよ。ちょっと聡さんに聞いてみるから！」

「止めろ清香。プレゼントの中身についてどうこう言うなんて、相手に失礼だろう？」

「だって聡さんがわざと空箱なんて寄越す筈が無いもの！　後で気が付いて慌てるかもしれないわ。……あの聡さん？　清香ですけど……。ええ、実はプレゼントの件で……」

一応清香を窘めたものの、聡がどう弁明するのかを少し意地悪く眺めていた清人だったが、あまり清人の思った方向に話は進まなかった。

「……あ、そうだったんですか？びっくりしちゃいました。……じゃあ、私はもう休みに入りましたし、来週にでも聡さんの会社の近くまで行きますね？」

「おい、清香！？」

予想外の台詞を清香が発した為、慌てて清人が口を挟もうとしたが、話し中だった清香はそれを半ば無視した。

「……いえ、構いませんよ？　今日はわざわざ家にまで来て貰いましたし。……ええ、それじゃあまた」

そして通話を終わらせた清香は、笑いを堪える表情で清人に向き直った。

「聞いてお兄ちゃん、笑っちゃったわ」

「何だったんだ？　一体」

「聡さんったらお兄ちゃんにはカフスボタンを用意してたんだけど、間違って来週の忘年会でやる予定の、ビンゴゲーム用のサプライズ景品として準備した箱を渡しちゃったんですって」

そう言ってクスクス笑っている清香に、清人が面白く無さそうに呟いた。

「……随分うっかり者なんだな」

「本当、時々聡さんって可愛いよね」

「可愛い？」

清香のその台詞にピクリと反応した清人だったが、当の本人は笑いを堪えるのに精一杯だった。

「空箱でしたって言った途端、凄い狼狽してたのが電話越しにも分かったわ。『先生に失礼な事をした』って。きっと顔色は真っ青だったわよ？」

「まあ、当然かもしれんな」

「『一度家に戻って本来の物を届けるから』って言ってくれたけど、只でさえお仕事で疲れてるのに流石に悪いじゃない。だから来週聡さんの会社の近くに、聡さんの休憩時間に合わせて出掛けて、プレゼントを受け取る事にしたわ。『近くにランチの美味しい店があるから案内するよ』って言われたし」

「俺は宅配とかでも一向に構わんが？」

殆ど呻くように清人が意見を述べたが、清香は腕組みをして頷きつつ真面目くさって答えた。

「私もそう思ったんだけど、聡さんが『失礼をした上にこれ以上不義理な事は出来ないから、是非とも手渡ししたい』って。本当に真面目な人だよね、聡さんって」

（やっぱりわざと空箱を仕込みやがったな、あの野郎……。小芝居までして上手く清香を丸め込みやがって、そんなに力尽くで排除されたいのか！？）

そうして「仕事納め前だとここら辺かな～」と上機嫌でカレンダーを眺めている清香は、未だ清人の怒りの大きさと深さに気が付かないまま、新年を迎える事になったのだった。

第２４話　秘められた誓い

新年に入って最初の土曜日。都内有名ホテルの大宴会場で、経済団体主催の新年会が華々しく開催されていた。

一流どころの企業の経営者、創業者一族の錚々たる顔ぶれが、あちこちで輪を作りながら親しげに語り合い、もしくは牽制し合う中、柏木雄一郎は時期を見計らい、目指す相手に向かって悠々と近付いて行った。

「やあ、小笠原さん、こちらにいらっしゃったんですか。新年明けましておめでとうございます」

にこやかに声をかけられて、昭と彼を囲んで話をしていた何人かは、意表を突かれて黙り込んだ。しかしそれも一瞬で、すぐに昭が何事も無かったかの様に笑顔で挨拶を返す。

「……これは柏木さん、おめでとうございます」

「昨年はお互い色々と気忙かったと思いますが、今年は心穏やかに過ごしたいものですな」

「全く同感ですね」

如何にもわざとらしく「ははは……」と笑い合っていると、側で二人の様子を窺っていた総白髪の老人が、興味深そうに口を挟んできた。

「ほぅ……、柏木さんは小笠原さんと懇意でいらしたんですかな？何やら最近仕事を取ったの取られたのと、穏やかで無い話がチラホラ漏れ聞こえておりましたが」

「それは……」

「滅相もありません、永島会長。ああ、勿論同業者の関係ではあるので、互いに競い合うのは当然ですが、仕事を離れた上では親しく交歓したいと思っております」

昭の台詞を遮り笑顔で雄一郎が断言すると、永島は満足そうに頷いた。

「なるほど……。それでは巷で囁かれている様に、柏木と小笠原で全面戦争が勃発直前などと言う事態は、単なる懸念と言う訳ですな？」

「勿論ですとも。小笠原さんもそれには同意してくれるだろう？」

あくまでもにこやかに促してくる雄一郎に、昭は舌打ちを堪えながら笑顔で話を合わせる。

「そうですね。どこぞの馬鹿な人間が、勝手な憶測を流しているだけでしょう。今年も宜しくお願いします、柏木さん」

「こちらこそ。……それで早速ですが、小笠原さんにお渡ししたい物が有りましてな」

「おや、何でしょうか？」

昭が怪訝な顔をすると、雄一郎は壁際に視線を向けて軽く手招きした。すると万事心得ている彼の秘書が歩み寄り、無言で手に提げていた紙袋を恭しく雄一郎に手渡す。

そして更に雄一郎は、昭に向かってそれを差し出した。

「どうぞお持ち下さい。ご子息の見合い写真です」

「はあ？」

周囲の者達と同様、思わず昭も間抜けな声を上げてしまったが、それに一向に構う事無く雄一郎は笑顔で続けた。

「実は私とごく親しくしているある人物が、お宅のご子息を大層気に入ってしまったみたいでして。『是正彼に良縁を世話して欲しい』と頼まれたんですよ」

「ほう……、親しい人物、ですか。その方とはどういったご関係で？」

相手の言わんとする事が分かり過ぎる程分かってしまった昭は皮肉っぽく顔を歪めたが、雄一郎は平然としらを切った。

「まあ、そんな事は置いておいて。弟達や妻の実家にも声をかけて、腕によりをかけて素晴らしいお嬢さんばかりを厳選してみましたよ？　来生精巧社長のお嬢さん、畠山経団連会長の姪ごさん、信楽銀行頭取のお孫さん、白鳥大臣のお譲さん、その他選り取り見取りです」

その顔ぶれを聞いた周囲の面々は、驚きと羨望が入り混じった眼差しで、紙袋の中の風呂敷包みを凝視した。

「流石柏木さん。豪華絢爛な顔ぶれですな」

「人脈の広さが並みじゃ無い」

「いやいや、巷で噂されている事など、この一事で十分否定できますよ」

「本当に。これだけ骨を折る間柄だとは思いませんでしたよ、小笠原さん」

「はあ……」

昭は何とか顔をひくつかせない様懸命に堪えたが、この場で最年長でもある永島が、心底嬉しそうな笑顔で彼にとどめを刺した。

「これは春から縁起が良いな。希に見る良縁ばかりじゃないか。小笠原君、ありがたく柏木君の好意を受け取りたまえ」

「はい……。息子にまでお心遣いを頂き恐縮です、柏木さん」

「いやこれ位、大した事ではありませんよ」

雄一郎の純粋な好意からきている行為と信じて疑わない永島に、昭は反論を封じられた。由紀子と結婚して社長職を譲られて以来、こういう社交場で全く後見の無い昭を何くれとなく気にかけてくれ、庇ってくれた恩人の目の前で、変に事を荒立てたくは無かったのだ。

「そう言えば君の息子には暫く会っていないな。聡君、だったか？」

昭に対するその問いかけを、横から雄一郎が奪う形で答える。

「そうです、永島会長。今年２５歳の東成大経済学部出身の秀才で、

体格も立派で容姿もなかなかの好青年です」
「おや、柏木君は彼の人となりを知っているのか？」
「そうでなければ縁談など持ち込みませんよ」
「それもそうだな」
そこで一同が揃って楽しげに笑い合う中、半ば強引に紙袋を押し付けられた格好になった昭だけは、必死に怒りを押し隠していた。

その日、夕方になって帰宅した昭は、運転手から手渡された紙袋を手に提げながら、仏頂面でリビングに入った。
「……戻ったぞ」
「お帰りなさい」
笑顔で声をかけた由紀子だったが、昭は表情を変えないままぶっきらぼうに言い放った。
「今すぐ聡を呼べ」
「……分かりました」
常になら「聡を呼んでくれ」という筈の夫が命令口調で言ってきた為、由紀子は少し驚きながらも聡を呼びにリビングを出て行った。そしてほどなくして、聡が由紀子と共にリビングに姿を現す。

「お疲れ様です、父さん。新年会で何かあったんですか？」
ここに来るまでに、由紀子から何やら父親が不機嫌らしいと耳打ちされた聡は、昭の顔色を窺いながら慎重に問いかけたが、既にネクタイを緩めながら憮然としてソファーに座っていた昭は、自分とは向かい側の席を指し示した。
「まずそこに座れ。話はそれからだ」
「……はい」
取り敢えず聡が大人しくソファーに収まり、由紀子も昭の隣に腰を下ろすと、昭は持参した紙袋から風呂敷包みを取り出し、それを目の前のテーブルに置いた。

「お前への縁談だ。柏木が見合い写真と釣書を、大量に俺に押し付けてきた」
「は？」
前振り無しの話の内容に聡はただ呆気に取られたが、流石に由紀子は顔色を変えた。
「あなた！　断れ無かったんですか？　そんな突然に」
「興和製紙会長の前で親しく声をかけられてな。まさか事を荒立てたり、周りの連中に変に不仲の所を見せる訳にもいかんし。……完全に向こうにしてやられた」
「そう……、永島さんには、変にご心配をかける訳にはいかないわね……」
忌々しく舌打ちする昭の説明を聞いて、由紀子は仕方無さそうに頷いた。そして固まっている聡の代わりに風呂敷包みを解き、内容を確認し始める。
そして幾らもしないうちに顔色を曇らせた。
「あなた……。この顔ぶれの方達とのお話を、無碍に断る様な真似は」
「流石にできんな。車の中で中身を確認してきたが、うちのメインバンクの頭取令嬢や、許認可官庁の幹部の娘も含まれているとあっては。全く柏木の奴……」
そこで昭は由紀子との話に一区切り付け、黙って二人のやり取りを見守っていた聡に声をかけた。
「さて、どうする？　聡。大人しくこの中の誰かと見合いをするか？　柏木のお膳立てはなかなかの物だ。小笠原にとって有益な縁談ばかりだからな」
半分以上皮肉を込めた父親の口調に、聡は冷え切った声で尋ねた。
「これはあれですか。大人しくこの縁談を受けて、清香さんの周りからさっさと失せろと言う、柏木側からの遠回しの脅しですか？」

「解釈はどうとでもできるが、ここで一番重要なのは、父親の再婚に関して柏木家に対して大いに含む所のある筈の“彼”と、あの損得勘定に聡い“柏木”が全面的に手を結んだと言う事実だ。相当嫌われたな、聡」

深刻な話の筈が、昭はその顔に苦笑いを浮かべ、釣られて聡も顔を緩めた。

「そこまで嫌われればいっそ本望ですよ。相手が無視できなくなっている証拠ですからね。申し訳ありませんが、その話は全部断って下さい」

息子のあまりにもあっさりした言い方に、僅かに渋面を見せる昭。

「簡単に言ってくれるな」

「やってやれない事は無いでしょう。父さんなら」

悪戯っぽく笑いながら言ってのけた聡に、昭は今度は笑いを堪える表情になった。

「はっ……、いつの間にか世辞も上手くなったな。分かった。何とかしておこう」

「すみません」

面倒をかける事になった父に向かって殊勝に頭を下げた聡だったが、ここで昭は真顔になって口を開いた。

「それはともかくとして……。どのみちいつまでも現実から目を逸らしている訳にはいかないだろう。そのうち清人君と腹を割って話をしなければいけないと思うから、そのつもりでな」

「……分かりました」

思わず強張った顔で頷いた聡から、昭は由紀子に視線を向けた。

「由紀子。お前も心構えだけはしておくんだな」

「はい……」

同じ様に緊張した顔つきながらも小さく答えた由紀子を、昭は何とも言えない表情で少しの間見詰めていた。

新年早々、小笠原家でそんな不穏な会話が交わされた翌日。三が日を過ぎたものの一月に入って最初の日曜日とあって、神田明神にはそれなりに参拝客が訪れていた。

社務所の窓口では様々な祈祷の受付、お守りや絵馬などの販売で人が並んでいたが、その傍らの大木の下で、先程引き当てたばかりのおみくじを手に、清香が堪え切れない笑いを漏らす。

「うふふっ、今年はやっとお兄ちゃんに勝った！」

その喜びぶりに、清人が呆れた様に小さく肩を竦めた。

「おみくじに勝ち負けがあるわけ無いだろう？」

「だって……、これまで毎年、お兄ちゃんは大吉ばかりで私は吉や小吉とかで悔しかったのに、今年は私が大吉で、お兄ちゃんが凶だなんて凄く嬉しいんだもん！」

ウキウキと上から垂れている枝におみくじを結び付けている清香の頭を、清人が苦笑しながら軽く叩いた。

「こら、俺が不幸になっても良いってのか？」

「そんな事は言って無いってば！　それに大吉の私が側に居れば、そんなに不幸にもならないでしょう？」

「それもそうだな」

緩みまくった顔のまま清人が清香と共におみくじを結び付けていると、何故か背後から奇妙な声が聞こえてきた。

「……げっ！！」

「え？」

「は？」

呻きとも叫びとも取れるその声を不思議に思った2人が反射的に振り向くと、何メートルか後方に口許を手で覆った聡の姿を発見した清香は忽ち笑顔になり、清人は威嚇するかの様にスッと目を細めた。

「聡さん、どうしてここに？　三が日は過ぎましたけど初詣ですか？」

走り寄って来た清香ににこやかに話しかけられた聡は、視線を忙しく行き来させてから、若干引き攣り気味の顔で答えた。

「あ、ああ。三が日のうちは色々忙しくてね。父の実家がこの近くだし、落ち着いた頃そこに顔を出すついでにここに来てるんだ。清香さん達は？　ここは住んでいる所からは随分遠いけど……」

「私達も混雑している時にわざわざ来たく無くて、毎年ずらして参拝してるんです。実はここの例大祭を見物に来て、お父さんとお母さんが出会ったんですよ。それで縁起が良いからって、両親が生きてた頃から毎年ここに来てるんです」

「そ、そうなんだ」

（まずい……、幾ら心構えをしておけと言ったって、こんな所でいきなり兄さんと母さんを会わせるわけには）

内心で激しく動揺している聡とは対照的に、清香がのんびりと尋ねる。

「ところで、聡さんお1人ですか？　由紀子さんとおじさまはご一緒じゃないんですか？」

そう清香が口にした途端、その背後で清人がその眼に殺気をちらつかせ始めた為、聡は本気で狼狽した。

「あ、ああ……、母が去年入院したから皆で病気平癒の祈祷をして貰ったんだけど、2人は先に駐車場に行って貰って、俺だけこっちにお守りを買いに来たから」

「そうなんですか。側にいらっしゃるなら一言ご挨拶しようかと思ったんですけど、それならまた改めて」

「うん、そうしてくれるかな。わざわざ車まで来て貰うのも悪いしね」

そうして聡がほっと一息吐いた瞬間、背後から今現在尤も聞きた

くない声が響いて来た。

「聡？　もう買い終わったのか？　由紀子が言い忘れたらしくて、受験生の子供が居る知り合いに渡すから、商売繁昌御神札の他に勝守も……」

「ごめんなさい、聡。二度手間になってしまったら……」

「「……」」

社務所の建物の陰から角を曲がって出て来た夫婦は、後ろ姿の息子に向かって声をかけたが、更にその向こう側に居た人物を認めて口を閉ざした。

清人と聡も咄嗟に対応ができずに無表情になって固まる中、一人清香だけが笑顔で昭と由紀子に頭を下げる。

「おじさま、由紀子さん、新年明けましておめでとうございます。今年も宜しくお願いします」

それを受けて、2人は何とか笑みを浮かべつつぎこちない挨拶を返した。

「ああ……、こちらこそ宜しく」

「新年早々会えて嬉しいわ」

そこで何を思ったか、清人が無表情のまま夫婦に向かってゆっくり歩み寄った。その何を考えているか分からない様子に、由紀子は怖気づいた様に一歩後ずさりして昭の背後に半身を隠す様にし、危険な物を察知した聡も一歩足を踏み出す。

しかし昭は息子を目線だけで制し、清人と正面から対峙した。

「初めまして、清香の兄の佐竹清人です。先日は妹がお宅にお邪魔させて頂いたそうで、加えて聡君から結構な品物を頂きまして、ありがとうございました」

軽く頭を下げながらの清人の話の内容や口調は、いたって紳士的かつ礼義に適った物であったが、事情を知る者にとっては辛辣すぎ

る一言だった。
（なるほど……、初めて顔を合わせた時は、自己紹介する間も無く殴り倒されたからな。確かにある意味、初対面には違いない）
ついつい笑い出しそうになるのを堪えながら、年長者の余裕で昭は言葉を返した。

「ご丁寧にありがとうございます。聡や清香さんからお話を聞いたりして、あなたとは既に随分前からの知己の様な気がしていましてね。今回が初顔合わせだなんて、信じられない位ですよ」
そう言って穏やかに笑った昭を見て、清人は益々腹立たしさを覚えた。
（嫌味か、この狸親父……。あの時もっとボコボコにしておくべきだったな）

「そう言えば……、佐竹さんは柏木社長とも昵懇だとか。柏木社長に働きかけて色々ご配慮頂いた様でありがとうございます」
「さて、何の事やら。確かに柏木さんの所とは家族ぐるみでお付き合いをしていますが、一介の作家如きが大企業の社長職を務めていらっしゃるお宅に、どんな配慮をすると？」
「家庭の中の事まで考えて頂けるとは、恐縮ですな。しかしご心配頂く様な事はありませんので、今後はお気遣いなく」
「小笠原さんは、どうやら何かお考え違いをしていらっしゃる様ですが？」
「そうでしたか？」
「そうだと思いますが？」
傍目には笑顔のやり取りだったが、話の内容が今一つ掴めない清香は後ろで首を捻り、聡はこの腹の探り合いの会話に胃痛を覚えた。

（二人とも、もういい加減勘弁してくれ、胃がっ……。そうだ、母さん！？）

慌てて由紀子の方に目をやると、真っ青な顔で片手で軽く昭のコートの袖を掴んでいるのが目に入った。しかし清人が更に足を踏み出して彼女に近寄ったのを見て、聡は顔色を変える。

緊迫した空気を醸し出す中、清人は昭の斜め後ろに佇む由紀子を面白く無さそうに見下ろしてから、笑顔らしき物をその顔に浮かべた。

「聡君のお母様の小笠原由紀子さんですね？　初めまして、清香の兄の佐竹清人です。あなたの事は清香から話を聞いていました」

「……は、はじめ、まして」

目が全く笑っていない笑顔で無言の圧力を受け、初対面では無いとも言い切れずに、由紀子はか細い声で挨拶を返した。すると由紀子と昭だけに聞こえる程度の小声で、清人が冷たく吐き捨てる。

「……どの面下げて清香を家に引っ張り込んだ。この偽善者が」

「……っ」

「由紀子！」

真っ青な顔の由紀子が小さく息を飲んで胸元を押さえ、そんな彼女の顔を覗き込んだ昭が、僅かに顔色を変えて小声で呼びかける。対する清人はそんな2人に全く興味が無さそうに一瞥しただけで、踵を返して歩き始めながら清香に声をかけた。

「それでは失礼します。この後片付けなければいけない仕事もありますので。ほら、清香、行くぞ」

「う、うん。じゃあ聡さん、おじさま、由紀子さん、失礼します」

慌てて清香は頭を下げて別れの言葉を述べ、昭達も何とか笑顔を浮かべつつ言葉を返した。

「ああ、さようなら」

「じゃあ清香さん、また電話するから」

「はい！」

そうしてその場に立ったまま、二人を見送っていた三人だったが、その姿が人混みに紛れて見えなくなった瞬間、緊張の糸が切れた様に由紀子が玉砂利の上に崩れ落ちて膝をついた。

「由紀子、大丈夫か!?」

「母さん!!」

流石に顔色を変えた男二人に、由紀子が胸を押さえながら弱々しく呟く。

「大丈夫よ、ちょっと苦しいだけだから、お薬で何とかなるから……」

そう弁解した由紀子を、昭が叱りつけながらバッグの中のピルケースを探す。

「早く舌下錠を使え！　それから念の為このまま病院へ行くぞ。聡、かかりつけの病院に休日対応して貰えるかどうか確認してくれ！」

「分かった！」

由紀子の傍らで慌ただしく対応している二人に、周囲の視線が集まり始めている頃、清人と清香は境内を抜けて最寄駅への道を歩いていた。

「今年は色々良い事がありそうだね、お兄ちゃん！」

「……」

「お兄ちゃんってば！　聞いてる？」

「……あ、ああ、すまん。何か言ってたのか？」

掴んだ腕を揺さぶって漸く反応を返された清香は、少し前から話しかけても上の空状態の清人に、怪訝な視線を向けた。

「どうかしたの？　さっきから何だか変よ？」

それに対し、清人は僅かに視線を逸らしながら弁解する。

「いや、何でも無い。ちょっと仕事で疲れてるかな？　新年早々一本新しいのを抱え込んだし」

それを聞いた清香は、何となく腑に落ちない様な顔付きをしたものの、深くは追及せずに話を終わらせた

「……そうなの？　じゃあ今日は帰ったらゆっくり休んでね？　晩ご飯は私が準備するから」

「すまないな、清香」

それからは何となく互いに無言で家路を辿っていたが、清人は心の中で義母である香澄に向かって謝罪の言葉を述べていた。

（すみません、香澄さん。あれから二十年以上経っても、まだ俺には約束を果たすのは無理みたいです……）

勿論そんな清人の呟きを、耳にする者など皆無だった。

第２５話　罪作りな天使

「聡さん、これがこの前の成人式の時の写真なの。由紀子さんに見て貰って下さいね？」

一月も半ばの週末、喫茶店で清香と待ち合わせた聡は、挨拶もそこそこに差し出された封筒を受け取り、その中から何枚かの写真を取り出して顔を緩めた。

「ああ、早速母があげた簪や帯留めを使ってくれたんだね？　ありがとう、これを見たら母も喜ぶよ」

振袖姿の清香の全身を写した物や上半身のアップの物など何枚かの写真の中に、清人とのツーショットを認めた聡は一瞬手の動きを止めたが、清香は特に不審に思わず笑顔で話を続けた。

「当日着付けと髪のセットをしてくれた玲二さんも感心してました。『流石に大企業の奥様だと、普段使いの物も本物だね』って。一応お店で貸して貰える飾りを家まで持ってきてくれたんですけど、無駄になって謝っちゃいました」

それを聞いた聡は思わず写真から顔をあげ、感心したように清香に向かって呟く。

「へえ……、玲二さんは当日の朝に、わざわざ清香さんの自宅まで出張してくれたんだ。優しいんだね」

「はい。それに『清香ちゃんの振袖姿を見逃してたまるか！』とかで、結局他の皆も成人式の会場に勢揃いしてしまって、そこで撮ったのが一番下のそれなんです」

「……そうなんだ」

清香に指し示され、端だけが見えていた一番下の写真を引き抜いて見ると、確かに振袖姿の清香を囲んで彼女の兄と従兄達が笑顔で全員集合しており、聡は軽い頭痛を覚えると同時に納得した。

（清香さんの成人式に顔を出そうかとも思ったが、大学祭の二の舞になりそうな予感がしたんだよな……。しかもこの日に皆予定を合わせたから、今日は誰もちょっかいを出しに来れ無かったとみた。つくづく正解だったな……）

そんな考えを頭の中で巡らせていると、無言になっていた聡を不審に思った清香が声をかけてきた。

「聡さん、何となく元気が無い様な気がしますけど、どうかしましたか？」

その問いに対し、聡はついこの間の懸念について口を滑らせる。

「……ちょっと、ね。実は今、母さんが少し体調を崩してて」

その言葉に、清香は忽ち心配そうな表情を浮かべた。

「大丈夫なんですか？　そう言えばこの前神田明神でお会いした時、何となく顔色が優れない様な感じはしましたけど」

「確かに、久し振りに人混みの中に出て、ちょっと疲れたのかもしれないね」

「そうですか……。退院されたばかりですし、あまり無理なさらない様に伝えて下さいね？」

「心配してくれてありがとう。母に伝えておくよ」

体調を崩した原因が清香自身の兄の一言だとは言えず、聡は静かに微笑んで誤魔化した。そして話題を変えようと、ここに来た時に感じた事を口にしてみる。

「だけど清香さんも、何となく元気が無い感じがするんだけど」

「私ですか？　私は別に具合は悪く無いですよ？」

キョトンとして言い返した清香に、聡が真顔で続ける。

「でも俺がここに来た時に、何か難しい顔をして考え込んでなかった？　何か心配事でもあるなら相談に乗るよ？」

そう言われて合点がいった顔付きをした清香は、次に戸惑う様な表情を見せた。

「心配事ですか？　まあ、確かに有ると言えば有るんですが……」
「何？　遠慮せずに言ってみて？」
「こんな事言われても聡さんが困るかと思うんですが……、最近お兄ちゃんの様子が変なんです」
そう言われた瞬間、聡は別に困るでもなく、寧ろ平然とその言葉を受け止めた。
（兄さんは清香さんに関わる事限定で、相当変だし色々常軌を逸しているのはこれまでで十分分かっているからな……）
冷静にそんな事を考えた聡だったが、清香に対しては心配そうな顔を装いつつ問い返してみた。

「先生の様子が変って、いつからどんな風に？　原因が何かは分かってるのかな？」
それに対し、清香は割と冷静に答えた。
「思い返してみると、初詣から帰ってからの様な気がするんです。突然どこか上の空になったり、気が付くと飾ってある家族写真を無言で凝視してたりとか」
「へぇ……、その日に何かよほど気に入らない事や、ショックな事でもあったのかな？」
原因がしっかり把握できているにも関わらず聡は惚けたが、続く清香の物凄い的外れな台詞を聞いて、激しく脱力した。

「ええ、お兄ちゃんったら、その日おみくじで初めて凶を引いたんです」
「……え？」
「お兄ちゃんはこれまで毎年、不思議な位大吉ばかり引いてたんですよ」
「……なかなか強運な人なんだね」
辛うじてコメントを口にした聡に、清香が更に追い討ちをかける。

「そうなんです！　それなのに今年偶々凶を引いて、密かに動揺して落ち込んでるみたいで。それで巷で有名なラッキーアイテムを色々集めて、お兄ちゃんにプレゼントしてみたんですけど、なかなか気に入った物が無いらしくて。あれから調子が戻らないままなんです」

ポニーテールを微かに揺らしながらテーブルに身を乗り出し、真顔で訴えてくる清香に、聡は思わず遠い目をしてしまった

（そりゃあ……、おみくじの結果が悪くで、気分を悪くしている訳では無いだろうからな……）

「聡さん、見ただけでお兄ちゃんの心をグッと鷲掴みしそうな、そんなラッキーアイテムに心当たりありませんか？」

あくまでも真剣に尋ねてくる清香を冷たく突き放す事はできず、聡は神妙に答えた。

「ごめん、その手の類にはあまり詳しく無くて……。今度耳よりな情報が入ったら、清香さんに教えるね？」

「お願いします」

（全く……、母さんの体調崩しただけでは飽き足らず、清香さんにまで何変な心配かけてんだ。あの馬鹿兄貴！）

聡は心の中で清人に罵声を浴びせてから、写真を元の様に封筒に入れてコートの内ポケットにしまい込み、カップに残っていた珈琲を飲み干した。

「じゃあそろそろ出ようか。スケートしに行く前に、寄りたい所が有るんだろう？」

「はい、そんなに時間はかかりませんから。この近くで開催されている、明良さんの個展に顔を出したいんです」

「明良さん？　倉田さん、だよね。確かフリーのカメラマンだったっけ」

「はい、結構活躍してるんですよ？　実はさっき渡した写真も、明良さんに撮影して貰ったんです」
「そうなんだ」
そうして支払いを済ませた二人は、清香の先導で他愛の無い話をしながら表通りを五分程歩き、繁華街のビルの一階に入っている貸しギャラリーの前で足を止めた。

ガラス張りのそのギャラリーの入口横には《倉田明良個展会場》の表示が掲げられており、二人は躊躇する事無く中へと足を踏み入れる。すぐ側の受付で担当の女性に軽く会釈しつつ記帳を済ませると、少し離れた所で年配の男性と立ち話をしていたスーツ姿の明良が清香達に気が付いて話を終わらせた。
「……そんな所ですね。それではごゆっくりご覧下さい。……やあ、良く来てくれたね、清香ちゃん。小笠原君もようこそ」
笑顔で歩み寄って来た明良に清香は悪戯っぽく笑い、聡は社交辞令的な笑みを返した。

「うふふ、明良さんに言われた様に、サクラの頭数を増やしに来たわ」
「それはありがたいな。清香ちゃん一人でも、十分華やぐからね」
「お邪魔します」
「やあ、付き合わせて悪いね。大した物は無いけど、一通り見て行って」
明らかに謙遜と分かるそんな会話を交わしてから、三人はそれなりに人が入っているであろう会場内をゆっくり移動し始め、偶々手が空いていたのか、それともスポンサーであっても中年男の相手よりは清香にへばり付いていた方が楽しいのか、明良は清香に寄り添って展示されている作品の解説を始めた。

今回の個展の被写体は主として自然の風景らしく、断崖絶壁から

鳥が飛翔する瞬間を狙った物や、洞窟内の神秘的な光景を撮った物など、思わず聡も見入ってしまう秀逸な題材と絶妙なアングルの作品が多かった。それで思わず素直な感想を口に出す。

「……なかなか素敵な作品が多いですね」

清香と話し込んでいた明良がそれを耳にして、益々嬉しそうな顔になりながら清香と聡を奥まった場所へと誘導した。

「ありがとう。実は最近の一番の傑作はこっちでね。是非ともその感想も聞かせて欲しいな」

「そうなんですか。拝見します」

それに素直に従って付いて行った聡は、目の前に現れた三枚のパネルを目にした途端、絶句して固まった。

「ああ、これだよ」

「これ……、……っ！？」

「きゃあぁっ！　思ったより素敵に出来てる！」

明良が自慢げに披露し、清香が歓声を上げたそれらは、《羽化》と題名が付けられた連作だった。それを見た聡がどうして固まったのかと言えば、それが清香の全裸を撮影した物だったからである。

勿論きわどいショットなどでは無く、向こう側を向いて膝立ち状態の背中に、翼をイメージした様に薄く透けて見えるシフォンの細長い布を交差させて体に軽く巻き付け、その両端を両手で掴んで幅広く広げた物、横向で膝を抱えてその上に乗せた顔をカメラの方に向けながら、下部はやはり薄布に埋もれている様に写っている物、更にうつ伏せになった状態で両肘を付き、組んだ手の上に顔を乗せて真っすぐ見詰めている物の三枚だった。

これだけでも聡は心臓が止まる位驚き、次いで猛烈な怒りに駆られたが、傍らの脳天気な二人の会話がそれに拍車をかけた。

「良いだろう？　出来上がりを見て、是非とも今回のラインナップに加えたくなってね。これまで見た人の反応も、結構良いんだよ」

「うわ～、凄く嬉しい！　撮影前にエステで全身を、お姉様達に散々いじられた甲斐があったな～」
「はは。俺は後から文句言われたけどね。『あんな何もしなくてもピチピチの若い子連れてきて、私達にどうしろって言うのよ。嫌味？』って」
「あはは、そんな事があったんだ～」
そんな会話を耳にしているうちに、聡の中で何かが盛大に音を立てて切れた。
と同時に聡の顔から徐々に表情が消え去っていき、ここで漸く清香と明良が静か過ぎる聡に気が付く。

「小笠原君？　さっきから黙ってるけど、どうしたの？　俺の傑作に度肝抜かれたとか？」
「聡さん、これ、どうですか？」
「……どうして“これ”を撮ったんですか？」
二人の問いかけに聡は質問で返したが、その声音は地を這う様な代物だった。それに当然気付きながら明良は平然と言い返し、清香は何も考えないまま素直に答える。

「どうしてって、清香ちゃんの成人の記念に。綺麗な今の清香ちゃんを残しておこうと思ったから」
「裸なんて、明良さんじゃなかったら恥ずかしくて撮って貰え無かったし。でも明良さん、流石プロだよね？　撮る時結構厳しかったし」
「そりゃあ、良い物を撮る為に命かけてるからね。それ以前に清香ちゃんを撮るんだから、下手な物は撮れないさ」
「でも本当に良い記念になったわ。ありがとう明良さん」
「どういたしまして。あとから別なパネルを家に送るからね」

如何にも楽しげに会話している清香と明良を凝視したまま黙って

いたが、ここでいきなり聡は右手で清香の手首を鷲掴みし、明良に軽く頭を下げただけで足早にその場を後にした。
「失礼します。行くよ」
「……え？　あの、聡さん！？　ちょっと待って！」
当惑しながら聡に半ば引きずられて行く清香を見送った、この事態を引き起こした張本人である明良は、一人取り残されたギャラリーでクスクスと笑いながらひとりごちた。
「ああ……、ちょっとばかり刺激が強過ぎたかな？　頑張ってね？　清香ちゃん」
そうして何事も無かったかの様に、新たな来客に向かって愛想を振り撒いていたのだった。

そして今現在自分が置かれている状況に全く気が付いていない清香は、一歩先を早足で進む聡に困惑しながら声をかけた。
「あ、あのっ！　聡さん？　いきなりどうしたんですか！？」
そんな問い掛けを何回か無視しながら聡は建物を出て通りを進み、少し歩いたと思ったらいきなり細い路地に清香を引っ張り込んだ。更に通りから陰になって見えない場所を選んで、建物の壁に清香の背中を押し付け、その両脇に自分の両手を付いて半ば彼女を閉じ込める体勢になる。
事ここに至っても、自分に何が起きているのか今一つ分かっていない様に、不思議そうに見上げてくる清香に向かって、聡は無表情のまま漸く口を開いた。

「……無防備にも程がある。多少腕には自信があるのかもしれないが、それで油断してると火傷だけじゃ済まないって分かって無いな」
「は？」
いきなりの断定口調に清香が戸惑った声を上げたが、続けて言われた言葉にカチンときた。
「加えて無頓着で無神経過ぎるし」

「……聡さん、怒りますよ？」
「怒ってるのはこっちだ！」
「きゃあっ！」
軽く文句を言っただけなのにいきなり怒りの表情で顔の横の壁を拳で叩かれ、清香は相手が相当怒っているのを漸く理解した。
「一体何がどうなると、ヌード写真なんか撮られる羽目になるんだ？」
「だから……、それは明良さんが、二十歳になった記念に、綺麗な私を撮ってくれるって……」
しどろもどろになりながら弁解を始めた清香だったが、聡は容赦しなかった。
「そんな口車に乗った挙げ句、撮影中散々男達に裸を舐めまわす様に見られてヘラヘラ笑ってたんだ？」
「それは……、裸と言われてもきわどい写真なんか撮られてませんし、明良さんは気心が知れてる相手だし、芸術作品を撮りたいって。それに舐めまわす様になんて誤解で、明良さん以外は全員女性スタッフで終始和気あいあいと……、きゃあっ！」
「ふざけるな！」
今度は強く両肩を掴まれて一瞬揺さぶられた為、流石に清香も固まって顔を引き攣らせた。そこで漸く聡も自分が清香を怯えさせているのを自覚し、肩を掴む手の力を緩めて黙って自分の足元を見詰める。
そして自分の感情を落ち着かせる様に、軽く何回か呼吸をしてから、再びゆっくりと顔を上げて清香の顔に視線を合わせた。
「……あ、あの、聡、さん？」
「俺としては……、はっきり口にしてなくても、もう家にも呼んで両親にも会って貰ってるからそのつもりだったんだけどね。迂闊だったな……」

「な、何が、でしょう？」
心底疲れた様な溜め息を吐かれ、幾らか怖じ気づきながらも清香が尋ねると、聡は一気にサラッと言ってのけた。
「清香さんと付き合ってる気になってたって事。残念ながら君の方はそうじゃなかったみたいだけどね。まあこの際、済んでしまった事は仕方がない。この際はっきり言わせて貰う。俺と付き合って」
真正面からそんな言葉を投げ掛けられた清香は、思わず逃げ場を探してしまった。
「え、えっと……、それは所謂どこかに行くと言う事では……」
「できれば、俺をこれ以上怒らせないで欲しいな？」
ここで唐突に聡の顔が、先程までの怒りの表情から不気味な位の極上の笑顔に切り替わった為、清香は心の底から戦慄した。
（や、やだっ！　何かこの笑顔怖いっ！　絶対聡さん怒りまくってる！！）
見せ掛けに騙されず聡の心情を正確に理解できた清香は、未だ両肩を掴まれた不自由な体勢のまま、軽く頭を下げて謝罪した。
「……すみません。所謂男女交際についてのお話だって事は、十分理解してます」
「それは良かった。一々説明する手間が省けて安心したよ。じゃあ話は戻るけど、俺の恋人になって？」
台詞の内容は依頼する形なのに、何故か拒否する事を許さない空気を醸し出している笑顔の聡に、清香はおずおずと口を開いた。
「……あの、聡さん」
「何？　俺が恋人じゃ不満？」
「いえ、そんな事じゃなくてですね。私、これまであまり男の人に好かれた事が無いんですけど……」
ボソボソと自分の経験値の低さを語り、遠回しにどうしてそんな

自分と付き合おうとするのかと問い掛けてみた清香だったが、聡はその発言を切って捨てた。

「単に、世の中の男達の見る目が無さ過ぎるのと、根性が無さ過ぎただけだから。俺から見たら清香さんは、十分魅力的な女性だよ？　他に質問は？」

「他に、と言われても……」

完全に進退窮まった格好の清香に、聡は自分のペースのまま話を続けた。

「じゃあ問題無いよね。じゃあこれから俺達は恋人同士と言う事で」

「はぁ……」

「それで、早速恋人の俺から君に、幾つか注意事項があるから良く聞いて」

「はっ、はい。何でしょうか？」

急に再び険しい表情になった聡に、清香がビシッと全身を緊張させると、聡は大真面目に言い聞かせてきた。

「他の男の前で裸になるのは禁止、って言うかそんなのは問題外だから。今回だけは特別多目に見てあげるけど、もし万が一同じ様な事があったら……、お仕置きだけじゃ済まないよ？」

「……っ！？」

最後に呟く様に語られた台詞の時、聡の瞳の中に得体の知れない危険な物を感じ取った清香は、目を見開いて固まった。

（ちょ、ちょっと待って！　聡さんが何か変っ！？）

本気で狼狽する清香の前で、聡が自嘲めいた小さな笑いと呟きを漏らす。

「自分でも驚く位、俺って独占欲が強いタイプだったみたいだな。でもこれまでこんな事は無かったし、本気の相手限定か……。これじゃあとても“あの人”を笑えない」

「え、えっと……、それはどういう意味」
「だから水着もビキニは禁止」
「は、はあぁ？」
話の流れに全く付いていけない清香を半ば無視し、聡が淡々と自分の要求を繰り出す。
「ただし、俺がプールを貸切にする時だけは構わないから」
「あの……」
（独占欲が強いとか、ビキニは禁止とか、だけどプール貸切の時はOKとか……、何か突っ込み所が満載なんだけど……。っていうか！　いつもの穏やかで冷静な聡さんはどこに行っちゃったのよっ！？）
聡の理性と冷静な判断力を崩壊させた張本人である清香が悶々と考え込んでいると、聡が顔を近付けて覗き込んできた。
「ねえ、俺の話、ちゃんと聞いてるのかな？」
「は、はいっ！　聞いてますっ！」
（ち、近いですから顔がっ！！）
自分達の体勢と距離を再認識して、自分の顔が赤くなるのを自覚した清香だったが、聡は傍目には変わらないままだった。
「そう。流石に温泉とかで、女湯に入る時まで水着を着ろとは言わないから安心して？」
（安心してって……、それは当然だと思うんだけど……）
心の中で突っ込みを入れた清香だったが、取り敢えず別の内容を口にしてみた。
「あの……、因みに、温泉テーマパークとか、クアハウスの類に行く場合は……」
それに対する聡の答えは、実にきっぱりとした物だった。
「他の男に見られるだろ？　当然ワンピースタイプ。スカートの付

いたAラインタイプの物や、パレオ付きなら尚良いね」
「……」
最早何も言えず黙り込んだ清香に、聡が笑顔で促してくる。
「返事は？」
「はいっ！」
「うん、良い子だ……」
反射的に了承の返事をすると、聡は満足そうな笑顔になってその顔を近付けてきた。

「あ、あのっ！　聡さんっ！？」
思わず両手で聡の身体を押しやる様にしながら、これから起きる事態を想像して軽くパニックを起こしながら清香は両目を閉じた。しかし自分の額に何か柔らかい物がほんの少しの間触れた感触がしただけで、何も変わった事は起きず、少ししてから恐る恐る目を開いて聡を見上げてみる。
するとそこにはいつも通りの穏やかな笑顔をたたえた聡が立っており、何か面白そうに清香を見下ろしていた。

「うん？　何？　清香さん」
「……いえ、何でも無いです」
ついさっきまでの一連のあれは幻だったのかと思う位の清々しい笑顔に、清香は呆然となりながら聡の問い掛けに答えた。すると聡が清香の手を取って、元の広い通りに向かって歩き出す。

「さあ、じゃあ話がついたところで、予定通りスケートに行こうか」
「あ、は、はい……」
（えっと……、と、取り敢えず、私、聡さんとお付き合いする事に、なったんだよね？）
そんな些か頼りない認識をしながら、清香は聡と共に目的地に向かって歩き出したのだった。

後日、明良から『めでたく清香ちゃんと交際開始にこぎつけた様だから、祝い代わりに贈ってやる。だがくれぐれも変な用途に使うなよ？』とのメッセージ付きで例のパネルをポスターに仕立てた物を送りつけられた聡は、「変な用途って何だ！　しかもこれを一体どこに飾れと？」と本気で頭を抱えた。

その一方で清香からどんな記念写真を撮影したのかを詳しく聞いていなかった清人は、自宅に届いたパネルを見せられた途端、「明良！　お前俺に殺されたいのか！？」と盛大に電話口で吠える事になったのだった。

第２６話　女達の策動

昼食もそろそろ食べ終わろうかという頃、学食で隣の席に座っていた清香から「朋美、ちょっと聞いて欲しいんだけど」と話しかけられた内容を、朋美は最初聞き流していた。しかしすぐにスプーンの動きを止めて真顔で清香を見返し、一通り話が終わったのとほぼ同時に、持っていたスプーンをカシャンとドライカレーの皿に取り落としつつ、小さく呻く。

「……それで、付き合う事になった？」

「うん、なんだかそんな事に……」

いつの間にか箸をトレイに置き、もじもじと居心地悪そうにしている清香を眺めた朋美は、頭痛と眩暈を覚えた。

（これまでのやり取りで、付き合ってるっていう認識が無かったのも凄いけど、半ば脅迫しながらなし崩し的に告白ってどうなのよ？）

朋美は気を落ち着かせようとコップを取り上げ、その中に半分ほど残っていた水を勢い良く飲み干してから再び横に向き直り、慎重に清香に問いかけた。

「因みに今の話、清人さんには」

「してるわけないでしょ！　恥ずかしいじゃない！　というか、今までも告白された時、一々報告なんてしてないから！？」

「……だよねえ」

（全く、厄介事を増やしてくれて……）

途端に顔を赤くして訴えてくる清香に、朋美は思わず深い溜息を吐いた。そしてこの場合、やはり自分が詳細を清人に通報するべきなのか、しかし告げた時の彼の怒り具合を考えると、あまり連絡はしたくないなと眉間に皺を寄せて考え込んでいると、清香が真剣な顔で問いかけてくる。

「それでね？　どうしたら良いかなって」
「どうしたらって、何を？」
　全く文脈と発言の意図が分からなかった朋美が問い返すと、清香は微妙に朋美から視線を外しながら、恥ずかしそうに小声で呟いた。
「えっと……、だから、聡さんと付き合うって、どうすれば良いのかなって……」
「……は？」
（そこから？　そりゃあ確かにあのシスコン兄貴と私のせいですぐに別れてるから、清香の恋愛経験値は限りなく0に近いけど！？）
　あまりと言えばあまりの事態に朋美は絶句したが、自分の立場では間違っても恋愛指南などできる筈も無いと分かりきっている朋美は、わざと冷たく突き放してみた。

「……好きなら暫くくっついてるし、嫌いなら別れれば良いだけの話よ。何？　もう愛想尽かしたの？」
「朋美、違うから！　そんな愛想を尽かすなんて！」
「じゃあ本当のところ、清香は聡さんの事をどう思ってるのよ」
　盛大に反論してきた清香に冷静に突っ込んでみた朋美だったが、そこで清香はボソボソと、しかし顔をうっすらとピンク色に染めながら延々と聡についての見解を話し始めた。

「そっ、それは……、時々何を考えてるか分からない事があるけど、気配りのできる優しい人だと思うわよ？　笑った顔も素敵だけど、真剣な顔も格好良いし。それで……」
　そこで、本人は意識していないものの立派な惚気話を延々と聞かされる羽目になった朋美は、益々精神的疲労感が増大した。
（本人は絶句自覚してない筈だけど、清香からこんな惚気話もどきを聞く日がくるなんて、何か感慨深い……。だけど迂闊な事は言えないし。かといってあの清人さんと真っ向勝負できる聡さんは貴重

な人材で、この先清香の前に同レベルの男がまた現れる保証はないし。うぅ、どうしよう……）

ひとしきりそんな事を悶々と悩んでから、朋美は顔付きを改めて清香の話を止めさせた。

「……清香、分かった。もう良いわ」

「そう？」

「それでね、清香」

「何？」

きょとんと問い返した清香の肩を、そこでいきなり朋美が両手でガシッと掴み、真剣な顔で一言口にした。

「……ごめん」

「え？　何が？」

今度は清香が話の流れが全く分からず問い返したが、朋美は語気強く言い切った。

「理由は卒業するまで言えないけど、取り敢えず先に謝らせておいて！」

その勢いに押され、何が何だか分からないままとにかく清香が頷く。

「……う、うん。何だか良く分からないけど……、取り敢えず分かったから落ち着こうね」

「卒業したら何でも相談に乗るから！　遠慮なんかしなくて良いからね！　お金に関わる事以外だったら何でも頼って！？」

「……その時はお願いします」

気迫に満ちたその訴えに、何事かという様な周囲からの視線を意識しつつ、清香が殊勝に答えた。それに安堵した様に、朋美が顔を綻ばせる。

「任せて！　あ、じゃあ私、次は向こうの特別棟の教室だから、先

に行くね！」
「うん、じゃあまた後でね」
そうして慌ただしく立ち上がり、トレイを抱えて食器の返却場所まで走り、そのまま手を振って学食を出て行った朋美を呆然と見送った清香は、食べかけだった親子丼の残りに再び箸を伸ばしながら首を捻った。
「何だか朋美まで変だな～。今年は変な星回りなのかな？　お兄ちゃんと聡さんも揃って変だし」

そして清香の目につかない場所まで行ってから、朋美は何かを堪える様な表情で携帯を取り出し、幾分躊躇しながらも目的の番号を選択して電話をかけ始めた。
（ごめんね清香！　親友の情報を切り売りする私を許して！）
「もしもし、緒方ですけど……」

「はい、佐竹ですが」
『今晩は。小笠原ですが清香さんは』
夜の八時を回った時間帯、自宅の電話を本を読んでいたリビングで受けた清人は、相手が誰だか分かった瞬間、無言で受話器を戻した。しかし即座に再び着信音が鳴り響く。

『もしもし。聡ですが』
途端にガシャッと音を立てて戻される受話機。しかし相手もなかなか引き下がらなかった。
『いい加減にして下さい！　大人気ないとは思』
三度目は会話の途中で清人がぶち切る。そんな取っては切り、取っては切りの攻防を十回程度繰り返し、とうとう向こうが諦めたらしく切ってから一分経過しても再度呼び出し音が鳴らなくなった時点で、漸く清人は小さく溜息を吐いてから忌々しく呟いた。

「目障りな小バエ野郎が……」
小さく吐き捨てるのとほぼ同時に、自室でレポートを書いていた清香がリビングのドアを開けてひょっこりと顔を出した。
「お茶を飲もうかと思ったんだけど、お兄ちゃんも飲む？」
「ああ、頼む。煎れてくれ」
「分かった。ねえ、さっき電話が何回か鳴って無かった？」
不思議そうに尋ねてきた清香に、清人が何でも無い顔で答える。
「何だかしつこい間違い電話が立て続けにな」
「そうなんだ」
小さく肩を竦めた清人に、清香は頷いてからキッチンへと向かった。そして自分が口にした電話、の言葉で、つい聡の事を思い浮かべる。
（ここ何日か聡さんから電話もメールも来ないんだよね。忙しいのかな？　こっちから連絡してみようかな？　でもわざわざ忙しい時に悪いかもしれないし、どうしよう……）
そんな風に清香が人知れず悩んでいる頃、残業の合間に会社の廊下から電話をかけていた聡は、携帯を握り締めながら清人に対する悪態を吐いていた。
「あのシスコン野郎！！　どこまで邪魔すれば気が済むんだ！」
思わず叫んでから慌てて周囲に人影が無いかを探り、取り敢えず無人らしいのが分かってから、何とか気持ちを落ち着かせつつブツブツと文句を呟く。
「清香さんに連絡が付かないのは、兄さんが彼女の携帯に、本人が気付かないうちに何か小細工したに決まってる。本人はそんな事をされてるなんて、夢にも思って無いだろうし……」

そこで盛大に舌打ちをしてから、聡は冷静に対応策を考え始めた。

「固定電話の取次は不可能。家に直接尋ねても門前払い。昼間に学校に訪ねて行ける程、そんなに時間に余裕は無い。となると……」

暫く真剣な顔で考え込んでから、聡は一度携帯をポケットに戻し、如何にも嫌そうに背広の内ポケットから名刺入れを取り出した。そしてその中から、以前貰っていた一枚の名刺を探し当てて引っ張り出す。

、

「……毒を食らわば皿までって言うしな。色々な意味で後が怖いが」

そう呟いて重い溜息を吐いた聡の手には、以前試写会会場で遭遇した時に真澄から貰った名刺が存在していた。サラリーマンの悲しい習性で、つい持ち歩いていた名刺を会話の合間に柏木姉弟と交換していたのだった。

そしてそれを裏返し、そこに書き込まれていた番号を確認し、再び取り出した携帯でその携帯番号に電話をかけ始める。

待つ事しばし。しかし予想通りの応答の声が返ってきた。

『……はい、柏木ですが』

「夜分すみません。小笠原です」

『あら！　随分珍しい人から電話がかかってくること』

しおらしく挨拶をすると、最初の仕事モードの様なやや警戒気味の口調から一転し、笑いを堪える様な声が返ってきた為、聡は些か憮然として言い返した。

「……ある程度予測されていたのでは？　頂いた名刺の裏に、こちらの携帯番号を手書きしておくなんて」

『まさか本当にかけてくるなんてね。“彼”の妨害になりふり構っていられないって事？』

「仰る通りです」

ひたすら下手にでた聡だったが、真澄は素っ気なく言い放った。
『だけど流石に私でも、あまり“彼”を本気で怒らせる様な事はしたく無いんだけど。それに別にあなたに借りとかも無いし』
「やって貰いますよ。迷惑料の代わりにね。小笠原の損害と俺の精神的苦痛に比べたら、実にささやかな物でしょう？」
『仕事の事を言っているなら関係無いわね。ビジネスの世界は弱肉強食。むざむざ盗られるそちらの力量の無さが災いしただけよ。責任転嫁は止めなさい』
「……」
流石にムッとした聡はこの前からのあれこれを当て擦ってみたが、逆にキッパリと言い切られて黙り込んだ。しかし十数秒沈黙が続いてから、電話の向こうの真澄が軽く溜息を吐いた気配と共に、予想外の台詞を伝えてくる。
『ただし、この場合ハンデが有りすぎるわね。フェアにするのは到底無理だけど、状況を幾らか有利にする位の話なら聞いてあげるわ。何をすれば良いの？』
「は？」
いきなりの上、あまりにも想定外の台詞を耳にして聡が思わず固まると、真澄は苛々した様に催促してきた。
『さっさと主旨を纏めて三分以内に言いなさい。こっちは残業中なのよ』
「失礼しました。それでは、お願いしたい内容ですが……」
急いで気を取り直した聡が依頼内容を説明するまで三分も必要とはせず、二人の会話はすぐに終了となった。
「もしもし、佐竹ですが……。どうかしましたか？　清香に用ならまだ帰っていませんが」
そろそろ夕方になろうかと言う時間帯に、自宅にかかってきた電

話に応対した清人は、その相手と伝えてきた内容に戸惑いの表情を見せた。
「は？」
思わず疑問の声を上げたものの繰り返し要求され、大人しく指示に従うべく電話を保留にして仕事部屋へと向かう。そしてドアを開けて中で資料整理をしていた恭子に声をかけた。

「川島さん。真澄さんから電話で、君に代わって欲しいと言われたんですが……」
「あら、珍しいですね。こちらにかけてくるなんて」
まだ戸惑いながら伝えた清人に、恭子は椅子から立ち上がりながらあっさりと返した。それに逆に驚きの表情を見せる清人。
「個人的に会ってるんですか？」
「ここで引き合わせてくれたご本人が、今更何を言ってるんですか。ごく偶にですけど、一緒に食事したり買い物に行ったりしてますよ？」
「……知らなかったな」
「お話ししていませんでしたか？　あ、それより電話！」
クスクス笑いながら指摘した恭子だったが、清人には予想外の取り合わせだったのか、些か呆然とその話を聞いていた。そして真澄を電話口で待たせている事に気付いた恭子が、慌ててその室内にある電話の子機を取り上げて会話を始めた。

「もしもし、真澄さんですか？……はい、恭子です。お待たせしました。今日はどうしてこちらに電話を？」
何となくその場に立ったまま清人がその様子を窺っていたが、話している間に恭子が当惑した声を出す。
「すみません、そう言えば携帯の電源を落としてました。……え？」
その声を発したと同時に何故か恭子は背後を振り返り、一瞬清人

とまともに目が合った。しかしすぐに視線を逸らして真澄の話に耳を傾ける。

「はい……、……はい、分かりました。ええ……、それならちょうど良かったです。確認して今夜か明日にでもお返事します」

最後は何故か笑いを堪える表情になった恭子は、終始友好的に話を終わらせた。

「……ええ、それじゃあまた」

そして子機を元の位置に戻すと同時に、清人が怪訝そうに尋ねてくる。

「彼女、何の用だったんですか？」

それに対し、恭子は清人の方に向き直りながら楽しげに答えた。

「美味しいお店を見つけたそうで、そのお誘いです。一人客は目立つから嫌とかで、時々お付き合いしてるんですよ」

「嫌なら無理に付き合わなくても良いんですよ？」

真澄に無理やり連れ回されているのではと、幾分心配になった清人は探りを入れてみたが、恭子はその懸念を一蹴した。

「あら、私真澄さんと一緒にお食事するのを、毎回楽しみにしてますよ？　自分とは違うタイプの方ですから、思いがけない考え方とかが聞けて、楽しいですから」

「そうですか。それなら良いんですが……」

まだ今一つ納得できない様な表情で清人はリビングに戻って行き、その姿が完全に見えなくなってから恭子はしみじみと考えた。

（先生の下で働く様になってから、口からでまかせが上手くなったわね……。喜ぶべきか悲しむべきか微妙だわ。さて……、そんな事より、頼まれた内容を確実にできる様に段取りを考えておかないと……）

そんな風に清人の知らない所で、女達の共同戦線が構築されつつあった。

それから一時間ほどして、清香が元気に帰宅した。
「ただいま！」
「お帰り。ちょうど良かった。そろそろ出掛ける所だったから」
「うん、行ってらっしゃい。気をつけてね」
まさに玄関で鉢合わせ状態の清香に、清人は愛想良く笑いかけてから背後の恭子を振り返って軽く頭を下げる。
「清香も戸締まりはしっかりとな。川島さん、１０時までには戻るのでお願いします」
「了解しました」
すっかり心得ている恭子の頷きに、清香が一人むくれる。

「お兄ちゃんったら！　もう子供じゃ無いんだから、川島さんに一緒に留守番をお願いしなくても」
「駄目だ」
清香に一言だけ言い聞かせ、清人は恭子の方に再び向き直り、小声で念を押した。

「……それでは川島さん。不審人物の排除は宜しく」
「どなたの事でしょう？」
「名前を口にしなければ分かりませんか？」
笑いを含んだその問いかけに、清人も同じ表情で返して来た為、恭子はそれ以上口を挟まず笑顔で頭を下げる。
「いえ、それでは行ってらっしゃいませ」
そうしてドアの向こうに清人が出て行くと、清香が憤慨してから恭子に向かって申し訳なさそうに言い出した。

「もう、お兄ちゃんったら！　ごめんなさい恭子さん、遅くまで付

き合わせて」
　それに事も無げに答える恭子。
「料亭で出版社の接待だから、無碍に断れ無かったみたいね。清香ちゃんが心配で中座して相手方の心証を悪くするより、私が留守番する事で先生がきちんとお愛想笑いしてくれるなら、その方が私も気が楽だもの」
「それもそうね」
　そこで女二人で顔を見合わせ、ひとしきり笑い合ってから玄関から奥へと移動した。

「さて、食材は十分有るから何を作ろうかしら。清香ちゃん、何か食べたい物はある？」
「あ、私が料理するから恭子さんは待ってて？　久々に恭子さんに料理の腕前を披露したいから」
　いつも泊まる時の様に夕食の支度をしようと台所に入りかけた恭子だったが、ここで清香が自分が引き受けると言い出した為、少し驚いた顔をした。
「あら、良いの？」
「勿論」
「それじゃあお言葉に甘えて、先生のお部屋から本でも借りて読ませて貰ってるわ」
「じゃあついでにこのバッグを部屋に置いて貰えますか？　料理ができたら呼びますね」
　恭子は清香からバッグを受け取り、台所に入った清香に背を向けて彼女の部屋へと向かった。そして邪魔される事無く室内に入り込む。

（さて、ここまでは予想外に上手くいったけど、どうかしらね……）
　考え込みながらベッドの上にバッグを置き、中から清香の携帯を取り出した。そしてベッドに座りながらその設定を確認しようとす

ると、案の定暗証番号の入力画面が出てくる。

「えっと……、流石にロックがかかってるわね」

そう呟いてから恭子は取り敢えず試しに四桁の数字を入力したがエラーになり、次いで少し考えてから駄目でもともとの気分で更に四桁を入力してみた。しかし予想に反してあっさりロックが外れてしまった為、思わず片手を額にやって深々と溜息を吐きだす。

「清香ちゃん……、自分の誕生日じゃ無いのは誉めてあげるけど、先生の誕生日だなんて先生を喜ばせるだけだから」

そして何とか気を取り直してから、恭子は聡からの通話やメールの着信拒否設定を次々と首尾良く解除し、携帯をバッグの中へと戻した。

「……これで、修正完了っと。まだもう一仕事、残ってるけど。先生に意趣返しする為に、先生にも清香ちゃんにも気取られ無い様に誘導するなんて、厄介よねぇ」

そんな事を幾らか疲れた様に呟きながら、恭子は清香の部屋を後にしたのだった。

そして清香が夕食を作り終わり、二人で向かい合って食べ始めたから暫くした頃、如何にも四方山話のついでという感じを装いながら、恭子が慎重に言い出した。

「……そう言えば清香ちゃん。留守番もそうだけど、携帯の設定とか大丈夫？」

「え？　何がですか？」

急な話題の転換に清香が怪訝な顔をすると、恭子は用意しておいた台詞をスラスラと述べた。

「先生が清香ちゃんを一人にさせるのを嫌がるなんて、何か変な事でもあったのかと思って心配になったの。以前から泊まりがけの取材旅行の時、ここに泊まる様に頼まれているけど、夕方から数時間

家を空ける位で留守番を頼まれるなんて初めてだったし」
それを聞いた清香は、溜息を一つ吐いてから申し訳なさそうに答えた。

「うぅ……、ごめんなさい恭子さん。何か年明けからお兄ちゃんがちょっと変で。情緒不安定って言うか、妙に心配性って言うか」
「そうなの？　それなら別に良いの。ストーカーの気配とか、無言電話や悪戯メールとかあったのかと思ったわ」
「勿論、そんな事無いですよ」
慌てて否定した清香に対し、恭子は神妙な顔つきで話を続ける。

「それでさっきの話に戻るけど、携帯なんて個人情報の塊だから、きちんと管理しないと危ないと思ってね。ちゃんとセキュリティーロックをかけてる？」
「大丈夫ですよ。恭子さんも心配性ですよね？」
そこは余裕の笑みで返した清香だったが、恭子は先程勝手に清香の携帯設定を確認した事など微塵も感じさせずに、笑顔で念を押した。
「それなら勿論、ロックナンバーは自分や家族の誕生日とは違う番号に設定してるのよね？」
「……え？」
途端に笑顔のまま固まる清香に、恭子が疑う様な視線を向ける。

「え？　って、清香ちゃん？　まさか、ひょっとして……」
「いえ、あの、でもっ！　お兄ちゃんの誕生日だし！」
必死になって弁解する清香に、恭子はわざとらしく溜息を吐いてみせた。
「……清香ちゃん。それ位ある程度付き合いのある人は知ってるし、先生はプロフィールで誕生日は公表してるのよ？　そんなに親しく無い人でも、清香ちゃんと先生の関係を知っている人なら、容易に

推察できそうじゃない」
「駄目？」
恐る恐るお伺いを立ててきた清香に、恭子は語気強く言い切った。
「携帯が未来永劫悪意を持った人間に渡る可能性が皆無では無いし、私としてはこの際是非変更を勧めたいわ」
「う～ん、それならどんな番号にしようかな」
最早食事そっちのけで悩み始めてしまった清香に、とんとん拍子に事が進んで嬉しい為緩みそうになる顔を何とか引き締めながら、恭子は冷静に問いかけてみた。
「誕生日以外で、そうそう忘れない日付とか、番号とかは無い？」
「えっと……。あ、そうだ！　０６１２にしよう！」
そう宣言してから再び箸を動かして料理を口に運んだ清香を、恭子は微笑ましく思いながら、自身も箸を動かしつつ小さな疑問を口にした。
「確かに二人の誕生日じゃ無いけど、何か忘れられない意味がある数字なの？」
「あれ？　覚えてない？　６月１２日は恭子さんが初めて家に来た日だよ？」
「え？」
何気なく言われた言葉に恭子は目を見開いて手の動きを止め、清香は清香でしみじみと語り出した。
「もう、あの時は本当にびっくりしたんだから。夕方帰ったら家に知らない女の人が居て、お兄ちゃんに『暫くこの人と一緒に暮らすから』って言われた時には」
「……ごめんなさいね。相当驚かせた自覚はあるわ」
うんうんと頷きながら話をする清香に、恭子は如何にも申し訳なさそうな顔になる。

「おまけにその頃、まだ客用布団を揃えて無かったから、『明日布団を買うから、一晩一緒に寝てくれ』って言われて」
「私は床やソファーでも良かったんだけど、先生が『ちゃんとしたベッドで寝なきゃ駄目だから、床やソファーを使うなら俺がそこで寝るから俺のベッドを使って下さい』って強固に主張されて、あの時は本当にどうしようかと思ったもの」
そこで女二人は顔を見合わせ、申し合わせた様に同時に溜息を吐いた。

「本当に訳が分からない主張だったな～。私、義理のお姉さんになるかもしれない人を、ベッドから蹴り落としちゃったらどうしようって、凄く緊張したんだから！　でも後でよくよく考えたら、恋人だったら一緒に寝るだろうし。その時、誰かと一緒の布団で寝るなんて凄く久し振りで、ホカホカしてすぐ寝ちゃった様な気がする」
当時を思い出しつつそう述べた清香に、恭子は思わず苦笑してしまった。
「ええ、緊張してた割には布団に入って五分で熟睡してたから、凄く羨ましかったわ」
「だって両親が死んでからはいつもお兄ちゃんと二人きりで、泊まりに来る人とかも皆無だったから、なんだか家族が増えたみたいで嬉しかったんだもの。そうか、お兄ちゃんが結婚したらお姉さんができるんだ。この人だったら仲良くできそうだな～って。だから忘れられない一日なの」
にこにこと説明された内容に、最近では殆ど忘れかけていた当日の事を思い出した恭子は、その顔に心からの笑みを浮かべた。

「……私だってそうよ。ありがとう、清香ちゃん」
「どういたしまして。……ところで恭子さん、本当にお兄ちゃんと結婚しないの？」
どこかからかう様な口調で尋ねてきた清香に、恭子も余裕で笑っ

て答える。
「だからその話は今更よ。あれから五年以上経ってるのよ？　もしそうならとっくに清香ちゃんの義理のお姉さんになってるわ。先生とはあくまで雇い主と雇用者の関係よ」
「そうなのよね～。残念だな～」
本心から言ってくれていると分かる言葉を恭子は嬉しく思い、半分照れ隠しに箸を動かしながらつい余計な事を口走った。

「それに、先生には先生のお考えがあるみたいだし」
「なあに？　それ」
清香に問われて自分が口を滑らせた事に気が付いた恭子は、にっこりと笑って誤魔化す。
「秘密。私が勝手に推察しているに過ぎないし」
「えぇ？　ずるい！」
盛大に抗議してきた清香だったが、ここで恭子が話を逸らしにかかった。

「それに、先生の結婚云々の話以前に、偶には清香ちゃんの恋バナとか聞きたいな～、とか思っているんだけど？」
「うえ？　恋バナって」
途端に動揺した声を上げる清香に、恭子はテーブルに肘を付きつつにっこりと微笑してみせる。
「この前大学祭で顔を合わせた小笠原さん。この際、その後どうなってるのか、是非聞きたいわ」
「ど、どうなってるのかって……」
「うふふ、清香ちゃんとこんな話ができる様になるなんて、本当に感慨深いわね。ほら、お姉さんに何でも話してみなさい」
「うぅ……、恭子さんの意地悪！」
小さく手招きする仕草を見せた恭子に、清香が顔を真っ赤にしながら拗ねる。それを見ながら恭子は何とか噴き出しそうになるのを

堪えた。

（ありがとう、清香ちゃん。今夜はぐっすり寝られそうだわ……）

清香との会話で思いがけずこの家を初めて訪れた時の事を思い出し、恭子の胸の内はその時の様に温かくなっていた。

第27話　アップダウン・バレンタイン

二月に入って寒さも一段と厳しくなってきた頃、一限目の講義が終了して次の教室へと向かいながら、朋美は並んで歩く清香にさり気なく話しかけた。

「ねえ、清香。今年のバレンタインはどうするの？　勿論聡さんにあげるんだよね、手作りチョコ」

「いつも通りお兄ちゃんには作るけど……、聡さんには渡そうか渡さないか迷ってるの」

本気で悩んでいるらしい口振りに、朋美は驚いて足を止めた。

「はぁ！？　ちょっと待って！　付き合い出して初めてのバレンタインでしょ？　ここは気合いを入れて、手作りチョコを渡すところじゃないの！？」

「だって……、私、相当料理の腕前が無いと思われる顔みたいで」

「……ごめん、私にも分かる様に話してくれる？」

がっくりとうなだれながら言われた台詞の意味が分からず、朋美は清香に説明を求めた。すると顔をあげた清香が、真顔で事情を語り始める。

「だって、今まで五人に手作りチョコを渡した事があるんだけど、そのうち二人に受け取り拒否されたの」

「何それ」

詳細を聞かなくてもそこはかとなくその理由が察せられ、その時の清香の心境を思って、朋美は僅かに顔を引き攣らせた。そしてそのまま清香の説明が続く。

「そして他の三人は貰ってくれたけど、当日中に一人、翌日二人に『やっぱり貰えない』って真っ青な顔で返されて。開封もしないそのままって、私の作った物を食べる気にならないって事だよね……」

言うだけ言って更に落ち込んだ様子を見せる清香に、朋美は流石に清人に対する怒りが湧き上がった。

（清人さんっ！　あんた何て事してくれたんですか！？　しっかり清香のトラウマになっちゃってるじゃないですか！！）

恐らく過去に手段を選ばず、相手にチョコを突き返させたであろう清人を、胸中でひとしきり罵ってから朋美はある決意をして口を開いた。

「……清香、今年はやっぱり作るべきよ」

「そうかな？　お兄ちゃんは私の作った物は何でも喜んでくれるけど、聡さんは迷惑に思わないかな？」

自信なげに問い掛けてくる清香に、朋美は溜め息を吐きそうになるのを堪えながら言い聞かせ始めた。

「あのね、私が今までそんな話を聞いた事が無かったって事は、小中時代の話でしょ？」

「うん、まあ……、そうだけど」

素直に頷いた清香に、朋美はそのまま畳み掛ける。

「そんなお子様時代の、所謂ガキの言動に未だに引きずられてどうするの。料理が下手そうな外見云々の問題じゃ無くて、大方周りの連中にチョコを貰った事を冷やかされて、恥ずかしくなって発作的に返したとかそんなところよ」

「そうなのかな？」

まだ疑わしい顔をしている清香に、朋美は大きく頷いてみせた。

「実際清香の料理を食べて腕前を知ってる私が保証するから、何も心配要らないわ。聡さん絶対喜ぶから、自信持って作ってあげなさいって！」

「そうかな……、朋美がそう言うなら、今年は二人分作ろうかな？」

「悪いこと言わないからそうしなさい」
「うん、ありがとう朋美」
そこで漸く明るいいつも通りの笑顔に戻った清香と共に、朋美は次の教室に向かって再び歩き始めた。
そして次の休憩時間、清香に適当な理由を述べて彼女から離れた朋美は、携帯である人物に連絡を取った。

「……もしもし、真澄さんですか？　朋美です。今大丈夫ですか？」
『ええ、大丈夫よ。頼んだ件、どうなったかしら？』
以前から清香の周りの人間関係についての情報源が絶対にいる筈と確信していた真澄は、清香から朋美の存在を聞き出した段階で彼女がそれだと目星を付けていた。しかし大人しく清人の指示に従っているからには、彼女なりの事情があると察してこれまで静観していたのだが、今回は敢えて清香を介さずに連絡を取ってみて、動揺する彼女に事情を話しささやかな協力を要請してみたのだった。すると案の定、朋美は憤慨しきった声を返してきた。

「チョコを作って渡す様に誘導しました。今回だけは全面的に真澄さんの意見に賛成です。以前から誰にもチョコを渡さないのは、清人さん以外に興味がある人が居ないからだと思ってましたが、まさか自分が料理下手顔かもと思い悩んでるとは思ってませんでしたよ。何妹のトラウマになる様な事をしくさってるんですか、あの人はっ！？」
現状としては清香に近付く男を排除する役目を担わされている朋美だが、基本的に親友思いの彼女が清人に向かって直接言えない分怒りまくって訴えてくる内容を、真澄は黙って聞いてから疲れた様に溜め息を吐いた。

『……本当に、普段冷静な人間が見境無くなると手に負えないっていう実例ね。協力ありがとう、朋美さん』

「どういたしまして。今回のこれは清香にバラした訳では無いし、清人さんとの契約の範囲外の事ですから」
きっぱり言い切った朋美に、真澄はつい小さな笑いを漏らす。
『今回はお互いの意見が一致して助かったわ。ついでにアフターケアもお願いできる？』
「勿論、この件に関してだけは最後まで面倒見ます。安心して下さい」
清香への罪滅ぼしの意味でも、朋美の意思は固かったのだった。

そしてバレンタインを控えた日曜日。朝食を食べながら清人は清香に確認を入れた。
「清香、今日は正彦君と出掛ける予定だったか？」
「ううん、悪いけど正彦さんには昨日急遽断りを入れたの。どうしても今日じゃ無いと空かないって言われたから、そっちを優先しようと思って」
あっさりと言われた内容に清人の箸の動きが止まり、若干声のトーンが低くなる。

「……じゃあ誰と出掛けるんだ？　小笠原君か？」
何とか顔を普通の状態に保ちながら、（清香に無理を言って予定を入れさせたのか？）と密かに憤っていると、そこで清香が思いもかけない事を言い出した。
「出掛けないし、午後から来るのは真澄さんよ。昨日言ってなかったかな？」
「は？　いや、聞いていないが……、彼女が何をしにここに来るんだ？」
全く理由が思い当たらなかった清人は当惑して尋ねたが、清香の答えを聞いて更に驚愕の声を上げた。

「バレンタインのチョコを作りによ」
「はあぁ!?」
驚きの声を出しただけでは足りず、無意識のうちに箸を取り落としてしまった清人に、清香は非難がましい視線を浴びせた。
「何？　別にそんなに驚く事は無いでしょう？」
「……彼女、食べられる物を作れるのか？」
思わず漏らした内容に、流石に清香が怒りの声を上げた。

「もう！　お兄ちゃんまで聡さんと同じ事言わないでよ。幾ら何でも真澄さんに失礼じゃない！」
「彼が何だって？」
「明日出掛けないかと言われて、真澄さんと一緒にチョコを作る約束をしたからと断ったら、少し黙った後『食べられるの？　それ』って言ったの。当然叱りつけたわよ、全くもう！　キャリアウーマンだからって料理ができないなんて思い込みは、失礼極まりないわ！」
その時のやり取りと思い出したらしく、怒りを増幅させた清香を眺め、清人は不覚にも心の中で聡の意見に同意してしまった。
（……初めてあいつに親近感らしき物を感じたな）
そんな風に呆然としていると、清香はまだ怒ったまま清人に宣言した。

「そういう訳だから、お昼過ぎからキッチンは使うからね！」
「ああ、分かったから……」
そして清人は何となく落ち着かない気分のまま午前中を過ごし、軽く昼食を取って後片付けが済んだ所で、エントランスからの呼び出し音が鳴り響いた。それは予想に違わず真澄からの連絡で、清香がモニター越しにやり取りしてから出迎える為に玄関へと向かう。
そしてさほど時間がかからずに、大きめの紙袋を抱え、片手にはバッグを提げた真澄が清香と話しながらリビングに現れた。

「本当に、今日は無理に押し掛けちゃってごめんなさいね。お邪魔します、清人君」
「こんにちは」
ソファーに座って新聞を読んでいた清人に、真澄が愛想良く声をかけたが、清人は辛うじて非礼にならない程度に挨拶を返しただけだった。しかしそんな態度を気にもせず、ダイニングテーブルの上に真澄が持参したチョコの材料らしき物を、女二人は袋から次々取り出しながら話を続ける。

「うちは一向に構いませんから良いですよ、真澄さん。でも話を聞いた事無かったんですけど、毎年チョコを作ってたんですか？」
「今年は偶々ね。ちょっとあげたくなった人が居たから、作ってみるのも良いかなって」
その真澄の言葉に清人は新聞を捲る手の動きを止め、清香は期待に目を輝かせた。
「へぇ？　どんな人ですか？　職場の人とか？」
「あら、それなら手作りなんかしないわよ。既製品を買うわ。あ、でもよくよく考えてみれば、私義理チョコの類も渡した事無かったわね。買いに行く時間とお金の無駄だと思ってたし」
小さく笑いを零しながら真澄が答えると、清香が尚も答えをねだった。

「ええ？　それなら益々どんな人か気になるな～」
「それは内緒。だけどいざ作ろうとしたら、家のシェフが『厨房を破壊しないで下さい！』って断固として使用拒否するんだもの。ふざけてるわよね」
手の動きを止めないまま憤慨してみせる真澄に、清香は僅かに顔を強張らせて慎重に尋ねてみた。

「あの……、真澄さん。どうしてその方は真澄さんが厨房に入るのをそんなに嫌がるんですか？」
「真顔で『危険過ぎる』って言うのよね」
「まあ、確かに危険と言えば危険かもしれませんけど……。真澄さん、以前火傷でもした事あるんですか？」
「いいえ、全然。ちょっと手を切った事がある位よ。それに以前家族に問題視されたのは、ちょっと炎が燃え上がって火事になりかけて、何かの弾みでオーブンが爆発して、ちょっと手が滑って包丁が飛んだ時偶々シェフが水を飲みに来て、鼻先にそれが刺さった事位だし。年を取って心配性になったみたい」
真顔で淡々とそう述べた真澄に、清香と清人は無言になり、心の中で突っ込みを入れた。

（それじゃあ問題視されなかった事とかも、色々あったのかしら？）
（それなら以前のあの特製ジュースとやらのレシピは、どうやって考えたんだ？）
そんな動揺している兄妹の心境など推し量る筈も無く、真澄は明るく清香に向かって声をかけた。

「さあ、清香ちゃんの指示通り材料は揃えて来たわよ。指導宜しく、清香ちゃん」
「う、うん。任せて」
一応笑顔を浮かべていた清香だったが、心なしかその顔が微妙に強張っているのを見て取った清人が、ソファーから立ち上がりつつ恐る恐る口を挟んだ。
「……清香？　一応俺も見ているか？」
しかしここで顔付きを険しくした清香が振り返り、清人にきつく言い聞かせる。
「一緒にお兄ちゃんにあげるチョコも作るんだから、見ていたら駄

目でしょう!?　毎年貰った時のお楽しみにしてるんだから」
「いや、しかし」
「締切が近いから、今日は頑張るって言ってたじゃない。ほら仕事仕事!」
尚も言いかけた清人に清香は走り寄り、両手で仕事部屋の方へと押しやった。それで清人は説得を諦め、大人しくリビングを出て行きながら一言付け加える。
「それじゃあ、気をつけて」
「分かってるわ」

力強く頷いた清香に一抹の不安を覚えながらも清人は大人しく出て行き、自身の仕事部屋へと入った。そして真っすぐ机に向かってやりかけの原稿に再び手を付け始めたのだが、十分も経たないうちに両手で頭を抱えて音を上げる。
「……勘弁してくれ。気になって仕事になるわけないだろうが」

しかしそんな愚痴を零しても締め切りが待ってくれる筈も無く、五時近くになってから清人は漸く何とか仕事に一区切りつけ、立ちあがって重い溜息と共に仕事部屋から出て行った。
そしてキッチンに入ると、カウンターの向こうのダイニングテーブルで、真澄と清香が何やら動かしている手元を見ながら、語り合っているのが見える。

「……それで、ここにこれを通して、捻って?　そのままこっちの方向に引っ張って纏めるの」
「こう、かな?　……うん、上手くできた!」
「綺麗にできたわね。早速使えるわよ?」
「ありがとう真澄さん。……あれ?　お兄ちゃん。休憩?」
人の気配を感じたらしい清香が振り向いて声をかけてきた為、清人は曖昧な頷きを返した。

「ああ、何か飲もうかと思って……」
そうして清人が黙ったまま清香が手にしている物に目をやると、それを察した清香が嬉しそうにそれを差し出してみせる。
「チョコを冷蔵庫に入れてからお茶にして、その後真澄さんにリボンフラワーの作り方を教えて貰ってたの。可愛いのができたでしょ？」
「ああ、そうだな……」
サテンのリボンとビーズを束ねて作ったらしい、小さなコサージュの様に見えるそれを、思わず清人は凝視した。

「わざわざ持って来て頂いたんですか？　すみませんでした、真澄さん」
「余り物をついでに持って来ただけだから、気にしないで」
そう言いながら、真澄は既にラッピングされている手のひらに乗るサイズの、しかし結構深さのある二つの箱に手早くリボンをかけ、更に結び目の所に先ほど清香と作っていた物を飾りつける。
「さてと、これで完成」
「うわ～、素敵。売り物みたい、真澄さん」
その出来映えに思わず誉め言葉を口にした清香に、真澄もにっこり笑ってから持参した袋をごそごそと漁った。そして目的の物を引っ張り出す。

「ありがとう。じゃあ最後の仕上げに、清香ちゃんにこれをあげるわ」
「何ですか？　これ」
一見何の変哲もない保冷バッグの様な、銀色で僅かにモコモコしている袋状のそれを、清香は不思議そうに見つめた。すると真澄は仕上げたばかりの箱を、その袋の中に入れながら説明を始める。
「持ち歩く間にせっかくのデコレーションが崩れたりしたら勿体無

いでしょう？　これは今度うちで取り扱う新製品なの。ここの横のラインを見ていて？」

「ここですか？」

箱を入れて直立している袋の縁から縁へ横に延びている線を清香が見やると、真澄は左手で袋の左縁を押さえ、右手で右端に付いていた何かのラベルを勢い良く引っ張ると、それは繊維状のものを引き出しながら外れた。そして十秒程してから清香に促す。

「ほら、どうなったのか分かる？」

「え？　あ、凄い！　何もしてないのに線の所で密着してる！　不思議」

「凄いでしょ。専用の圧着機とか熱で溶着させないで、出先で手軽に密閉できるの。清香ちゃんを驚かせたくて持ってきちゃった。チョコを入れて保管運搬するのに使ってみて」

「うわ～、面白そう！　早速使ってみます」

ウキウキと清香がそれを受け取ると、真澄が手早く荷物を纏めた。

「長々とお邪魔しちゃ悪いし、そろそろ失礼するわね。迎えが来る頃だし」

そこで唐突に携帯の着信音が鳴り響き、真澄が自分の物をバッグから引っ張り出して時間を確認しつつ、苦笑いで応答した。

「…五時ジャスト、さすがね。今降りるわ」

そして再び携帯をしまい込んでから、清香とキッチンでお茶を煎れ始めた清人に向かって声をかけた。

「下に車が来てるから失礼するわ。お邪魔しました」

そして下まで送ると言った清香を、真澄は玄関での見送りで押し止めて去って行き、清香はすぐにリビングに戻って来た。

「もう少ししたら、夕飯を作り始めるから待っててね」

「それは構わないが……、流しも綺麗に片付いているし、終わった

のか？」
「うん」
「そうか」
そこで何やら言いたげな清人の気配を察したのか、清香がボソッと言い出した。
「……ねえ、お兄ちゃん、柏木のおじさんのお家ってお金持ちなんだよね？　専属の料理人だっているみたいだし」
「そうだな。それが？」
「真澄さんが厨房に立ち入り禁止の理由……、何となく分かった気がする」
視線を逸らしながら言いにくそうに述べた清香から、清人はキッチン全体に視線を移して眺めやった。そして平然と言い聞かせる。
「まだマシな方だと思うぞ？　短時間で綺麗に片付く程度なんだから」
「え？」
当惑した清香に、清人は淡々とある事実を告げた。
「香澄さんも深窓育ちだったから、結婚当初家事は壊滅的だったからな。父さんは仕事で忙しかったし、必要に迫られて俺が一通り教えたんだ。……俺はあれで“忍耐”という言葉の、本当の意味を知った」
「……」
清人が真顔でそう告げると、キッチンに不気味な沈黙が漂った。
清香としては（確かにあまり手際良く無かったけど、あれでもマシになった方なんだ）という驚愕や、（十歳の義理の息子に家事を指導される継母ってどうなの？）という疑問などが頭の中で渦巻いていたが、母と真澄の名誉の為にも取り敢えずこの話題はここで終わりにしようと気持ちを切り替える。

「えっと……、それじゃあ、夕飯の支度の前に、チョコの仕上げだけやってしまおうかな」
そんな事をわざとらしく口にしながら、清香は冷蔵庫に向かった。清人もそれ以上話を蒸し返す事はせず、無言のまま茶を淹れてソファーへと向かう。
そして清香が冷蔵庫から取り出したトリュフチョコを、ダイニングテーブルで一粒ずつ丁寧に箱詰めし、慎重に包装紙で包みリボンと先ほどのリボンフラワーを付けるのをお茶を飲みながら何気なく眺めていた清人は、清香が真澄から貰った銀色の袋にその箱を入れた所で、漸く真澄の今回の訪問の意図を悟った。

（しまった……。あんな特殊な物で密封されたら、小細工なんかできないじゃないか！）
真澄が清香にも正確な目的を悟らせず、聡へのチョコへの手出しを完璧に封じてみせた事に気付いて、清人は小さく歯軋りした。

（あいつの肩を持つ気ですか……。それ以前に、それだけの為にわざわざチョコを作る話を出したんですか……）
清人が、真澄に対する怒りに駆られているなど夢にも思わない清香は、楽しそうに清人を振り返った。

「見てお兄ちゃん！　本当に一瞬でくっついたみたい。面白～い！」
「……そうだな。良い物を貰ったな」
「うん！　これって緩衝材にもなってるし。せっかく作ったリボンフラワーを崩さないで見て貰えるわね」
そんな風に上機嫌で語る清香を、清人は苦々しい思いで見詰めていた。

そして迎えた二月十四日。予め電話とメールのやり取りで聡が抜

け出しやすい時間帯を確認した清香は、夕刻に小笠原物産本社ビルの前に朋美と共にやって来た。

「……ねえ、朋美。わざわざ会社まで押し掛ける必要ってあるの？　何だかストーカーっぽくない？」

「現に付き合ってるんだから、ストーカーなんかじゃないでしょ。今更何言ってんのよ！」

「だって……」

そんな押し問答をしていると、社屋から「清香さん！」と声をかけながら、聡が小走りにやって来た。そして清香の所に来た聡は、横の朋美の姿を認めて僅かに顔を引き攣らせるが、いたって普通の口調で挨拶する。

「清香さんお待たせ。やあ、緒方さんも久し振りだね」

「はい、大学祭以来ですね。……ほら、清香。グズグズしない！　相手は仕事中なんだから」

「う、うん」

ドンッと背中を押されて聡の方に一歩足を踏み出した清香は、幾分心配な顔で持っていた小さめの紙袋を彼に向かって差し出した。

「あの、聡さん。電話でお話した様にお仕事中に呼び出して申し訳無かったんですが、チョコを持って来たので良かったら貰って頂けませんか？」

それに聡は僅かに怪訝な顔をして見せた。

「えっと……、本当にくれるの？　先生に何か言われなかった？」

「何かって……、何をですか？」

益々清香が不安そうな顔になってきたのに気付いた為、聡は慌てて笑顔で手を伸ばし、その紙袋を受け取った。

「いや、何でもないんだ。ありがとう頂くよ。それにわざわざ会社まで来て貰って悪かったね。今度埋め合わせするからね？」

上機嫌で聡が受け取ってくれた為、清香も安堵して漸く表情を緩めた。
「そんな事気にしないで下さい。聡さんから誘われても色々あって断ってる事が多いし……、今度はなるべく聡さんの方の都合に合わせますね？」
「そう言って貰えただけで嬉しいな。それじゃあ今度の週末にでも」
満面の笑顔で早速清香に誘いの言葉をかけようとした聡だったが、ここで静観していた朋美が容赦なく割り込んだ。

「じゃあそういう事ですので、お邪魔様でした！　失礼します！　ほら、帰るわよ、清香」
むんずと清香の腕を掴み、最寄駅に向かって歩き出した朋美に、清香は慌てて聡に別れの言葉を告げる。
「え？　あ、そ、それじゃあ、聡さん、失礼します」
「ああ、また連絡するから」
半ば強引に朋美に引き摺られて帰って行った清香を呆然と見送ってから、聡は苦笑いして社屋ビル内へと戻った。そしてエレベーターに乗り込んで、一人きりの空間で手提げ袋を覗き込みながら嬉しそうに独り言を漏らす。

「うん、元気が出てきたな。……しかし、この保冷バッグの様な物はなんだ？　職場に持って来るから中身が見えない様に、気を遣ってくれたのかな？」
そんな事を呟きながら、聡は顔を引き締めつつ部屋へと戻ったが、何故か戻った途端部屋中の人間の物言いたげな視線を浴びて僅かに怯んだ。更に自分の机の所に、同じ課の主だった面々が集まっているのを見て困惑する。

「あの、どうかしたんですか？　皆集まって」
不思議に思いながらも声をかけたが、上司達は揃って黙り込んで

おり、恐る恐る隣の席から高橋が説明してきた。
「角谷、ついさっき、お前宛てに社に届いた宅配便を、総務の子が届けに来たんだが……」
「荷物？　最近会社宛てで何か頼んだ記憶は無いんだが」
怪訝に思いながら人垣を掻き分けて机を見ると、確かに小さいダンボール箱が乗せられているのが目に入った。しかし心当たりの無かった聡は首を傾げる。
そこで高橋がもの凄く言い難そうに、聡に注意を促した。

「その伝票の……、送り主欄の名前、見てみろ」
「名前……、って！　はあ!?」
そこに真澄の名前と柏木産業本社ビル所在地の住所がしっかりと記されていた為、聡が驚きの声を上げた。そして呆然とする間もなく、背後からおどろおどろしい声が響く。

「角谷……、どうしてここに“あの”柏木真澄の名前が書かれているのか、その理由を教えて貰えないか？」
その声が課長の杉野の声以外ではありえない為、聡は蒼白になりつつ慌てて振り返った。
「いえっ、課長！　俺にも何が何だかさっぱり」
「しかも品名が“チョコ”だと？　ふざけるなよ角谷っ！　まさか一連のあれも、お前が全て漏らしたんじゃあるまいな!?」
聡に掴みかかりながら絶叫した杉野に、聡は必死になって弁解し、周囲の者が慌てて引き剥がしにかかる。

「課長！　それは誤解です！　これは何かの間違いか嫌がらせでっ!!」
「ちょっと落ち着いて下さい、課長！」
「冷静に話し合いましょう!!」
「角谷！　一体どういう事なんだ、これはっ！」

その日から聡は暫くの間、職場で冷たい視線に晒される羽目に陥ったのだった。

「……はい、柏木」

『何て事をするんですか！　あなたって人はっ！！』

出先から帰社したのとほぼ同時に鳴り響いた携帯に応答した真澄は、いきなり耳元で叫ばれた為反射的に携帯を離しながら顔を顰め、次いで怒りの声を上げた相手が分かって嬉しそうに顔を緩めた。

「ああ、ちゃんと届いたのね」

『届いたのね、じゃありません！　運悪く偶々席を外した時に机に持って来られて、上司や同僚に見咎められて、えらい目に合わされましたよ！　あなたは俺に何か恨みでもあるんですかっ！？』

憤慨しきった訴えに微塵も恐縮する事無く、飄々と答える真澄。

「特に恨みは無いけど……、今回清香ちゃんのチョコに何も仕込まれたりせず、安心して食べられるのは私のおかげなのよ？　感謝される事はあれ、文句を言われる筋合いは無いわね。それ位の嫌がらせ、甘んじて受けなさい」

『どうしてですか！』

「それが私の筋の通し方だからよ。言ったでしょ？　例の件を引き受ける時に、あなたに借りは無いしどちらかに一方的に肩入れはしないって」

そんな主張を繰り出した真澄に、聡は一瞬黙りこんでから慎重に問いかけた。

『……ちょっと待って下さい。つまり、兄さんからの嫌がらせを受けない代わりに、あなたからのそれを受けろと？』

「当たり前じゃない」

『どうしてそうなるんですか！？　全然意味が分かりません！』

「分からなくて良いわよ。それじゃあね」

電話の向こうでまだ何やら喚きかけた様だったが、真澄はそれを無視して通話を終わらせた。そして苦笑しながら携帯をしまおうとする。

「よっぽど職場で絞られたらしいわね。まあ、若い頃の苦労は買ってでもしろって言うし、お姉様からの愛の鞭だとでも思って」

そこで再び携帯が鳴り出し、真澄が（まだ文句を言い足りないわけ？）と思いながらディスプレイを確認すると、別な人物からの着信だった。それを認めて思わず小さな笑みを零す。

「あら、重なるわね」

そしてすぐに応答ボタンを押した。

「もしもし？」

『佐竹ですが……、今大丈夫ですか？真澄さん』

「ええ、平気よ。出先から戻って部屋に移動中なの」

そう言いながら真澄は廊下を歩き、付き当たりの窓の所にまでやってきた。すると清人が電話越しに、困惑した声を伝えてくる。

『さっき自宅に届いた物があるんですが……、何ですか？　これは』

「あら、まだ開けてないの？」

『開封して、包装も解いたから電話したんです』

「それならご覧の通り、ブラウニーだけど。それが何か？」

淡々と告げる真澄に、清人がどこか疲れた様な声を出した。

『……すみません、俺はこれを送りつけた意図を知りたいんですが』

「だって清香ちゃんがトリュフを作るって言うから、違うチョコ菓子の方が良いかと」

笑いを堪えながら伝えた真澄に、清人が恨みがましく言ってくる。

『真澄さん、何かの嫌がらせですか？』

「嫌ね、邪推しないでくれる？　最近随分疲れてそうだから、甘い

物でも取った方が良いんじゃないかと思っただけよ。念の為清香ちゃんにも味見して貰ったし、心配いらないわ」

『それはどうも、ありがとうございます』

とうとう我慢できず小さく笑いながら断言した真澄に、清人も苦笑いの風情で答えた。ここで真澄が爆弾発言をする。

「それで、もう一つは聡君にあげたから」

『……は？　あいつに、ですか？　どうしてそんな事を』

途端に困惑と怒りが入り混じった声を出した清人に、真澄は飄々と言ってのけた。

「職場にね。送り主欄は私の名前で、品名はチョコと記入して今日送りつけたの。ついさっき熱烈な“お礼”の電話を貰ったわ」

真澄のその台詞の意味を少しの間黙って吟味した清人は、小さく笑ってから呆れた様な声を出した。

『……随分、意地の悪い事をしますね』

それを聞いて、再び楽しそうに言い出す真澄。

「若い子にはあまり嫌われたく無いけど、この場合仕方が無いわ。そういう訳で、彼は結構周りから絞られたみたいだから、清香ちゃんがチョコを渡して拗ねてるのは分かるけど、機嫌を直して大人しくそれと清香ちゃんのチョコを食べてなさい」

『どこまで命令する気ですか』

「せっかく清香ちゃんがあなたに作ったのに、『あいつと同じ物なんて』って苛つかないで、美味しく味わって食べて欲しいからよ。分かった？」

押しつけがましく言った台詞にも清人は気を悪くする風も無く、大人しく了承の言葉を返した。

『分かりました』

「それなら良いわ。それじゃ失礼するわね」

そこで真澄は会話を終わらせ、耳から携帯を離してそのディスプレイを見下ろした。
「全く、世話が焼ける事……」
呆れた様に溜息を吐いてから真澄は携帯をしまい込み、自分のオフィスへと戻って行った。
そして清人は清人で携帯を耳から離し、目の前のテーブルに置かれた小さな箱の中身を見詰める。

「なるほど。これがあの人流の筋の通し方、と言うわけか……」
セロファン紙に一つずつ包まれたブラウニーを、清人が真顔で一つ摘まみ上げ、次の瞬間苦笑いの表情になった。
「全く……、完全に裏をかかれたな。まあ、偶にはこんなのも良いか」
そんな事を呟きながら何となくそれを掌で転がしていると、清香が帰宅してリビングに姿を現した。

「ただいま。あれ？　それって真澄さんが作ったやつだよね？」
「ああ、最近疲れ気味みたいだからこれを食べて英気を養え、だそうだ」
不思議そうに問われて、清人は小さく肩を竦めながら答える。それを聞いた清香は怪訝な顔をした。
「なんだ、それなら宅配便なんかで送らないで、作った時にそう言って渡せば良いのに、真澄さんったらどうしてそんな事するのかな？」
「あの人にはあの人の考えがあるんだろう」
「まあ、そうだけどね。……でもそうなると、もう一つは誰にあげたんだろう。気になるな～」
空中に視線を彷徨わせながらそんな事を呟く清香に、清人は失笑しかけながらも何とか笑いを堪えた。

「さあ、誰だろうな。清香、悪いが珈琲を淹れてくれるか？」
「うん、ちょっと待ってて。私のチョコも今渡すね」
「ああ、嬉しいな」
荷物を置き、笑顔でキッチンに向かった清香の背から視線を手の中に戻した清人は、満足そうにブラウニーを包むセロファン紙を剥がし始めた。

第２８話　芽生える不安

「真澄、お前に折り入って話がある」
軽いノックの後、断りを入れながら自室に入ってきた祖父の総一郎に、机に向かって持ち帰った書類の精査をしていた真澄は、軽い溜息を吐いてからドアの方を振り返った。
「はい、なんですか？　取り敢えずこちらにどうぞ」
そう言いながら椅子から立ち上がり、机とドアの間にある一人がけのソファーを指し示す。
自室といっても二間続き、かつ一部屋が十分な広さがある柏木邸では、机や飾り棚、本棚を並べても、丸いテーブルを挟んで一人がけのソファーを並べるに十分過ぎる余裕があった。そこに対面する形で座った二人だったが、何故か話があると言った総一郎が、固く口を引き結んで微動だにしない。

「……」
「お祖父様？」
「……」
眉を寄せ、不審そうに真澄が声をかけてみたが、総一郎の態度に変化は無かった。
「あのですね……。そろそろ休もうと思うので、お話なら手短にお願いしたいのですが」
流石にイラッとしながら促すと、総一郎はいきなり椅子から崩れ落ちる様に下り、座っている真澄の足元で土下座した。

「真澄、後生だから儂の頼みをきいてくれっ！！」
「はあ？　いきなり藪から棒に何ですか？」
「頼む！　このままでは儂は死ぬに死ねんのじゃあぁっ！！　死んでから澄江と香澄に合わせる顔が無かろう！？　あの子は孫の中で

はお前に一番懐いておるから、お前の口添えが是非とも必要なんじゃ！」

それで祖父の言わんとする内容を粗方察してしまった真澄は、面倒事はご免だとばかりににべも無く言い放って奥の寝室に向かう為立ち上がった。

「……長生きできそうで良かったですね。私は休ませて貰うので、これで失礼します」

「真澄！　お前はそれでも儂の血を分けた孫かっ！？　あんまりじゃあぁぁっ！！」

そこですかさず足首を掴まれた真澄は、絨毯の上に座り込んだまま涙を見せつつ哀れっぽく訴えてくる総一郎を、ほとほと呆れた眼差しで見下ろした。

（うざっ……、商談の席でならともかく、実の孫相手に見え透いた泣き真似なんかしないでよね）

「……真澄はこんな死にかけた老人の、最期の願いも聞いてくれん様な、薄情な人間だったのか？」

「死にかけてませんから。例え死にかけてても、他人の尻拭いと損働きだけは御免です」

「ほぅ……、それは商人としては天晴れな心意気じゃ。それでは商人らしく、支払った対価に見合った働きはして貰おうかの。あれには随分と大枚を払わされたんでな」

（……そうきましたか）

泣き落としが駄目と分かった途端、真顔になって睨みつけてきた祖父に、真澄は思わず遠い目をしてしまった。しかしゆっくりと立ち上がった総一郎と真正面から視線を合わせながら、反論を繰り出す。

「あれはそちらが自主的にお支払いになったのでは？」

「先に法外な金額を提示したのはそっちじゃな」
「「……」」
無言で見つめ合う二人。しかし何気なく総一郎の背後のドアに目をやると、その隙間から両手を合わせて拝むにしている父と弟に加え、笑顔で軽く手を振っている母の姿を認めてしまった真澄は、色々諦めて深々とした溜息を吐いた。

「……分かりました。それで具体的には何をしろと？」
「おう、簡単な事じゃ。単なるメッセンジャーだからの」
（だからの、じゃあないでしょう！　簡単だって言うなら自分でやりなさいよっ！）
心の中で憤慨しつつも、真澄は厄介かつ面倒な使者の役目を引き受ける事になったのだった。

そんな事のあった翌日。真澄は夕刻電話を一本入れてから、夜に佐竹家へと出向いた。
「こんばんは、清香ちゃん。遅くにごめんなさいね。これベルネスのクッキーだから、良かったら食べて頂戴」
「ありがとう、真澄さん。でも浩一さんならともかく、真澄さんが平日の夜に来るなんて珍しい。しかも仕事帰りですか？」
玄関先で出迎えた清香は、真澄が脱いだコートの下から現れた、一目でオーダーメードだと分かる体型にフイットしたスーツ姿に、お土産の紙袋を受け取りつつ不思議そうに尋ねた。それに乾いた笑いで応じる真澄。

「ええ、ちょっとね。色々立て込んでて。……嫌な事は早めに済ませるに限るし」
「え？　今なんて言ったの？　真澄さん」
後半はボソッと呟いた為、良く聞き取れなかった清香が尋ね返したが、真澄は笑って誤魔化す。

「ううん、なんでもないから」
そして二人並んでリビングに入ると、ソファに座って本を読んでいたらしい清人が、こちらも怪訝そうな顔を向ける。
「いらっしゃい。今日はどうしたんですか？　清香からは特に何も聞いていませんが」
「えっと……、ちょっと清香ちゃんに、急いでお願いしたい事があって」
「それなら私の部屋で話しましょうか？」
気を利かせたつもりの清香だったが、真澄は軽く首を振った。
「できればリビングで……、清人君にも聞いて貰いたいと言うか、話しておきたい内容だし……。今日はこちらの都合を聞かずに押し掛けちゃったから、忙しかったら出直すけど……」
何となくできれば忙しいと言って欲しい様な真澄の口振りに、清人と清香は無言で顔を見合わせたが、首を捻りつつ真澄に座る様に促した。
「別に構いませんよ？　どうぞ座って下さい」
「ありがとう」
そして清人と清香が並んで座ったのと反対側のソファーに真澄が落ち着くと、真澄が言い難そうに口を開いた。
「それでね、清香ちゃん」
「はい」
「……」
「……真澄さん？」
言葉を選んでいるうちについ無言の時間が続き、不審そうな清人からの問いかけの声を受けて、真澄は思い切って来訪の目的を告げた。
「あ、えっと、ごめんなさい。実は今日、今度の日曜日に清香ちゃ

んを私の家に招待したいと思って、そのお誘いに来たの」
いきなりの話に清人は無言で話の行方を見守る事にし、清香はキョトンとしてその理由を尋ねた。
「お家に、ですか？　どうして？　今まで真澄さん達が家に来る事はあっても、真澄さんの家にお邪魔した事は無かったのに」
その当然の疑問に、真澄が慎重に話を続ける。

「それが……、私が大学祭の時に競り落としたアレンジ、覚えてる？」
「勿論覚えてます。あの時はありがとうございました」
律義に頭を下げた清香に、真澄は笑って押し止めた。
「それは良いんだけど……。あれを家に持って帰ったら、それを見た祖父がとても気に入ってしまってね。どうしても欲しいと言うから譲ったの」
「そうだったんですか。真澄さんのお祖父さんにまで、そんなに気に入って貰って嬉しいです」
嬉しそうに笑った清香に、真澄は一気に一番重要な事を告げた。

「それで、今度の日曜日がちょうど祖父の八十歳の誕生日に当たってて、近親者が集まって祝いの席を設ける事になったんだけど……。是非一度、あれを作ったお嬢さんにお会いしてみたいから招待してくれって祖父に頼まれて……」
「真澄さんのお祖父さんが、ですか？」
「ええ……」
驚いて目を丸くした清香に、（それは、いきなり見ず知らずの人間から招待されたら、不審に思うわよねぇ……）と思わず遠い目をする真澄。その時、その戸惑いを払拭する様に、清香の携帯の着信音が鳴り響いた。

「ちょっとすみません」

「どうぞ、出て頂戴」
真澄に断りを入れつつ立ち上がり、ダイニングテーブルの上に置きっぱなしだった携帯を開くと、清香は躊躇い無くそれに応じた。
「もしもし、聡さん？　こんばんは。どうかしたんですか？」
途端に僅かに眉を顰める清人に、小さく溜息を吐いた真澄。しかし幾分困った様な表情で清香が背後を振り返った時には、二人はいつも通りの顔を取り繕っていた。
更に（気にしないで）と言う様に真澄が手を振って清香の部屋の方を指差した為、清香が携帯を耳に当てたまま小さく頭を下げてから、自室へと向かう。そしてその姿がリビングから消えると、ここまで沈黙を保っていた清人が不思議そうに真澄に声をかけた。

「珍しいですね、あなたがこんな使い走りの様な事をするなんて」
「私だって真っ平ご免よ！　目の前でわざとらしく土下座されて嘘泣きなんかされて、正直ウザくて最初は突っぱねたわ」
乱暴に足を組みながら、舌打ちせんばかりに言ってのけた真澄に、思わず清人が溜息混じりに尋ねる。
「……でしょうね。それなのにどうして引き受けたんですか？」
「きっぱり断った途端に嘘泣きを止めて、『支払った対価に見合った働きをして貰おうか』と迫られたのよ。全く、どこの世界に孫を脅す祖父が居るって言うのよ」
苛立たしげに吐き捨てる真澄を見て、清人は無意識に両腕を組んで考え込んだ。

「対価という事は……、話の流れからすると、ひょっとして例のアレンジの事ですか？」
「ご明察」
短く答えた真澄にその憤り具合が分かり、清人は呆れながらも質問を続けた。
「一体、会長から幾らむしり取ったんですか。二百万ですか？　三

百万ですか？」
「……五百万」
「真澄さん！？」
ボソッと呟かれた金額に、流石に清人は驚いて組んでいた両手を二人の間に置かれたローテーブルに勢い良く付き、非難混じりの声を上げた。しかし真澄も組んでいた足を戻し、僅かに身を乗り出しながら必死に弁解する。

「だって！　普通百万で売ろうって時に、最初から百万なんて提示しないで、高く言って値切り交渉に応じるものでしょう？　五百万ってふっかけて、二百万か三百万あたりで折り合いを付けるつもりだったのに、まさかバカ正直に言い値で応じるなんて思わないじゃない！！」
「その挙げ句、その場で現金一括払いされて、そんなに要らないと訂正しようとしても『儂に渡さんつもりか！？』とゴネられて、しっかり受け取らされたって所ですか？」
容赦無く指摘してくる清人に、本気で項垂れる真澄。
「どうして実際目にした様に言えるのよ」
「あなたにしては珍しい計算ミスですね」
慰めるべきか叱るべきかを清人が微妙に躊躇していると、真澄は膝の上に置かれた拳を強く握り締め、呻く様に呟いた。

「何だか……、今にして思えば、あれも全部自分の誕生日に清香ちゃんを招く為の布石に思えてきたわ」
「そんな気がしますね。お身体も頭の回転も衰えていない様で、結構な事じゃないですか」
小さく肩を竦めて事も無げに言った清人の言葉に、思わず真澄は顔を上げて清人の顔をまじまじと見やる。
「……何ですか？」
思わずたじろいだ様子を見せた清人に、真澄は顔色を窺う様に尋

ねた。

「反対しないの？」

「清香が柏木邸に行く事にですか？　それともご老体の告白をですか？」

「勿論両方だけど」

その問いに、清人は明るく笑って答えた。

「以前にも言いましたが、別に構いませんよ？　香澄さんに口止めされたので、今でも自分からは清香に打ち明けない事にしていますが、清香があの人の孫である事は事実ですから、それを告げようとする事自体を妨げるつもりはありません」

「それなら良いんだけど……。それで、清人君も一緒に来ない？」

「俺も、ですか？」

「ええ……、良かったら、だけど」

唐突な誘いの言葉に、清人は一瞬本気で当惑した様に黙り込んだが、すぐに苦笑しながら小さく首を振った。

「辞退しますよ。あの人が俺を招く筈がありません。大方あなたと浩一の独断でしょう。二人の立場を悪くする様な事はできません」

「でも、それは！」

「せっかくの祝いの席を白けさせるのは、流石にご老人に悪いですよ。せっかく勇気を振り絞ってらっしゃるんですから、それに水を差したくはありません。お気遣いなく」

声を荒げかけた真澄を、清人は淡々とした口調で宥めた。すると真澄が真剣な顔つきで、どこか清人を探る様に問いかける。

「本気で言っているのよね？」

「勿論です」

きっぱりと言い切った清人に、真澄は思わずと言った感じの呟き

を漏らした。
「……赤の他人にそれだけ寛容になれるなら、実の血縁者の」
「真澄さん？」
冷たい声で遮られた真澄は、自分の失言を悟った。
「ごめんなさい。余計な事は言わないわ」
謝罪して気まずそうに俯いた真澄が気の毒になったのか、清人は幾分わざとらしく明るい声で言い出す。

「正直に言わせて貰うと、あの屋敷は敷居が高いんですよ。あんな事があった所ですしね」
「やっぱりまだ許せない？」
心配そうに尋ねた真澄に、清人は何故か笑いを堪える様な表情で続けた。
「いえ、もうそんなのはとっくに超越してます。もし清香が十五も年上のバツイチ子持ち男に引っ掛かったら、俺だったら後腐れの無い様に確実に息の根を止めますよ。ですがあなたのお祖父様は、あの件で香澄さんが激怒したのがきっかけでしょうが、正式に入籍した後は嫌がらせもきっぱり止めて遠くからこそこそ様子を見ているだけで、いじらしいじゃないですか」
「それ……、本気で言ってるの？」
思わず疑わしそうな視線を向けた真澄に、清人が真顔で応じる。

「言ってますよ？　清香が高校の頃なんか男子生徒にちょっかい出されたりしないかどうか心配で、そこの学校の理事に金を掴ませて事務員の服と身分証のパスを入手してたのを知ってます。それを使って時々カツラと眼鏡で変装までして校内に入り込んでは、廊下の陰から清香の様子を眺めていたのを見た時には、思わず涙を誘われましたし」
「は？」
（清香ちゃんの高校まで行って、一体何やってたのよお祖父様！！）

祖父が第一線を退いてからの知られざる行動に、真澄は愕然とした。しかし清人の驚愕の告白は、更に続く。

「下駄箱や机に入れられた手紙とかを焼却処分したり、清香に言い寄ってる男に上から雑巾のすすぎ水をぶちまけたり、呪いの藁人形を鞄の中に入れたりしているのを見た時には、良い年をしたご老人がするのはどうかとも思いましたが」

（良い年をして無くても、人間的に問題あり過ぎでしょ！！）

心の中でそう絶叫した真澄だったが、ふと重大な疑問が頭をよぎった。

「……ちょっと待って。どうして清人君がそんな事を知ってるわけ？」

怪訝な顔をした真澄に、清人が全く悪びれずに答える。

「俺も似た様な事をしてましたから。校内でばったりご老人に遭遇して焦りましたよ。向こうは俺に気が付いていませんでしたが」

（清香ちゃん命の同類だわ……、お願いだから平然と言わないでよそんな事！　というか、そこのセキュリティーってどうなってるの！？）

本気で頭を抱えてしまった真澄に、清人が不思議そうに声をかけた。

「どうかしましたか？」

「……なんでもないわ」

「ああ、そうだ。理学部や医学部とかならともかく、文学部で白衣を着てうろうろすると目立つので、機会があったらさり気なく指摘してあげて下さい。見ている方が痛々しくて」

至極冷静に現在進行形であろう問題を指摘され、（清人君に憐れまれてるなんて事が分かったら、お祖父様憤死するわね……）と思いながら、真澄は話題を元に戻した。

「ご忠告ありがとう。じゃあどうして家に来るのが嫌なわけ？」
「それは……、やはり血統書付の犬の中に、薄汚い雑種が紛れ込んだら浮きまくるでしょう？」
「清人君！」
今度ははっきりとその顔に怒りの表情を浮かべた真澄に対し、清人は困った様に肩を竦めてみせた。
「自虐趣味で言ってるんじゃありません。客観的に見てそうですから。でも俺と違って清香は香澄さんの娘で心根も良い娘ですし、心配要らないですよ。ですから今回清香がそちらに出向く様に協力しますし」
「だから！　それはあなたが来ないと本当の意味では」
「……お兄ちゃん、ちょっと良い？」
二人が互いの主張を言い合っていると、携帯の通話口を抑えながら清香がリビングのドアから中に入って来て、清人に声をかけた。それに慌てて二人は会話を止め、清人が尋ね返す。

「清香、どうかしたのか？」
「それが……、今度の土曜日はお兄ちゃんと出掛ける事にしてたけど、聡さんと出掛けても良い？」
「土曜日？」
困った様に尋ねる清香に、清人は僅かに不満そうな顔になった。
「うん、二月に入ってから誘いを断ってばかりで、この前バレンタインにチョコを渡しに行った時に少し顔を合わせただけだし、ホワイトデーの辺りがまた忙しくなりそうだから、前倒しでその時のお礼がしたいって言われて……」
（ホワイトデーの周辺でまた色々仕掛けようとしたのを読んで、予め行動に出たのか？　つくづく生意気な奴だな）
（もう何を考えてるか丸わかりだわ。全面的に清人君を信頼してる清香ちゃんだけは、嫌がらせなんてしてるって他人が言っても信じ

ないでしょうけど）

二人がそれぞれ考えを巡らせていると、清香が元の様に清人の隣に座りながら、縋る様な目で清人に訴える。

「ねえ、お兄ちゃん、どうしても駄目？　春休みになったら幾らでもお兄ちゃんに付き合うから」

無意識に可愛らしく小首を傾げながらの問いに、真澄は思わず心の中で冷静に突っ込みを入れた。

（あ……、これは清香ちゃんの勝ち。間違っても真似できないわ）

すると清人は憮然としながらも、真澄が予想した通りの了承の言葉を口にする。

「……分かった、好きにしろ」

「良かった。じゃあ聡さんにそう言うね！　……もしもし、聡さん？　お待たせしました」

再び電話しながらうきうきとリビングを出て行った清香を見送った真澄は、向かい側で面白く無さそうにそっぽを向いている清人に、幾分疲れた様に声をかけた。

「以前から聞きたかったんだけど……、物分かりの良過ぎる兄を演じるのって疲れない？」

「変に押し付けたら反発するだけですよ」

あっさりと言い切った清人に、真澄は更に問いかける。

「だから本人には良い顔をしておいて、裏で画策するってわけ？　ひょっとして、香澄叔母様の時のお祖父様や父達を反面教師にしてるとか？」

「ご想像にお任せします」

必要以上に触れられたくないらしく淡々と会話する清人に、真澄はそれ以上の追及を諦めた。そして何分かしてから携帯を閉じて清香が戻って来る。

「真澄さんお待たせ！　それで、真澄さんのお祖父さんの誕生日祝いのお話でしたよね」
「そう。どう？　来て貰えないかしら？」
「う～ん、真澄さんと浩一さんと玲二さんは良く知ってるけど、後は知らない人ばかりだろうし、どうしようかな……」
躊躇する清香に、思わず真澄は口を滑らせた。
「勿論、他にも皆来るし、出席者は全員清香ちゃんが知ってる人間だから、遠慮しないで？」
「え？　どうして？　それに皆って誰の事？」
思わずキョトンとなった清香に、真澄は話の順序を間違えたと後悔し、らしくない真澄の失態に清人は小さく溜息を吐く。

（しまった……。そう言えば、清香ちゃんとの関係を悟られない様に、必要以上にお互いの関係も喋っていなかったから、友之や正彦達と従兄弟同士って事も話して無かった……。どこからどう説明すれば……。下手に話すとどうして隠してたのかと言われて、なし崩しにばれるし）
（本当に、あなたらしくないですね……。一体何をやってるんですか）
そこで固まってしまった真澄に構わず、清人は平然と言ってのけた。

「清香、お前まさか今の今まで知らなかったのか？　柏木さんと倉田さんと松原さんは血の繋がった実の兄弟だぞ？　当然、真澄さんを含めて皆従兄弟同士で、全員柏木産業会長の柏木総一郎氏のお孫さんだ」
「え、えええぇっ！　何それ、聞いてないっ！　第一、名前が違うのにどうして！？」
本気で驚愕した清香に向かって、清人が淡々と言い聞かせる。

「長男の雄一郎さんは当然柏木姓を名乗ってるが、確か次男の和威さんは1人娘の絢子さんの家に、三男の義則さんは姉妹だけの真由美さんの家に婿養子として入って、それぞれの姓を名乗ってるんだ。そうでしたよね？　真澄さん」

唐突に同意を求められた真澄だったが、そこですかさず頷いて見せた。

「え、ええ、そうなの。私達はそんなの分かりきってるから、そういえば清香ちゃんに対してわざわざ自分の従兄弟の誰々なんて紹介はしなかったかもしれないわ。ごめんなさいね」

「うわ……、そうだったんだ。十五年以上経って、衝撃の事実が判明……」

呆然と呟く清香を見て、（それ以上の驚愕の真実があるけど）と両者は思ったが、余計な事は口に出さずに話を続けた。

「そういうわけだから、私の家族に和威叔父様達と義則叔父様達が加わるだけだから、お祖父様を除けば清香ちゃんも顔見知りばかりでしょう？」

「本当にそうだわ」

「それに清香、成人の祝いに貰った装飾品の礼状はもう出しただろうが、やはり一言直に礼を言った方が良くはないか？　幸い今回三人が一堂に会するわけだから、纏めてお礼を言う絶好の機会だと思うが」

さり気なく清人に指摘された清香は、ここで大きく頷いた。

「それもそうね。真澄さん、お邪魔させて頂いて良いですか？」

「勿論大歓迎よ。皆喜ぶわ」

「じゃあお兄ちゃんも一緒に行くよね？」

如何にも当然の様に清香がそう口にした途端、清人と真澄は揃って口を閉ざした。それを不審に思った清香が問いかける。

「どうかしたの？」
そこで清人がきっぱりと清香に言い聞かせる。
「いや、清香、俺は行かないから。身内の集まりだし、そうそう部外者が立ち入ったら不味いだろう」
「でも私も部外者だし、皆お兄ちゃんの事は知ってるけど？」
普段なら清人抜きで皆が集まる事など皆無の為、反射的に清香は口にしたのだが、清人は苦笑いして答えた。

「皆は知ってるが、主役の総一郎氏とは俺は面識が無いからな。清香は彼に招待されているから行くのは問題無いが」
「まあ、それはそうだけど……」
あっさりと嘘を吐いた清人だが、当然それは清香に分かる筈も無く、何となく釈然としないまま黙り込んだ。そして小さく息を吐いた清人が、更に言葉を続ける。
「時期的にも悪いしな。もうすぐ確定申告の期限なんだ。経費や諸費用のチェックを今月中に済ませておいて下さいと川島さんに厳命されてるから、今度の土日にそれをやろうと思っていたし」
それを聞いて、清香は漸く納得した様に真澄に向き直った。

「……そうなの。それなら仕方無いよね。じゃあ真澄さん、私だけお邪魔しますね？」
「え、ええ。私はできれば清人君にも来て貰いたいんだけど……」
諦めきれない真澄は一縷の望みをかけて清人に声をかけたが、対する清人の答えはつれないものだった。
「無理です。諦めて下さい」
「分かったわ。それじゃあお祖父様に伝えておくわね。それから当日は迎えの車を寄越すから」
「ありがとう、真澄さん。お世話になります」
それから真澄が帰る旨を告げ、下で待たせていた車に戻ろうとす

ると、清香がマンションの出入口まで送ると言って清人を引き連れて付いて来た。そして清香と世間話をしながらエレベーターに乗り込んで笑顔を見せていたが、心の中では懐疑的な心境に陥る。

（取り敢えず目的は達成できたけど、当日そう上手く事が運ぶのかしら？）

そして表情だけでは容易に考えを察知できない清人の存在を背後に意識しながら、真澄はここに居ない年長者達の事を考えた。

（清香ちゃんとの血縁関係を明らかにしたとしても、お祖父様達が清人君を認めなかったとしたら、お兄ちゃん大好きの清香ちゃんが激怒するのは確実だし。そこの所をちゃんと考えているんでしょうね！？）

考える毎にどんどん増していく不安を振り払う様に真澄は小さく首を振り、その背中を眺めながら清人は分からない程度に眉を顰めていた。

第２９話　舞台裏

「それじゃあ、お兄ちゃん、恭子さん、行ってきます」
コートを着て出掛ける支度をすっかり済ませた清香が、清人の仕事部屋のドアを開けて顔を覗かせると、清人は机に向かったまま幾分不機嫌そうに、恭子は本棚から何かのファイルを抜き出しながら笑顔で答えた。

「……ああ」
「行ってらっしゃい。気をつけてね？」
「はい」
そうして清香が笑顔で出て行ってから二・三分して、マンションの前の通りを一台の車が走り去って行った。それを窓際に移動した恭子が見下ろしながら、誰に言うとも無しに呟く。
「聡さんはＢＭＷなんですね。あれは３シリーズかしら？　先生は」
「川島さん、無駄口は叩かないで下さい」
ピシャリと釘を刺された恭子だが、しかしそれほど恐れ入る様子は無く、両手で抱えていたファイルの束を、清人の目の前にドサリと置いた。

「はい、それではこちらも端的にお伝えします。こちらの銀行口座入出金額と購入品の伝票の名前と金額、それと必要経費として計上する領収書を、今日の夕方まで全てチェックして下さい」
「……量が多すぎませんか？　全部川島さんの方で適当に処理してくれて構わないんですが」
憮然として丸投げしようとする清人に、恭子がにこりと笑いかける。
「先生？」
しかし全く目が笑っていないその笑顔を見てしまった清人は、神

妙に頷いてファイルに手を伸ばした。

「分かりました。やります」

「全く……。下手すれば本業収入より副収入の方が多くなりそうで、そちらの計算で手一杯なんですから、本業に関わる事位責任持ってちゃんとやって下さい」

ぶちぶちと文句を言いながら部屋を出て行こうとくる恭子の背中に、清人が傍目には素直に頷いてみせながら、疲れた様に付け加える。

「ああ。……しかし、最初の頃はこんな女性じゃ無かったんだが」

「聞こえてますよ？　それ以上文句を言うなら、夕方から清香ちゃんのデートの監視に出掛けるのも断固として阻止しますからね！第一、誰のせいで私がこうなったと思ってるんですか？」

途端にピタリと足を止めて背後に向き直り、恭子が本気で怒った顔を向けてきた為、清人が懇願する様に呻く。

「……終わらせるから出掛けさせてくれ」

「勿論です。頑張って下さい、先生」

最後は笑いを堪える様な顔で恭子が部屋から出て行ったのを確認してから、清人は溜息を一つ吐いて携帯を取り出した。そして予め予定していた番号を選択して、短く告げる。

「もしもし？　……ええ、宜しくお願いします長野さん」

その頃、清香はマンションまで迎えに来た聡の車に乗り込み、のんびりと聡との会話を楽しんでいた。

「迎えに来て貰ってすみませんでした」

「これ位何でも無いよ。それより……、今日は無理に付き合わせてしまったみたいで悪かったね。先生に何か言われなかった？」

運転しながら慎重に尋ねてみた聡に、清香が自信満々に請け負う。

「流石にちょっとだけ渋い顔をしてましたけど、ちゃんと了解して貰えたし、大丈夫です！」
「それは良かった」
それを聞いた聡も笑顔で答えたがチラリとバックミラーに目を走らせ、清香を乗せた辺りから二台程後ろにチラチラ見えている様に感じる、一台の車を確認した。

（……しっかり尾行は付けてるみたいだがな。あの黒のカローラか？　取り敢えず様子を見るか）
色々思う所は有ったものの、聡は余計な事は口にせず、清香との会話を楽しみながら目的地へと車を走らせた。

「凄い！　聡さん、またストライク！」
何回目かのストライクを出して満足そうに聡が戻って来ると、清香が小さく拍手しながら出迎えてくれた。それに気を良くしながら聡が苦笑する。
「清香さんも取りこぼし無くスペアを取ってるだろ？　正直、もう少し差が付くかと思ってたんだけどな」
「うふふ、小さい頃から皆に鍛えて貰いましたから」
自信有り気に答える清香に、思わず聡が尋ねた。
「皆って……、先生や柏木さん達の事？」
「ええ、両親が忙しかったから、旅行や遊びに連れて行ってくれたのは、専らお兄ちゃんや皆だったんです」
「そうなんだ」
そこで聡が何となく周囲を見回しながら立ち上がった。
「ちょっと飲み物を買ってくるから、ここで待っていて。何が良いかな？」
「えっと……、烏龍茶があれば」

「了解」
そして清香から離れた聡は、片隅の軽食を取り扱っているカウンターで烏龍茶とアイスコーヒーを頼んで支払いをしながら、そこから見通せる入口の向こうに佇んでいる男にさり気なく視線を向けた。

（ボウリング場に来て、ボウリングをしないなんて目立つだろ。それともあいつはおとりで、他にゲーム中の人間の中に、別に監視要員が居るのか？　そう考えると誰も彼も怪しく見えて落ち着かないな……）

そう考えて小さく溜息を吐いた聡は、注文したカップを二つ受け取り、これからの事を思案しながら席に戻った。

「お待たせ。じゃあ後一ゲームしたら出ようか」
「はい、今度こそ負けないから」
「はは、俺も負けるつもりは無いけどね」
（取り敢えず、本当の勝負はここを出てからだな）

そうして傍目には何事も無くゲームを終え、二人は再び車に織り込んで移動を開始した。そして暫く走らせた所で、聡が確信する。
（やっぱり付いて来たな。結構車線変更もして、交差点でも信号が変わる直前で振り切ったんだが……）

清香には不審に思われ無い程度に遠回りをしたり、交差点をギリギリですり抜ける様な真似をしても、相変わらず付かず離れずの絶妙な位置を保っている相手に、聡は横目で助手席の清香を見つつ算段を巡らせた。
（発信機でも付けられてるのか？　……ちょっと試してみるか）
そんな事態も予め予想していた聡は、余裕でとある老舗百貨店の専用駐車場に愛車を滑り込ませたのだった。

そうして清香を連れて店内に入った聡は、躊躇う事無く勝手知ったるＶＩＰ専用ルームに直行し、重厚な扉の前に佇む男性店員に一言告げた。

「小笠原ですが」

「お待ちしておりました。どうぞお入り下さい」

相手が恭しく扉を開けると、扉の内側のカウンターに控えていた年配の女性が歩み寄り、聡と何が起こっているのか全く理解できずに戸惑っている清香の前で一礼する。

「お久しぶりです、小笠原様。お二人ともこちらにどうぞ」

「ありがとう。お世話になります。……さあ、行こうか」

「え？　は、はい……」

（あまりこういう所は利用したく無かったが、使える物は使わないと。あの人相手には分が悪すぎる）

まだ良く状況が飲み込めていないまま、促された清香は大人しく聡に付いて奥へと進んで行った。そして壁際に置かれた座り心地の良さそうな応接セットの前で、出迎えた女性が立ち止まり、聡と清香の方に向き直る。

「それでは小笠原様はこちらでお待ち下さい。それで、今日はこちらのお嬢様のお支度を整えれば宜しいのですね？　何かご希望はございますか？」

「いえ、特には。三上さんのお手並みを拝見させて貰います。費用は幾らかかっても構いませんので、宜しくお願いします」

聡に笑顔でそう言われた途端、三上と呼ばれた女性の目がキラリと光った。

「お任せ下さい」

そして聡の斜め後ろに立っていた清香の手を取り、満面の笑みを浮かべる。

「さあ、お嬢様。こちらへどうぞ」
「え？　あ、あの、聡さん？」
「じゃあ清香さん、また後で」
「後でって……、ちょっと、あの！？」
更に奥へと促されて、清香は一気に不安が押し寄せて聡を見やったが、聡は笑って手を振るのみだった。
そして三上は一言も発しないまま目配せで部下の女性達を呼び寄せ、彼女達が清香を半ば強引に奥へと連れ去って行くと、聡を室内の隅にセットしてあるソファーへと促した。そして目の前に運ばれてきたコーヒーカップを眺めてから、聡が小声で確認を入れる。

「三上さん、電話でお願いしていた件ですが……、使わせて頂けますか？」
「全て終わりましたら、部下に案内させます。ご心配無く」
万事心得た風情で頷いた三上に、聡も満足そうに頷いた。
「それは良かった。彼女の事は両親もとても気に入っていまして。下手な男の目に触れる様な真似をするなと、きつく言われているんです」
いけしゃあしゃあと言ってのけた内容に、三上は僅かに笑いを堪える表情で応じた。

「小笠原様は、お二人揃ってあの方を随分可愛がっておられる様ですね。また足をお運び頂ける様に、宜しくお伝え下さい」
「分かりました。今回の事も併せて伝えておきます」
そして２０分後。

「さ、聡さぁん……」
全身を先程とは違う衣装に身を包んだ清香が殆ど涙目で戻ってきたのを見て、聡は心底嬉しそうな笑みを浮かべた。
「うん、とても良く似合ってるよ？」

「似合ってるよ、じゃあなくてですね、これは一体何事ですか？」
「うん？　だからチョコのお礼」
「やっぱり……、じゃあなくてっ！！　幾ら何でもこれは大げさすぎます！」
「じゃあ彼女が着ていた服と荷物は纏めて、今日中にこの住所に届くように手配しておいてくれ。それから車も後日取りに来るから」
「畏まりました」
「お願いですから人の話を聞いて下さい！」

そこで清香の自宅住所を書いたメモと車のキーと駐車券を纏めて三上に渡した聡は、苦笑しながら清香を宥めつつその手を引いて、入ってきたドアとは反対方向に向かって歩き出した。
（これで何とか振り切れるか？　流石に金魚のフンを引き連れてデートはしたくないからな）
そして聡曰わく“金魚のフン”を排除するべく、行動を開始したのだった。

その日の夕刻、ブリーフケースを手に提げた清人が予約していた料亭の個室に入ると、何故かそこには予想外の人物まで存在していた。
「随分遅かったな清人。後十分来なかったら、確認の電話を入れようと思っていたところだ」
「何飲みますか？　俺達は先に《六華の舞》と《越の剣峰》を飲んでましたが」
「ここ、料理も旨いけど、酒もなかなか良いの揃えてますよね」

途端に仏頂面になり空いていた浩一の正面の席にドサリと腰を下ろした清人は、ブリーフケースの中からモバイルＰＣを取り出し、既に料理が置かれていた卓上の隙間で何やら起動させ、次いでラジ

オのような物を乗せてダイヤルを調整しながら問いを発した。
「一つ聞いて良いか？　一人で料亭を予約したら流石に不審に思われるから浩一を誘ったんだが、どうしてお前達まで居るんだ？」
それに対し、まず浩一が言いにくそうに弁解する。

「いや、だってな？　男二人で個室ってのも、変な風に思われそうで……。それで声をかけたら友之と正彦が空いてるって言うから」
「ご馳走になります」
「いや～、タダ飯とタダ酒は本当に旨いよな～」
「……浩一？」
杯を傾けながらの招かれざる客である二人の脳天気な台詞に、清人の顔が凄みを増す。それを真正面から受けた浩一は、諦めて溜め息を吐いた。

「……二人分は俺が払う」
「当然だ」
そうして音声を発し出した機械とＰＣで表示出されている内容について、他の三人から逆に質問が発せられる。
「ところで、俺も聞きたいんだが。指定されたここに入ってこっそり廊下の様子を窺ってたら、隣の部屋に清香ちゃん達が入って行って驚いたぞ。どうして聡君の予約先と部屋まで分かったんだ？」
その浩一の問いに対し、清人は片手でＰＣの画面をスクロールさせて内容を確認しつつ、手酌で杯を傾けながら事も無げに答えた。

「あいつの身辺を徹底的に探って、これまでのデートや商談、接待などで使った店をピックアップしただけだ。その中の和食の店に片っ端から予約を入れた」
「入れた、って……。他の料理の店だってあるだろう」
浩一が怪訝な顔を見せた時、先ほど清人が調整していた見慣れない機械から、どう考えても清香と聡の声としか思えない会話が聞こ

えてきた。

『……嬉しい！　久し振りに和食が堪能できて。しかも本格的だし』

『絶対和食と言われてここにしたけど、そんなに喜んで貰えて嬉しいな。最近あまり和食を食べて無かったの？』

『そうなんです。うちは基本朝食は和食なのに、この5日全部パンばかりで！　しかも夕食も『俺は最近辛味に目覚めた』とか訳の分からない事を言って、南米料理やら韓国料理やらインド料理ばかりだったの。やっぱり最近のお兄ちゃん、どこかおかしいわ！　日本人の味覚の基本は鰹節と昆布よっ！！』

『……そうだね』

それを聞いた浩一は、呆れた目を清人に向けた。

「確実に和食を選ばせる為、清香ちゃんに和食断ちさせたか……。可哀想だろう」

「背に腹は代えられん」

溜め息を吐いてそれ以上質問を続ける気を無くした浩一に代わり、その横に座っていた友之が疑問を投げかけた。

「ですが、和食と言っても何店も候補があったのでは？　しかも当然の様に隣室の会話を盗聴できている理由を教えて頂きたいんですが」

それに対しても清人は小鉢の中身をつつきながら、飄々と答える。

「候補店全部に予約を入れた時、ここの女将が昔付き合っていた女だったのが分かった。その誼であいつが予約を入れたら連絡を貰える様に頼んたらビンゴでな。即座に他はキャンセルした」

「それで？　昔の誼で隣の部屋を押さえた上に、盗聴器のセットも頼んだんですか？」

「俺は誰とでも円満に別れてるからな。仲居とかを一から口説く手間が省けて助かった」

「……良く分かりました」
（（（必要なら、その為だけに口説く気満々だったんだ……）））
呆れた表情を隠しもせず、清香達の会話を肴に黙々と食べ始めた友之に代わり、これまで清人の隣の席から身を乗り出す様にしてＰＣの小さいディスプレイを覗き込んでいた正彦が、不思議そうに呟いた。

「……清人さん、今日はずっと二人に尾行を付けてたんですね」
「ああ」
「送付されて来たこの経過報告では『帝日百貨店のＶＩＰルームに入ってから、恐らく従業員専用通路及び隣接関連施設への地下通路使用で脱出し、一時追尾不可。しかしタクシーで移動中を発信機で再び補足』とあるんですが」
「それがどうした？」
相変わらず杯を傾けながら淡々返した清人に、正彦が首を傾げながら疑問を呈する。

「添付されているこの写真を見ると、ＶＩＰルームに入る前後で清香ちゃんの服装が清香ちゃんの服装が上から下まで変えられてますよ？」
「本当か？」
「ええ。靴やバッグは勿論、ポニーテールにしてたシュシュまで取られて、見慣れないバレッタでハーフアップにしてる位ですし」
興味をそそられたらしい友之が口を挟むと、正彦は説明をしつつＰＣを向かい側に向けて押しやった。それを受けて向かい側の二人が、興味深そうにその画面を確認する。

「なかなかやるな……、聡君」
「そこまでして、まだ追尾できたのか？　一体何に発信機を仕込んだんだ？　携帯のＧＰＳは電源を落とせばアウトだし、キーホルダ

ーとかか？」
　そこに映し出されていた画像を見て思わず友之が感心した様に呟き、浩一が心底不思議そうに尋ねると、清人は箸を動かしながら淡々とその場所を告げた。
「清香は寝る前に、翌日着る物を揃えておく習慣があるからな。夜中に部屋に入って、清香のブラの中に縫い込んでおいた」
　それを聞いた途端浩一は箸を取り落とし、友之は飲みかけていた酒を噴き零し、正彦は思わず尋ね返した。

「何でそんな事してるんですか！？」
「年頃の女の子の部屋にはプライバシーの面からも必要かと思って、一応清香の部屋のドアに鍵を付けておいたんだがな。普段ロックしていないから助かった」
「いや、そういう事じゃなくてですね！？」
　真顔で答えた清人に正彦は声を荒げかけたが、額を押さえて疲れた様に浩一が宥めた。
「……もう何も言うな正彦、放っておけ。疲れるだけだ」
「しかし最近変ですよ？　清人さん。今まではここまで尾行させたり、盗聴までしていなかったでしょう」
「そこまで骨のある奴が居なかっただけの話だ」
「そうですか？」
「友之、お前もだ」
「分かりました」
　不審そうに尋ねた友之も一応大人しく頷いて黙々と料理を味わう事に専念した為、室内に響くのは盗聴している清香と聡の声のみになった。

『……この前は、わざわざチョコを会社まで持って来てくれてありがとう。何か心配していたみたいだったけど、美味しかったよ？』
『心配というか……、これまでなかなかチョコを受け取って貰えな

かったから』
『……それは偶々、相手が悪かったんじゃ無いのかな？』
『朋美もそう言ってましたけど』
そのやり取りだけで、ほぼ正確に事情を察知した浩一は、清人に僅かに非難する様な視線を向ける。

「清人？」
「俺に少し脅された位で突っ返す様な男に、清香のチョコを渡してたまるか」
悪びれず平然と言ってのける清人に、他の三人は無言で小さな溜め息を吐いた。
『そう言えば……、聡さん、真澄さんと一緒にチョコを作るって言ったら、それは食べられるのかとか失礼な事言ってましたよね？』
『う……、失言だった。謝るよ』
『本当にそうですよ？　ちゃんと美味しい物ができましたし。お兄ちゃんが貰って普通に食べてましたから』
それを耳にした男達は、揃って素っ頓狂な叫びを上げた。

「はあぁ？　姉さんがバレンタインのチョコを作った！？　有り得ない！」
「それを清人さん、食べたんですか？　本当に？」
「今度はどんなネタで脅されたんですか？」
それを聞いた清人は、憮然としながら口を開いた。
「疲れが溜まってそうだから甘いのを食べろ、だそうだ。因みに同じ物をあいつの職場に記名入りで送りつけたらしいな。その代わりに、俺があいつへのチョコに細工するのを妨害された」
その声に被せる様に、清香の声が響く。

『……でも、それは同じ物を二つ作ってたの。もう一つはどんな人にあげたのか、気になってしょうがなくて。聞いても教えてくれな

いし』
『は、はは……、誰に、だろうね……』
（姉さん……、嫌がらせにも程がありますよ……）
（大人しくとんでもないチョコを食べさせられた方が、良かったんじゃないのか？）
（それにしても、真澄さんが作った物を食べるなんて、清人さんは勇者だな。聡君、相手が悪すぎる……）
何となく虚ろな声の聡に、その職場で何が起こったかをうっすらと悟った三人は、思わず聡に同情した。そこで清香が話題を変えてくる。

『真澄さんと言えば……、明日の真澄さんのお祖父さんのお誕生日のお祝いの席に、招待されてるんです』
『え？　柏木総一郎さんの？　それはどうして』
予想外に戸惑って声を上げた聡に、清香は子細を告げた。
『学祭で真澄さんが競り落としたアレンジを気に入られて、譲ったらしくて。是非一度、これを作ったお嬢さんに会いたいから、という事で』
『……へえ、そうなんだ』
戸惑う口調で何とか相槌を打った聡だったが、寝耳に水だった友之と正彦は、冷静な顔をしている清人と浩一に問い質した。

「ちょっと待て、聞いてないぞそんな話！？　明日のあれだろう？　そんな事になってたんですか？」
「それならお祖父さんが、いよいよ覚悟を決めたって事ですか？」
「ああ、お祖父さんが姉さんに泣き付いてね」
「その様だな」
大して感銘を受けた様子も無く箸を動かし続ける清人に、友之は僅かに顔を顰めて見やった。

「良いんですか？」
「真澄さんにも言ったが、俺が反対する理由があるのか？」
「それはそうですが……、あなたは来るんですか？」
慎重に顔色を窺いながら尋ねてきた友之に、清人は顔色を変えないまま淡々と答える。
「それも言ったが、総一郎氏が招待してるのは清香であって、俺じゃないだろう」
「……浩一さん？」
正彦が幾分非難する様な眼差しで浩一を見やったが、浩一は困った様に無言で首を振ったのみだった。そしてその場に何となく気まずい雰囲気が満ちる。
それに触発されたかの様に、機会越しに伝わってくる清香の声も、何となく沈んだ物になっていた。

『お兄ちゃんは笑って行って来いって言ったけど、結構気にしてるんじゃないかと思って』
『どうしてそう思うの？』
『だって、その話があったのが月曜日の夜で、翌朝からパンが続いたんだもの』
「……清人さん、やっぱり気にしてるんですか？」
疑わしげな視線を向けた正彦に、清人が仏頂面で応じる。
「そんなわけあるか。仕方がないだろう。その話の合間にあいつから清香に電話が来て、今日のデートが決まったんだから」
「結果的に、見当違いな方向で清香ちゃんに心配かける事になりましたね」
「……うるさい」
鋭く突っ込みを入れた友之に、清人がふてくされた様に呟いた。
隣室でそんなやり取りがされているとは思わない清香達の話は、更に続く。

『真澄さんから話があった時、初めて皆が従兄弟同士だって事が分かって驚いたの』
『そ、そう……、それは俺も驚いたな』
『それで、明日の出席者は顔見知りばかりなんだけど、その顔ぶれが揃ってる場で、これまでお兄ちゃんが居ないなんて事は無かったから……』
『ああ、なるほど。心細くは無くなったけど、先生を仲間外れにしたみたいで、嫌なわけだ』
『仲間外れっていうか……、うん、まあ、そういう感じなのかもしれないけど……。何となく釈然としなくて……』
考え考え言っているらしい清香の声を聞いて、正彦が小さく噴き出した。

「はは……、無用の心配だって、今清香ちゃんに言ってあげたいね。今更清人さん抜きで何かしても、全然面白くないからな」
「そうだな。俺達全員、今までのあれこれで血の繋がりなんて関係無しに、清人さんに惚れ込んでるし」
そう言ってニヤリと笑った友之を、清人は如何にも嫌そうに眺めながら毒吐いた。
「……野郎どもに好かれても嬉しくもなんともないぞ。第一、初対面の時に三人がかりで俺をボコろうとした奴が、何を言ってやがる」
「懐かしいですね。あれは実に感動の対面でした。見事に返り討ちされましたし」
「うん、あの啖呵に惚れたね」
ヘラヘラと笑って言われた内容に、清人は本気で頭を抱えて呻いた。

「……香澄さんに頼まれたから手加減したが、二度と顔を見たくないと思うまで、徹底的に叩きのめしておくんだった」
「まあまあ、そう照れるなよ」

「照れて無い！　というか浩一、お前あの時も一人で傍観しやがって。混ざってボコるか止めさせるか、どちらかできなかったのか？」
「ああ、今度はどちらかにする」
「お前な！」
そこで室内には清人の怒声と他の三人との笑い声が満ち、それに釣られた様に清人も顔を緩め、苦笑いの表情を浮かべた。

第２９話　舞台裏（後書き）

少し長くなりすぎたので、中途半端ですがここで切らせて貰います。続きは編集が済み次第、明日か明後日ＵＰの予定です。

第３０話　真実の一端

明日の事を口にした途端、何となく沈鬱な空気を醸し出し始めた清香を、聡は苦笑いしつつ何とか宥めようと試みた。

「そう心配しなくて良いよ、清香さん。皆も清人さんとは普通の血縁者以上に仲が良いだろうし。……特に清香さんに関する事では、一致団結してると思う」

「それは十分分かってますけど……」

「清香さんが寂しい思いをしない様に、また招かれる機会とかがあれば、きっと他の皆が清人さんも招待しようと言い出すと思うよ？　実際、先生は人間的にもごく一部を除けば立派な人だし、総一郎氏も大部分では気に入ってくれると思うから」

（そのごく一部が、もの凄くえげつないんだが……）

清香に全面的に嘘を言うつもりはなく、微妙な言い回しで清人の事を評した聡だったが、それを全面的な褒め言葉と受け取った清香は、嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう聡さん。何か変な気を使わせてしまったみたいで、ごめんなさい」

「いや、本当の事だからね」

そうして幾らか元気を取り戻した清香と共に、綺麗に彩られた旬の料理を味わうのを再開した聡だったが、翌日の事に対しての懸念は捨て切れなかった。

（話の流れからすると、あの連中が従兄弟同士って事は告げても、清香さん自身の従兄弟にも当たる事や、総一郎氏が清香さんの母方の祖父という事までは知らせていないって事だよな？　当日告白するつもりなのかもしれないが、そこに兄さんが不在と言うのがどう転ぶのか……）

そして暫くの間、上の空気味に清香と会話をしながら密かに悩んでいた聡は、箸置きに静かに箸を置いて清香に声をかけた。

「……清香さん、話があるんだけど」

「はい、何ですか？　聡さん」

「以前聞いた、清香さんの母方の親族の事なんだけど……」

そう聡が口にした途端、清香は嫌悪感一杯の表情で聡に文句を言った。

「聡さん！　せっかく美味しく食べている時に不愉快な話題を持ち出さないでくれますか？　せっかくのお料理が不味くなります！」

「俺としても、君の気分を悪くしたくは無いんだけどね。一度は言っておこうかと思ったから」

「何をですか」

不機嫌さ丸出しで応じた清香だったが、聡は気を悪くする様な素振りは見せないまま、慎重に口を開いた。

「一つ確認なんだけど、清香さんのお母さんは清香さんに自分の身内についての文句を言ってても、お父さんと先生は何も言って無かったんだよね？」

「そうですよ。以前にもそう言いませんでしたか？　全く、二人揃って大怪我させられたくせに、お父さんもお兄ちゃんも人が良いんだから！」

当時を思い出して憤慨する清香に、聡が尚も言葉を選ぶ様に質問を続ける。

「文句を言わないどころか、お母さんが文句を言う度、窘めたりしてなかった？」

「してましたよ？　『子供に向かってつまらない事を吹き込むのは止めなさい』って。それがどうかしたんですか？」

そこで聡は、幾分躊躇いがちに言葉を継いだ。

「……お母さん、口で言うほど実家の人達の事を、怒っていなかったんじゃないのかな」
「はぁ？　どうしてそうなるんですか！？」
わけが分からないといった感じで怒りの声を上げた清香に、聡が真顔で自分の考えを述べ始めた。
「これは、あくまで俺個人の考えなんだけど……、お父さんと先生には、結果的にお母さんを実の家族と引き離してしまったっていう負い目があって、怪我をさせられたのは仕方が無いと思っていたんじゃ」
「確かにそうかもしれないけど、それでよってたかって袋叩きにして良いわけが無いですよ！？」
聡の話を遮って机を叩きながら訴えた清香だが、聡は机に片肘を付き、疲れた様に溜め息を吐きながら懇願する。
「ごめん、清香さん。取り敢えず最後まで、俺の話を聞いてくれるかな」
「……分かりました」
話の腰を折った自覚はあった清香は、真剣な聡の表情を見て何とか怒りを抑えた。その状態を確認してから、聡が再度口を開く。
「それで、二人が恨み言の一つも言わないから、一方の当事者のお母さんとしては、逆に辛かったと思うんだ。二人に訴えても恐らく困った様に宥められるばかりで。だからついつい清香さん相手に、殊更文句を言ってたんじゃないかと思う」
「どうして部外者の聡さんが、分かった様な事を言うんですか？」
淡々と言い聞かせる様な口調に、清香が反発心を覚えて半ば拗ねながら嫌味を言うと、聡は苦笑いしながら推論を述べた。
「何となく分かる気がするから。……本当に心の底から嫌って会いたく無かったら、清香さんにそんな話すらしないよ、きっと」
「え？」

一瞬何を言われたか分からずにきょとんとした清香に、聡は苦笑を深めながら話を続けた。

「それほど毛嫌いしている人の事を、好き好んで口にしたいと思う？　きっと存在すら自分の中から抹消すると思うな。嫌いだって言ってる事自体、気にしてる証拠じゃない？」

「……そんなものでしょうか？　聡さんはどうしてそう思うんですか？」

「う～ん、偶々似た様なケースを知ってるから、かな？」

（まさか兄さんの事だなんて、今の段階では口が裂けても言えないが）

穏やかに言い聞かせる様に言われて、清香は疑わしげな視線を向けたものの、どこか困った様な表情の聡を見て頭から否定はしなかった。すると聡が、幾分恐縮気味に問いかける。

「失礼な事を言ってしまうかもしれないけど、清香さんのお母さんって、結構気が強くて負けず嫌いな所が無かった？」

「それは全面的に認めます」

「それでお母さんが自分の身内の仕打ちに憤慨してても、お父さんと先生が何も文句を言わないから、自分だけは許しちゃ駄目だと自分自身に言い聞かせてたんじゃないかって、話を聞いてて思ったんだ。振り上げた拳の下ろしどころが分からない、みたいな」

素直に即答した清香に聡が慎重に意見を述べると、清香は思わず声を荒げて噛み付いた。

「じゃあ聡さんは、お父さんとお兄ちゃんが悪いって言うんですか？」

「そうは言ってない。ただ二人ともお母さんが清香さんに文句を言うのを、あまり良く思って無かったんだよね。それはいつかはお母さんと実家の間が上手くいくようにって、願っていたからじゃない

かと」
「……本当にそんな風に思ってます？」
「ああ。だからお母さんから散々恨み事を吹き込まれていた清香さんが腹を立てているのは分かるけど、君が生まれる前の話だし。頭から最低の人間だなんて決めつけないで、一度本当にお母さんが実家の人達を心底恨んでいたのか、どうしてこれまで没交渉だったのかを、少し考えて欲しいなと思って」
　聡はそこまで言って黙って清香の反応を待ったが、清香も不機嫌そうに聡の顔を真正面から睨んだまま黙り込んでしまった為、室内に重苦しい沈黙が満ちた。そしてそのまま一分程経過してから、清香が溜息を吐き出して面白く無さそうに告げる。
「どうして聡さんは、母の親族の話題なんか持ち出すんですか？」
　そのごく真っ当な問いかけに、聡は冷や汗を流しつつ弁解じみた台詞を口にした。
「それは……、世の中、いつどんな時に、何が起こるか分からないから。ちょっと物の見方を柔軟にしておいた方が、対処の幅も広がるだろうと思って……」
「……すみません、もう少し分かりやすくお願いします」
「だから、つまり……、例えば偶々道で出会った人が、お母さんが散々悪口を言っていた人だったと分かったとしても、問答無用で殴りかかったら悪く言われるのは清香さんの方だし……」
「私、そんなに乱暴者に見えますか？」
「いや、今のはあくまで物の例えでっ！！」
（これ以上どう言えば良いんだ？　まさか明日そのお母さんの実家の面々と顔合わせする筈だよ、なんて言えるわけないし）
　自分でも支離滅裂な話になってきていると思ったものの、目を細めて睨みつけて来た清香に益々どう話を進めたら良いか分からず、聡の中で焦りばかりが先行していたその時、清香がふっと目許を緩

ませてクスクスと笑い出した。

「怒ってませんよ、聡さん。そんなにビクビクしないで下さい。何だか私が苛めたみたいじゃないですか」

「そう？　そう言って貰えると気が楽だけど」

辛うじて笑顔を浮かべた聡に、清香は小さく頷いてからきっぱりと言い切った。

「分かりました。聡さんがそこまで言うなら、これからもし万が一そういう人達と出くわす事があっても、その人達の事を頭ごなしに決めつけないで、冷静に今の状態を見詰め直してみる事にします」

そこで漸く聡は安堵のため息を吐いた。

「そうしてくれると嬉しいな。なるべく清香さんに嫌な思いをさせたくないし」

しかしそこで清香が、どこか悪戯っぽい笑いを浮かべながら念を押してくる。

「でも、実際目にした時に気に入らない相手だったら、叩きのめしても構いませんよね？」

「ま、まあ、そこまでは、俺も強制するつもりはないから……」

「ですよね」

そう言って再び小さく笑いだした清香に、聡は疲れた様に溜息を吐いた。その聡を見ながら清香が笑いを収めてしみじみと言い出す。

「でも聡さんって、やっぱり普通の人とは違いますよね？」

「え？　どこが、かな？」

結構神経を擦り減らす話題の後に、まだ何か不審な所があったのかと身構えた聡だったが、清香は平然と話を続けた。

「だって、お母さんと再婚する時にお父さんとお兄ちゃんがされた事をこれまで話した相手は、全員『それは酷い』とか『あんまりだよね』って怒ってくれたけど、聡さんの様に『実はお母さんは実家

の人達をそんなに嫌って無かったんじゃないか』なんていう人は皆無だったもの」

「……確かに、一般的にはそう思い難いかもしれないね」

（だけど関係を明らかにしていないにしても、兄とか甥姪を家に入れて清香さんに近付けていたあたり、そうだと思うんだが）

自分の考えを再認識していた聡に、清香の感心しきった声がかけられた。

「やっぱり聡さんって、私なんかよりずっと大人で、素敵だと思います」

そういってにこやかに笑いかけられた聡は、先程までの緊張感から一気に解放され、つい軽口を叩いた。

「そう？　それは嬉しいな。それなら聞くけど、先生と俺だとどちらの方が格好良いと思う？」

「え、ええ？　そ、そんな事、急に言われても！」

途端に頬を僅かに染めつつ、視線を彷徨わせて狼狽する清香を見て、聡はついからかってしまった。

「こらこら、ここは迷わず『聡さんの方が』って言う所じゃないのかな？」

「そ、それはそうかもしれませんけど！　生憎言いなれてないんですっ！」

「じゃあ、この際、自然に言える様にしてあげようか？」

「してあげようかって、一体何を……っ！　きゃあぁぁっ！！」

そこでそわそわと視線を左右に動かしていた清香が、自分の右肩口から腕にかけての部位に視線を向けたと思ったら、いきなり悲鳴を上げて座ったまま後ずさりし、背後の壁に背中を押しつけるようにして真っ青な顔で固まった。それに流石に驚いた聡が立ち上がり、座卓を回って清香に近付きつつ声をかけてみる。

「清香さん？」
「く、首っ……」
清香の肩から首にかけてゆっくりと移動している小さな蜘蛛を見た聡は、それから顔を背けつつ涙目になりながら言葉少なめに訴えてきた清香に、思わず笑いを誘われた。
（こんな小さな蜘蛛が駄目とは、意外だけど可愛いな）
そんな事を考えつつ、聡はポケットティシュを取り出し、そこから一枚引き出しながら尋ねた。

「清香さんはこういうのは苦手？」
「苦手って言うか……、それ以前の問題で」
潤んだ瞳でふるふる震えながら見上げて来る清香に、思わず溜息を吐いて手を伸ばす。
「すぐ済ませるから、少しだけ大人しくしてて」
「やだっ！　だめぇっ！」
どうやら問題の蜘蛛が服の襟から首に降り立ったらしく、その微妙な感触を感じ取ってしまったらしい清香が半ばパニックを起こし、触りたくないけど振り払いたい一心で手や肩を乱暴に振り回した為、聡は閉口した。

「ほら、暴れると余計に時間がかかるんだけど？」
「そ、そんな事言われてもっ！　やだあぁぁっ！」
清香が本格的に泣き叫ぶ寸前で、聡は清香の肩を押さえつつ首尾良くテッシュで蜘蛛を摘まみ上げた。
「はら、取れたからもう大丈夫だよ？　服にも付かなかったし、機嫌を直して」
そう聡が声をかけ、ティッシュの中で潰れかけた蜘蛛を見せつつ宥めた所で、廊下に繋がる引き戸が勢い良く開いて壁にぶつかる音が響いた。聡と清香が（何事？）と思う間もなく、続けて出入り口

の襖がバシィッッ！　と勢い良く開かれ、同時に姿を現した清人の絶叫が響き渡る。

「清香、無事かっ！？　貴様ぁぁっ！　俺の清香にこれ以上触れたら、今すぐ後腐れ無くあの世に送ってやるぞ！！」

「お兄ちゃん！？」

「……っ！？」

傍から見たら聡が清香の肩を掴んで壁際に押し付けている体勢に、清人は理性を吹き飛ばしかけたが、取り敢えず予想外の乱入者に揃って固まっている二人の元に駆け寄り、聡を一睨みしてから膝を付いて清香に尋ねた。

「清香、大丈夫か？　こいつに何をされた！？」

勢い込んで尋ねた清人だったが、清香は当惑した様に聡の手元を指差しながら答えた。

「何って……、気が付いたら肩に蜘蛛が居て、首の方に上がって来たから、聡さんに取って貰ってたんだけど……」

「は？　蜘蛛？」

「……はい、これですが」

「……」

白い目をしつつ聡が差し出して見せた中身を見て、清人は無言で固まった。そして清香が当然過ぎる疑問を発する。

「ところでお兄ちゃんはどうしてここに？　……あれ？　浩一さんに友之さんに正彦さんまで居る。今晩は。聞いてなかったけど、皆でここでお食事してたの？」

清人を止めようとしたものの間に合わず、そのまま戸口から顔を覗かせていた面々に気が付いた清香が、不思議そうな顔をしながらも挨拶をすると、三人は強張った笑顔で言葉を返してきた。

「こ、今晩は、清香ちゃん」

「そうなんだ。奇遇だね」
「ここ、料理も酒も旨いって、結構評判でさ」
そうして揃って「あははは……」と乾いた笑いを零した面々から、清香は再び清人に視線を戻した。

「本当に凄い偶然ね。……でもお兄ちゃんは、どうして私がこの部屋に居ると思ったの？　何だか血相を変えて飛び込んで来たし」
そんな問いを発した清香から聡は視線を外し、注意深く室内を眺めまわした。
（あの流れで何かされたのかと誤解したなら、カメラは無くてマイクだけか……。しかしどうやってこの店と部屋を割り出して仕込んだんだ？）
そうして眉を顰めた聡だったが、目の前で答えに窮している清人を見て、多少意地悪く考えた。

（全く油断も隙も無い人だが……、この場をどう収拾をつけるつもりだ？　まさか妹のデートを盗聴してましたなんて言えないだろうし）
そんな聡の前で、清人が幾分開き直った様に口を開いた。

「それは……、清香の悲鳴が聞こえたから、何かあったのかと心配になって思わず飛びこんでしまったんだが」
「確かに蜘蛛に驚いて声は出したけど、そんなに大声じゃ無かったと思うけど。ねえ、聡さん？」
「まあ、そうだね」
反射的に聡が頷くと、清香が不思議そうに首を傾げる。
「それなのに、他の部屋で聞こえたの？」
それに対する清人の答えは、ある意味大方の予想通りだった。

「それは……、ひとえに、俺の清香への愛の深さが為せる業だ

な」
堂々とそう言い切った清人に、思わず男四人は白けきった視線を向けた。
（面と向かってそんな事言えるんですか、あなたって人は……。ある意味尊敬します）
（ああ、絶対聡君が呆れてる……）
（これで清香ちゃんを誤魔化せると、本気で思ってるんだろうか）
（清人さん、やっぱり最近、どこか切れ味鈍ってませんか？）
しかしそれに対する清香の反応は、これもある意味大方の予想通りだった。
「……凄い！　お兄ちゃんって昔から色々超人じみてた所があったけど、最近益々超能力者みたいね！？」
そこで清人の言葉を疑いもせず無邪気に褒め称える清香を見て、他の人間は激しく脱力した。
（（（（信じるんだ……。いや、素直なのは美点だと思うけど……））））
清香のブラコンぶりを再認識した面々が何とも言えずに黙り込んでいると、それに気付いた清香が不思議そうに顔を向ける。
「あれ？　皆、どうかしたの？」
「いや、何でもないから」
そこで慌てて取り繕った浩一の台詞に合わせて清人が立ち上がり、何事も無かったかの様に歩き出しながら清香に告げた。
「じゃあ俺達は部屋に戻って食事を続けてくるが、食べ終わったら一緒に帰るぞ」
「え？　でも……」
思わず清香は聡に顔を向けたが、聡は穏やかに笑って了承した。

「俺の事は気にしないで。先生と一緒に帰って良いよ」
「……はい」
申し訳なさそうに答えながらも頷いた清香に背を向けて清人達はその部屋を後にし、その後は比較的平穏に食事を済ませた。聡は会話が筒抜けの状態の場所でこれ以上突っ込んだ話などはしたく無かったし、清人達も自分達の存在がバレた以上、あまり騒ぎを大きくしたくない浩一達が清人を必死に宥めていた為である。
そして部屋を出た所で待ち構えていた清香を、清人は半ば強引に確保し、予め呼んでおいたタクシーに一緒に乗せた。

「今日はご馳走様でした。おやすみなさい」
「ああ、おやすみ。先生もお疲れ様です」
「……ああ。出して下さい」
聡が開けた窓越しに清香と別れの挨拶をし、清人にチクリと嫌味を放つと、二人を乗せたタクシーは料亭の門の前から走り去って行った。それを角を曲がるまで見送ってから、聡は背後に黙って佇んでいた面々に、幾分冷たい視線を向ける。

「最初から聞いてましたよね。どうやったんですか？」
「それは……、企業秘密？」
「……失礼します」
車を途中で置いて来た聡は、へらっと笑って誤魔化した正彦の横を通り抜け、表の通りに出てタクシーを拾おうと歩き出したが、ここで腕を組んでいた友彦が楽しそうに声をかけて来た。

「お気遣いどうも」
「何がです？」
「うちの不良中年や老人達のフォローをしてくれただろ？」
思わず足を止めた聡は、それを聞いて僅かに不愉快そうに眉を寄せた。

「別に……、あなた達の身内を庇うつもりで、あんな話をした訳じゃありません。清香さんが本当の事を知った時、必要以上に過剰に反応して欲しく無いからです。懐いてるおじさん達が、実は今まで嫌い抜いていた人物と同一人物だったなんて知ったら、相当ショックを受けそうじゃないですか？」

「確かにそうだろうな」

指摘されて頷いた友之に、聡が些か疲れた様に語る。

「それに……、明日は兄は一緒に行かないそうですし。あの人が居ればどんな状況に陥っても、清香さんを丸め込める筈ですが。現に今日だって“ああ”でしたし」

「確かにな」

「もう殆ど刷り込みに近いよな。『お兄ちゃんは悪くない、間違わない』って、絶大なる信頼っぷり」

そこで思わず笑いを零した友之の横で、正彦が相槌を打った。それを見た聡が、僅かに顔をしかめて二人を見返す。

「それなのに未だに兄を排除する、柏木の神経を疑いますね」

それに正彦が軽く目を見開き、意外そうに問い掛けた。

「……へえ？　これまで散々嫌がらせされてるのに、清人さんの肩を持つんだ？」

「総一郎氏にとっては、愛娘を奪った憎い男の息子である事は確かですが、今では清香さんの唯一人の家族です。清香さんの為にもきちんと認めてあげて欲しいと思うのは、そんなにおかしい事ですか？」

小さく肩を竦めて淡々と語る聡に、友之が笑いを堪える表情で応じる。

「聡君は、実は隠れお兄さん思いの、苦労性だったんだ。知らなかったよ」

「正直……、この４ヶ月で、それ以前の人生までと同じ位の気苦労

をしている実感はありますね」
「それは大変だな」
心の底からの呟きを茶化す様に言い返され、聡は幾分険しい目で友之を睨んだ。それを受けて、友之が肩を竦めつつ弁解する。
「そう睨まないでくれるかな。爺さん達だって好き好んで事を荒立てたくは無い筈だ」
「年寄り連中は、取り敢えず打ち明ける事だけで、テンパってる状態だろうしな。変な事にならない様に、俺達がフォローするよ」
「清人の事も、そのうちきちんとさせるから。それに関しては心配しなくて良いよ。それより、自分の事を心配した方が良くないかな？」
正彦と浩一にも続けざまに言い聞かされて、聡は憮然として頷いた。
「……分かっています」
そして僅かの間考え込んでから、その場で車を待ちながら雑談を始めた三人に声をかけた。
「ところで……、その明日の集まりっていうのは、何時から何時まで予定されているんですか？」
その問い掛けに、正彦が包み隠さず答える。
「えっと……、昼食を食べてお茶を飲みつつ歓談って流れだから、午後の一時から五時位までの予定になってるが。それがどうかしたのか？」
「いえ、清香さんに聞きそびれたので、何となく聞いてみただけです」
「そうか？」
そんな会話をしているうちに、そこの門前に柏木家所有のロールスロイスが静かに滑り込んで来た。

「じゃあお疲れ様」
「俺達も帰るから」
「今日は色々悪かったね」
浩一達が口々に微妙な表情と口調で挨拶をしてきた為、聡も一応社交辞令の範囲内での返事をした。
「いえ、失礼します」
そうして三人が乗り込んだ車が走り去って行くのを見送りながら、聡は静かに誰に言うとも無く呟いた。

「それなら、明日だったら邪魔が入らず、心おきなく話ができそうだな……」
そうして何やら決意した聡は、今度こそ大通りに向かって足を踏み出して行った。

第３１話　清香、人生最長の一日（１）

清香の予定到着時刻の直前、真澄が和風庭園に囲まれた離れの日本家屋を訪れると、そこの仏間で総一郎が仏壇の前に正座しながらぶつぶつと独り言を言っているところだった。

「……澄江、お前にはあの世で散々気を揉ませてしまったかもしれんな。儂も漸く決心がついたぞ。後で子細を報告するから、見守っていてくれ」

しんみりした声でそう言った総一郎が鈴棒で鈴を打ち鳴らし、チーンとしめやかな音が室内に響いた所で合掌するのを、スラリと障子を引き開けた真澄が些か呆れた様な表情で眺めやった。

「覚悟が決まって何よりですわね。……正直に言わせて頂ければ、今までかかるなんて往生際が悪過ぎたとは思いますが」

そんな皮肉を飛ばした真澄に、チラリと背後を振り返った総一郎が忌々しげな表情を浮かべる。

「なんじゃ、真澄か。今澄江と話して心を落ち着けている所だ。少しは遠慮せんか」

しかし勿論そんな事で怯む真澄では無く、再度祖父に向かって念を押した。

「お祖父様……。くれぐれも清香ちゃんの前では」

「くどいぞ真澄！　正直に一連の話をして、その結果清香に罵倒されて殴り倒されたとしても、ひたすら黙って頭を下げて許しを請う覚悟はできておるわ！」

自分の話を遮って言い切った祖父に、真澄は懸念を払拭できないまま話を終わらせようとしたが、案の定総一郎は余計な一言を付け加える。

「そうですか？　本当にそうなら、私もこれ以上は言いませんが」
「心配せんで黙って見ていろ。何、あの得体の知れんクソガキでは無く、清香に頭を下げるのだから何だって我慢できるわ」
「お祖父様！　だからそう言う不穏当な発言は慎んで下さいと、私があれほど！」
流石に語気を険しくして窘めようとした真澄だったが、総一郎は素知らぬふりで仏壇に向き直り、今は亡き愛妻に向かって語りかけた。

「なあ、澄江。真澄はいつになったら嫁に行けるのかの～。もう三十三じゃぞ？」
「それとこれとは関係無いでしょう？」
「この口うるさいのが治らんうちは、やっぱり無理じゃな。清香の件が無事済んだら、今度は真澄の嫁入り先の心配をしてくれんか？　なあ、澄江」
「お邪魔しました！！」
怒りでぶち切れた真澄は開けた時とは比べ物にならない位乱暴に障子を閉め、ガラス越しに明るい日差しが差し込む縁側を憤怒の表情で母屋へと進んだ。

「全く！　あの脳天気爺がっ！」
ぶちぶちと文句を吐きながら離れの出入り口で靴を履き、母屋に繋がる絨毯敷きの通路を進み、幾つかの角を曲がって応接室に入る。そして広さにしたら四十畳位はありそうな室内を見渡すと、二つある応接セットの手前の方に、自分の弟達や従兄弟達が勢揃いしているのを見て、真っすぐ歩み寄った。

「ああ、もう全員揃ってるのね」
「姉さん、お祖父さんの様子はどうでしたか？」
すかさず姉に席を譲りながら首尾を尋ねた浩一に、真澄はソファ

ーに乱暴に腰かけながら早速毒吐いた。
「どうもこうも！　それなりに覚悟は決めているらしいけど、薔薇色の未来を頭の中に思い描いて、頭に花を咲かせてるわよ」
苛立たしげに告げた真澄の態度で、総一郎がどの様な状態だったのかその場全員が容易に察した。

「……大体の様子は分かりました」
「清人さんに頭を下げるわけじゃなく、清香ちゃんだから良いとか言いました？」
「何かこの期に及んでも、清人さんの事を貶してそうですね」
周りから口々に言われた内容に、思わず真澄が右手で額を押さえて俯きながら、常には無い弱気な言葉を漏らす。
「……段々不安になって来たわ。文句を言われても清人君を同席させるべきだったかしら」
「残念ながら、もう手遅れですね」
容赦無く断言した友之に反論する気も起きず、真澄はただ一つ溜息を吐いた。それを見て流石に不憫に思ったのか、玲二から励ましの声がかかる。

「まあ、俺達も出来るだけフォローするから、なんとかなるって！　そう暗くなるなよ、姉貴！」
わざと明るめに言ってみた玲二だったが、真澄は玲二に恨めしそうな顔を向けた。
「玲二……、あなた今日の席次、まだ見てないの？」
「え？　決まってるの？」
「ほら、これだ。和室の続き間でやるからな」
そう言って沈鬱な表情でテーブルの片隅から一枚の用紙を取り上げた浩一は、弟に向けてそれを差し出した。受け取った玲二がそれを開いて確認すると、長い座卓を一列に繋いでその両側に席が配置されており、上座は勿論主役の総一郎だが、総一郎の向かって右側

の列に雄一郎ら三兄弟夫婦と修夫婦の順で座り、向かって左側には清香が座ってから、独身の孫達が年齢順で座る様に席が配置されていた。

つまり清香の次は必然的に真澄であり、順に浩一、友之、正彦、明良、玲二で座るとなれば、末席の玲二には咄嗟にフォローのしようが無いのが実情である。

「これだと……、祖父さんのすぐ左側に清香ちゃんで、その隣が姉貴と兄貴？」

「……良かったわね、一番下座で。何なら代わるわ」

恐る恐る玲二が確認を入れると、真澄がボソッと呟いた。それに本気で慄きつつ玲二が頭を下げる。

「ごめん、姉貴。心の中で応援してるから！」

「真澄姉！　頑張れ！」

「取り敢えず微妙な話題は振らない様に、私達も十分気をつけますから」

「ＮＧワードとしては清人さん関連の事や、連想する内容だよな」

「一回で終わらせようぜ？　何回も胃が痛い思いをするのはごめんだ」

従兄弟達に加えて奈津美にまで励まされても、気が重くなるのは隠しようも無い真澄だったが、ここで使用人の一人が皆が集まっている場所に歩み寄って来て報告してきた。

「真澄様、佐竹様がご到着されました」

「噂をすれば影ね。……まずこちらに案内して頂戴」

「畏まりました」

色々覚悟を決めた真澄が普段通りの顔で指示すると、相手の女性は一礼して応接室を出て行った。それを見送って、真澄は周囲の者達を見回す。

「皆、今日は宜しくね」

それに応じて全員無言で小さく頷くと、先程の女性に先導されてドアから清香が現れた。一抱えもある様な花束を持って、ゆっくり真澄達の方に歩み寄って来る。

「真澄さん！　今日は招待して頂いて、ありがとうございます。迎えの車までよこして貰って、助かりました」

まず清香が礼儀正しく挨拶すると、それまでの不安など感じさせない様な笑みで真澄が応じた。

「それくらい気にしないで？　こちらこそ、無理を言ってしまって悪かったわ」

「ううん、皆で集まるのは学祭で偶然顔を合わせて以来だし、嬉しくてこの一週間楽しみにしてたの」

ニコニコと心から嬉しそうに笑う清香に、思わずほっこりとその場が和む。

「そう？　俺達も清香ちゃんに会えて、凄く嬉しいよ」

「ああ、可愛げの無い祖父さんに会うためだとしてもね」

「もう、正彦さんったら口が悪いんだから。実のお祖父さんさんでしょう？」

「いや、だって本当に口うるさくて頑固で可愛げが無いんだよ？……相手限定で意気地なしでチキンだけどさ」

「結構可愛いお祖父さんみたいじゃないですか」

「……随分豪胆な性格になったね、清香ちゃん」

正彦の愚痴に清香がクスクスと笑った所で、半ば呆れた様に明良が応じると、そこで真澄が清香が手にしている花束について尋ねた。

「ところでその花束、わざわざ持って来てくれたの？気を遣わせちゃってごめんなさい。でも祖父が喜ぶわ」

すると、清香が幾分恐縮気味に言い出した。

「えっと……、恥ずかしいんですけど、これ、実はお兄ちゃんが準備してくれて……」
「え？」
「清人が？」
意外な事を聞かされて真澄と浩一は揃って驚きの声を上げたが、それを受けて清香は淡々と説明を始めた。

「はい。私、何も考えないで手ぶらで出掛けようとしてたんですけど、午前中にお花屋さんが配達してくれて。『お前からと言って持って行け。慶事と弔事は金を惜しむものでは無いからな』って言ってました。やっぱりお兄ちゃんは気配りのできる大人だなと、再認識して」
嬉しそうに清人自慢を繰り出す清香に、真澄と浩一の顔が微妙に引き攣った。
「そ、そうなの……。後から私からもお礼を言っておくわね？」
「清香ちゃん、それ、お祖父さんには自分からのプレゼントだって言ってね？」
「お兄ちゃんからって言わない方が良いんですか？」
不思議そうに首を傾げた清香に、周りが焦りながら二人の発言をフォローする。
「そうじゃなくて……、支払いは清人さんがしたかもしれないけど、実際持って来てくれたのは清香ちゃんだし」
「可愛い女の子が持参してくれただけで、お祖父さんは満足だろうし」
「清人君はあまりでしゃばった事はしたがらないタイプだしね」
「はあ……、分かりました」
何となく納得しかねる顔付きながらも了承の言葉を返した清香に、真澄と浩一は取り敢えず安堵した。

（何とか不安要素は回避できたかしら？）

（詳細を聞いたお祖父さんが「こんな物受け取れるか！」とか喚いたら、一巻の終わりだからな）

そんな冷や汗ものの会話をしていると、応接室に入ってきた年長者達が、清香を見つけて歩み寄ってきた。

「清香ちゃんいらっしゃい！」

「やあ、久し振りだね、待っていたよ」

「雄一郎おじさん、玲子おばさんも、お久しぶりです！」

それを合図の様に真澄達は自分の親達に席を譲り、さり気なく窓際の方へ揃って移動した。そして雄一郎達が遠慮なく清香を取り囲む。

「元気そうだね。今日はわざわざありがとう」

「早速プレゼントを身に付けてくれているようだね。嬉しいよ」

「はい、せっかくだから付けてみようかと。和威おじさんも義則おじさんも、ありがとうございました」

淡いパステルグリーンの、胸元にゆったりとしたドレープが付いて裾が広がっているワンピースに、伯父達が送ったパールとプラチナで作られたネックレスとイヤリング、ブローチの三点セットは良く似合っていた。それを間近に目にする事が出来て、送った面々も満足そうに頷く。

「清香ちゃん、スポンサーは主人だけど、選んだのは私達なのよ？忘れないでね？」

「やっぱり私達の目は確かよね、良く似合ってるわ」

「はい、おばさん達のセンスは抜群ですから。本当に素敵な物を、ありがとうございました」

「まあ、清香ちゃんって、相変わらず正直で可愛いんだから」

嬉しそうに義理の伯母に当たる玲子達が笑いさざめいてから、ふと絢子が清香を眺めながらしみじみと言い出した。

「でも二十歳過ぎると、忽ち大人っぽくなるわねぇ……」
「そうよね、普段と全然雰囲気が違うし」
「おばさん達が寂しくなってしまうから、あまり早くお嫁に行かないでね？」
絢子の台詞に玲子と真由美が真顔で応じると、清香は激しく動揺しながら反論を繰り出す。

「おおお嫁って！　まだ全然そんな事はないですから！　雰囲気が違うって言うのも、単に髪を下ろしてるせいだと思いますしっ！」
「あら、そう言えばいつもポニーテールですものね」
「そのハーフアップも似合ってるわ、清香ちゃん」
「バレッタもアクセサリーに合わせて、パールとシルバーなのね。素敵よ？　清人君が買ってくれたの？」
何気なく玲子が尋ねた一言に、清香が口ごもりながら答える。
「あ、いえ……、これはお兄ちゃんではなくて、昨日聡さんに頂きまして……」
「……聡さん？」
「いえっ！　あのっ、何でもないですから！」
「「「「「「……」」」」」」
怪訝そうに問い返した玲子に、清香は慌ててその場を取り繕った。

（何だか、ここでうっかり聡さんの事を口に出したら、おばさん達に根掘り葉掘り聞き出されそうな気がする……）
清香は当然初めて聞く名前に食いつかれると予想したのだが、昨年末その聡の見合い話の為に奔走した雄一郎達は、余計な事は言わずに黙って顔を見合わせた。そこで離れていた真澄が再び清香の所にやって来て、控え目に声をかける。

「清香ちゃん、お父様達との話は済んだ？　準備が出来たそうだから部屋に移動しましょうか」

「私達はちょっと話があるから、先に行っておいで」
「あ、はい。それじゃあまた後で」
雄一郎に優しく言われた清香は素直に頷き、皆に向かって小さく頭を下げた。それに他の者も鷹揚に応じる。
「ああ」
「楽しんでいってね？」
そうして清香と子供達が先に離れの方に向かうのを見届けてから、和威が雄一郎を問い質した。

「……兄さん。そう言えば小笠原の方では、あれをどうしたんですか？」
「未だに清香ちゃんに纏わり付いているって事は……」
幾分目線を険しくして義則も問いかけると、雄一郎がどこか楽しそうに答える。
「全て何とか穏便に事を収めたらしいな。やるじゃないか、小笠原社長も」
「まあ！　私達があれほど骨を折ってあげたのに」
「許せませんね、お義姉様」
「それもそうなんだけど……、実はお義父様に、まだこの事をお伝えしていなくて……」
そこで義妹に同意を求められた玲子は、困った様に夫に目をやりつつ現状を告げた。その内容に弟夫婦達が固まる。

「は？　本当ですか！？」
「俺達はてっきり父さんに話をした上で、父さんの人脈も総動員してあれだけかき集めていたのかと」
幾分非難する様に訴えて来た弟達に、雄一郎が渋い顔になって言い聞かせる。
「本当だ。ここであの清人君も手を焼いている男が、清香ちゃんと付き合いだしたなどと言ったらあの父の事だ、逆上して何を言い出

すか分からないぞ？　しかも何やら因縁があるらしい小笠原の人間ときてるからな」

「まあ、纏わり付くだけじゃなくて、付き合い始めたの？」

「じゃあさっきの反応は、色々聞かれるのが恥ずかしかったのかしら？　可愛いわね」

のほほんとお気楽な事を言い出す妻達に、男達は揃って苦虫を噛み潰した様な表情になった。

「お前達、あまり気楽な事を言うな」

「そうだ。今日一日、何とか無事に祖父と孫としての対面を済ませたら、追々説明すれば良いだけの話だからな」

「くれぐれも、余計な話題は口にするなよ？」

「それは重々承知しております」

「そう心配なさらなくても」

「少しは信用して頂戴？」

口々に念を押した夫達に妻達は呆れつつ、そこで揃って離れへの移動を開始したのだった。

応接室でそんな些か深刻な会話が交わされている頃、清香達は離れに到着してそこの玄関で靴を脱ぎ、奥の続き間へと進んでいた。そして目的の場所に辿りつくと、上座に一人ポツンと座っていた皺の深い老人に向かって真澄が声をかける。

「お祖父様、清香ちゃんを連れて来ました」

「お、おう、すまなかったな、真澄」

そう応じてから、総一郎は近寄ってきた清香に座ったまま畳に手を付いて、軽く頭を下げた。

「……その、清香さん。今回、我が家に突然招待したりして……、驚かせてしまったら申し訳無かったの」

「そんな事、気になさらないで下さい。私も真澄さん達のお祖父さ

んにお会いできて嬉しいです。お誕生日おめでとうございます！」
　目の前に座った清香が総一郎に向かって持参した花束を差し出すと、総一郎は信じられない物を見る様な目つきで清香を眺めやった。

「これを、儂にくれるのか？」
「勿論です。お嫌でなければですが……」
　些か心配そうに語尾を濁した清香に、総一郎が満面の笑みで頷く。
「なんの、可愛いお嬢さんから貰った物をお断りするほど、無粋な性格はしておらんのでな。ありがたく頂きますぞ？」
「気に入って頂けて良かったです」
　第一印象はちょっと怖そうなお祖父さんかもと密かに思った清香だったが、嬉しそうに笑っているその顔は好々爺としか見えない物で、清香は一人笑いを堪えた。

（うん、可愛いお祖父さんだな～。やっぱり若い女性から貰ったっていうのがポイントなんだろうな。余計な言は言わないでおこう）
（これで第一関門はクリアかしら？　もう何でも良いからさっさと告白してよねっ！）
　すぐ横でそのやり取りをひやひやしながら見守った真澄だったが、そんな切なる願いとは裏腹に、全員が席に着いて雄一郎が乾杯の音頭を取り、食事をしつつ歓談の流れになってからも、総一郎は清香と当たり障りのない世間話などをして、一向に埒が明かなかった。
　一同、特に至近距離の真澄が流石に苛々し始めた時、漸く総一郎が口調を改めつつ清香に声をかける。

「あの……、清香、さん？」
「はい、なんでしょうか？」
　その緊迫感溢れる雰囲気と表情に、清香以外の全員が瞬時に話を止めて事態の推移を見守る。
「今まで黙っておったが、清香さんは……」

そこまで言って言葉を途切れさせた総一郎に、清香は本気で首を傾げた。
「何か？」
「その……、儂、の……、ま……」
「はい？」
そのまま次の言葉が出てこない総一郎に、清香が（どこか急に具合が悪くなったのかしら？）と本気で心配しかけたその時、漸く総一郎が言葉を絞り出した。

「ま……、饅頭を食後のお茶請けに準備したんだがの。若い娘さん相手では、もうちっとハイカラな物の方が良かったかの？」
その台詞に、ある者は盛大に溜息を吐き、ある者は頭を抱えたが、真澄は心の中で容赦なく実の祖父を罵倒した。
（いい加減にしなさいよ、このチキンじじいっ！！）
そんな一同の心境など分かる筈も無い清香は、笑って告げる。

「いいえ、とんでもない！　お饅頭は大好きです」
「そ、そうか。それなら良かっ」
「私もお兄ちゃんも和菓子の類は好きで、時々贔屓の店にお使いを頼まれる位ですから」
予想外の人物の事が話題に上った瞬間、総一郎の顔が僅かに引き攣った。
「ほ、ほう……、お兄さんも好きかの」
「はい。もうお酒が強くてザルな癖に、甘い物にもこだわりを持ってて。ですからお兄ちゃんが美味しいと言った物は絶品なんですよ？　良かったら今度お持ちしますね？」
「……それは嬉しいの」
親切心から申し出た清香には一応笑顔を向けたものの、声の調子が冷えたものになったのを感じた真澄は、話題を逸らそうと慌てて清香に声をかけた。

「あのっ！　清香ちゃん、今日身に付けてるそれって、成人のお祝いにお父様達が贈った物よね？　良く似合ってるわ」
「うんうん、清楚さと気品溢れる装いじゃな。それに実際使っている所を見せるのは、贈った者への何よりの礼じゃ。清香さんは人情の機微を分かっている、若いのに似合わずできたお嬢さんじゃな」
　その姿を改めて見やり、それですっかり機嫌を直した総一郎が清香を手放しに褒めると、清香が若干照れながら弁解した。

「いえ、あの、そんな大した事じゃありません。せっかくだから付けている所を見て貰いなさいって勧めたのはお兄ちゃんですし」
「……ほう」
「あ、そ、そうだったの」
「本当にお兄ちゃんって、些細な所まで目配り気配りできる人なんです。私も見習わないといけないと思っているんですが、なかなかそうはいかなくて」
「……」
　しみじみと清人を褒める清香に、総一郎は表情を消して無言になった。益々危険な物を感じた真澄は、内心の動揺を押し隠しつつ事態の打開を図る。

「えっと……、清香ちゃん？　例のアレンジなんだけどお祖父様が気に入って、仏間に飾ってお祖母様に見せているのよ」
「お祖母様、ですか？　仏間って……」
　当惑した清香に、総一郎が幾分寂しそうに真澄の説明に付け加えた。
「ああ、儂は連れ合いを二十年近く前に亡くしておっての。あれが生きていた時代にはああいう物は無かったから、綺麗な物が好きだった澄江が見たら喜ぶと思ってな」
　それを聞いた清香は納得した様に頷き、しみじみと言い出した。

「奥様は澄江さんって仰るんですか。総一郎さんの奥様なら、きっと素敵な方だったんでしょうね」
「そう思ってくれるかの？」
「勿論ですよ。だって息子のおじさん達も孫の皆さんも、揃って美形で優しい人ばかりですもの」
笑って断言した清香に勇気を貰った様に、総一郎が口を開いた。
「そう言って貰えると嬉しいの。だが実は清香さんも澄江の血を」
「だから皆で集まると、私一人醜いアヒルの子みたいなんですよね。お兄ちゃんは皆に混ざっても、違和感無い位美形で存在感を醸し出してるのに。やっぱり母親が違うと、その違いが結構見た目に出るんでしょうか？」
せっかくの告白を遮られた挙げ句、謙遜して「あはは」と笑ってみせた清香に、総一郎は思わず腰を浮かせて叫びかけた。
「そんなわけあるか！　儂の娘があやつの母親に負」
「清香ちゃん！　さっきから見てたんだけど、そのバレッタ素敵ねっ！」
そこで総一郎に負けない位の大声で真澄が会話に割り込み、それと同時に清香の肩を掴んで強引に反対側の自分の方を向かせた。その乱暴な振る舞いに驚きながらも、真澄に向かって清香が律義に答える。
「はい、お兄ちゃんも今日の出で立ちには似合うなって、出掛けに誉めてくれました」
「……そう、それは良かったわ」
（もう嫌っ！　どうして振る話題が悉く清人君に繋がるわけ！？）
（清人が度が過ぎたシスコンだって事は頭に入れてたが、清香ちゃんも相当なブラコンだって事を忘れてたな……）
真澄と浩一が激しい頭痛を覚え始めたその時、何とか平常心を取り戻した総一郎が、再度真顔で清香に声をかけた。

「清香さん。改めて話があるんじゃが」
「はい、何でしょうか？」
再び自分の方を向き直った清香に、総一郎は深呼吸してから徐に話し出す。
「その……、真澄から聞いたんじゃがの。清香さんは、母方の親族とは疎遠じゃそうだが……」
「はあ、確かにそうですが、もっと正確に言えば疎遠では無くて没交渉です」
「清香さんは……、その人達と会ってみたいとは思わんかの？」
恐る恐る問いかけたそれに、清香が平然と答える。
「会えるなら、それを回避するつもりはありませんよ？」
「それは本当か！？」
思いもかけない言葉に総一郎が喜色を露わにして僅かに膝を進めたが、対する清香の答えは容赦の無いものだった。

「ええ。もし会う機会があったら今度は私がボコボコにしてやろうと思って、お兄ちゃんと一緒に幼稚園の頃から道場通いをしましたし。だってお母さんが『清吾さんと清人君の前で土下座して、四つん這いのままその場で三回回ってわんって吠えて、靴の裏を舐めるのを見たら、二人に対してしたあれこれを全部許してあげても良いわ！』って断言してましたから、娘で妹の私はそれくらいかな～って」
「……」
事も無げに清香が口にした内容に、総一郎は再び表情を消して黙りこみ、その息子達は（香澄……、お前それは厳し過ぎるだろう……）と父の心情を慮って密かに涙し、孫達は（だから柔道を習ってたんだ。単に大好きなお兄ちゃんにくっついて通ってたんだと思ってた……）と頭を抱えた。そこで何故か清香が苦笑して、小さく肩を竦めながら話を続ける。

「……と、一昨日までは固く心に誓っていたんですが」
「は？　そうすると、昨日どうかしたのかの？」
微妙な所で言葉を区切った清香に総一郎が不思議に思って仔細を尋ねると、清香が真顔で言葉を継いだ。
「昨日、ある人に同じ様に母の親族の話をした時、言われた事があるんです」
そうして清香は前日の聡とのやり取りを、簡潔に語って聞かせ始めたのだった。

第３１話　清香、人生最長の一日（１）（後書き）

ぶった切りで申し訳ありません。まだまだ続きます。

第３２話　清香、人生最長の一日（２）

「その人に『お母さんは散々清香さんに文句を言ってたそうだけど、本当に嫌いだったらわざわざその人物について語る事すらしない筈だ。口で言うほど毛嫌いしていたわけではないと思う』と言われたんです。それを聞いて思い当たる事があったので、帰宅してから母の遺品を纏めてあるダンボール箱を、お兄ちゃんに内緒でこっそり開けてみました」

「何が気になったんじゃ？」

「私が中学に入学してすぐ、帰宅したらお母さんが『清人君ったらまた余計なお節介するんだから。それにどうして毎回私の言う枚数で作ってくれないのよ』とかブツブツ文句を言いながら、何かを紙袋に突っ込んでたんです。帰宅した私に気付いて慌てて隠してそれきりだったんですけど」

「……それで？」

はぁ……、と溜息を吐いて話を一端区切った清香に、総一郎が様子を窺う様に続きを促した。それを受けて清香が話を続ける。

「その直後に両親が事故死して遺品を整理していた時、お兄ちゃんがあの時見た袋を箱に詰めていたんです。母が隠した時記念写真の様に見えたので、しまい込んで良いのかと思ったんですが、ちゃんと本棚にそれは保管してありましたから見間違いだと結論づけていて。でも思っていた通り中身は記念写真でした」

「記念写真って、何の？」

ここで怪訝そうに口を挟んで来た真澄の方に体を向け、清香が指折り数えながら説明した。

「えっと……、私の誕生記念と七五三の二回、それから小学校と中学校の入学の時に家族四人で撮って貰った写真です。写真屋さんで一枚ずつ装丁して貰った物で」

「ああ、なるほどね」
「それをどうしてお母さんが隠すわけ？」
今度は真澄の横から浩一が質問し、清香が説明を続けた。
「それを撮影した写真屋さんは小学校の同級生のお父さんなので、今日の午前中電話をかけて聞いてみたんです。そうしたら、それは毎回お兄ちゃんが追加注文していた分でした」
「え？　どういう事？」
「お店のおじさんも一枚を二枚にしてくれと言われて、当時子供だったお兄ちゃんに理由を聞いたら『香澄さんの実家の人に渡す分です』と言ったんですって」
「実家の分って……」
そんな物は存在すら知らなかった真澄はチラリと父親に視線を送ったが、雄一郎も当惑しながら軽く首を振って否定する。そんな事とは気付かないまま、清香が話を続けた。
「しかも『二枚目の料金は持ち合わせが無いので、毎月少しずつ支払いますから全額支払ったら渡して下さい』と頼まれて、約束通り半年してから渡したんだよって言われて驚きました。おじさんが言うには『親には内緒で毎月お小遣いを持って来てたんだろう。偉いよな清人君は』ってしみじみ言ってて。……あ、流石に二回目はバレて、それ以降はお父さんが追加料金を払ってたそうなんですけど」
「……そうだったの」
殆ど呆然と呟いた真澄に、清香が幾分慎重に考え込みながら推論を述べる。
「多分お兄ちゃんは、それを渡す事を口実にして実家の人と仲直りする様にって、お母さんに毎回渡してたと思うんです。でもお母さんは意地を張って、連絡を取らずにいたんじゃないかと。でも本当に欠片も渡す気が無かったら、そんな物、幾ら義理の息子がくれたからって、さっさと破り捨てるなり焼き捨てるなりしますよね？」

「ど、どうかしら？」
冷や汗を流しながら（あの香澄叔母様ならやりかねない……）とは思ったものの、真澄は何とか誤魔化した。そこで清香が自分なりに結論付ける。

「だからお母さんはひょっとしたら、口で言ってるほど実家の人達を毛嫌いしていたわけじゃないのかなって、思う様になったんです。……思えば、他人にその人達の悪口を言う度にお兄ちゃんに強い口調で叱られてたのも、お兄ちゃんはそれを分かってて窘めてたのかなって。口に出しては単に『他人の悪口を言うのは見苦しい』って言ってたけど」
そんな事をしみじみ語った清香を見て、年配者達は揃って目頭を熱くした。

（はあ……、本当に清人君には、余計な気苦労をさせたな……）
（生さぬ仲で心配はしていたが、確かに香澄と実の親子以上に仲が良かったからな）
（全く、香澄も父さんも揃って頑固者のせいで、子供にまで迷惑を……）
（なんて健気なの、清人君。うちの息子達にその爪の垢でも煎じて飲ませてあげたいわ）
（香澄さんも、清人君の事は会う度ベタ褒めだったものね……）
（これを聞いたらお義父様だって、清人君を毛嫌いなんかしない筈だわ）
結婚後の香澄と一時期絶縁状態だったものの、なし崩し的に交流をしてきた兄と兄嫁達は清人に心の中で改めて感謝しつつ、未だにかたくなな総一郎に期待する様な視線を向けたが、口を固く引き結んだ総一郎が次に発した言葉は、彼らの期待を大きく裏切るものだった。

「……話を聞いておると、それを清香さんに説いた人物は、酸いも甘いも噛み分けるなかなか味のある御仁の様じゃな。清香さんの大学の先生とかかの？」

（お父さん……、幾ら清人君を直接誉めたく無いからって……）

（つくづく素直じゃありませんわね。話を清香ちゃんに説いた人の方に、持っていこうとするなんて……）

息子と嫁達が揃って呆れて肩を落とす中、清香が幾分もじもじしながら総一郎の言葉を否定した。

「えっと……、その人は大学の先生とかじゃなくて、私より五歳年上の、小笠原産業にお勤めの方です。小笠原聡さんって言うんですけど、さっきお話ししたように、若くても何事も幅広い物の見方ができる、家族思いの優しい方なんですよ？」

そう清香が口にした途端、清香と総一郎以外の全員がすっかり失念していた事を思い出し、激しく動揺した。

（しまった！　あいつの事は祖父さんに内緒にしたままだった！）

（清香ちゃんに口止めをするのを忘れてたわ！）

（ちょっとまて！　しかも長年因縁がある小笠原の社長の息子なんて知られたら）

そんな中、総一郎が僅かに目つきを険しくして、清香に尋ねる。

「小笠原産業の小笠原……。ひょっとしてその男は、小笠原産業前会長の小笠原幸之助の孫かの？」

「えっと……、お祖父さんの名前は知らないんですが、お父さんは現社長の小笠原昭さんで、お母さんは由紀子さんですけど。もしかしたらお知り合いですか？」

その清香の問いかけには直接答えず、総一郎が更なる問いを繰り出す。

「その男とは、単なる知り合いだろうな？」

「いえ、あの……、ごく最近ですね、所謂お付き合いというものを

始めまして……」

　他の者が止めたり誤魔化す暇も無く、清香は若干照れながらも素直に述べてしまい、その途端総一郎は怒声を張り上げた。

「あのゲジ眉因業ジジイの孫と付き合ってるだと!?　目を覚ませ清香!　お前は絶対騙されとるぞ!!」

「は、はあ?」

（え?　何で?　いきなり呼び捨て?）

　突然両肩を掴まれ、顔を覗き込まれつつ断言された清香は当然戸惑い、真澄と雄一郎が狼狽しつつ話に割り込んだ。

「お祖父様!　そんな事どうだって良いでしょう?」

「そうですよ!　せっかくの祝いの席なんですから、仕事上の諍い事を持ち込まないで下さい!」

「ふざけるな!　儂はあやつに個人的に恨みがあるんじゃ!　あの守銭奴はよりにもよって、澄江の帯を横取りしたんじゃあぁぁっ!!」

　そこで息子を睨みつけつつ激昂した総一郎が叫んだ内容に、清香以外の面々も本気で傾げた。

「はい?」

「あの、何ですか?　それは」

「……初耳なんですが」

　そして皆が戸惑う中、総一郎は肩を掴んだままの清香に向き直り、切々と訴え始めた。

「清香、聞いてくれ。あれはもう五十年近く前の事じゃ」

「は、はい……」

（だから、何で呼び捨て……）

　そう疑問には思ったものの、相手の気迫に押されて清香が頷き、総一郎は話を続けた。

「儂は休みの日に澄江と一緒に観劇に行った帰り、買い物を楽しんでおったんじゃ。すると澄江が一軒の店の前でふと足を止め、『あら、素敵な帯ね』と言ってな」
「はぁ……」
「澄江は万事控え目で、普段なら物をねだる様な事もしない慎ましやかな女じゃった。これは買わねばなるまいと店に飛び込んだのだが、生憎現金も小切手もあまり持ち合わせが無かった。当時はまだ今ほどカード決済が普及してもおらんでな」
「それでどうしたんですか？」
ちょっと興味を引かれて尋ねた清香に、総一郎が渋い顔をして続ける。

「行き着けの店ならつけ払いもできるが、その店は初めてだったからの。手付け金として店の主人に十万を渡して、明日不足分を持たせるから、その帯を押さえておいてくれと頼んだんじゃ」
「でも、当時で十万っていったら、結構大金ですよね」
「その通りじゃ。主人が快諾したのでその日は澄江と帰り、翌日使いの者に金を持たせたら……、そやつが『既に売られた後でした』と手ぶらで帰って来おったんじゃ！！」
「え？　どうしてですか？」
目を丸くした清香だったが、流石に興奮してきた総一郎を見かねて、周りが騒ぎ始める。

「お父さん、もうその辺で」
「そうです！　清香ちゃんも困ってるでしょう？」
「五月蝿い、黙っとれ！　その店の常連客の中に小笠原が居てな、儂らが帰った後に来店して、店の者が包もうとしていたその帯を見て、半ば無理矢理倍の金額を払って帯を奪い取って行ったそうじゃ。店の主人は手付け金を返した上で常連客なので断り切れなかったと

謝罪したらしいが、言語道断じゃ！　店の信用を何じゃと思っとる！！」

「それは酷いですよね」

思わず清香が頷いて同意を示すと、総一郎は我が意を得たりとばかりに声に力を込めて話し続けた。

「そうじゃろう！？　それから少しして何かのパーティーで小笠原夫妻を見かけたが、奴の細君が例の帯を締めていてな。それを見た澄江が残念そうな顔をしていたのが、今でも忘れられん。あれは芸者上がりの厚化粧女にでは無く、澄江にこそ相応しい物だったんじゃ！！　金を積まれて予約品をあっさり渡す様な、商売人の風上にも置けぬ輩の店など、半年で潰してやったぞ！」

「……」

それを聞いた清香は（それはどうなの？）とは思ったが、余計な事は言わずに口を噤んだ。そして更に総一郎の小笠原との確執話が続く。

「それからも儂が別荘を買えば、その南側に儂の所よりも広い所を買ったので、そこの更に南側の土地を買って奴の土地が日陰になるように大木を移植したり、自社ビルを儂の所より高い物を建てておったから、儂は更に高いものを建ててやったんじゃ！　どうじゃ清香、儂はあれ以来一度も負けてはおらんぞ！」

「……はあ」

「お祖父様！　もう良い加減にして下さい！！」

総一郎に感想を求められた清香は、（だから、どうして呼び捨てなんだろう？）とは思いつつも素直に頷き、真澄は堪らず悲鳴を上げた。そして室内の全員が頭を抱える。

（小笠原との確執には、そんな秘話が……）

（今、初めて知ったな）

（もう訳分からなくて、清香ちゃん固まってるぞ？）

（お祖父さん、もう少し冷静に！）

そしてそんな事を考えていた面々の前で、理性を吹っ飛ばした総一郎がこれ以上は無いという位の自爆発言を繰り出した。

「よりにもよって、付き合っている相手がその小笠原の孫じゃと！？　儂は絶対に許さんぞ清香！　娘を薄汚いクソガキを連れた、出自も知れない野良犬野郎に盗られただけでも未だに腸が煮えくり返っておるのに、孫まであの意地汚い守銭奴の孫になど盗られてたまるかっ！！」

「お父さん！！」

「お祖父様！！」

その魂の底からの絶叫に、雄一郎と真澄の悲鳴が続き、瞬時に室内の空気が凍りついた。そして清香が何回か瞬きしてから、静かな声で総一郎に問いかける。

「……すみません、一つ確認させて下さい。誰が誰の孫なんですか？」

その問いに、まだ自分の置かれた状況が分かっていない総一郎は、勢い込んで叫んだ。

「清香が儂の孫に決まっとるだろうが！　それでだな」

「そうなると、“盗られた娘”さんがお母さんで、“薄汚いクソガキを連れた、出自も知れない野良犬野郎”がお兄ちゃんとお父さんって事ですよね？」

「おう、勿論そう」

冷静に念を押された内容に同意しかけた所で、総一郎は漸く自分の失言に気が付き、真っ青になって口を噤んだ。僅かに目を細めた清香がその様子を眺めてから、ゆっくりと座卓の向かい側に座る面々に視線を向けつつ確認を入れる。

「そうなると、当然、あなたと一緒になって、お父さんとお兄ちゃ

んを袋叩きにしたのが、雄一郎おじさんと和威おじさんと義則おじさんって事になりますよね？」

「「「「……」」」」

否定する事など出来ずに揃って固まった男達を、険しい表情で睥睨する清香。

「あ、あの……、清香ちゃん。これは……」

どうなる事かとその場の全員が固唾を飲んで事態の行方を見守る中、恐る恐る真澄が清香に声をかけたが、それが引き金になったかの如く清香が総一郎の方に向き直り、力一杯その頬を平手打ちした。

「最っ低！！　もう二度と来ません！　御馳走様でしたっ！！」

「清香ちゃん！？」

衝撃音と共に清香が勢い良く叫び、素早く立ち上がったかと思うと襖を勢いよく引き開けつつ外へ飛び出した。呆気にとられて見送ってから、一瞬遅れて真澄が慌てて立ち上がり彼女の後を追う。何やら背後が騒がしいと思ったものの、そんな事は気にせずに走って廊下を進んだ。

「清香ちゃん、ちょっと待って！」

大声で叫んでも止まるつもりは無いらしく、姿も見えない。そして和風別館の玄関で既に清香が靴を履いて飛び出した後なのを確認した真澄は、（ハイヒールだと追い付けないわね）と素早く判断し、靴を履かずにそのまま母屋への渡り廊下へと走り出た。

幸い二回程角を曲がっただけでローヒールを履いた清香を見つけ、冷たい床面を真澄が裸足のまま走り抜け、玄関の手前で何とか清香の左腕を捕まえる。

「ちょっと待って！　落ち着いて頂戴！」

「離して下さい！　もう一分一秒たりともここに居たくありませんし、誰ともお話しする気はありません！」

殆ど泣き叫んで手を振りほどこうとした清香に、真澄が幾分顔を険しくしながら訴える。
「分かってる。だから車で遅らせるから、ちょっとだけ待って」
「あなた達のお世話になんて、金輪際なるつもりはありません！もう大っ嫌い！　皆、嘘吐きばっかり！！」
そこで勢いに任せて振り回した右手が真澄の顔に派手にぶつかり、清香は流石に驚いて動きを止めた。それを気にする風も無く、真澄が冷静に告げる。

「……悪いけど、こんな状態のあなたを一人で帰すわけにはいかないわ。途中で事故にでもあったら取り返しがつかないもの」
「放っておいて下さいと言ってるでしょう！」
「そうはいかないの。柏木物産の一課長としてではなく、創業家の一員としてね。あなたに何かあったら、清人君から柏木が何らかの報復を受ける事は間違い無いから。私達には従業員の生活を守る義務があるのよ」
唐突に言われた内容に、思わず清香は涙を引っ込めて真澄を怪訝そうに見やった。

「何、言ってるんですか？　お兄ちゃんは只の作家ですよ？　大企業の柏木に報復なんて」
本気で困惑する清香に、真澄は溜息を吐いてからある事実を伝えた。
「六年前位に、彼はその柏木の外部取締役に就任してるの。その時父と何やら取引があったみたいで、彼はうちのホストコンピューターへの極秘アクセスコードも知っているわ」
「は？　お兄ちゃん、そんな事一言も！？」
「今、私が言った事がどういう事か分かる？」
「どういう事って……」
問いかけられた内容が全く分からず清香が口ごもると、真澄が真

剣そのものの表情で解説した。

「柏木が犯罪行為に手を染める事は勿論無いけど、業界で覇権を握る為に違法スレスレの事をする場合もあるの。清人君にはその情報に触れる機会が……、いえ、恐らく何かあった時の為に、既にある程度は把握している筈よ。下手したらそれをどう使われるか」

「そんな事っ！」

「あなたを泣かせた事で彼を怒らせるのは確実だけど、そういう訳だからあなたを放置せず、より危険性の少ない方を選ばせて貰う必要があるの。あくまでうちの車を断って歩きと電車で帰るって言うなら、清人君が迎えに来るまです巻きにしてどこかの部屋に閉じ込めておく事にするけど、どちらが良い？　選ばせてあげる」

どこまでも本気でしかあり得ない真澄の物言いに、清香は幾分悔しそうに声を絞り出した。

「……タクシーを呼んで下さい」

それが清香の妥協の産物だと理解した真澄は、これ以上押し問答を続ける気は無く、少し離れた物陰から恐る恐る様子を窺っていた使用人達を振り返って叫んだ。

「分かったわ。……能島さん！　大至急タクシーを一台頼んで。勿論これまでにうちで頼んだ事のある人でよ！　門の所で待ってるって伝えて」

「わ、分かりました！」

指名された女性が慌てて奥へと走って行くのを認め、その背後に心配そうに控えていた従兄弟達のうち何人かに無言で首を振ってから、真澄は清香の手を引いて真っすぐ玄関へと進んだ。

「さあ、行くわよ」

そうして大きなドアを開け、無言で外に踏み出して少ししてから、清香は真澄がストッキングだけ穿いた足で歩いているのに漸く気が

付いた。
「あの……、真澄さん。足……」
「気にしないで。早く出ましょう。一分一秒でもここに居るのは嫌でしょう？」
「……」
控え目に指摘した清香だったが、清香の方から話し掛けて貰ったのが嬉しいかの様に、真澄は小さく苦笑いしながら門に向かって歩き続けた。それに何となく気まずい思いをしながら、清香は黙り込む。そして舗装された道を少し歩いてから、周囲の整えられた庭園や噴水を眺め回しながらボソッと言い出した。

「……ここに入って来た時も思ったんですけど、凄いお金持ちなんですね」
「そうみたいね」
まるで他人事のように返す真澄に、清香は訳も無く反感を覚えながら話を続ける。
「お母さん、こんな所のお嬢様だったなんて、全然思えなかったんですけど」
「……そうかもね」
どこか遠い目をしながら真澄が呟くと、清香が幾分強い口調になって言葉を継いだ。
「だからと言って、お父さんとお兄ちゃんの事を、あんな風に言われる筋合いはありません！　確かにお金持ちじゃ無かったけど、曲がった事なんかできない優しいお父さんでした。お兄ちゃんだっ、て……」
ここで再び涙ぐんでしまった清香が言葉を途切れさせ、俯いてしまった為、前を向いて歩いたまま真澄が謝罪の言葉を口にした。

「ごめんなさい」
「……真澄さんが謝る筋合いの事でもありません」

幾分素っ気ない口調で真澄の謝罪を拒否した清香だったが、門まで到達した真澄が横の通用口を開けて清香を促し、二人で門の外に立った所で質問を繰り出した。

「……今までどうして黙ってたのか、聞いても良いですか？」

それに真澄は困った様に小さく肩を竦めてから、包み隠さず当時の事情を話し出した。

「香澄叔母様に口止めされてたの。父達は清香ちゃんとの初対面直後『顔を合わせてしまったから、今後顔を見せても仕方無いけど、身内だとバラしたらベランダから放り投げるわよ？』と言われたそうよ。私達は『歓迎するけど余計な事一言でも漏らしたら、パンツを脱がせてお尻ペンペンの写真を撮って社交界にばらまくわよ？清人君に写真を撮って貰う事はもう了承して貰ってますからね！』と言われたわ」

それを聞いた清香は、真澄に疑わしげな視線を向けた。

「あの……、真澄さんは当時……」

「私が十六で浩一が十四、友之が十三で正彦が十二ね」

淡々と語る真澄に、清香が僅かに顔を引き攣らせる。

「……さすがにそれは無理なんじゃ」

「叔母様は清人君と一緒で、やると言った事は必ずやり遂げる人だったわよ？　当時既に腕っ節が半端じゃなかった清人君は、基本的に叔母様に逆らうなんて事しなかったし。間違い無く実行に移されたわね。……後は言い出すきっかけを掴めないまま、そのままズルズルとよ」

「……そうですか」

何となく精神的な疲労を覚えて清香が黙り込むと、真澄が慎重に口を開いた。

「清香ちゃんが怒るのは当然だけど……」

そう言って次に続ける言葉を選んでいる真澄に、清香は考えながらも自分の思いを正直に伝える。
「怒っているとは思うんですけど……、正直、色々な事が一度に頭の中に入ってきて、何がなんだか分かりません」
それを聞いた真澄は小さく笑って頷いた。

「当然よ。今日はゆっくり休んで頂戴。後日改めてお詫びに伺うわ」
「……お兄ちゃんが家に上げるとは思えないんですけど」
「普通に考えればそうでしょうね。……今にして思えば、叔母様は寛大だったわ」
素朴な疑問を呈した清香に真澄が感慨深げに述べた所で、二人の目の前にタクシーが滑り込んで来た。そして開かれた後部座席のドアの方に真澄が清香を促し、真澄が中を軽く覗き込みつつ声をかける。

「支払いはこちらに請求して頂戴。……じゃあ清香ちゃん、気をつけてね？」
「……はい、失礼します」
小声で後部座席から挨拶を返した清香に頷き、真澄はその場で走り去るタクシーを見送った。そのまま真澄は邸内には戻らず、門扉に背中を預けて疲れた様に俯く。
そのまま１０分程経過した所で、真澄が今日履いていたハイヒールを手にした浩一が、通用門を開けて姿を現した。

「姉さん？　なかなか戻って来ないから心配したよ？」
心配顔の弟から差し出された靴を受け取り、真澄はそれを履きつつ忌々しげに尋ねた。
「ごめんなさい。ありがとう、浩一。ところで諸悪の根源は」
「……自室で布団を頭から被って寝込んでる」
「叩き起こして清人君の前に引きずり出してやるわっ！」

流石に怒りに満ちた表情で通用門をくぐって歩き出した真澄に、浩一が慌てて追い縋った。

「姉さん！　頼むから落ち着いて。あの状態のお祖父さんを責めても仕方が無いだろう！？」

「確かにそうだけど、私の気が収まらないのよっ！」

「取り敢えず姉さん、お茶でも飲んで気持ちを落ち着かせて。俺もそれに付き合ってから出掛けるから」

「出掛けるって、どこに？」

意表を衝かれて自分の横を歩いている弟の顔をまじまじと見やった真澄に、浩一は溜息を吐いて今後の予定を告げた。

「清香ちゃんが一連の経過を話し終わった頃を見計らって、清人の所に顔を出して殴られて来る。俺達が結果的に、清香ちゃんを泣かせる一因を作った事には変わりないから」

「……殴られるなら私の方でしょう？　誘ったのは私なんだし」

「清人はフェミニストだから、幾ら腹を立てても姉さん相手なら一発しか殴らないで、却って怒りを溜め込むよ。だから清人の好きなだけ、俺が殴られる事にする」

浩一の話を聞いた真澄は眉を顰めて反論したが、相手は小さく苦笑したのみだった。

「だけど！」

「だから、俺の顔が崩れる寸前で姉さんが割り込んで、一発殴られて終わりにしてくれたら凄く助かる」

思わず声を荒げた真澄だったが、浩一が幾分茶目っ気を含んだ口調でそんな事を言った為、釣られて小さく噴き出し、左手の甲で浩一の右腕を軽く叩いて請け負う。

「……分かったわ。お姉さんに任せなさい。骨は拾ってあげる」

「嬉しいな、頼りにしてる」

柏木姉弟がそんな物騒な相談をしているとは思っていない清香は、タクシーの中で柏木邸内で言われた事を考え続けていた。思考がぐるぐると堂々巡りをしているうちに、あっさりと自宅マンションの前に到着し、タクシーの運転手に声をかけられる。

「……お世話様でした」

小さく運転手に声をかけてから道路に降り立った清香は、殆ど無意識のうちにエントランスのオートロックを解除し、エレベーターに乗り込んだ。

そしてすっかり涙が引っ込んでいた清香は（今日の事、お兄ちゃんにどう話そう……）と真剣に悩んでいたのだったが、エレベーターが清香の住んでいるフロアに辿りついた瞬間、清香にとっては更に予想もつかない事態が通路の向こうで展開されていた。

第３２話　清香、人生最長の一日（２）（後書き）

まだまだ続きます。呆れずにお付き合い下さい。ｍ（＿＿）ｍ

第３３話　清香、人生最長の一日（３）

話は清香が帰宅する三十分程前に遡る。

その時、仕事部屋で資料の整理をしていた清人は、携帯の呼び出し音が響いた為作業を中断してそれを取り上げた。ディスプレイに浮かびあがった見慣れない番号に一瞬戸惑ったが、通話ボタンを押して応答する。

「はい、もしもし佐竹ですが」

『すみません兄さん。今ちょっと時間を貰って良いですか？』

そこから聡の声が伝わってきた途端、清人は問答無用で通話を終わらせた。そして素早く受信履歴に残った番号を、受信拒否設定にしてから忌々しげに呟く。

「……この番号、清香からでも聞き出したのか？」

そして何とか気持ちを落ち着かせてから机へ戻り、作業を再開した清人だったが、五分程して固定電話の呼び出し音が鳴り響いた。何となく嫌な予感を覚えながら、清人が仕事部屋の子機を取り上げる。

「はい、佐竹です」

『話も聞かずにいきなり切るのは、酷くありませんか？』

「しつこいぞ！」

予想通りの声に清人は怒りを露わにして怒鳴りつけ、通話を終わらせた。そして当分かかってきても通じない様に、わざと所定の位置に戻さず話し中の状態にする。

「全く……」

悪態を吐きながら何とか仕事に集中しようとした清人だったが、それから更に十分程して今度はインターフォンの呼び出し音が鳴り

響いた。最早苛立ちを隠そうともせず、清人がそのモニターに歩み寄り応答ボタンを押すと、画面にエントランスに佇む聡が映し出されていた。操作音で清人が応対しているのを察したらしい聡が、軽く頭を下げつつ呼びかけてくる。

『俺です。少しお話ししたい事があり』

無言のまま清人はモニターの電源を落とし、素知らぬふりを決め込んで作業を再開した。

それから更に五分程して、今度は玄関の呼び出しのチャイム音が鳴り、怪訝そうに清人が腰を上げた。そして玄関のドア越しに声をかける。

「はい、どちら様ですか？」

「すみません、管理室の高田です。ちょっと確認したい事がありますので、ドアを開けて頂けませんか？」

一応覗き穴から廊下を窺うと、確かに一階に常駐している管理人である年配の男が佇んでいた為、清人は慌ててロックを外した。

「分かりました。今開けます」

そしてドア開けながら、清人は怪訝な顔で尋ねた。

「高田さんお待たせしました。どうかしましたか？」

「申し訳ありません、佐竹さん。こちらの方が」

「良かった、別に何事も無かったんですね？　心配しましたよ、兄さん」

そこで開いたドアの向こうから聡が姿を現し、ドアを閉められない様にさり気なく片足でドアを押さえ、両腕でドアノブを掴んでいる清人の腕を捕らえた為、流石に清人は驚きの声を上げた。

「なっ、お前っ！　どうしてここにっ！」

しかし何故かその反応を見た高田が、ほっとした様に笑顔を見せる。

「ああ、本当に弟さんだったんですね？　佐竹さんや妹さんからそんな話は聞いていなかったので、疑ってしまってすみませんでした」
「いえ、確かに両親が離婚して名前も違いますし、普段離れている者の事をペラペラ話したりはしませんよ、お気遣い無く」
　にこにこと高田に愛想を振りまく聡に、清人が低く呻く。
「これは一体何事だ？」
「嫌だな、兄さん。俺との約束を忘れて昼寝でもしてたんですか？」
　凄まれてもびくともせず聡が苦笑し、高田が安堵した様に経過を説明した。
「電話でもエントランスのインターフォンでも応答が無いから、ひょっとしたら兄が室内で倒れているかもしれないと、下で訴えられまして焦りましたよ。管理室から登録されている携帯や固定電話にかけてみても、全く応答がありませんでしたし」
「清香さんも出掛けると聞いていたので、もし一人で倒れていたらまずいかと。しかも『中から応答があっても、もしかしたら押し込み強盗が兄を脅してるかもしれないから』なんてお騒がせして、不測の事態に備えて無理に付いて来て貰って、本当に申し訳ありませんでした」
　そう言って高田に向かって神妙に頭を下げた聡を見て、清人は心の中で忌々しげに呟いた。
（こいつ……、それを狙ってわざと事前に電話をかけて応答不能にしておいて、高田さんを引っ張り出して俺に中から鍵を開けさせたな？）
　しかしそんな事とは夢にも思っていない高田は、愉快そうに笑って軽く手を振った。
「いえいえ、想像力豊かな所は、流石物書きの方の弟さんですね。何事も無くて本当に良かったです。それでは私は失礼します」
「はい、お騒がせしました」

「申し訳ありません」
頭を下げた高田を聡と清人も謝罪の言葉を述べて見送ったが、その姿が見えなくなった途端、清人は取り繕った外面をかなぐり捨て、未だ自分の右手を押さえている聡の腕を左手で掴んで恫喝した。

「……随分手の込んだ真似をしてくれるじゃないか。さっさとその手を離せ」
「叩き出しても構いませんが、話を聞いて貰うまで廊下で待たせて貰います。そのうち清香さんが帰ってくるかもしれませんね」
動じずに言い返す聡を、清人は目を細めて睨み付ける。
「……警察を呼ぶぞ？」
「単なる兄弟喧嘩でですか？　でも俺は兄さんに対して手を上げる気はありませんから、下手すると傷害罪を問われるのはそちらですね。それに……、清香さんに余計な心配はかけたくないので、できれば回避したいです」
淡々と告げる聡に清人は「チッ……」と小さく舌打ちすると、ドアを更に大きく開いて聡に腕を掴まれたまま廊下に出た。そして聡が腕を離すとドアを閉め、そこに背中で寄りかかりながら両腕を組んで横柄に告げる。

「五分だけ話とやらを聞いてやる。さっさと話せ」
（あくまで室内に入れる気は無いと言う事か……。はっきりしていっそ清々しいな）
その姿に思わず笑いを誘われた聡だったが、それを見た清人が益々不愉快そうに唸った。
「……何がおかしい」
「すみません。それではなるべく簡潔にお話ししますが、まず……」
瞬時に笑いを収めた聡は、清人の前で両手両膝を廊下に付けて座り込み、神妙に頭を下げた。

「兄さんの気持ちを考えず、こちらから一方的に接触を図って申し訳ありませんでした。母にも余計な事はするなと窘められました。併せて身元を隠したまま、清香さんに近付いた事に関しても謝ります」

それを聞いた清人は意外そうな顔を見せた。

「ほう？　今日は随分素直だな。それで？　このまま俺の目の前から消えて、一生現れないと約束するとでも？」

「その逆です。何年か後には嫌でも親戚付き合いをして頂く必要がありますので、この際きちんと一度お詫びしておこうと思いまして」

「何、世迷い言言ってやがる！」

「ぐっ……」

突然声を荒げた清人が勢い良く聡の左掌を靴で踏みつけた為、聡は小さく呻き声を漏らした。しかしそれには構わず、薄笑いを浮かべながら清人が聡の手を踏みにじる。

「もう一度言ってみろ。何が何だって？　……取り消すなら今のうちだぞ？」

その脅しにも聡は怯まず、右手で清人の右足首を捕まえながら、高い位置にある異父兄の顔を見上げた。

「勿論、清香さんはまだ学生ですし、今すぐと言うわけではありませんが、四・五年のうちには」

「ふざけるな！　誰が貴様なんぞに清香を渡すか！」

聡の言わんとする事を察した清人は怒声で聡の話を遮ったが、聡は冷静に話を続けた。

「俺が気に入らないのは、単に母さんの息子だからですか？　それ抜きで考えても、俺自身が清香さんの相手としては相応しく無いと思っているんですか？」

「……何だと？」

物騒な気配を醸し出しながら清人がそこで眉をしかめ、聡が慎重

に清人の顔色を窺いながら言葉を継いだ。
「それに……、もしかしたら兄さんは、それほど母の事を恨んではいないんじゃないですか？」
「どうしてそう思う。頭の中が相当おめでたいな、お前」
頭の上からせせら笑われた聡だったが、何とか感情を抑えながら推論を述べた。

「清香さんには『本当に嫌いだったら話に出す事もしない』とは言いましたが、良く考えてみたら兄さんの行動には色々矛盾点があったもので」
「どこがどう矛盾していると？」
「ご両親のお通夜の時の話です。兄さんは母達を引きずり出して殴りましたよね？」
「それがどうした」
「父は拳で殴り倒されたそうですが、母は平手打ちされただけですよね」
「だから？」
「……本当に嫌い抜いてたら、幾らフェミニストでも父と同程度に母を殴りませんか？　もしくは触れるのも忌避して一発も殴らないと思いますが」
どこか探る様な視線で見上げられた清人は一瞬黙り込んでから、ボソッと言葉を返した。
「……女性には極力手を上げるなと言うのが、死んだ父の教えでな」
しかし聡はそこを突っ込まず、あっさりと話題を変える。

「そうですか。それでは話を変えます。兄さんはどうして母達に焼香させなかったんですか？」
「何？」
「完全に赤の他人だと思ってるなら、尚且つ未だに清香さんに母との関係を知られたくなくて黙っているなら、当時知らぬ振りをして

黙って焼香させて帰って貰えば良かったじゃありませんか。それをわざわざ騒ぎになる危険を冒して、母達を外に連れ出したのは何故ですか？」

「……自分が捨てた、かつての亭主の遺影を見に来た女の顔を見るのが、不愉快極まりなかったからだ」

　如何にも面白く無さそうに告げた清人に、聡は疲れた様に溜め息を吐く。

「違うでしょう？　恐らく兄さんは、一度に両親を亡くした清香さんの心境を慮っただけです。自分にはまだ母親が居ると分かったら、清香さんが余計に寂しがると思ったから、発作的に引きずり出したんじゃ無いですか？」

「妄想を垂れ流すのもいい加減にしろよ？」

「爺さんにも俺に対してもえげつない報復を仕掛けてきたあなたが、幾ら直接接触して来ないからといっても、心底憎んでる相手を放置するなんて有り得ないと、この間のあれこれで思いましてね」

「はっ！　良い社会勉強になっただろう？」

　更に右足に体重をかけてくる清人に、僅かに顔を歪めながら聡が言い募る。

「ええ、お陰様で。それで、清香さんには母を亡くなった事にしてあなたの方から連絡も接触も断っていたのは、再婚した母の立場を推し量ったり、義理の母親の香澄さんに遠慮していたせいですか？」

　聡がそう尋ねた次の瞬間、その手から右足を退けた清人が思い切り右足で聡の左肩を蹴りつけた。流石に衝撃を堪えられなかった聡が仰向けに廊下に転がると、その上に馬乗りになった清人が両手で聡のコートの喉元を掴み上げる。

「言いたい事はそれだけか？　誰があの女の立場に配慮するって？」

「怒るという行為自体、気にしている証拠だと思いますが？」

「はっ！　あんな女、倒れて入院してたそうだが、いっその事そのままくたばってしまえば良かったんだ！！」
　そこまで何とか平静さを保っていた聡だったが、ここで流石に怒気を露わにして清人の腕を掴んで睨み付けた。

「何て事を言うんですかあなたって人は！？　幾ら気に入らないからって、言って良い事と悪い事があるでしょう！」
「貴様に賢しげに説教される謂れは無い！」
　そう吐き捨てた清人に、聡も負けじと清人の手首を引き剥がそうとしながら怒鳴り返す。
「本当に最低な人間ですね、あなたって人は！　あなたが纏わりついてる清香さんに、面倒くさがって近付く男が居なかったのも納得ですよ。正直、母の事が無かったら、例え知り合っても深入りしようなんて思いませんでしたね！」
「自分の行いを棚に上げて、何ほざいてやがる！」
「二人とも止めなさいっ！！」
　突然至近距離から響いた怒声に、掴み合っていた二人は声のした方に顔を向けて驚愕した。

「え！？　どうしてここにっ！」
「清香さん！？　まだ帰る時間じゃ！」
「知らなかったわ……、お兄ちゃんと聡さんが私が居ない隙を狙って、コソコソ密会する間柄だったなんて」
　腕を組んで仁王立ちになり、冷え冷えとした声を降らせて来る清香に、二人は慌てて相手の服から手を離し、立ち上がりつつ弁解する。

「清香！　そんな誤解を招く様な発言は！」
「清香さん！　コソコソなんてしてないから！」
「そうよね。隣近所の迷惑も顧みず、マンションの通路で殴り合い

の兄弟喧嘩をする位ですものね。コソコソなんかしてないわよね？」
　周囲を見渡しつつ薄笑いを浮かべて皮肉を口にした清香に、清人が居心地悪そうに問いかけた。
「……清香、お前どこから聞いてた？」
「『完全に赤の他人だと思ってるなら』の辺りからかしら？」
「「……」」
　途端に黙り込んだ男二人を睥睨しつつ、清香がその場を仕切り始めた。

「さあ、取り敢えず中に入るわよ。お兄ちゃん、ま　さ　か　あれだけ過激なスキンシップをしていた聡さんを、中に入れないなんて言わないわよね？」
「清香、それは」
「聡さんもさっさと入って。ま　さ　か　私の誘いを袖にして、この場からトンズラしようなんて考えてないわよね？」
「あの、清香さん」
　一応抵抗しようとした男達の言葉に、清香は耳を傾けずに言い付ける。

「寒いのよ。さっさと入る！　お兄ちゃん、アールグレイ！　聡さんは黙って座る！」
「「……はい」」
　神妙に頷いた二人を家の中に押し込んだ清香は、廊下の怒声を聞き付けて何事かと顔を覗かせていた近所の者達に「どうもお騒がせしました～」と愛想を振りまいてから家の中に入った。しかし玄関に入った途端不機嫌そうな顔付きになり、玄関のポールスタンドにコートを掛けて真っすぐリビングへと向かう。
　その間キッチンで清人が紅茶を淹れ始めた為、聡はソファーで所在無げにしていたが、リビングに入ってきた清香を見て、思わず腰を浮かしかけながら口を開いた。

「……清香さん、さっきのあれは、言葉のあやと言うか何と言うか」
「五月蝿い」
「……」
目を細めて睨み付けてきた清香に弁解の言葉をぶち切られ、聡は神妙に押し黙った。そこでトレーで一人分のカップを運んできた清人が、僅かに顔を引き攣らせながら声をかける。
「清香、アールグレイを淹れ」
「座って」
「……ああ」
ありがとうもなにも言わない事に加えての清香の命令口調に、清人と聡の肝が冷える。
そして清香の向かい側に清人が座ると、目の前のローテーブルに置かれたティーカップをゆっくりと取り上げた清香は、一口中身を味わってから徐に言い出した。

「そうね……、何から話そうかしら？　……やっぱり私がどうしてこんなに早く帰って来たのか聞きたいでしょう？　聞きたくない？　……そんな事、言わないわよね？」
「できれば……」
「聞かせて欲しいです……」
疑問形ではあるが全く笑っていない目を見れば、強制である事は一目瞭然であり、男二人は素直に頷いてみせた。すると清香は険しい目つきのまま、クスクスと笑いだす。
「それがねぇ、聞いてびっくりの話なのよ？　……まあ、ひょっとしたら二人とも知ってる話かもしれないけど」
「「……」」
最後はドスの効いた声で皮肉をぶつけて来た清香に、男二人は最悪の予想を頭の中に浮かべたが、それから清香が順序立てて語った内容がその予想通りの内容だった為、二人は内心で盛大に呻いた。

（何てタイミングの悪い……。しかも総一郎さん、あなたって人は年を取っても学習能力はつかなかったんですか……）

（最悪だ……。ブラコンの清香さんに兄さんの悪口は禁句以外の何物でもないのに。それでなし崩しにバレるなんて……）

本気で頭を抱えたくなった二人に、十分程かけて紅茶を飲み干しながら柏木邸でのあらましを一通り語り終えた清香が、不気味な微笑みを浮かべつつ声をかける。

「……それでね？　聡さんに昨日諭されたお陰で、理性をぶっ飛ばしてお祖父さん達をその場で半殺しにしたりせずに帰って来れたの。聡さんのおかげよ？」

「い、いや、その……」

「お兄ちゃんは私がお祖父さん達の悪態を吐く度に、そんな風に悪し様に言うのは止めろと言ってたでしょ？　平手打ちで済ませてあげたのは良くやったって、誉めてくれないの？」

「あ、あのな、清香……」

冷や汗を流しつつ何とか事態を穏便に済ませようと試みた二人だったが、ここで室内に清香の怒声が響き渡った。

「……なんて事、本気で言うと思ってんのかーーーーっ！？」

「うわっ！？」

「ちょっと待てっ！」

叫びながら清香は聡にティーカップを投げつけ、清人にソーサーを投げつけてから、両手でローテーブルを盛大に叩きつつ絶叫した。

「ふざけんじゃないわよ！？　皆で私一人除け者にして陰でコソコソコソソ！」

「清香！　これには色々と訳が！」

「清香さん！　決して好き好んで隠していた訳では！」

「さあ、お兄ちゃん、今すぐさっき廊下で言ってた事、洗いざらい話して貰うからね！　もしこの期に及んで嘘を吐こうものなら、分かった時点で綺麗さっぱり兄妹の縁を切るわよ？　勿論分かってるわよねっ！？」

「清香……」

憔悴した顔で清人が呻いたが、再度拳でテーブルを叩いた清香は、情け容赦なく押し殺した声で凄んだ。

「さっさと吐け」

「……はい」

（清香さんっ……、人格が崩壊してる。兄さんまでまるで別人……）

常には見られない憤怒の形相の清香と項垂れた清人を見て、色々諦めた聡は片手で顔を覆った。

それから二十分程かけて清人は粗方の説明を終えた。

途中で聡の反論や突っ込みが入り二人で論争になりかけた事が何度かあったものの、無言の清香の一睨みですぐその場は収まる。そして全てを聞き終えた清香が真顔で腕を組みながら、些かわざとらしくしみじみと言い出した。

「……へえぇ、なるほどねぇ～。よぉぉ～っく分かったわぁ～。お兄ちゃんと聡さんは、どちらも由紀子さんが母親の異父兄弟ってわけかぁ～。どことなく似てるとは思ってたんだよねぇ～。懇切丁寧な説明をどうもありがとぅ～」

（清香、言い方がもの凄く嫌味っぽいぞ……）

（は、針のムシロだっ……）

チクチクと棘が刺さる様な物言いに、男二人は身の置き所が無い居心地悪さを味わう。そんな中清香が聡にチラリと視線を向け、呆れた口調で言いだした。

「それで？　聡さんは由紀子さんの為に、面倒くさい義理の妹の私

に近付いて、お兄ちゃんに渡りを付ける為、情報収集の一環で私と付き合うふりをする事にしたんだ～。孝行息子の鏡だよねぇ～」

「清香さん、それは誤解だから！　第一、俺達の話をちゃんと最初から聞いてくれてたら」

しかし清香は聡の訴えになど耳を貸さず、今度は皮肉っぽい視線を清人に向けた。

「それで？　お兄ちゃんはそこら辺の事情を私に隠したまま、陰険かつ姑息な手を使って聡さんの仕事を散々邪魔した挙げ句、大病したばかりの由紀子さんがそのまま死んだら良かったとかの暴言を吐いたわけだ～。まあ……、気持ちとしては分かる気もするけど、人として実際に口に出すのはどうなんだろうなぁ～」

「あの、清香？　確かにそれは俺も言い過ぎたかと」

そしてボソボソと弁解しようとした清人の台詞を、清香の金切り声が遮る。

「本当にいい加減にして！！」

そう叫びながら清香はソファーから勢いよく立ち上がり、涙目になって二人に怒声を浴びせた。

「私の周りって、揃いも揃ってとんでもない嘘吐きばっかり！　二人とも最低よ、大っ嫌い！！」

言うだけ言ってリビングから駆け出して行った清香を、聡が一瞬遅れて追いかける。

「清香さん！」

しかし聡の目の前で恐らく清香の自室であろう部屋のドアが閉まり、ご丁寧に中から施錠される音が聞こえた。

「清香さん？　お願いだからここを開けて話を」

「五月蝿い！！　とっとと出てけっ！」

狼狽しつつもドアを叩きながら呼びかけた聡だったが、清香の叫びと共にドガシャッ……と固くてそれなりに重量のある物が派手に

投げつけられた音と衝撃がドア越しに伝わり、聡は現時点での説得を諦め、取り敢えず清香が落ち着くまで待たせて貰おうとリビングへと戻った。しかしそこで予想外の光景を目にした聡は、思わずたじろいだ。

両肘を膝に乗せ、俯いて文字通り頭を抱えて微動だにしない清人に、聡が恐る恐る近付く。その途中でインターフォンの呼び出し音が鳴り響いたが清人が相変わらず無反応な為、聡は慎重に声をかけてみた。

「兄さん、呼び出し音がしてますが」

しかしそれでも反応が皆無の為、心配になった聡が屈みこんで顔を覗き込もうとした。

「兄さん？　どうしたんですか。どこか具合でも」

「清香に、大嫌いと言われた……」

そのままの姿勢でぼそっと呟かれた内容に、聡が眉を寄せる。

「はあ？　そんなの兄弟喧嘩か何かで、お約束の様に口にする言葉じゃ無いですか？」

「清香と喧嘩なんかした事は無い」

「あのですね……」

本気で頭痛と眩暈を覚えた聡だったが、しつこく鳴り続けている呼び出し音を放置もできず、舌打ちしながら聡がインターフォンに歩み寄った。

「全く、こんな時に誰……、え？　柏木さん！？」

モニターを覗き込んだ聡は、そこに映し出されている人物を見て仰天し、慌てて受話器を取り上げた。

「お待たせしました。今開けます」

『遅い！　……って、その声、まさか聡君？』

マイクを通して下のエントランスから戸惑いの声を伝えて来た真澄に、聡が促す。

「話は後です。取り敢えず上がって下さい」
『分かったわ。……ほら、行くわよ』
そして浩一を引き連れて上がってきた真澄を玄関で出迎えた聡は、予想に違わず玄関で問い質される事となった。

「一体どういう事？　あなたがここに居るなんて。第一、清香ちゃんは？　ちゃんと帰宅しているわよね？」
「はい、彼女から柏木邸でのあらましは聞きました」
「それで君はどうしてここに？」
不審げな浩一の問い掛けに、聡が思わず顔を引き攣らせる。
「……実は、兄と色々突っ込んだ話をしている所に清香さんが帰宅しまして、俺達の関係がバレて少し前に洗いざらい吐かされました。その結果清香さんは自室に閉じ籠もって、返事もしてくれません」
半ば自棄になって聡が簡潔に語った内容に、真澄と浩一が深々と溜息を吐き出す。
「……何て間の悪い」
「二人揃って大馬鹿野郎ね」
そんな事を言い合いながらリビングに足を踏み入れた真澄は、ソファーで彫像と化している清人を指差しつつ聡に小声で尋ねた。

「それで？　あの燃え尽きてるのは何なの？」
「何か……、清香さんに『最低』とか『大嫌い』とか罵倒されたのが相当ショックだったみたいで……」
清人からも真澄からも視線を外しつつ聡が状況を説明すると、柏木姉弟が清人に憐れむ視線を向ける。
「……絶対、清香ちゃんに言われた事ないでしょうしね」
「ある程度予想はしていたが、これほどとは……。ちょっと清香ちゃんの様子を見て来るから」
そう言って浩一は清香の部屋に向かい、真澄は一人で暗い空気を漂わせている清人に歩み寄った。

「お邪魔するわよ」
その声に清人はゆっくりと顔を上げ、向かい側のソファーに座った真澄に、僅かに殺気の籠った視線を向ける。
「真澄さん？　清香を泣かせましたね？」
しかしその程度の恫喝は予想の範囲内だった為、真澄は平然と問い返した。
「それについては全面的に謝るけど、今それについて四の五の言ってる場合じゃ無いんじゃない？　下手したら清香ちゃん、人間不信になりそうよ？」
「……どうすれば良いと言うんですか」
すぐに殺気を消して再び項垂れた清人に、真澄は舌打ちしたい気持ちを懸命に堪える。そこで慎重に聡が清人の横に腰を下ろすと、清香の様子を見に行っていた浩一がリビングに入ってきた。

「駄目だね、内側から鍵がかかってるし、呼び掛けても応えない」
「取り敢えず引っ張り出すしか無いわね」
溜息混じりに浩一が真澄の隣に腰を下ろすと、真澄がきっぱりと言い切った。それに清人が怪訝な視線を向ける。
「どうやってですか？」
「私に任せてくれない？　古事記や日本書紀の時代から、扉の向こうに隠れた大御神を誘い出すのは、女神の役目と決まっているでしょう？」
「「……はあ？」」
清人と聡は怪訝な顔を向けただけだったが、浩一はきょとんとしながら隣に座る姉に疑問を呈した。

「姉さん？　それは天照大神が天の岩戸に隠れた話の事ですか？　姉さんが清香ちゃんの部屋のドアの前で裸踊りとかしても、別に楽しくも何ともないと思いますが」

浩一がそう言った瞬間真澄が勢い良く立ち上がり、両手で浩一のネクタイを掴んだと思うと、首の結び目をギリギリと力任せに締め上げた。

「浩一、あんたこの状況下でそんなくだらない冗談をいえる程度には、図太い神経してたのね。お姉さん全っ然、知らなかったわ」

「すっ、すみません！　失言でしたっ！　取り消しますから、その手をっ！」

必死に弁明を繰り出し、窒息の危機から脱してゼイゼイと息を整えている浩一を、清人と聡は生温かい目で見やった。そんな三人を見下ろしてから真澄が憤然として歩き出す。

「全く……、どいつもこいつも使えない男どもねっ！」

盛大に吐き捨てつつリビングのドアを開けて廊下を進み、清香の部屋のドアの前に立った真澄は、まずは普通に呼びかけてみた。

「清香ちゃん？　真澄だけど、ちょっと話があるから開けて貰えない？」

しかし室内は静まり返っており、相変わらず無反応な為、真澄は先程よりはやや大きめの声で再度呼びかけた。

「さ～や～か～ちゃ～ん。五つ数えるうちに、ここを開けてくれないなら、清香ちゃんがクローゼットの奥に隠してある箱の中身の事を、清人君に洗いざらい教えちゃうわね～？」

リビングのドアの所まで出て来て真澄の様子を窺っていた男達は、（何の事だ？）と首を捻ったが、そんな事はお構いなしに真澄がカウントを始めた。

「じゃあ数えるわよ～。ひとぉ～っつ、ふたぁ～っつ、みいぃ～っつ、よおぉ～」

「真澄さんっ！　何で、どうして“あれ”の事知ってるのっ！？」

「開けてくれてありがとう。お邪魔するわね」

ガチャガチャと慌ててロックを外す音が聞こえたと思ったら、

狼狽しまくった様子の清香がドアを開けて顔を出した。その体を押し戻しつつ、真澄が自分の体を室内に滑り込ませ、素早くドアを閉めて再び施錠する。

「清香！」

「清香さん！」

「お黙り！　大人しくリビングから一歩も出ないで待ってなさい！」

慌ててドアに駆け寄ったものの再び閉め出され、清人と聡は必死の形相で声を張り上げたが、室内から真澄の怒声が投げつけられ、顔色を無くしてリビングへと戻る。その気配をドア越しに窺っていた真澄の背後から、清香の声がかけられた。

「あのっ！　真澄さんっ！　どうして“あれ”の事っ！！」

そこで驚きのあまり口をパクパクさせている清香に向き直った真澄は、思わず失笑しながら宥めた。

「ああ、あれ？　ちょっとカマかけてみただけなんだけど。年頃の女の子には家族に見られたくなくて、机の引き出しとか本棚の奥とかに隠してある物があるのはお約束じゃない？　私の勘働きもなかなかのものよね」

「……引っかけられたんですか」

それを聞いてがっくり項垂れた清香に、苦笑しながら真澄が促す。

「せっかくだからその隠している物、見せて貰えない？」

「だだだ駄目です、たとえ真澄さんでも絶対に駄目ぇぇっ！！」

再び狼狽しまくって拒否する清香に、真澄は真顔になって口を開いた。

「それは残念だけどしょうがないわね。……その代わりにちょっとお話ししましょうか。清香ちゃんが帰宅してからあった事を聞いたけど……、大変だったわね」

それを聞いた清香は、情けない顔をしながらベッドにポスンと座

りつつ項垂れた。
「大変って……、そんな一言で片付けないで下さい。もう頭の中ぐしゃぐしゃで、何も考えられないです。どうしてくれるんですか？　明日から金曜まで、今週は期末試験期間なんですよ？」
「……それは困ったわね」
その切実な訴えに、真澄も思わず眉を顰めつつ清香の横に腰を下ろす。
「駄目だわ、まともに書ける自信なんて全然無い。このままだと単位を落としちゃう……」
そんな事を呻いている清香を眺めてから、真澄は唐突に質問を繰り出した。

「清香ちゃん、就寝予定時刻は？」
「えっと、試験期間中は早寝早起きを鉄則にしてるので、十時には」
戸惑いつつも律義に答えた清香に、真澄はにっこり笑って言い出した。
「まだ四時過ぎだし、九時には寝る支度を始めないといけないとしても、まだ五時間近くあるわ。ダラダラ寝てればあっと言う間に過ぎる時間だけど、それを有効に使えばかなりの事ができるわよ？」
「え、えぇ？」
「少しでもすっきりして、試験に集中したいでしょう？」
「それはそうだけど……」
一体何を言い出すのかと困惑した清香だったが、真澄の意見には同意を示した。そこを真澄が畳み掛ける。

「それなら清香ちゃんが一連の話を聞いた上で、これから何をするべきなのかを考えて、その優先順位を決めるの。そして残り時間で、できるだけそれを片づけるのよ」
「する事の優先順位、ですか……」
促された清香は床を眺めつつ、真剣な顔で悩み始めた。そしてそ

の横で真澄が黙ったまま反応を待つこと十五分程で、清香が結論を出す。

「……真澄さん、やっぱり私はお兄ちゃんが最優先です」

きっぱりと言い切った清香の判断に、真澄は思わず微笑んでしまった。

「でしょうね。次は？」

「老人優先です」

「道義的にもそれが妥当ね」

あまりにも清香らし過ぎる答えに、真澄は噴き出すのを必死に堪えた。そして真顔の清香を促してベッドから立ち上がる。

「じゃあ今日これからの方針が纏まった所で、早速出掛けるわよ？足は私が提供するわ」

「お願いします」

余計な事は言わなくても清香が何をするつもりなのか十分理解できていた真澄は、そのまま清香を引き連れて部屋を出た。そして清香には玄関でコートを着ている様に言いつけ、自身はリビングに向かう。

そしてドアが開いた気配を察知してソファーから立ち上がっていた男三人に、真澄は怒鳴った。

「ちょっと清香ちゃんと出かけるけど、後を追いかけてくるんじゃないわよ！？」

「は？　一体どこに」

「ちょっと待って下さい！」

「姉さん？」

流石に狼狽と困惑の顔を向けて来た面々を、真澄が一喝する。

「清人君、浩一！　私が良いと言うまで、聡君の手を離すんじゃないわよ？　そいつをこの家から一歩でも出したら承知しませんから

ね！！」
「え？　真澄さん、何なんですかそれはっ！　……ちょっと！　何するんですか、兄さん！　浩一さんまで！」
真澄が指示した途端二人に拘束されたらしい聡の叫びを背中に受けながら、真澄は玄関へと急ぎ、既に身支度を終えていた清香に小さく頷いた。

「下に家の車を待たせてあるの。先方の住所は分かっている？」
「はい、大丈夫です」
「じゃあ急ぎましょう」
そう言葉を交わしてから、真澄は掛けていたコート引っ掴み、清香と共に玄関から飛び出して行ったのだった。

第３３話　清香、人生最長の一日（３）（後書き）

まだまだ続きます。（汗）

第３４話　清香、人生最長の一日（４）

「奥様、佐竹様がお車で門の所にいらしてますが、お通しして構いませんか？」

日曜の夕刻、リビングで寛いでいる時、唐突に家政婦からそんな声をかけられた由紀子は、怪訝な顔をしながらもすぐ指示を出した。

「え？　約束はしていないし、聡も居ないけど……。良いわ、お通しして」

「畏まりました」

そして由紀子と顔を見合わせてから立ち上がった昭が、窓際に移動して庭から門へと続く道を眺め、電動式の門がゆっくり開くと同時にスルスルと邸内に入ってきた車を認めて、呆れた様に呟く。

「何だ？　タクシーじゃなくて、あれはセンチュリーリムジン？　まさか清人君が送って来たわけじゃあるまいな」

「さあ……、私にも何がなんだか。でも追い返す訳にもいきませんし」

「それはそうだが。……ああ、やはり清香さん一人だな」

門の入り口付近で停車した車から清香が地面に降り立ち、屋敷の玄関までの何十メートルかの道のりをサクサク歩き始めたのを見て、昭は軽く安堵した。そして彼女を出迎える為に、由紀子を促して玄関へと移動する。

二人が玄関に来ると、既に移動していた家政婦が玄関のベルが鳴ると同時に静かにドアを開け、清香を招き入れた。そして姿を現した清香が、軽く頭を下げる。

「おじさま、由紀子さん、突然すみません。お邪魔します」

「こんにちは、来てくれて嬉しいわ」

「今日はどうされました？　あの車はお兄さんのかな？」

昭が何の気なしに問いかけた言葉に、清香はちょっと言い難そうに言葉を濁した。
「……いえ、真澄さんのお家の車です」
「真澄さん……、ひょっとして柏木家の？」
そこで怪訝な顔を見せた昭から由紀子に視線を移しながら、清香は真顔で来訪の目的を告げる。

「はい。それで、今日は由紀子さんに折り入ってお話があるんです」
「私に？」
「ええ。聡さんは今私の家で捕まってますから、邪魔が入る心配はありませんので」
清香の口調と顔付きから、話の内容とやらがどう考えても穏やかな物では無い事に薄々気付いた二人だったが、拒否する事はせずに清香を促した。

「取り敢えず上がって下さい」
「失礼します」
そうして三人揃ってリビングに移動し、ソファーに落ち着いてから、昭が清香に断りを入れた。
「清香さん。私が居ても支障はありませんか？　なるべく話の邪魔はしませんから」
「構いません」
「ありがとう」
「それで由紀子さんにお話と言うのは……、お兄ちゃんの事です。二人は親子ですよね？」
「……っ！？」
「清香さん？　どうしてそれを」
いきなりの断定口調での問い掛けに、由紀子は息を飲んで固まり、昭が険しい顔になって問い返す。それに清香は真顔で返した。

「今日帰宅したらお兄ちゃんと聡さんが、男二人で廊下で取っ組み合ってる所に遭遇しまして。なかなか刺激的な内容を怒鳴りあっていましたので、洗いざらい吐かせたんです」
「あの馬鹿が……」
それを聞いた昭は盛大に舌打ちして何やら口の中で息子に対する悪態を吐き、清香は由紀子に顔を向けて説明した。

「それで、お兄ちゃんの話だけを聞いただけでは、偏った見方しか出来ないかと思いまして。一応由紀子さんの言い分も聞いておこうと、押し掛けた訳なんです」
「言い分なんて……、全面的に清人が言った事で間違いないわ」
力無く肯定した由紀子だったが、清香はそれで納得しなかった。
「それでも！　私はあなたの口から、あなたの考えをちゃんと聞きたいんです！」
僅かに身を乗り出しながらの、その強い口調に驚いた様に由紀子が目を見張り、昭が珍しい物を見る様な眼で眺める。
そしてリビングに静寂が満ちたが、少ししてから昭が由紀子を静かに促した。

「由紀子」
「……分かりました。お話しします」
それから由紀子は清人を置いて家を出るまでのいきさつと、それ以後の小笠原と清人との関わりについて述べ、由紀子が関知していなかった事で自分が知りえていた内容を昭が補足説明する形で、二十分程かけて一通りの説明を終えた。
話の途中で清香は何回か僅かに眉を顰めたものの、取り敢えず無言を貫いて話の腰を折ったりする様な真似はせず、話が終わると同時に溜息を一つだけ吐き出した。そして徐に口を開く。

「ありがとうございます。良く分かりました……。お兄ちゃんの話

は大筋で間違い無い様です。……由紀子さん、一つ言わせて貰って良いですか？」

「ええ」

何を言われるか大方の察しがついた由紀子は固い顔で頷き、清香は予想通りの内容を口にした。

「お断りしておきますが、私にとってはお兄ちゃんが最優先です。それを踏まえた上で聞いて貰いたいんですが……、由紀子さんは指を噛みちぎられても、お兄ちゃんを手放すべきじゃ無かったと思います。……三十年近く経過してますし、もの凄く今更ですが」

「ええ、分かっているわ。清香さんは間違っていない。悪いのは全部私よ」

俯いて涙ぐんだ由紀子を見やり、清香は向かい側から探る様な視線を向けた。

「……後悔、してますか？」

「ええ」

「そう思ってくれているなら、今からでも遅くありません。今から家に来てお兄ちゃんに指を噛みちぎられて下さい」

「え？」

「清香さん！？」

物騒な事を宣言しながら清香が立ち上がりつつテーブル越しに由紀子の手を取った為、由紀子は戸惑い、昭は顔色を変えた。しかし清香の表情は全く揺るがなかった。

「さっきも言った様に、私はお兄ちゃん最優先なんです。お兄ちゃんの気の済む様にしてあげたいんです」

「清香さん、それは！」

「流石に無傷で帰すと確約できませんが、いよいよ駄目となったら私が割り込んで何としてでも止めます。伊達に十何年も道場通いをしてません」

「いや、しかし！」
流石に焦って思いとどまらせようとした昭だが、清香は由紀子の顔を覗き込みながら静かに訴えた。

「由紀子さん、もう三十年近く後悔してれば十分じゃ無いんですか？　今行動しないと、死ぬまで一生後悔し続ける事になりますよ？」
「清香さん……」
「私のお母さんは意地を張っている間にあっさり死んじゃって、とうとう実家の人達と和解できないままになっちゃったんです。でも由紀子さんとお兄ちゃんは、今どちらも生きてるんです。決裂するならそれでも良し、とにかく一歩踏み出して下さい。お願いします」
「……清香さん、でも」
真摯に訴える清香に対し由紀子が泣きそうな顔を見せたが、ここで穏やかな声が割って入った。

「行ってきなさい」
「あなた？」
「言いたい事があるんだろう？」
先程までは動揺していたものの、清香の話を聞いて腹を据えたらしい昭は、由紀子から清香に視線を移して声をかけた。
「清香さん、部外者の私は同行しない方が良さそうだ。由紀子を頼めるかな？」
その問いに、清香が僅かに苦笑して頷く。

「勿論です。信用して下さい」
「ああ、宜しく頼むよ。……由紀子？」
「……はい、行ってきます」
昭に促されて由紀子はゆっくりと立ち上がり、ドアへと向かった。
「じゃあ車を待たせているので、それに乗って行きますね。由紀子さん、急いで支度をして下さい」

「分かったわ」

そうして身支度を整え、昭に玄関で見送られた二人は、待たせてあったリムジンの後部座席に乗り込み、運転席に背を向ける形で座っていた真澄に声をかけた。

「真澄さん、お待たせしました」

「思ったよりかからなかったわよ？……初めまして、小笠原由紀子さんですね？　柏木真澄と申します」

向かい合う形で腰かけた由紀子に、真澄は軽く頭を下げた。それに対して由紀子が恐縮気味に頭を下げる。

「こちらこそ。これは柏木さんの車だそうですね。お世話になります」

「いえ、大した事ではありませんので」

二人がそんなやり取りをしている間に、清香は携帯を取り出してどこかへ電話をかけ始めた。

「あ、もしもし、お兄ちゃん？　そろそろ聡さんを解放して良いわ。……え？　今？　聡さんのお家に居るの。聡さんにそう伝えてね、それじゃあ」

そこで問答無用で通話を終わらせて再び電源を落とした清香の斜め前で、真澄が傍らの車内備え付けの受話器を取り上げ、運転席に指示を出す。

「出して頂戴」

そうして静かな音と共にゆっくりと車が発進し、清香は真澄と顔を見合わせて小さく笑い合った。

「悪い子ね、清香ちゃん。聡君、絶対泡を食って家に帰って来るわよ？」

「敷地内にいる間に電話したんですから、その時点では聡さんの家に居る事に間違いは無いです」

「確かに、すれ違っても私達の責任じゃあ無いわよね」
「そうですよ」
そんな事を言い合ってクスクスと楽しそうに笑っている真澄と清香に釣られる様に、強張った由紀子の顔も僅かに綻んだのだった。

「……聡君、真っ青になって帰って行ったな」
男二人取り残された室内でボソッと浩一が呟くと、清人が忌々しげに言い返した。
「出掛けるって、まさかあいつの家に行ってるなんて思わないだろう。全く……、清香の奴、何やってるんだ。第一真澄さんが付いていながら、鉄砲玉にも程がある」
「ある意味、姉さんが一緒だから余計に心配なんだが……」
「……益々不安を煽る様な事を言うな、浩一」
「悪い」
そんなやり取りをして更に重苦しい沈黙が漂った佐竹家のリビングだったが、少しして何やら玄関の方から物音を察知した二人は、ほっとした様にソファーから腰を浮かせた。

「何か物音がしないか？」
「漸く帰って来たか……」
清人が溜息を吐き出した所で、ドアの向こうから清香が顔を出して挨拶してきた。
「ただいま」
「一体何をしてたんだ、お前は」
思わず説教しかけた清人の台詞を遮り、清香が体をずらして後ろの人物をリビング内へと誘導する。
「お客さんを連れて来たの。……由紀子さん、どうぞ入って下さい」
「は？」
「……っ！」

予想外の人物の名前を耳にして目を丸くした浩一と絶句した清人の前に、ゆっくりと由紀子が現れた。そして微動だにしない二人に向かって、軽く頭を下げる。

「……お邪魔します」

「じゃあ、由紀子さんはこっちに座って下さい。ほら、お兄ちゃんはさっさとそのまま座る！」

「……ああ」

「浩一、あんたは私と一緒に下で待機よ。ほらぐずぐずしない！」

「いや、あの、ちょっと……」

清香は由紀子の手を引っ張り、真澄が浩一の手を引っ張って移動を開始してその場を仕切り、男二人は全く抵抗できなかった。

「じゃあまた後でね、清香ちゃん」

「はい、連絡宜しくお願いします」

そうして真澄と浩一が姿を消し、清人と由紀子が対面する形でソファーに座り、清香が二人と直角になる位置で腕を組んで仁王立ちになったところで、清人に冷静に促す声をかける。

「さてと。当事者が揃った所で、お兄ちゃん、さっさと済ませてよ。時間が押してるんだから」

「……何だそれは？　全然意味が分からんぞ。何をさっさと済ませろと？」

怪訝な顔を向けた清人に、清香が呆れた様に素っ気なく言い放つ。

「だ～か～ら、さっき聡さんに向かって由紀子さんの事を悪し様に言ってた様に、本人に向かって悪口雑言をぶつけるなり、子供の頃にやった様に指を噛みちぎるなり、お通夜の時の様に殴り倒すなりしてすっきりしたらって言ってるのよ」

「清香……」

途端に眉を顰めて見上げて来る清人に、清香が淡々と続ける。

「この間聡さんに纏わり付かれて、いい加減ストレス溜めてるんでしょ？　それ位、本人に代償してもらったって良いじゃない。その為にわざわざ連れて来たのに」
「……」
意識的に由紀子に視線を合わせようとしないまま、清人は不機嫌そうに黙り込んだ。それを見た清香が茶化す様に言い出す。
「あれ？　どうして何もしないわけ？　嫌がるのを無理矢理引きずって来たのにな～」
「……ふざけるのもいい加減にしろ、清香。本気で怒るぞ？」
（う、うわ～、本気で怒ってるかなこれ。お兄ちゃんの話を聞いた時、何か口で言うほど怒ったり憎んでる様な気がしなかったから、一か八か由紀子さんを連れて来てみたけど……、単なる私の見当違い？　本気でお兄ちゃんが暴れたら、止められるかな？）
怒りを孕んだ視線で清人が清香を睨みつけ、その視線を真っ向から受け止めた清香は何とか笑顔を保ちつつ、内心で滝の様に冷や汗を流した。その時、その場の重くなりつつあった空気を切り裂く様に、由紀子の叫びが響く。
「ごめんなさい！」
それを耳にして、思わず清人と清香が二人揃って由紀子の方に顔を向けた。
「全部私が悪いの。本当はもっと早く清吾さんとあなたの前に出て、2人の顔を正面から見てきちんと謝るべきだったの。例え許して貰えなかったとしても」
「今更？」
そこで冷え冷えとした清人の声が発せられたが、由紀子は話を続ける事を躊躇いはしなかった。
「あなたが私のした事を、きちんと認識してるのは分かってたの。

だからどうせ許して貰えないだろうとか、戻っても同じ事を繰り返しそうだからとか、色々理屈を付けて目を逸らしてその事を考えない様にしてた。でも……、今ならはっきりと理解できる。単に私は自分が傷つきたく無かっただけだって。そしてその事で他人がどんな風に傷つくのか、考えもしない傲慢な人間だったって」

「確かにそうだな」

冷静に認める発言をした清人に、由紀子が座ったまま膝に頭が付く位に頭を下げる。

「だから、あなたの気が済むなら好きなだけ罵倒してくれて構わないし、殴り倒されても構わないわ。そんな事であなた達に対するお詫びになるかは分からないけど、自分自身に区切りをつけたいから」

「……へえ、それは殊勝な心掛けですね」

どこか皮肉っぽく清人が独り言の様に呟くと、その場に気まずい沈黙が漂った。そして暫くしてから、足元を見下ろしていた清人がボソッと言い出す。

「……父さんが再婚した香澄さんは、明るくて気立ての良い人で、何事にも前向きで挫けない人だった」

「……そう」

（ちょっとお兄ちゃん！　何もここでいきなり母さんを誉める話をしなくても良いでしょう？　由紀子さんの立場が無いじゃない！）

何と返したら良いか分からず、のろのろと頭を上げて小さく相槌を打った由紀子の心境を思って清香は心の中で憤慨したが、続く話で頭を抱えたくなった。

「結婚してすぐの頃、父さんからあなたの事を聞いたらしくて、気を遣って消息を教えてくれた。『清人君のお母さんを何かのパーティーで見かけた事があるわ。再婚して清人君の弟も居るそうよ』って」

「……香澄さんには、お目にかかった事が無いと思ってたわ」
（お母さん……、それ、気を遣ってっていうよりは、寧ろ無神経だと思う……）
ある意味天然だった母親の所業に、密かに呻く清香。

「それで……、香澄さんに『香澄さんの事をお母さんって呼びますか？』と聞いたら、逆に聞き返された。『清人君はお母さんの事を何て呼んでるの？』って」
「……え？」
（あの、お兄ちゃん？　さっきから話があっちこっち飛んでるんだけど。どう繋がってるわけ？）
由紀子同様戸惑った清香を完全に無視して、清人の話は続いた。

「当然『母親なんて居ないから、何とも呼べないな』と言ったら無茶苦茶怒られた」
「どうして？」
「『私、清人君のお母さんらしい事、何一つ出来ないのに、清人君を産んだ人を差し置いて、私がお母さんって呼ばれるわけにはいかないでしょう！』というのが理由だった。結婚当初香澄さんは家事が壊滅的だったから、はっきり言って俺が面倒見てた。だから香澄さんがそう考える気持ちは、分からないでもない」
（お母さん……、どれだけ酷かったの……）
しみじみとそう語った清人を見て驚を隠せない様子の由紀子を見ながら、清香は自分の母親の当時の生活能力の無さに、思わず床に蹲りたくなるのを必死に堪えた。そんな清香にチラリと顔を向けてから、清人が由紀子に向き直って話を続ける。

「そうしたら『じゃあ清人君がお母さんをお母さんって呼ぶなら、私の事もお母さんって呼んでもおかしく無いわよね。いきなり電話じゃ流石にハードルが高いだろうから、手紙を書いて』って脅迫さ

れた」
「……あの」
「ちょっと待ってお兄ちゃん！　今の話、全っ然意味分かんないんだけど！？」
　本気で困惑した様子を見せた由紀子だったが、それ以上に納得いかない顔付きで清香が清人に大声で迫った。すると清人が盛大に溜息を吐いてから、補足説明をする。

「だから……、全く交流が無い世話もしていない人物を俺が母親と認識するなら、全然母親らしくない自分でも母親と呼ばれる事に抵抗感が無くなるからとか何とか……」
「何、それ？　益々意味不明なんだけど」
「香澄さんは時々独特な物の考え方をする上に、一度言い出したら聞かなくて。それから暫く毎日目の前に葉書を出されて『お母さん元気ですか？　僕も元気で頑張ってますって書こうね？』って迫られた」
（お母さん……、無理強いして、益々お兄ちゃんが意固地になったんじゃないの？）
　そんな事を思って顔を引き攣らせていた清香の耳に、小さな清人の呟きが入ってくる。

「しかもよりにもよってあんなのじゃ……」
「あんなの、って何？」
　思わず突っ込んだ清香に、それで我に返ったらしい清人は慌てて弁解した。
「あ、いや、何でも無いから」
「お兄ちゃん？　隠し事は洗いざらい吐けって言ったよね？」
　そこで当然誤魔化される筈も無く、清香が上から睨み付ける。その視線を一身に浴びた清人は観念して、小声で呟いた。

「……バラのポストカードだったんだ」
「はい？」
意味不明な呟きに清香が眉を顰め、清人が益々言い難そうに話を続ける。
「香澄さんは結婚してからは極力無駄使いはしない様にしてたが、無類の可愛い物好きだったからカードとかシールの類でささやかな贅沢をしてな。自分のコレクションの中からとっておきの一枚を俺に渡してたんだ」
それを聞いた清香はそこはかとなく嫌な予感を覚えながら、次の質問を繰り出した。

「……具体的にはどんな？」
「全面ピンクのバラが咲き乱れてて…、妖精がチラホラ描かれてるかなりメルヘンチックな……。あ、いや、別に、香澄さんに悪気があった訳じゃ無いぞ？　『これを送ったらお母さんだって絶対喜んでくれる筈だから！』って、自信満々に押し付けてたんだから」
「「……」」
慌てて弁解しつつ香澄を庇う清人を見てから、清香と由紀子は示し合わせた様に無言のまま顔を見合わせた。それから清香が恐る恐る確認を入れる。

「ねえ、お兄ちゃん……。因みに、それが普通の官製葉書だったら、素直に書いてた？」
「さあ……、それは……、どうだろうな」
清香からも由紀子からも微妙に視線を外しながら答えた清人に、清香は頭痛がしてきた。
（……あの反応じゃ、ひょっとしたら書いてたかも。やっぱり十歳男子には電話よりハードル高かったんじゃない？　お母さん……）
そこで項垂れた清香は、ふと引っかかりを覚えて清人に質問した。

「ねえ、お兄ちゃん。お母さんがお兄ちゃんに由紀子さんと連絡を取らせようとしてたなら、どうして由紀子さんは亡くなった事になってたの？　私が聞いた時お兄ちゃんがそう言ってたのを、お母さん否定しなかったと思うんだけど」

記憶を引っ張り上げつつ不思議に思った清香はそう尋ねたが、清人はそれに言い難そうに答える。

「それは……、俺が香澄さんを脅したから……」

「脅した？　どうして！？」

「清香が喋れるようになるのを、香澄さんは狙ってたんだ。自分と一緒に清香も『おてがみかこー』って言えば、絶対俺が落ちると思って」

清人が真顔でそう言った途端、清香は堪らず小さく噴き出した。

「ちょっとお兄ちゃん！　それは幾ら何でも考え過ぎ。お母さんが私を使ってまで小細工する筈」

「香澄さんは、お前の名前を教え込むより先に、さっき言った言葉を当時一歳のお前に必死に教え込もうとしてたんだ」

「え？」

「だから先手を打って、『清香の前ではあの人は亡くなった事にして下さい。清香に手紙を書く様に言わせたりしたら、今後家事育児一切手伝いませんから』と宣言した」

開き直って経過を説明した清人に、清香が引き攣った顔をで念を押す。

「……それで、お母さん否定しなかったんだ」

「ああ。だから香澄さんは悪く無い」

もう何も言う気がしなくなった清香は黙り込み、由紀子が唖然として見守っていたのを見て、清人が話を元に戻した。

「香澄さんはお節介なんだ。自分は実家と絶縁状態の癖にそんな事

言うものだから……、つい『香澄さんが親兄弟と仲直りしたら、俺もあの人の事を母さんと呼ぶ事にします』と言って膠着状態になった。まあ、俺と十何歳しか年が違わなかったから、こんな大きな子供にお母さんと呼ばれるのは気の毒だと思った事もあるんだが」

「お兄ちゃん……」

自嘲気味に呟いた清人に思わず清香が声をかけると、清香の方を見ながら清人が話を続けた。

「そうこうしているうちに清香が産まれて、世話をしているうちに段々分かってきた」

「分かったって、何が？」

「何時間おきに泣き喚いて、ミルクだオムツだと手間がかかるだろう。香澄さんと一緒に当然俺も面倒見たが、俺の時は誰も居ないからな」

「……」

「香澄さんは天然で物怖じしない性格だったから、団地の中にもすぐ溶け込んで友達も沢山出来てた。もともとノイローゼになる様な性格の人じゃなかったし。でも俺がある程度大きくなってから周囲の人に聞いてみても、あなたはあそこに二年以上住んでたのに、どんな人間か知ってる人は殆ど居なかった。最初周りの人が、俺に気を遣っているのかと思ったんだが、もともと社交的な性格ではないんだろう？　家を出て行ったあと、暫く入院していた事も、清香さんが後で調べて教えてくれたし」

黙り込んで無反応な由紀子を眺めながら、清人は淡々と話していたが、そこでふと視線をずらして口調を変えて言い出した。

「……自分なりに色々考えて、高校の頃には意地を張るのが馬鹿らしくなってきて。自分で葉書を買って連絡だけは取ろうかと思っていた矢先、……クソジジイが恩着せがましく世迷い言を言ってきた」

（うわ、そのタイミングであの話だったんだ……）

あまりの間の悪さに思わず清香が天を仰ぎ、焦った様に由紀子が口を挟んだ。

「あのっ！　私はその話！」

「知らなかったんだろう？　それは知ってる」

「え？」

当惑した表情を見せた由紀子に、清人が苦々しい表情で告げた。

「耄碌ジジイが『あんな分別の無い馬鹿娘には何も出来んからな。儂が直々に動いたのを知ったら涙を流して感謝するぞ』と言ってたから」

「うわ……、何、その勘違いジジイ！」

流石に清香も怒りを露わにして思わず叫んだが、清人は見た目は冷静に話し続けた。

「暫くそれでムカついて、流石に香澄さんも葉書を書くのを強制しない様になってたんだが、卒業間近に社会人になる訳だし、いい加減大人になろうかと思って葉書を書こうと思ったら……」

そこで言葉を濁した清人を、清香が促してみる。

「思ったら？」

「……クソジジイが小笠原に入れとの勧誘ついでに、散々暴言吐きやがった」

（由紀子さんのお父さんだけど……、色んな意味で最低の人だわね）

憎々しげに吐き捨てた清人を見て、最早清香は弁護する気にもならなかった。

「それも袖にして、小笠原とは本格的に縁を切ったつもりになってたから、殊更葉書を書く気にもなれなくて……。そうこうしているうちに、香澄さんが父さんと一緒に交通事故で亡くなった」

「そうだったんだ……」

思わず呟いた清香に構わず、清人が淡々と話を続ける。

「お通夜の席で、ちゃんとお母さんって一度でも呼んであげれば良かったと、心底後悔してた。俺がいつまでもつまらない意地を張らずに、手紙の一枚でも書いておけば、香澄さんは笑って『じゃあ私の事もお母さんって呼んでね』って言ってた筈なんだ。そんな事を頭の中で考えてた時に、のこのこ亭主と一緒に顔を出したりするから……。つい、カッとなって夫婦揃って殴り倒した」

「あのっ……、私、本当に考え無しに顔を出して……」

（だからあれ、だったんだ……）

再び涙ぐんでしまった由紀子を見ながら、清香が肩を落としつつ溜息を吐き出したが、清人の話は続いた。

「それから……、初詣の時は、毎年一家揃って参拝してた思い出の場所で、一家揃って来てる所にばったり遭遇したものだから、ムカついてつい嫌味を言った」

「ごめんなさい、全然知らなかったから。来年からは行かない様にするわ……」

すっかり萎れて消え入りそうな声で謝罪する由紀子を見て、清人は僅かに眉を顰めてからわざとらしく言い出した。

「確か……、聡とか言ったよな。息子の名前」

「……え、ええ」

（だからお兄ちゃん、話題飛び過ぎ！　凡人の私にも分かる様に話を進めてよ！　第一、聡さんの名前なんて今更でしょ！？）

唖然としながら驚きの目を向けた清香と、戸惑って思わず顔を上げ、涙を何とか抑えながら見返して来た由紀子から顔を背けながら、清人は面白く無さそうに言葉を継いだ。

「最近、清香の周りをうろちょろして迷惑だ」

「あの……、聡には私からも良く言って聞かせるから」

「生意気だし、目上を目上と思ってないし、ふてぶてしい面構えで

顔を見る度ムカつくんだが……、良い根性をしてる」
「「え？」」
女二人が怪訝な視線を清人に向けたが、当人は二人と視線を合わさないまま冷静に話を続けた。
「まあ……、女を見る目はなかなかだし、それなりに頭も切れる様だし、見た目よりは気配りのできる奴の様だ。だから……、百歩譲って俺の弟と認めてやっても良い」
「清人？」
「お兄ちゃん？」
言わんとする事が分からず怪訝な顔をした二人には構わず、清人が自論を展開する。
「血が繋がって無くても、大して母親らしい事をして貰え無くても、俺が母親と思う人間は後にも先にも香澄さん唯一人だ。だから香澄さんが死んだ今となっては、他の人間をそう呼ぶ訳にいかない」
「……勿論、その通りね」
そう穏やかに頷いた由紀子を一瞬横目で見やってから、清人はすぐに視線を外しつつ呟く。
「だけど……、あなたの事は弟の母親として認識しても良いと思ってる」
「……あの」
「お兄ちゃん？　それって……」
慎重に清人の本心を探ろうとした清香の目の前で、清人が窓の方に顔を向けて誰にも視線を合わせない様にしながら、些か棒読み調子で言葉を継いだ。
「最近大病したらしいが、体に気をつけてせいぜい長生きしてくれ。今は到底無理だが、後二・三十年経って俺の性格が丸くなったら他の呼び方がしたくなるかもしれないし、うっかり口が滑るかもしれ

ないから」
　そう言われた由紀子と清香は、言葉の意味を一瞬頭の中で吟味し、清人の言わんとする内容を察した。そして由紀子は目許をハンカチで押さえて泣き出しながら頷き、清香は満面の笑みで清人の横に膝立ちで座り、その首に両手を回して抱き付く。

「……っ、……ええ。気を、つけるわ……。ありがとう、清人」
「お兄ちゃん！」
「うわっ！　こら、清香。お前いきなり何するんだ！」
　慌てて腕を引き剥がした清人だったが、続けて清香は清人の頭を撫で始めた。
「お兄ちゃん偉い！　頑張ったね、誉めてあげる！」
「何だその上から目線はっ！　第一頭を撫でるなっ！」
「えぇ～？　だって可愛いんだもん。それにお母さんの代わりだから良いでしょう？」
「お前な……」
　若干照れながら文句を言った清人だったが、邪気の無い笑顔で言い聞かされて苦笑するしかなかった。と、ここで何を思ったか、清香が勢い良く立ち上がる。

「さて、話が纏まった所で、私、これからまた出掛けるから。お兄ちゃん、由紀子さんをちゃんと送ってね？」
「は？　ちょっと待て清香！　お前どこに行く気だ」
　言うだけ言ってスタスタと歩き出した清香を清人は慌てて問い質したが、清香は振り返って文句をぶつけてきた。
「真澄さんのお家。下で待って貰ってるの。全く……、お兄ちゃんがぐだぐだ回り道して話してるから、時間かかっちゃったじゃない！　もう七時半よ、どうしてくれるのよ！」
　それで清香の訪問の理由を悟った清人は、これ以上引き留めはしなかった。

「それは悪かったな。真澄さんと浩一に謝っておいてくれ。あと…、相手は高齢なんだから、少しは手加減しろよ？」
「分かってるわよ、行ってきます！」
「ああ」
元気良く飛び出して行く妹を玄関で苦笑しながら見送った清人は、リビングに戻ろうとして未だに泣いている由紀子の姿を目にし、違う場所に足を向けた。そして一分後リビングに戻ってきた清人は、由紀子に向かってある物を差し出した。

「良かったら使って下さい」
「え？　これ……」
由紀子が顔を上げ、目の前の濡れタオルらしきものと清人を交互に見詰めると、清人は幾分疲れた様に説明した。
「もう少しマシな顔になったら送って行きます。このまま返したら、今度は俺がご主人に殴られそうだ」
そう言われた由紀子は一瞬真顔になってから、泣き笑いの表情を浮かべて小さく頷く。
「……ええ、そうですね。お願いします」

そうして受け取ったタオルを顔に押し当ててまた俯いた由紀子を見ながら、清人は今は亡き義理の母親の、明るい笑顔を思い返していた。
（これ位で何とか妥協して下さい、お義母（かあ）さん……）
自分の顔に苦笑の表情が浮かんでいる事を、清人ははっきりと自覚していた。

第３５話　清香、人生最長の一日（５）

「真澄さん、浩一さん、お待たせしました」
窓ガラスを叩いて知らせる必要も無く、車内で待ち構えていた二人によって開けられたドアから清香はスルリとリムジンに乗り込み、待たせていた相手に軽く頭を下げた。それに二人が笑って頷く。
「お疲れ様。じゃあ行くわよ？」
「お願いします」
そして真澄が再びインカーフォンの受話器を取り上げて運転席に指示を出すのを横目で見ながら、浩一が幾分心配そうに問いかけた。
「清香ちゃんが一人で出て来た所を見ると、心配要らないとは思うけど……、あれからどうなったのかな？」
その問いに、清香は小さく肩を竦めた上で、苦笑しながら答える。
「それが……、散々ぐだぐだ言った後で、生意気な弟の母親として認識しても良い、だそうです」
「なるほどね」
「相変わらずひねくれた奴……」
そこで小さく息を吐いた二人が、呆れ半分苦笑半分の表情を見せると、清香は笑いを堪える様な表情になって付け加えた。
「それで……、後二・三十年したら他の呼び方をしたくなるかもしれないから、身体に気をつけろとかも言ってました」
清香がそう言った瞬間、二人は揃って失笑した。
「はは、あいつ、どこまでも素直じゃないな」
「あら、上出来じゃないの」
「はい、私もそう思って、頭を撫でて誉めてあげました」
「それは何よりだわ」
そうしてひとしきり三人で笑い合った後で、笑いを収めた清香が

真澄に問いかけた。

「それで真澄さん、お願いしておいた事は？」

その短い問いかけに、真澄も真顔になって頷く。

「言われた通りに家の者に指示しておいたわ。遠慮なんかしないで思い切りやってね？」

「ありがとう、真澄さん」

そう言って力強く頷き合う女二人を眺めた浩一は、深い溜息を吐いたのだった。

それから三人を乗せた車は大した渋滞にも引っ掛からずに再び柏木邸へと戻り、車寄せで運転手に恭しく開けられたドアから、真澄達が颯爽と降り立った。そして彼女達の到着を知った使用人達が玄関の内側に勢揃いする中を、真澄が清香と浩一を引き連れ、脇目もふらずに真っすぐ奥へと進んで行く。

「お、お帰りなさいませ、真澄様。それで、その……」

「三郷さん、私の指示通り準備はできた？」

長年執事として柏木家に仕えて来た初老の男性が真澄に追い縋りつつ、その背後を歩く清香にチラチラと目を向けながら真澄に声をかけたが、真澄は冷静に問い返した。それに三郷が慌てて答える。

「はい、できております」

「お祖父様達は？　別館に居るわよね」

「はい、お揃いですが……」

「それなら良いわ」

「あのっ！　真澄様！」

確認したい事だけ聞き終わると、真澄は焦っている忠実な使用人を振り返りもせず、目的の場所へと急いだ。そして三人は廊下を抜け、別館の入り口で靴を脱いで上がり込み、何時間か前に清香が走

り抜けた廊下を再び逆方向に進む。
そして目的の部屋に到達した清香は、前を譲ってくれた真澄に軽く頭を下げてから、障子の引き手に両手をかけて思い切り左右に引き開けながら雄々しく叫んだ。

「たのもぅーーーーっ！！」

バシィッッ！！と障子が悲鳴を上げた音と清香の雄叫びを耳にして、現れた清香に対面する形で正座していた面々が全員怯えた様にびくっと全身を震わせた。それを清香の背後から眺めた真澄は、先程まで宴席が設えられていたその部屋が綺麗に片付けられ、一面に敷布団が敷かれているのを確認して、満足そうな笑みを浮かべる。

「あぁ～ら、雁首揃えている上に白装束なんて気が利いてますね、お祖父様。万が一ぽっくり逝っても、着替えさせる手間が省けて楽ですわ」
そう言って敷き詰められた布団の真ん中で、白の単衣に白の腰紐の出で立ちで正座している祖父や、その一歩後ろで上着を脱いで一列に正座している父と叔父達を見下ろした真澄は、コロコロと楽しげに笑った。それを見て、その部屋の隅に神妙に控えていたその他大勢が心底肝を冷やす。

（姉貴……、容赦なさ過ぎ）
（笑顔が怖いな、真澄さん）
（何やら、清人さんの方でも一悶着あったって浩一さんから連絡があったし……）
（清香ちゃんの機嫌が、直ってる様にも見えない……）
荒事になる予感に女性達は別室に待機という事になり、妊婦の奈津美と共に修も帰宅した後であり、その場には男しか存在していなかったが、笑顔の真澄と無表情の清香を交互に見ながら、一癖も二

癖もある男達は緊張感漂う空気に何とか耐えていた。そしてここで真澄が動く。

「さあ清香ちゃん、どうぞ？　思う存分好きな様にして頂戴」

その声を受けた清香は小さく頷いて足を踏み出し、再び体を強張らせた総一郎達の眼前に立った。そして腕を組みながら冷静に頭の上から声をかける。

「さて……、さっきは勢いに任せて飛び出してしまったので、改めてお伺いしたいんですが。弁解があるなら先に聞いておきましょうか。総一郎さん？」

冷え冷えとした声が降ってきた為、総一郎は顔色を更に悪くしつつ、布団に両手をついて俯きながら声を絞り出した。

「……儂が悪かった」

「そうですね。他には？」

（清香ちゃん……、姉貴以上に容赦ないな…）

（普段ほよほよしてる人間程、本気で怒らせると怖いって事か）

（祖父さん達、全く逃げ場無しだな）

流石に乱闘沙汰になったらどうにかして清香を押さえる腹積もりはしていた面々だったが、その破局の瞬間を恐れて戦々恐々としていた。そんな心境など全く理解しない風情で、清香が淡々と話を続ける。

「清人……、君、に頭を下げて謝る」

「それだけですか？」

微妙につっかえながら言った言葉に、清香は僅かにピクリと眉を寄せながらも、冷静に先を促した。

「……香澄と、……清吾君、にも、だ」

「遅過ぎましたね。もう死んでこの世に居ませんし。どうして今になって漸く頭を下げる気になったんですか。せめてお父さん達が死

んだ時にでも頭を下げに来たら、良かったじゃないですか」
　些か嫌味っぽく肩を竦めながら言い返した清香だったが、そこで総一郎が小声で呻く様に呟いた。

「……行ったんじゃ」
「は？」
「……」
　両手をついて項垂れたままの総一郎の言葉を聞き取り損ねた清香は怪訝な顔を向けたが、総一郎はそれきり口を噤んだ。するとその背後から、恐る恐るといった感じで雄一郎が口を挟んでくる。

「あの……、清香ちゃん。実は父も香澄達の通夜に出向いてるんだ」
「え？　……だって、確かにあの時、おじさま達はいらしてましたけど、総一郎さんは来てませんよね」
　そこで一気に疑わしげな視線を向けた清香に、兄弟揃って口々に弁解を始める。
「それが、その……、車に同乗してたんだが、土壇場になって父がなかなか車から降りなくて……。『香澄の死に顔など見るのは嫌じゃ』とかごねたり、『あんな男と一緒になって殺されおった』とか暴言を吐いたり、『清香にののしられたら、生きていけん』とか怖気づいて」
「あまり広い駐車スペースでもなかったから、長々と占拠していると周囲の迷惑だと思って、仕方無く父を置いて私達だけ降りて、会場の集会室に入ったんだよ」
「父は落ち着かせてから、翌日の告別式に連れて行こうかと思ってね」
「そうだったんですか？　まあ、それはどうでも良いですが」
　まだ今一つ納得しかねる顔付きの清香だったが、取り敢えずそれで話を終わらせようとした。しかし雄一郎がもの凄く言い難そうに話を続ける。

「そうしたら……、車で大人しくしていると言ったのに、父が遅れてこそこそと焼香しに集会場に入って……」
「はあ？　お顔に見覚えが無かったんですが、お焼香だけして帰ったんですか？」
「いや、実は……、集会場に入った所で……」
「何ですか？」
流石に驚いた顔を見せた清香だが、その問い質す視線を受けた雄一郎は口ごもって黙り込んだ。それを訝しげに、徐々に眉を顰めて睨みつける清香を見て、和威と義則が兄以上に気まずそうな表情と口調で、補足説明を行う。

「その……、清香ちゃん、その時、ご近所の手伝いの女性と何やら話してて……」
「えっと……、色々、叫んでたよね？　母親の親族云々について……」
それを聞いた清香はキョトンとして、当時の情景を思い返した。

（えっと……、確かおじさん達から、当座のお金を預かったってお隣のおばさんに言われて受け取って……。あの時、話の流れで『あの人で無し野郎ども』とか『焼香に来たって一歩たりとも上げさせるか』とか『もし来たら頭から灰をかぶらせて叩きだしてやる』とか叫んだ覚えが……、ちょっと待って！！）
そこまで思いだした清香は、総一郎を指差しながら力一杯叫んだ。

「あ、あそこに！　あの場所におじさん達の他に、総一郎さんも居たんですか！？」
「「「「……」」」」
無言で揃って小さく頷いた男達に、清香は盛大に顔を引き攣らせた。

（それは流石に……、目の前で散々自分の悪行を並べたてられたら、自分がその人で無しですって、名乗り難いかも……。その後大泣きしちゃって、お兄ちゃんに迷惑かけた位だし……）

一気に気まずい気分に陥ってしまった清香がどう話を続ければ良いか困惑していると、総一郎がボソボソと清香の足元で呻き始めた。

「……清香が憤慨するのも尤もじゃ。あの時のお前は、本気で怒った香澄に瓜二つでの。死んだ香澄に絶対許さないからと叱責されている気持ちになって、とてもそのまま名乗り出る事ができずに、焼香もせずに黙って帰ったんじゃ」

（そんなに怖い顔で叫んだつもりは無いんだけど……）

ちょっとだけ憮然とした清香だったが、総一郎はそこでしみじみと呟く。

「それからはこっそり清香の生活を見守るだけで良いと思ってたから、何か困った事があったらすぐに助けてやれる様にちょくちょく様子を見に行っていたが、あの男は万事そつが無くて、手を貸す必要も無くての……」

そこで清香は怪訝な顔をして、独り言の様に語る相手を見下ろした。

「あの男って言うのがお兄ちゃんって事は分かるんですが……、ちょくちょく様子を見に行ってたって、何ですか？　家には来てませんよね。来てたらお兄ちゃんが言う筈ですし」

そこで総一郎が何か言うより先に、真澄の呆れ果てたといった風情の声が割り込んだ。

「文字通り近くに様子を見に行ってたのよ。お祖父様ったら、清香ちゃんが高校の頃、そこの理事に金を掴ませて事務員の服と身分証のパスを入手して、時々校内に潜入して様子を窺ってたの。他にも色々ある筈だけど」

「はあぁ！？」

「ま、真澄っ！　お前、何故それを知っとる！」
流石に驚きの声を上げて自分を見つめて来た二人に、真澄は軽く肩を竦めながら補足した。

「清人君から聞いたのよ。校内でばったり遭遇して、曲がり角の向こうから清香ちゃんの様子をこっそり窺っているのを見た時には、思わず涙を誘われたって言ってたわ。ああ、その時どうして清人君が校内に居たかは、ここで突っ込まないで。この話にはあまり関係無いし、時間の無駄だわ」
「「……」」
さらっと事も無げに言ってのけた真澄を、清香と総一郎は何とも言えない表情で凝視したが、すぐに総一郎は下に顔を向け、清香もそれを眺めた。

「そんな風に、もうこのまま名乗りを上げず、こっそり見守っていくだけで良いかと思っとったんじゃ。どうせいつかは向こうから折れて頭を下げに来るじゃろうと思って、胡坐をかいてふんぞり返った罰が当たったんじゃろうと思ってな。そうしたら……半年近く前の事だが、澄江が夢枕に立ったんじゃ」
「はあ……」
何とも言えずに曖昧に相槌を打った清香だったが、ここで総一郎がキッと顔を上げて清香を見据えながら訴えた。

「そうしたら澄江の奴、久しぶりに会えて喜んでいる儂に向かって『あなたはもう八十になるんですよ？　いつぽっくり逝ってもおかしくない年なのに、まだ意地を張ってるんですか。そんな人、私、お迎えになんか来ませんからね』と冷たく言ったんじゃ！　あんまりだとは思わんか！？」
「あの……、私にそういう事を言われても……」
「お父さん、落ち着いて下さい！」

「ごめんね、清香ちゃん。両親は夫婦仲が良かったから」
「そ、そう、他の人間に対しては傍若無人でも、母さんに対してはだけは昔から弱くて」
いきなり清香の片足を掴んで涙目で訴えてきた総一郎に、清香は思わず体を引き気味にし、雄一郎達が慌てて総一郎を宥めつつフォローしようとした。しかし総一郎の訴えは更に続く。

「その上、『死んだら香澄に会えるから、そこで謝るなんて調子の良い事を考えているんじゃないでしょうね？　あの子も私も勿論極楽に来ましたけど、あなたの顔なんか見たくないって、あなたの地獄送りを画策して香澄が閻魔様に直談判してましたよ？　だからあなたが地獄に行ったらこうして会えなくもなりますから、今のうちにお別れに来たんです』と言ったんじゃ！　澄江の奴、あんまりじゃあぁぁぁぁっ！！」
「「「「……」」」」
錯乱した様に叫んで清香の足から手を離し、布団に蹲って号泣し始めた総一郎を最早誰もフォローできず、黙って互いの顔を見合わせた。
そのまま何分か様子を窺っていても総一郎が泣きやむ気配が無い為、清香が溜息を吐いて疲れた様に会話を再開させた。

「……それで？　死んだ奥さんと娘にこれ以上愛想を尽かされたくなくて、こっそり見守る方針を方向転換して、告白しようと思ったわけですか？」
「そうじゃ。それで清香に孫たちの誰かと早急に結婚して貰おうかと思って、皆に発破をかけたんじゃが……、どいつもこいつも甲斐性無しどもが」
苦々しげに総一郎は部屋の壁際に控えている孫達を見やったが、清香はそれを一喝した。
「あなたが文句を言う筋合いじゃありません！」

「……すまん」
再び萎れた様に俯いた総一郎に対し、清香は軽い頭痛を覚えながら話を続けた。

「第一、どうして祖父だと告白する事と、従兄妹同士で結婚する事が繋がってるんですか？」
「それは……、新郎新婦どちらにとっても祖父に当たるから、身内として紹介しやすいし、告白して怒っても亭主になる奴がお前を宥めてくれるかと……」
ぼそぼそとそんな事を説明する総一郎に、清香が呆れた様に断言する。
「……何ですか、その穴だらけの計画とも言えない計画は。確かに皆とは仲良くしてますけど、結婚云々は別でしょう。それに一日二日で気易く結婚するわけありません！」
「それは儂も認める。清香もまだ若いし、下手したら結婚まで持ち込むまで一年二年かかって、その間に儂がぽっくり逝きかねない事に後から気付いてな」
（元気一杯で、後二・三十年は楽々と生きていそうなんだけど……）
皺はあっても肌に艶と張りがあり、声にも力があっていかにも矍鑠としている総一郎を見ながら清香はそう考えたが、本人は大真面目で語り続けた。

「しかしいきなり面識が無い人物に『お前のお祖父さんだ』といっても不審がられて通報されかねんし、お前の父親の事もある。罵倒されるのは仕方が無いとしても、関係自体否定されたくは無いから、打ち明ける前に何とか友好関係を築くか、あまり清香を怒らせない状況を作りたいと思って……」
「それで？　真澄さんがプリザーブドフラワーのアレンジを競り落としたのをきっかけにして、私を自分の誕生祝いの席にかこつけて、ここに招待する手筈を整えたんですか。……残念過ぎる事

に、私を最っ高に怒らせましたがね」
　尻つぼみになった総一郎の言葉に被せる様に、清香が冷え冷えとした口調で続けると、総一郎が必死の面持ちで訴える。

「すまん。それは全面的に謝る。お前の父親と兄の悪口を言うつもりは無かったんじゃ！　ちゃんと過去の行いについて謝る心積りもしておった。本当じゃ！　……だが、小笠原の孫なんぞと付き合っとるなどと言われて、つい口が滑って」
「言い訳にもなりませんね」
「……」
　冷たく弁解をぶった切られた総一郎は、再び俯いて黙り込んだ。
　そこに清香が念を押して来る。
「言いたい事はそれだけですか？」
「……ああ、似るなり焼くなり、お前の好きにしてくれて構わん」
　それを聞いた清香は、溜息を吐きだしてから総一郎の前に屈み込んで静かに告げた。

「そうですか。それは結構な心掛けですね……、お祖父ちゃん」
「え？」
　予想外の単語を耳にして、思わず顔を上げた総一郎だったが、清香は素早く両手を伸ばしてその襟元を掴み上げ、掛け声をかけつつ乱暴に引っ張り上げた。
「はあぁぁぁっ！」
「ちょっと、清香ちゃん！」
「落ち着いて！」
　慌てて男達が腰を浮かせて清香を止めようとしたが、清香はその目の前で共に立ち上がった総一郎の前に踏み込んで体を沈めつつ、為すがままの相手の脇の下に自分の肘を入れて、勢い良く肩越しに投げた。

「とりゃぁぁっ！！」
「ぐわぁぁぁっ！！」
「お父さん！　大丈夫ですかっ！？」
見事な背負い投げをされた総一郎は呻き声を上げ、それを見た雄一郎は慌てて駆け寄ろうとしたが、素早く移動して来た清香がその横に移動して腕を取る。

「自分の心配を、して、下さいっ！」
「うわぁぁっ！」
思わず逃げようと体を引いた雄一郎だったが、清香は叱りつけながら素早く相手の脇の下に手を差し込み、体を引っ張ってそのバランスを崩しつつ右足で相手の足を払い上げた。
「兄さん！　清香ちゃん！？」
払腰を受け、布団に転がり呻いている兄を見て真っ青になった和威だったが、清香は容赦無かった。

「はい、もう一丁！」
「ちょ、うえっ！」
あっさりと組んで足を引っ掛けつつ和威を横向きには跳ね上げると、最後の獲物に向かって躊躇う事無く足を進める。
「さ、清香ちゃん、ちょっと待って！」
「問答無用ですっ！」
「うおぅっ！」
過去に柔道の経験があると聞いていた義則に対しては、清香も手抜きをするつもりは無かったらしく、勢い良く引いて相手の体を引き付け、真後ろに身を捨てつつワンピース姿ながら片足相手の腿の付け根に当て、押し上げる様に頭越しに投げて見事な巴投げを披露した。
一連の動きを見ていた男達の、思わずといった感じの拍手が沸き

起こる中、仁王立ちになった清香の呆れた声が響き渡る。

「全く、良い年をした大人が揃いも揃って何をコソコソと。反省して下さい」

「わ、分かっておる」

「圭吾さん達はもっと酷い怪我をしてるしな」

「二人には本当にすまなかった」

「心から反省してるから」

それを聞いた清香は、疲れた様に溜息を吐いた。

「何、勘違いしてるんですか。お父さん達をボコボコにした事についてはもう良いです」

「どうしてじゃ？」

思わず不思議そうに見上げた総一郎に、清香は当然の如く言い切った。

「だって、本人達はもう気にしていないと言ってましたし、第一お母さんにこっぴどく怒られて、ずっと親兄弟の縁を切られていたじゃないですか。十分罰は受けてますよ」

「……清香」

思わず涙ぐんだ総一郎に、清香が苦笑交じりに続ける。

「だから、今投げたりしたのは、すっかり怖気づいちゃって私との関係を打ち明けなかった事に対する罰です。お陰で私、生まれて二十年以上も、こんな素敵な親戚が存在している事を知らなかったんですからね」

「本当に許してくれるかの？」

恐る恐る尋ねた総一郎に、清香はわざとらしく考え込みながら条件を出した。

「そうですね……、あと一つさせてくれたら、許してあげても良いんですが……」

「なんじゃ？　お前がやれと言うなら、犬の真似でもなんでもするぞ」
勢い込んで申し出た総一郎に、清香が冷静に告げる。
「いえ、そんな事じゃなくてですね……、澄江さんにご挨拶したいんですが」
「は？」
一瞬何を言われたのか分からない顔をした面々に、清香は困った様に付け加えた。
「死んだお祖母ちゃんに、今までお線香の一つも上げないで不義理をしたなと思って」
そう言われた総一郎は、堪え切れずに涙で顔をくしゃくしゃにしながら、何度も大きく首を縦に振った。
「……、おう、おう、是非挨拶してくれ、澄江も喜ぶぞ」
その前に清香は膝を付き、笑って告げた。
「お祖母ちゃんにちゃんとお祖父ちゃんを迎えに来てくれる様に頼んでおくけど、せっかくお祖父ちゃんに会えたばかりだから、お迎えはあまり早く来ないでともお願いしておくわ」
「さ、清香ぁぁぁっ！！」
感極まった総一郎が勢い良く清香に抱き付き、号泣を始めると、清香もその背中に腕を回して抱き締め返す。
「だから長生きしてね、お祖父ちゃん」
「勿論じゃとも！　清香が結婚して曾孫を産んで、その子が結婚するまで見守ってから、澄江と香澄に報告してやるからな！　儂はたった今、そう決めたぞ！」
（いや、流石にそれは無理なんじゃ……）
その場に居た殆どの者はそう思ったが、感極まって大泣きしている総一郎の台詞に水を差す真似はせず、ある者は貰い泣きし、ある者は苦笑して見守ったのだった。

その後、何とか総一郎が落ち着いた所で一同は揃って仏間へと移動し、灯りの中に浮かび上がった仏壇の前に横一列に並んだ。そして蝋燭に火を点けた総一郎が、清香を手招きする。

「清香、これが澄江じゃ。美人じゃろう。清香は若い頃の澄江にそっくりじゃぞ？」

「はあ……」

示された遺影では上品な初老の女性が優しく微笑んでおり、清香は内心で突っ込んだ。

（私……、こんな美人にはならないと思うんだけどな……）

しかし余計な事は言わず、線香を立てて鐘を鳴らし、合掌して神妙に頭を下げる。

（お祖母ちゃん初めまして。ご挨拶が遅くなってすみませんでした。本当に私の周りには面倒くさい人間ばかりなので、私ともどもこれからも見守って下さい。宜しくお願いします）

そんな事をしみじみと考えていた時、背後からスルスルと襖が引き開けられる音と共に、どこかのんびりとした声がかけられた。

「あら、こんな所に居たの。探したわよ？……お取り込み中の所悪いんだけど清香ちゃん、もう八時半過ぎてるのよね」

途中からどこかに姿を眩ましていた真澄が現れてそう声をかけると、清香がピクンと反応し、慌てて腕時計で時間を確認しながら溜息を吐き出した。

「本当……、移動時間を考えたら、ここでタイムアップですね」

「その様ね。……ところで清香ちゃん、ここに来てから携帯の呼び出し音とか全然気にならなかったんだけど、電源を落としてたの？」

ここで清香が持参していたバッグから携帯を取り出して操作を始

めた為、真澄はその手元を覗き込みながら尋ねた。それに清香が真顔で答える。

「当然ですよ。こっちは真剣に物事に取り組んでるのに、横からゴチャゴチャ邪魔されたら堪りませんから」

「まあ、それはそうよね」

そう頷きつつ携帯のディスプレイを覗き込んだ真澄は、思わず棒読み調子で呟く。

「うわ～、やっぱり通話記録とメール着信数が凄い事になってるわね～」

「その様ですね～」

まるで他人事の様に応じた清香は、それから黙り込んで何やら操作を始め、一連の二人のやり取りを黙って見守っていた面々の中から、浩一が恐る恐る仔細を尋ねた。

「あ、あの……、清香ちゃん。さっきから何の話をしてるのかな？それに一体何をしているのか、教えて欲しいんだけど」

それに対し、清香は携帯から目を離さないまま、あっけらかんと答えた。

「ああ、お兄ちゃんの異父弟さんからの記録が凄い事になってて。ウザいので今纏めて消去してる所なんです」

「……それって、要するに聡君の事だよね？」

思わず口を挟んで問い質した正彦に、女二人は首を傾げて顔を見合わせる。

「あれ？　そんな名前でしたっけ？　真澄さん」

「さあ……、どうだったかしら？」

「ちょっ……、真澄姉！」

「二人とも一体何を……」

物騒な台詞を耳にした周囲は顔色を変えたが、清香は淡々と操作

を続けた。
「さて、これで……、受信送信記録全部削除、メールフィルターや着信拒否設定をばっちり済ませた上で、アドレス帳からも綺麗さっぱり消去終わりっと！」
頗る上機嫌で携帯操作を終わらせたらしい清香の台詞に、真澄は笑顔で応じた。

「これですっきりして試験期間に突入できるわね」
「はい、もう頑張ります！　全教科パーフェクト目指しますからねっ！」
握り拳を作って力強く応じる清香に、真澄の笑顔が深くなる。
「その意気よ。何と言っても学生の本分は学業ですもの。じゃあ帰りも送るわ」
「あ、良いですよ、真澄さんだって明日は仕事じゃないですか。散々付き合わせちゃったし、玄関先で失礼します」
「そう、それなら運転手には家まで送らせるけど、玄関で見送らせて貰うわね？」
「そうして下さい。それじゃあ……」
そこで一端話を区切った清香は、再び総一郎の前に正座して深々と頭を下げた。

「お祖父さん、伯父さん達も今日はありがとうございました。今日はもう時間が無いので、また改めてお伺いします」
「……お、おう、気を付けてな」
「清人君に宜しく」
「はい、失礼します」
そうして笑顔の清香が真澄と連れ立って玄関に歩いて行くのを大人しく見送った面々は、微妙な顔付きで二人を眺めていた浩一に視線を向けた。
「浩一、どういう事だ？」

戸惑いを含んだ父親の視線を受けた浩一は、ここで溜息を一つ吐いてから徐に語り出した。

「それが……、清香ちゃんを待っている間に、車内で姉さんに説明されたんですが……、清香ちゃんは明日から金曜まで、期末試験期間なんだそうです」

「それで？」

「その前に少しでもすっきりして試験に臨みたいので、限られた時間で物事を効率的に片付ける為に、対応する優先順位を付けたとか」

「……因みにどんな？」

周囲から怪訝な顔を向けられた浩一は、居心地悪そうに話を続けた。

「清香ちゃんにとっての最優先事項は清人に関する事なので、小笠原家に乗り込んで由紀子さんを連れ出して、清人と対面させました」

「確かに、君からの電話で、清人君と小笠原の関係までばれてしまったという事は聞いたが……」

和威がまだ少し要領を得ない顔付きで呟き、浩一が続ける。

「次に老人優先と言う事で、お祖父さん達へのお仕置きですね」

「茶化すな、浩一君」

「それで、タイムアップと言うのは？」

僅かに笑いを含んだ声に義則が溜息を吐き、雄一郎が続きを促すと、浩一はこの場に居ない人物に対し、心底同情する表情をその顔に浮かべた。

「……そうこうしているうちに、清香ちゃんに嘘を言って近付いてた聡君に対応する時間が無くなったんですよ。試験期間中は十時就寝だそうです」

そう言われた面々は漸く事態を悟った。

「それが残ってたか……」
「うっかりしてたな～、俺らこっちの方だけで頭の中一杯だったし」
「時期が悪かったとしか言いようが無いな」
「……ちょっと待て。何か清人さんとお祖父さん達をあっさり許した分、聡君の方に余計に怒りが向けられてる気がしないか？」
「そうだな……、試験期間中はこのまま放置する気満々みたいだったし……」
　口々に重い口調で感想を述べ合う中、ふと思いついた様に正彦が問いを発し、それに考え込みながら友之が応じた。その途端、室内に再び不気味な沈黙が満ちる。
　しかし何分も経過しないうちに清香を見送りに行っていた真澄が戻り、固まっていた室内の面々に呆れた様に声をかけた。
「何やってんのあんた達。明日仕事でしょう？　いつまでも呆けてるんじゃないわよ。さっさと帰りなさい。清香ちゃんも帰ったわよ？」
「あ、ああ、そうですね」
「じゃあそろそろ帰るか」
　もぞもぞと動き出した従兄弟達から、今度は真澄は叔父達に視線を向ける。
「叔父様達も、向こうで叔母様達が待ちくたびれてますよ？　私から簡単に経過を説明しておきましたから」
「そ、そうか、すまなかったね」
「じゃあ帰らせて貰うとするか」
　申し訳無さそうに叔父達が腰を上げるのを認めて、真澄は残った二人に声をかけた。
「お祖父様、お父様、疲れたのでもう休ませて貰います。お休みなさい」
「……おう、手間をかけさせたな」

「……お休み」

言うだけ言ってあっさりと踵を返した真澄に、男達はとんだとばっちりを受ける羽目になった聡の事を思い浮かべつつ、僅かな罪悪感を覚えていたのだった。

第３５話　清香、人生最長の一日（５）（後書き）

取り敢えず怒涛の一日の話は終わります。次は怒涛の五日間の話（笑）です。

第37部　清香流、矛の収め方

「……はあぁ、良く寝たぁ。早起きすると気持ちが良いわね。今日も一日、頑張ろうっと！」

試験期間突入の月曜日。まだ薄暗い外の景色などお構いなしに、清香はこれ以上は無い位、爽やかに朝の五時にベッド上で体を起こした。そして手早く着替えてから机に向かい、今日試験を受ける予定の教科の最終確認を始める。

そして時計が七時になった時、清香は無言で椅子から立ち上がり、リビングの方へ歩いて行った。

「おはよう、お兄ちゃん」

「おはよう、清香。朝ご飯はできてるから」

「分かったわ。すぐ食べるね」

そんないつも通りのやり取りをした二人はダイニングテーブルに着き、「いただきます」と挨拶をして食べ始めた。しかしそこから先は延々と無言で咀嚼する、微妙に気まずい雰囲気が漂う。

「……あの、清香？」

「何？」

「まだ怒ってるのか？」

昨夜帰宅してからはあからさまに怒りをぶつけられた事は無かった清人だったが、時折チクチクと嫌味を言われ、結構神経をすり減らしていた。しかしそんな清人に向かって、清香が朗らかに笑う。

「怒るって、何が？　私がお兄ちゃんに？　有り得ないでしょ。詳しく言ってみてくれる？」

「……いや、見当違いなら良い」

（やっぱりまだ怒ってるな……）

それをはっきり認識させられて清人は密かに落ち込んだが、ふと気になった事があって清香の全身に視線を走らせた。更に座ったまま体を屈め、テーブルの下も眺める。

「……何やってるの、お兄ちゃん」

冷え冷えとした声がテーブルの向こう側からかけられたが、上半身を起こした清人は真顔で清香に告げた。

「清香、その服装で出掛ける気なら、着替えて行った方が良い」

「は？」

「ジーンズにスニーカー。荷物もリュックに詰めて背負って行け」

「……何なの？　いきなり」

「いいから、言う通りにしろ」

そう言って清香から視線を逸らしつつ清人は食事を続行し、清香も怪訝な顔をしながら食べ続けたのだった。

それより少し後の時間帯、前夜から全く清香と連絡が取れなくなっていた聡は、清香達が住んでいるマンションの入り口付近で、通勤や通学の為に出て来る住人達からの訝しげな視線を浴びつつ、清香を待っていた。

辛抱強く待つこと三十分近く。自動ドアが横にスライドして、清香が姿を現す。それと同時に清香は聡の姿を認めて一瞬立ち止まったが、聡はそれに構わず通路の真ん中で上半身を直角に近い状態にまで折り曲げて声を上げた。

「清香さん！　全面的に俺が悪かった。何度でも謝るから、落ち着いて俺の話……、え？　……はあ？　ちょっと！」

パタパタと自分に向かって駆けてくる足音と気配を察知した聡は、罵倒されるか蹴られるか、または投げられるかと地面を見たまま一気に緊張したが、何故か背中から腰の間を突かれた感じがしてから、背後に走り去る足音を聞いて慌てて上半身を戻して振り向いた。す

ると予想に違わず聡を馬跳びして乗り越え、軽快に駅方向に走り去る清香の姿を認めて唖然となる。
それに追い討ちをかける様に、中から出て来た清人が軽く拍手をしながら、棒読み調子で呟いた。

「……冷静な判断力と抜群の運動神経。流石俺の妹だ。革靴のお前では、もう追い付けないな」
「兄さん！　他人事の様な事を言ってないで、少しは清香さんに取りなしてくれても良いじゃないですか！？」
「他人事だからな。お前もさっさと出社しろ。遅れるぞ？」
「……くっ！」
怒りを露わにして文句を言った聡だったが、清人に手で追い払われる真似をされた上、軽くいなされて歯軋りした。しかしいつまでもその場に居るわけにもいかず、重い足取りで職場に向かったのだった。

そして翌日。朝再び清香を待ち構えていると、清香に先んじて清人が現れた。それに警戒心ありありの表情で、聡が声をかける。
「……おはようございます」
「ああ。……しかし夜押し掛けず、朝だけなのは誉めてやろうか」
「年度末の決算期で、何かと忙しくて連日残業なんですよ！」
「それは良かった」
「……嫌味ですか」
前日同様聡が歯軋りした所で、清人がさり気なく移動して聡の横をすり抜けようとしながら素早くその背後に回り込み、羽交い締めにした。

「ちょ！　兄さん、いきなり何を！？」
「うるさい。大人しくこっちに来い！」
そのままの体勢で清人がズルズルと出入り口から離れた場所に移

動すると、壁の向こうから清香の声が微かに伝わってくる。
「お兄ちゃん、行ってきまーす！」
それを耳にした聡は、怒気を露わにして叫んだ。

「兄さん！　何で邪魔をするんですか！？」
「俺は清香に嫌われたくない」
「……血も涙も無い人ですね、あなたって人はっ！」
盛大に文句を言いつつ何とか清人の拘束を振り払った聡は、憤然として駅に向かって歩いて行った。

そして水曜日は地下駐車場で清人の車に清香が乗り込み、待っていた聡の目の前を無情にも通り過ぎて行ったが、木曜日はいつまで経っても清香が出掛ける気配が無かった。
自らの出勤時間も近付いている事からじりじりしながら待っていると、悠然と中から清人が現れ、信じられない内容の事を口にする。
「清香なら一時間以上前に出掛けたぞ？」
「え？」
「早く行って、試験開始前に友人と一緒に図書室で勉強するそうだ」
それを聞いた聡は一瞬黙り込んでから、苦々しげに呻いた。

「……兄さん、よくも今まで黙ってましたね？」
「人聞きの悪い。ギリギリには教えてやっただろう？　さっさと行かないと本当に遅刻するぞ？」
「ご親切にどうも！！」
腹立ち紛れに吐き捨てた聡は駅に向かって駆け出し、間に合わないと判断したのか流しているタクシーを捕まえて慌ただしく乗り込んで去って行った。

そんな四日間が過ぎた後の金曜日。いつも通り朝食を食べながら、清人は慎重に問い掛けた。

「なあ、清香……」
「うん？　なあに？　お兄ちゃん」
「その……、あいつに連絡とかは……」
恐る恐るそう口にした途端、清香の目が物騒に光った。
「え？　お兄ちゃん、“あいつ”って誰の事？　浩一さん？　友之さん？　正彦さん？　それとも修さんか明良さんか玲二さん？　ちゃんと誰か分かるような言い方をしてくれないとな～」
「いや、いい。何でもない」
「そう？」
そうして黙々と食べ続ける清香を見て、清人も黙って食事を続けた。

そしてその日は聡の待ち伏せは無く、清香と清人は肩透かしを食らった気分でマンションの出入り口で別れた。そして清人は台所を片付けながら、しみじみ考え込む。
（清香もな……。普段温厚な分、一旦怒ると、なかなかおさまらないタイプだから。そう言う所は、流石あの香澄さんの娘だ……）
そんな事を考えつつ、自分は比較的あっさり清香に許して貰った分、聡への当たりがきつくなっている事を自覚していた清人は、この間多少後ろめたい気分を抱えていた為、濡れた手をタオルで拭きながら深い溜息を吐いた。

「仕方がないな……」
そう心底嫌そうに呟きながらも、清人は時計で現在時刻を確認しながら携帯を取り上げた。そして使う事は無いだろうと思いながらも、真澄から一応教えて貰っておいた番号を、多少躊躇しながらも選択して電話をかけ始める。

『……はい、角谷ですが』
大して待たされる事無く応答があったが、名乗られた名前で相手

の居場所が特定できた。
「ああ、やっぱり今の時間は職場か。今大丈夫か？」
『……少々お待ち下さい』
聡が幾分険しい口調で断りを入れ、少しだけ待たされてから再度声が伝わってくる。
『何の用ですか？』
隠す事無く冷気を伝えてくる聡を、清人は微塵も気にせず話し始めた。

「お前、今日の午後に早退して、一度家に帰れ」
『いきなり何ですか？』
その唐突な物言いに、流石に聡が腹を立てた声を返してきた。しかし一方的な清人の話が続く。
「清香の試験期間は今日までだ」
『はい、以前に彼女から聞いて知ってます』
「十六時半に終了予定だ」
『それがどうかしましたか？』
「清香の話では、最近キャンパス周辺の取り締まりが厳しいそうで、先週どこぞのバカボンが正門横に堂々と停めていたポルシェが、レッカー移動させられたそうだ」
『良い加減にして下さい！　それが何だって言うんですかっ！』
廊下の隅で周囲の目を憚りながらコソコソと電話を受けていた聡は本気で苛立ちながら叫んだが、そんな事を考慮しないまま清人が話を続けた。

「だから試験終了時間を狙って、正門の真ん前にお前の車を停めろ」
『は？』
「構内から門に向かって歩くと、嫌でも目に付く様にしろと言っている。もうこれ以上は言わんぞ」
『……』

そこで唐突に黙り込んだ聡に、今度は清人が苛立たしげな声を上げる。
「おい、聞いているのか？」
その問い掛けに、聡は慎重に問い返してきた。
『それは……、俺に車をレッカー移動される危険を冒して、清香さんが逃げ出さない様な処置を講じろと？　例えば『乗ってくれるまで移動させない』と言うとかですか？』
「……最悪、目の前でレッカー移動される無様な事になっても、同情はして貰えるだろうな」
自分の言いたい内容を汲み取った聡に、清人皮肉っぽく付け加えた。それに笑いを堪える様な声で聡が応じる。
『アドバイス、ありがとうございます』
「それと……、その後どこかに寄ってきても構わんが、門限は十九時だ。一分一秒たりとも遅れたら、一生家に立ち入れないと思え」
『……門限は二十一時では無かったんですか？』
思わず憮然とした声を発した聡に、清人が平然と言い返す。
「今夜は清香の試験が無事終了したので、清香の好きな料理を色々作る事にしているからな」
それを聞いた聡は、諦めた様に溜め息を吐いてから、神妙に告げてきた。
『……分かりました。時間厳守で清香さんを送っていきます』
「そうか。もしきちんと門限前に送ってこれたら、お前にも食べさせてやってもいい。多目に作るつもりだったから」
『え？　あの……』
そこで戸惑い気味の声を返してきた聡に、清人が淡々と続ける。
「何か不服でも？」
『いえ、とんでもありません！』

慌てて否定してきた聡に、清人は思わず口角を上げた。

「そうか。それなら適当に理由を付けて職場を抜けろ。……ただし、間違っても母親がまた病院に担ぎ込まれたなんていう、縁起でもない嘘は吐くなよ？」

『大丈夫です。兄が交通事故で病院に担ぎ込まれたとでも言いますから』

「おい！」

『冗談です。それでは失礼します』

冗談では無い内容を口にされた清人は思わず怒りの声を上げたが、聡は笑いを含んだ声であっさりと通話を終わらせた。そして通話が途切れた携帯を見下ろして、清人が忌々しげに呟く。

「あいつ……、やはり気に入らん……」

清香を巡る男二人の紛争は、未だ収束する気配は無かった。

同じ頃、試験の休憩時間に教科書の最終チェックをしていた清香に、隣に座っていた朋美が不審そうに声をかけた。

「……ねえ、清香。試験が始まってからずっと思ってたんだけど、あんたこの試験期間中変じゃない？」

「ん～？　変ってどこが～？」

朋美の言葉に一瞬ピクリと反応したものの、素知らぬ顔で教科書を捲る清香に、朋美は呆れ気味に言葉を継いだ。

「凄いピリピリしてるでしょ。別にしゃかりきになって試験に挑まなくても、あんたの成績なら単位を落とす危険性は少ないのに」

「単に、何事も油断は禁物って事よ」

「そうなの？　それなら良いんだけど……。ところで春休みになったら聡さんとデートの約束でも」

「朋美！！」
「はっ、はいっ！」
そこでいきなり清香が分厚い教科書をバタンと勢い良く閉じながら、咎める様な口調で朋美の名前を口にした為、朋美は反射的に返事をし、周りの者達は何事かと視線を向けた。
そんな中、険しい顔を見せていた清香が、にっこりと笑いながら朋美に言い聞かせる。

「他人の迷惑だから、試験に集中しようね？」
「……分かりました」
そしてコクコクと頷きながら、朋美は確信する。
（これはやっぱり聡さんと何かあったのよね。まさか全面撤退した訳じゃ無いとは思うけど……、後から清人さんに確認してみないと）

そんな決意をしながら横に座る清香の顔を慎重に窺っていた清香だったが、携帯がメール着信をバイブで知らせてきた。
試験開始時にはまた電源を落とす為、今のうち内容を確認しておこうかとバッグから取り出し、受信内容を確認した朋美は、無言で首を捻る。
（何なんだろう、この指示。相変わらず清人さんのやる事って、凡人には理解不能な事が多いわよね……）
そうは思ったものの、清人からの指示内容は大した手間や労力がかかるものでは無く、帰りにそれを実行する旨を頭に叩き込んで朋美は携帯の電源を落としたのだった。

そして夕方になって期末試験は無事に全日程を終え、清香と朋美は連れ立って校舎から出て歩き出した。
「はぁ～、やっと終わったわね～。あと少しで春休みだわ。嬉しい～」
「……そうね」

何となく心ここに有らずといった風情で朋美と並んで歩いていた清香だが、ふと気がついて横に顔を向けながら尋ねた。

「ねえ、朋美。朝話していた店に帰りに寄って行くなら、西門の方が近いのにどうして正門の方に行くの？　遠回りじゃない」

それを聞いて、朋美が些か慌てた様に答える。

「……え？　そ、そうかもしれないけど、ちょっとこっちを回って行きたいなあって」

「だからどうして」

「だって、皆一斉に校舎から出てくるし、西門に向かう通路って狭いでしょ？　ゴチャゴチャした人込みを歩きたくないのよ」

「……ふぅん？　まあ、良いけど」

不思議そうな顔をしたものの清香は取り敢えず頷き、朋美は密かに安堵の溜め息を吐いた。そして二人揃って歩きながら、無言で考え込む。

（全く……、変な指示を寄越さないでよね？　第一、聡さんとの事がどうなってるのか、気になってしょうがないわよ）

（流石に今朝は聡さん、マンションの前にも居なかったみたい……。だけど、まだ納得できないし、腹を立ててるんだから！）

そうして校舎間を通り抜けて、真っ直ぐ正門へと伸びる道に入った所で、朋美がいきなりその足を止めた。清香は少し遅れてそれに気付き、二・三歩先に進んでから立ち止まった朋美を振り返る。

「どうしたの？　朋美。こんな所で止まって」

その問い掛けに、朋美は前方から清香に視線を移し、何とも言えない微妙な顔付きで口を開いた。

「……あのね、清香。私、初めて聡さんに会った時に、何となく清人さんと似てる気がするな～と思ったんだけど」

「はぁ？　あの二人の、どこら辺がどう似てるって言うのよっ！」

一連の事を口にすると怒りがぶり返す為、週明けから聡と清人に関する事は一言も漏らしておらず、当然二人の関係性を知らない筈の朋美にそんな事を言われて清香は苛立った。

（何？　無関係の朋美にも分かる位、あの二人って端から見て似てるわけ？　それなら全然気が付かなかった、妹の私の立場って何なのよ！？）

そうして半ば八つ当たりしながら朋美の次の言葉を待った清香だったが、続く台詞で目が点になった。

「どこら辺って……、その……、二人とも頭が良い筈なのに、時々もの凄いお馬鹿さんな所？」

「……何、それ？」

思わず胡乱げな視線を向けた清香に、朋美が冷静に尋ねる。

「清香、聡さん、車持ってるよね？」

「うん」

「黒だよね？」

「そうだけど」

「外車っぽいよね？」

「うん、確かにＢＭＷ……、でもどうして知ってるの？　私、話した事あったっけ？」

不思議そうに問い返した清香に、朋美が些かげんなりした様な顔付きでゆっくりとした動きで前方を指差した。

「……現物が目の前にあるから」

「え？」

そして朋美が差し示した正門方向へ素直に顔を向けた清香は、そこにとんでもない物を発見して固まった。

「ななな何あれっ！？」

絶句して固まった清香の背後から、容赦無く駄目出しをする朋美。

「……どこからどう見ても聡さんだよね」
「それは分かっているけどっ！！」
清香が驚愕したのも当然で、正門のど真ん前に停められた黒のＢＭＷの前に、一抱えほどもある大きなピンクのバラとかすみ草で作られた花束を抱えたスーツ姿の聡が、キャンパス内の方を向いて立っていたのだった。
当然中から続々と出てくる周囲の学生達の好奇心に満ちた視線や、聡の行為を咎める目線が彼の全身に突き刺さっていたが、当の本人は一向に気にする素振りを見せていなかった。

「この場合さぁ～、聡さんがあそこで待ってるの、絶対あんただよね～」
「ま、待っててなんて言った覚えは無いわよっ！！」
「うん、まあ、そうだろうけどね～。聡さん、捨て身もいいとこだよね～。……あんた達、一体土日に何があったのよ」
「なっ、何も無いってばぁぁっ！」
生温かい目で朋美が見やると清香は半泣きになりながら弁解したが、朋美は躊躇う事無く清香を切り捨てた。

「……じゃあ、私、西門から帰るから。さよなら清香、また来週」
「ちょっと待ってよ朋美、私も西門から帰るっ！」
踵を返した朋美の腕を捕まえつつ清香が叫んだが、朋美は冷静に言い聞かせた。
「清香……。聡さん、あんたが出てくるまで、あそこでずっと待ってるわよ。賭けても良いわ」
「そそそ、そんな事、私知らないから！」
「……あんた意外に血も涙も無い女ね。聡さんをあのまま晒し物にして平気なんだ」
「だ、だって、恥ずかしいわよ、あの中に行くのは！　皆何事かと遠巻きにして見てるじゃない！！」

「車もねぇ……、いつからあそこに停めてるのか知らないけど、早く移動させないと大学の事務局から通報されて、持ってかれるんじゃない？」

「……っ！」

わざとらしく溜息を吐きながらの朋美の台詞に、清香が最近の話題を思い出して盛大に固まった。それに追い打ちをかける朋美。

「まあねぇ、今後金輪際無関係って言うなら？　無視して帰ってもどんな仕打ちをしても一向に構わないと思うんだけどねぇ」

それを聞いた清香は、聡の方を睨みつけながら盛大に呻いた。

「うぅぅ……、どうして私の周りって、こう面倒くさくて非常識な人間ばかりなのよ！　朋美、私、今日はこっちから帰るから。さよならっ！」

「さよなら～、色々頑張ってね～」

文句を言ってから自分に別れを告げ、勢い良く正門に向かって走り出した清香の背中に、朋美は間延びした声をかけた。そして小さく噴き出す。

「一応、清人さんに経過報告しておこうかな？」

そうして携帯を操作しつつ、朋美は西門の方へ向かって歩き始めた。

一方の聡は全身に突き刺さる視線をものともせず、正門で立ちつくしていたが、道の向こうから猛然と駆けて来る人物を認めて、思わず笑顔になった。そして息を切らせて自分の目の前に立った清香に、何も言わせず花束を押し付ける。

「やあ、清香さん。試験お疲れ様。良かったらこれを貰ってくれる？」

「うえっ、ちょっと」

「それで、試験の出来はどうだった？　勿論清香さんの事だから、

心配は要らないと思うんだけど」
「どうだった？　じゃあないでしょう！　こんな所で一体全体何をやってるんですか！？」
　顔の前に押し付けられた大きな花束を反射的に受け取った清香は、それを横にずらしつつ聡に向かって吠えた。それに対して聡が平然と答える。

「試験期間中は集中したいって気持ちは分かったから、終わったらじっくりと話をさせて貰えないかなと思って、誘いに来ただけなんだけど」
「……一昨日までは連日朝に押しかけてたくせに、何を白々しい事を言ってるんですか」
　思わず清香が白い目を向けると、聡が苦笑いで応じた。
「まあ、それは置いておいて、車に乗ってくれないかな？」
　さり気なく清香の腕を掴んだ聡が促したが、清香は黙り込んだままピクリとも動かなかった。しかしそれはある程度予想された事だった為、聡は穏やかに笑いながら再度清香を促す。

「言っておくけど、乗ってくれるまでここから動かないから」
　それを聞いた清香は、ヒクリと顔を引き攣らせて静かに凄んだ。
「……あのですね、手を離して頂けませんか？」
「申し訳ないけど、それは駄目かな？」
　笑顔の聡と仏頂面の清香の間に静かな緊張感が満ちたが、それに音を上げたのは清香の方だった。

「ああ、もう！！　分かりました！　乗ります！　乗りますから、さっさとここから移動して下さい！　駐車禁止の標識の目の前で停めてるなんて、車を持って行かれますよ！」
「あれ？　うっかりしてた。それは気が付かなかったな」
（白々し過ぎるっ……）

必死で訴えたのにしれっと言い返されて、清香は呆れ果てた溜息を漏らした。そして周囲から様々な視線を受けながら二人で車に乗り込み、その場を後にしたのだった。

そして少しの間車内は無言だったが、発進させた車が車道の流れに乗り、スムーズに走り出した所で、幾分申し訳無さそうに聡が口を開いた。

「その……、今日は変に目立つような事をして、悪かったね」

その台詞に、運転席の方に向き直りながら、清香が盛大に噛み付く。

「当たり前ですよ！　週明けに、私が正門前でアッシーを待たせてたなんて噂が広がってたら、どうしてくれるんですか！？」

「そうだな……、責任を取って毎日送り迎えをする？」

「ふざけないで！」

そこで聡が我慢できなくなったという様に、笑いを零す。

「ごめん、今週ずっと無視されてたから、清香さんが普通に喋って文句を言ってくれるのが嬉しくて」

「……怒られて喜ぶなんて、おかしいです」

「うん、そうだね」

憮然として文句を言った清香に、聡は笑顔のまま頷いた。そして顔付きを改め、前を見たまま再度口を開く。

「俺と兄さんの関係を黙ったまま清香さんに近付いたのは、本当に悪かったと思ってる」

「……当然です」

「当人である母さんと兄さんの意思も立場も、まるで無視した独りよがりな行動だったし」

「……本当に、良識のある大人の行動とは思えません」

「確かに最初はあの兄さんが溺愛してる、血の繋がらない義理の妹

がどんな人間か、興味本位で近付いた事は認めるけど」
「認めなかったら投げ飛ばしてます」
殺伐とした声で淡々と言い返された聡はここで一瞬怯んだが、表面上は動揺を見せずに話し続けた。

「清香さんと知り合ってから、もっと君の事が知りたくなった。いつも明るくて元気で、その笑顔に見惚れて、いつの間にかこの笑顔を見る為には、どうすれば良いかと四六時中考える様になってた」
「何か際限なく、考え無しに笑ってばかりみたいじゃないですか……」
ぼそっとひねくれた感想を述べた清香に気を悪くした風情も見せず、聡が話を続ける。
「今はそうじゃないだろう？　だから必死に考えてるよ。最初はどうあれ、いつの間にか母さんと兄さんの事は二の次……、と言うか、もう殆どどうでも良くなってた」
「そうは見えませんでしたが？」
些か皮肉っぽく横目で睨んだ清香に、流石に聡も苦笑する。

「……正直、兄さんに関してはどうしても避けて通れない関門だったから、嫌でも考えなければいけなかったけど。それはあくまで清香さんの兄という立場で、自分の兄って事は殆ど意識していなかったし。……逆に、あの容赦の無い人と、あまり血が繋がってるとは思いたくない」
「……」
これまで清香にとっては唯一無二の自慢の兄であった清人だったが、これまでの経過を洗いざらい吐かせられた時に、聡に対する嫌がらせの数々も素直に自白した為、清香の中で一時的に信用が失墜していた。今現在ではかなり回復していたものの、聡のその感想を全面的に否定できなかった清香は、何とも言えない顔で黙り込んだのだった。

そして沈黙の中、聡が再び口を開く。

「一連の事で、清香さんの中で俺の信用がガタ落ちだって事は分かってる。だけど君に付き合ってくれと言ったのは、便宜上とか口先だけの事とかじゃなくて、俺なりに本気で考えた上で申し出た事だから。……だから俺にもう一度、チャンスを貰えないかな？」

その聡の話をフロントガラスの向こうを凝視したまま聞いていた清香だったが、ここで聡の方に顔を向けて頼んだ。

「少しだけ、どこかに停めてくれませんか？」

「分かった。ちょっと待ってて」

清香の求めに応じ、聡は前方を見渡して車道の幅に余裕がある所を見つけ、路肩に寄せて静かに車を停めた。そして助手席の清香に向き直る。

「清香さん、ここで良いかな」

そう言った途端、聡の左頬に派手な衝突音と共に鈍い痛みが走った。平手打ちされたと分かった聡に、清香がまだ固い表情のまま告げる。

「……お祖父ちゃんもこれで済ませましたから、これが妥当でしょう」

「ありがとう、清香さん」

「あと一つ……、条件があるんですけど」

「何？　遠慮なく言ってみて？」

まだ緊張が残る顔で聡が促すと、清香は逆に表情を緩め、如何にも申し訳無さそうに言い出した。

「その……、怒りに任せて、携帯に登録していた聡さんのメルアドと携帯番号と家電番号を、着信拒否にした上でアドレス帳から全部消去しちゃったんです。ですから、また教えて貰いたいんですけど

……」

「それは構わないよ。家に帰る前に、どこかでお茶していこうかと思っていたからちょうど良い。だけど……」

「どうかしましたか？」

怪訝な顔付きで言葉を濁した聡に、清香が幾分不安そうな表情で問い返した。それに聡が淡々と答える。

「登録拒否設定にしたアドレスや番号を、アドレス帳に復帰さた上で、設定を解除すれば良いだけの話じゃないのかな？」

不思議そうに言われた内容を頭の中で考えた清香は、花束の中に顔を埋める様にしてがっくりと項垂れた。

「……私の馬鹿。お兄ちゃんに知られたら『だからお前はまだまだ子供なんだ』って馬鹿にされる……」

本気で落ち込んでいるらしい口調の清香を、聡は笑いを堪えながら宥めた。

「兄さんには言わないから、安心して良いよ」

「本当に？」

思わず顔を上げ、縋る様な眼で見つめて来た清香に、聡が優しく笑いかけながら請け負う。

「ああ、それにこれからは兄さんの代わりに、俺が色々教えてあげるから」

「ありがとう、聡さん」

「どういたしまして。じゃあそろそろ出すから」

そうしてブレーキを踏み込みつつ、ギアに手をかけてドライブモードにした時、視界の隅に鮮やかなピンクの物が映り込み、強い香りと共に左頬に僅かな柔らかい感触を感じた聡は、思わずそのままの姿勢で固まった。

そして一瞬遅れて、左手をギアから離し、頬を軽く押さえながら、呆けた様な表情を助手席に向ける。

「……え？」

その視線を受けた清香は、逃げ場が無い助手席で難儀そうに片手で大きな花束を抱えつつ、片手で口許を押さえながら真っ赤な顔で喚いた。

「あああのっ！　この間の事は、ちょっと自分でも大人げ無かったと思いますし、結構思ったより強く叩いちゃったみたいですし、ちょっとしたお詫びですっ！　こんなの、お嫌かもしれませんけどっ！」

それを受けて、聡が些か呆然自失状態で呟く。

「いや、嫌じゃないよ。嫌じゃないけど……」

「な、何ですか？」

不自然に言葉を濁した聡に清香が恐る恐る声をかけた所で、何故か聡は視線を逸らし、両腕をハンドルに持たれかけさせて突っ伏した。そして清香に聞こえない程度の声で、忌々しげに呟く。

「まさかこうなる事まで予測して、門限を十九時設定にしたわけじゃないよな、兄さんは……」

「え？」

そこで盛大に溜息を一つ吐いてから聡は顔を上げ、自分の反応を窺ってビクビクしている清香にいつも通りの笑顔で笑いかけた。

「何でも無い。じゃあ、ちょっとお茶してから、十九時前には家に送って行くよ。兄さんが清香さんが頑張ったご褒美に、清香さんの好きな物を作って待ってるって言ってたから」

「本当？」

「門限を守ったら、俺にも分けてくれるそうだし」

途端に目を輝かせた清香に、聡が苦笑気味に付け加える。それを聞いた清香は一瞬目を丸くし、次いで笑って断言した。

「それじゃあ遅刻できないですね」
「ああ、そう言う事。……ちょっと残念だけどね」
その聡の台詞に清香は僅かに首を傾げたが、聡は笑って前方に視線を戻し、車を再度発進させたのだった。

【心の隙間の埋め方】（完）

第３７部　清香流、矛の収め方（後書き）

これで【心の隙間の埋め方】の本編としては完結しますが、何編か番外編を出して完結とさせて貰います。そして今回は清香と聡の出会いをきっかけにした言わば始まりの話なので、恋人らしい描写が殆ど無くて申し訳ありません。

主人公は変わりますがこれの続編を予定しています。早ければ何とか年内中にＵＰ予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9168w/

心の隙間の埋め方

2011年12月19日21時46分発行